評議員
文學博士 萩野由之　文學士 笹川臨風
文學博士 黑板勝美　文學士 菊池謙二郎
文學博士 松本愛重　文學博士 三宅米吉
（イロハ順）

黑川真道編

國史叢書

武田三代軍記 一

國史研究會藏版

解題

武田三代軍記 廿二卷

本書は、甲斐源氏の武田信虎・同晴信(信玄)・同勝賴三代の事蹟を詳細に記したるものなり。

信虎は、新羅三郎義光より十八代、晴信は十九代、勝賴は二十代に相當れり。

本書內容については、國書解題に左の通り記せり。

武田三代記　廿二卷　片島深淵

甲州武田家の系圖、濫觴、門葉等の事より、武田信虎・同晴信・同勝賴三代の事蹟を詳記したるもの、卽ち信虎暴惡にして、諸名臣諫死する事より、晴信終に父を廢し自立し、一代百二十餘戰に其の武功を顯し、勝賴繼ぎ立つに及んで佞臣を愛し、終に天目山に自殺するまでの事を、詳細に記述せり云々。

と記せり。以て其の大概を知るべし。要するに信虎より晴信に至りて、武田氏最も隆盛を極め、勝頼に至り、終に悲慘の滅亡を遂げたるなり。本書は、其の事蹟を記したるものなり。此の書、享保五年版を採收す。

作者片島深淵子は、名を武矩といふ。元、筑前の人なり。後浪華に住す。其の傳記を詳にせずといへども、享保時代の人なり。武矩は博覽强記、兼て兵學に達したり。著書は本書の外に、武備和訓・武藝訓・明君文武蹟・武家圖像傳・赤穗義臣傳等あり。何れも兵學及び武士道を鼓吹したるものなり。以て其の人となりを知るべし。

大正五年四月

黑川眞道識

例言

一、原本廿二卷なるも、頁數の都合に因り、本編には、十四卷迄を採收して、之を前編とし、十五卷以下は、後編として分册收載することとせり。

一、原本片假名なるも、本編には悉く平假名に改めたり。

一、語尾を補うて、通讀の平易を計れるもの頗る多く、且つ文字の一定せざるものは、全卷を通じ、多きに從つて、一様ならしむるに力めたり。

一、原本中の挿圖は、悉く之を收め、一も省略せるものなし。

目次

武田三代軍記

目次終

武田三代軍記

序

夫惟、兵法者、治二亂逆一之要道、撃二凶賊一之祕術也。本邦兵家、古今之將士、皆講二磨中華之規矩一、雖レ用二其兵略一、而法意混雜、間有レ難レ爲レ證焉。曰若、甲源武田家之軍事、獨二步于諸家一、至レ今言レ武者、多以レ之爲レ法。實是末代龜鏡也。其家臣高坂彈正昌信、所レ記之甲陽軍鑑、專載二武事之蘊奧一。然而文義、往々有二缺議一、初學之士非レ所二輕議一也。頃日、有レ客、攜二來一册一見レ示レ余。余披而覽レ之、有二奇正變作之妙用一。陣法權略寢備矣。可レ謂奇書也。但惜、其編頗有二脫簡一。余幸弱冠時、隨二從于小幡勘兵衛景憲之高弟某一、挹二武田之洪盡、武備之淵源一。以レ故補二其遺漏一、足二其殘缺一、題曰二武田三代軍記一、終書二厥端一。

正德乙未初秋上浣　　浪華城西隱士　片島深淵子

武田家系圖

人皇五十六代

清和天皇（文德天皇第一皇子、諱惟仁、又號ニ水尾帝一。）──貞純親王（第六皇子、號ニ桃園親王一。）

──經基（號ニ六孫王一、初て賜ニ源姓一。正四位上、鎭守府將軍。）──滿仲（號ニ多田新發意一。從四位上、左馬權頭。）──賴信（從四位上、河內守、鎭守府將軍。）

──賴義（正四位上、鎭守府將軍、伊豫守。）──義光（新羅三郎、從五位下、左衞門尉、刑部少輔、弓馬達人。）──義淸（武田冠者、刑部三郎。）──淸光（逸見冠者、號ニ黑源太一。）

──光長（逸見冠者、上總介、一説に逸見、逸見の祖なり。）

──信義（五歳の時に父卒す。故に十二年の間、板垣陣代す。光長と信義同日に生る。光長は巳の時生る。信義は午の時生る。世俗の説によつて、信義を兄とす。）

──信光（武田「一説に石和」武田伊豆守、從五位下、井澤五郎大膳大夫。）──信政（小五郎、伊豆守、弓の達人。）──信明（治部少輔、伊豆守、幼稚の間、十年安田陣代。）

──時綱（六郎、伊豆守、安藝守。）──信宗（孫六、伊豆守、甲斐・安藝守護。）──信武（甲斐守、陸奧守、伊豆守、九州探題八幡寺殿と號す。）

──信成（大膳大夫、刑部大輔。）──信春（大膳大夫、幼稚の間、九年加々美陣代。）──信滿

──直信（四郎、彈正少弼、左馬頭、安藝守護。）──信綱（伊豆守、左馬助。）──信重（太郎、武田中興武勇なり。幼稚の間、十年板垣陣代。）──信森（幼稚の間、十三年、安田陣代。）

──信賢（大膳大夫、治部大輔、歌人、新苑玖波集に入る。）──信昌（三歳の時父卒す。故に十五歳迄、跡部上野介陣代。）──信繩

國信 大膳大夫、若狹を領す。若狹の武田と號す。 — 信政 治部少輔、

信時 伊豆守、大膳大夫。

義統 若州大守、永祿年中、公方の味方に參る。 — 義賴 左京大夫、法名崇喜。

元信 伊豆守、 — 信統 彦五郎、中國にて病死。

元隆 — 元繼

信虎 左京大夫、從五位上、左衞門尉。

晴信 信濃守、大膳大夫、大永元年誕生。天文二十年二月十二日、剃髮。號法性院大僧正信玄德榮軒。天正元年四月十二日病死。號惠林寺義山大居士。

信繁 左馬助、文武之勇將、永祿四年、河中島合戰に死す。

信連 孫六、入道逍遙軒。

女子 今川義元室。

信豐 左馬助、童名長老、天正十年三月卒去。號英叟知雄大禪定門。

義信 太郎、隱謀の聞えあるに依つて自害。

隆寶君 盲目なり。海野の名跡となる。

勝賴 伊奈四郎、母諏訪賴茂女。依つて諏訪の名跡を繼ぐ。玉山龍公大禪定門と號す。 — 信勝 太郎、童名竹王丸。武田の家督を繼ぐ。幼少の間、父の勝賴後見。天正十年壬午三月十一日、田野天目山に於て、勝賴父子自害。行年十六歲。春山花公大禪定門と號す。

信盛 油川腹、仁科の名跡、仁科五郎。

女子 宍山殿室。

女子 北條氏政室。

武田三代軍記 卷之第一

甲州武田家濫觴附家傳の事

夫れ事の相叛く者、勇と怯とに如くはなし。相近き者も、亦、勇と怯とに如くはなし。奮然として勁悍し、怯と相近き者は小勇なり。退然として溫克に、怯と相近き者は大勇なり。何をか小勇といふ。小敵に勝つ者是なり。何をか大勇といふ。大敵に勝つ者是なり。寇敵の來る、多き事百萬といふとも、其兵を知る者、之を麾けば、枯を摧き、槁を振ふが如し。何ぞ之を大敵とするに足らんや。爰に我朝、足利家治世の末に當つて、國家互に勇を爭ひ、境を論じ、鯨の如くに吞み、蜂の如くに起りて、海內一日も靜なる事なし。就中、甲陽の武田家、謀略四海に震ひ、古今に獨步し、正兵の奇術を窮め、其名、天下に轟く。之を稱して甲州流といふ。是れ兵家の

一流にして、後代の將士、十が八九、其徒ならずといふ事なし。抑、武田家の濫觴を委しく尋ぬれば、人皇五十六代、清和天皇第六の皇子桃園の貞純親王に、始めて源の姓を賜ふ。其御子鎭守府將軍經基、軍略に長じ、智勇兼備し給へるを以て、初めて武臣となり給へり。其子左馬頭滿仲、其子冷泉院判官代賴信、六箇國の受領を經て、河內守と號し、鎭守府將軍に任ぜらる。其家嫡伊豫守賴義、相續いて鎭守府將軍に任ず。後冷泉院の御宇、天喜二年、奧州安倍貞任・舍弟致任等が謀叛に依つて、陸奧に下向あつて、康平六年三月十六日、彼の朝敵等を誅伐ある。凡そ敵の斬首一萬五千餘級なり。斯くて賴義朝臣、一宇の堂舍を建立し、其討捕る所の敵の片耳を納めて、耳納寺とぞ號せられける。賴義朝臣に、男子餘多ましましけり。嫡子八幡太郎義家、續いて鎭守府將軍に任じ、陸奧守となつて、內の昇殿を聽さるゝ。二男賀茂次郎義綱・三男新羅三郎義光と號す　然るに義光、母は二位の法印尊長が女なり。此時の勳功に依つて、後冷泉院、叡感の餘りに、御旗・鎧を下し賜ふ。彼の冑と申すは、胴丸にして、大袖金具には、割菱の紋を附けられたり。世に之を武田菱

甲斐源氏

武田家の由來

小笠原氏先祖

南部氏先祖

於曾氏先祖

とぞ申しける。則ち義光、從五位下に敍し、刑部丞になつて、甲斐國に住せらる。是より子孫繁榮して、甲斐源氏とは申すなり。佐竹・逸見・板垣・一條・錦織・平賀・柏木・南部・下山・小笠原等の大祖なり。其子武田刑部三郎義淸と號す。義淸、父祖の業を受け、弓馬の道に長じ、武勇の德、綿々たるを以て、武田と稱せらるゝ事、例少き龜鑑なり。舍弟刑部四郎盛義、是れ平賀の元祖なり。義淸の子黑源太淸光、其子武田太郎信義・同 逸見上總介光長・同 加々美次郎遠光・同 安田三郎義定・同 安井四郎淸隆・同河内五郎長義・同田井五郎光義・同 曾禰禪師坊嚴尊・同 奈古藏人義行・同 淺利與市義遠・同 八代與三信淸と號しける。是より、逸見・加々美・安田以下に分れたり。加々美次郎遠光が嫡子を、秋山太郎光朝と號す。其次信濃守長淸、是れ小笠原の祖なり。舍弟三郎光行、是れ南部の元祖なり。其次四郎經光、是れ於曾氏の祖なりけり。然るに、太郎信義、右大將賴朝卿義兵の時、一族を語らひ、駿河國浮島が原に出向ひ、奇謀を以て、平家の大勢を追歸す。其大功を感賞せられて、一番に駿河國をぞ給はりける。其嫡子一條次郎忠賴、元曆元年、隱謀の聞えあつて、賴朝卿、天野藤

一條の先祖　藝州の武田　武田家の中興　無楯の冑

内遠景に命じて、鎌倉殿中に於て誅せらる。其次、板垣三郎兼信・同武田兵衛尉有義・同五郎信光、大膳大夫と號す。其子伊豆守信政舎弟六郎信長、これ一條の元祖なり、伊豆守信政の曾孫伊豆守信宗、甲斐・安藝の兩國を給はつて、守護職に任ず。其子伊豆守信武、尊氏卿に仕へて、武名、尤も隱なし。其子信成、父の家督を繼いで、甲州に在住す。舎弟左馬頭直信は、安藝の國を給はつて、彼の國の守護職となれり。之を稱して、藝州の武田といへり。信成三代の後胤伊豆守信重、足利に仕へて、勳功莫大なれば、公方、其忠貞を賞じ、朱の采配を給はるに依つて、武勇、武田の家の中興なりと、世人普く之を感ず。信重の孫信昌は、纔か三歲にして、父信森、卒去せられしかば、十五歲に至る迄は、老臣跡部上野介、後見として大小となく執行ふ。此故に、昔、後冷泉院より賜はりし御旗、無楯（たてなし）の冑、皆此家に傳はりしを、信昌、十九歲の時、執權跡部上野介と、不快の事出來つて、當國石和の鄕に於て戰を挑む。此時、跡部、彼の無楯の冑を着せり。然るに信昌、心中に祈念して、上野介を唯一箭に射殺し給ひける。無楯に、其跡明かに殘れり。斯くて凱陣の後、信昌宣ひけるは、

無楯の冑は、元祖新羅三郎義光より、當家重代の家寶なり。然るに、一矢に射通しぬる事、偏に末世になり下り、無楯の威力も衰へぬるにこそ。尤も歎かはしき事ならずや。我思ふ仔細あれば、一命を捨て、無楯の威力の有無を試んと自ら彼の冑を着し、精兵の射手を選まれけるに、武藤五郎七郎・出田小十郎・三枝式部とて、當國にて名を顯せる强弓なり。是等三人、前後に立ち分れて、主君信昌を射たりけるに、其矢、一筋も冑に立つ事能はず、盡く飛び歸りけるこそ、不思議の例なれ。扨は、無楯の靈威新たなり。家運彌〻長久なるべしとぞ悅ばれける。其子信繩、其子を左京大夫信虎とぞ號しける。

武田家門葉の事

左京大夫信虎は、父信繩の家督を續ぎ給ひて、新羅三郎十八代に相當れり。先祖義光朝臣の時、冷泉院より賜はりし御旗・無楯の冑・諏訪法性の甲・義弘の太刀・左文字の刀・同短刀を始め、樣々の家寶、此家に傳はれり。之を甲州の御屋形と號して、其

武田の一族

武田の老臣

信虎、一族を討滅す

威を隣國に震ひ給ふ。一家には、安田・淺利・逸見・一條・南部・秋山・板垣・下山・加々美・勝沼・櫻井・小佐手・曾根・於曾・數野等の人々あり。中にも下山、其頃は穴山と號す。此穴山殿の息女を、信虎の室家となし給ひければ、是より國中の者共、穴山殿を重じ參らする事、日頃に十倍せり。穴山左衛門佐信行と申せしは、此御臺所の御舍弟なり。家臣には、山縣河内守虎淸・馬場伊豆守虎貞・工藤下總守虎豐・內藤相模守虎資、之を四人の老臣として、原能登守友胤・小幡山城守虎盛・小山田備中守などいへる、何れも一人當千の勇士等、計ふるに遑あらず。然るに信虎、武勇世に類なく、權謀に於ては、他に異なりと雖も、飽く迄短慮にましまして、世を世とも思ひ給はず、人を人ともし給はず。一族安田・淺利・逸見・勝沼・櫻井・小佐手を始め、大方攻滅して、其所領を奪ひ、勢、遠境に震はれしかば、誰が身にか殃の來らんと、一門の人は、安き心もなかりけり。智ある老臣等は、如何なる天魔の御心に入變つて、骨肉の好を忘れ、斯く門葉を滅し給ふらん。積惡の家には、必ず餘殃ありといへり。末如何ならんと悲みて、樣々諫め參らすれども、曾て許容し給はず。うたてかりし事ども、

なり。

武田信虎、加々美四郎と確執の事

茲に、信州葛尾の城主村上賴平は、年來、武田家と、互に害心を挿んで、合戰絶ゆる間なし。時に武田の一族に、加々美四郎といふ人あり。彼の家人石原小六といへる者は、大剛の譽ありて、己が武勇に慢じ、人を人ともせざりけるが、或時、四郎が寵愛の小姓神田磯松といへる者と、口論をし出したり。其故は、磯松は、主君の愛童なるを以て、其寵に誇り、傍輩を輕じ、侮る事甚し。又石原は、武邊の覺を高慢して、常に主命をも、用ひざる程の者なりければ、互に威を爭ひ、口論に及びけるが、小六、大剛の者なれば、磯松を唯一討に害して、忽ち其場より、逐電して甲府に來り、信虎を賴み、身を隱してぞ居たりける。信虎も、彼の石原が勇名を、兼ねて聞及び給へば、手の者になしてぞ召使はれける。此由を傳へ聞きて、加々美四郎、大に怒り、某が郎等の、不義あつて逐電したるを、當屋形の抱へ置き給ふ事、いはれな

し。急ぎ此方へ給はるべし。誅罰を加へ申し度候と、再三、使者を以て、申されけれども、此信虎を賴むとて、來りたる者を、何者にもせよ、得こそ出すまじけれ。重ねて申し來りなば、使者を討つて捨てんと、大に怒りて、使を歸されける。加々美、安からず思ひけれども、流石、信虎は門葉の棟梁なれば、如何ともすべき樣なくして、憤を抑へ居られけるに、石原、己が法令に背きたる事をばいはず、却つて、信虎に讒しけるは、加々美四郎儀は、內々、葛尾の村上賴平に、心を通じ、別心の企、樣樣に候と、佞臣輕薄の黨を語らひて、辯才を盡して支へける。元來、信虎、心荒き人なれば、其實否をも正さず、大に腹立し、頓て使者を以て、傳へ聞けば、累代の恩顧を忘れ、骨肉の好（よしみ）を捨て、村上に內通し、信虎を失はんと、相巧まるゝの由、其不義、顯然として隱なし。抑々其意趣何事ぞや。悉く以て之を聞かん。若し又、不實なるに於ては、早速、甲府に來つて、誤なき所を、明白に申開かるべしとぞ、いはせられける。四郎、使者に對面し、こは屋形の仰とも覺えず候。何の遺恨あつてか、今更、敵に一味仕らん。身に取つて覺え候はず。今我、骨肉の好を蔑し、故なうし

て、敵に與せんは、何ぞ勇士の道にあらんや。按ずるに、讒人、府君の側にあつて、某を申沈むるか。附きては又、石原小六、法令を犯し、傍輩を殺害し、甲府に逃げ至つて、一命を助かる。其恩の忝き餘りに、輕薄比興の心底を以て、予を讒言するか。又は某、別心に事を寄せ、加々美の家を攻滅し、一跡を横領せんとの巧ならんか。信虎、欲心強盛の大將故、一族を滅し、其門葉を絶して、其地を奪はんと、晝夜相巧まるゝ事、世人の皆知る所なり。某、心中に毛頭僞る所なければ、甲府に參つて、陳謝するに及ばず。夫れとても、事の實否を、面談に聞きたく思召さば、當城へ御越あるべし。僞なき旨を申開かん。又、最前に申す如く、我が家、斷滅せんとならば、軍勢を差向けらるゝに及ばず。腹搔切つて、所領を參らすべしと、荒らかに、返事を述べられける。使者、此由を傳說して、信虎に、斯くとぞ申しける。

加々美四郎夜討、小熊部合戰の事

去る程に、左京大夫信虎は、加々美四郎が返詞を聞き、大に怒つて、惡き擬舞かな。

其儀ならば、一時に蹈潰して、四郎が首を梟すべしと、小幡入道日淨・原大隅守兩人を以て、隊將として、三百餘騎を指向けらる。永正十六年三月下旬、加々美が城より、二里北方なる小熊部に陣を取り、明日は城に攻寄すべしとぞ議したりける。加加美四郎、之を聞き、家人を集めて、いひ含めけるは、武田勢、今宵小熊部に陣取りたると聞ゆ。一定、明日は當城に攻寄せんとぞ極むらん。敵、さまでの大勢とも聞えず。先んずる時は、人を制し、先んぜらるゝ時は、人に制せらるといへり。軍は明日と心得て、何心なく油斷して、憩ひたらん所こそ、討ちよからんぞ。假令明日、敵、城を巻かずといふとも、今宵の軍、然るべからん。敵、地利を知らざるの虚一つ、行軍に疲れたる弊一つ、今夜、深更に及んで討入り、一人も殘さず討取るべし。夫れ兵勝の術は、不意を撃つに如かず。味方の勢を二手に分け、一手は敵陣の左の方に廻り、村中に忍び入り、路程は軍兵に枚を啣ませて、馬は轡のならざるやうに、手拭を以て之を巻き、靜まり返つて押寄せ、正兵、急に進んで、敵の篝を打消し、番人、寢ほれたらん所を、騎士を以て、蹴立て切散し、無二無三に討つて入り、戰、半ならん

小熊部夜合戰

時、以前に廻りし一隊は、奇兵となつて、横に當り、爰に顯はれ、彼所に突出で、鬨を作りて、千變萬化し、勝負を一戰に決すべしと、能々、術をいひ含め、相言葉を定め、兵糧をつかはせ、其夜の子の刻に城を出で、小熊部に押寄せたり。武田勢は、若し夜討や寄すらんと、篝を燒きて待ち明す。然る所に、加々美勢、張番の軍勢を蹴立て、鬨を作り、直に本陣に討つて懸る。武田勢、少しも騷がず、鬨を合せて馳合はす。中にも、多賀左近兵衞、眞先に進んで、一番に鑓を合はする。是に續いて、曾根甚內、山脇小市・木戶將監を始め、一騎當千の兵共、鑓を提げ〳〵突出で、爰に顯はれ、彼所に進んで、命を風塵に比して防戰ふ。多賀左近兵衞は、先登の勇士と鑓を合せ、忽ち其敵を突伏せて、猶ほ、敵中に進む所に、相木森之介と名乘つて、大太刀を打振り、切つて懸る。左近兵衞、己が持ちたる鑓を、切折られて抛捨て、腰の刀を拔合せて渡し合ふ。相木、透間をかぞへて蹈込み、多賀が膝口を、したゝかに割る。痛手なれば働き得ず、營中に引退く。山脇小市は、敵一騎討取つたり。岩村助三郎は、大長刀を水車に振廻し、邊を拂つて戰ひけるが、加々美勢の物頭落合源次兵衞と引組

んで、雙方、劣らぬ勇士なれば、組敷くと雖も、又刎返し、首を搔かんとすれば、刎返され、更に勝負、見えざる所に落合ひ、力や優りけん、難なく岩村を取つて抑へ、首を搔かんとする所を、助三郎が弟同じく助十郎、馳寄つて、落合が内甲に、手を入れ、引仰のけて、上なるが岩村か、下なるが助三郎かと呼ばはる。岩村、下より、上なるこそ敵よといふより、早く刎返して、落合が首を取る。斯かりける所に、左の方の村中より、加々美が軍勢、横合にどつと懸る。是に依つて、武田勢、少ししどろになる所を、隊將小幡入道日淨、采配を振つて、馬を乘廻し、旗の手を靜め、守返しの場を下知し、我が馬廻りの步卒をば、折しかせ、鑓倉を作つて、曈と駈散し、追ひつ返しつ相戰ふ。鋒先より火焰を出し、萬卒に面を向ふ有樣は、唯、百千の雷の、一度に落懸るかとあやまたる。抑々此小幡入道日淨は、元は遠州勝股の者なりけるが、信虎、十九歲の時より、甲府に來り、武田家に仕へて、數度の戰に高名を顯はし、武功名才の勇者なれば、從ふ所の兵卒、各、劣らぬ者共なり。既に横雲引分れて、黎明の頃になりけれども、互に勝負も見えざりければ、大將加々美四郞、諸

卒に命じて曰、夜も頓て明けぬべし。暗きに紛れて引取れと、頻に下知して、軍勢を纏め、引揚ぐれば、武田勢、之を見て、敵は引くぞ、討留めよと、我先にと、喰留めんとするを、殿に控へたる西久保左兵衞、取つて返して、之を防ぐ。小幡入道・原大隅・大剛の者共なれば、さのみ敵を追ふべからず。此地、先きに至つて切所あり、敵は案内を能くしれり。難所に味方を、おびき寄せ、大返にして戰はゞ、必定、味方の敗ならん。長追をすべからずと、軍勢を引揚げたり。武田家の軍令、流石、名將の德化なれば、敵、不意を窺ふと雖も、終に勝つことを得ずして、己が居城に打納れけり。

加々美四郎籠城附原・小幡城攻の事

斯くて、小幡入道日淨・原大隅守、敵に息を續がすなとて、其翌日、打立つて敵城に押寄せたり。寄手の軍勢、勇み進んで、城際につくとひとしく、鬨の聲を嚔と揚げ、一時に之を乘取らんと、喚き叫んで、堀際に押付けたり。城中にも、待ち設けたる事

なれば、同じく鯨波を合せ、精兵の手垂共、櫓狹間を押開きて、散々にこそ射出しけれ。寄手の足輕、同じく狹間を閉ぢんとすれども、強く城兵に射すくめられて、人を楯にして、其場をこたへんとするに、矢場に、十三人、射伏せられけり。されども寄手、之を用ひず、楯を一面につき竝べて、曳々聲を出して攻寄する。城中より射出す矢は、岡野を過ぐる夕立の、風に競ふが如くなれば、寄手も急に進み得ず。只、矢戰に數刻移りて、既に夕陽に及びければ、原・小幡、軍勢を引揚げ、陣を取り、日々夜々に足輕を出し、矢戰計りをぞしたりける。斯くて、何まで日を重ね、是程の小城を拔き得ずして、人口、塞ぐに所なからんと、原・小幡、會評して合戰の利害をはかり、既に明日と相定めて、陣中、其用意をしたりけるに、兩將、軍勢に向つていひけるは、去ぬる頃の城攻、勿論、味方小勢なりと雖も、即日にして、城を拔く事能はず。いひ甲斐なき働とせんか。味方、手負ひ或は戰死するもの、少からずと雖も、敵、虎口を出でざれば、彼を撃捕るに及ばず。旁々是非なき次第なり。明日に於ては、有無の勝負を決せん。各の一命、兩將申預かる上は、少しも法を犯すべか

らず。唯、射るとも突くとも用ひず、鞫を傾けて、總軍の節制を、守るべしとぞいひ含めける。斯くて、其夜も東雲の頃になりしかば、三段に備を分けて、楯を雌雄に衝並べ、太鼓を打つて、直ちに堀際に攻付き、埋草を以て之を埋め、組橋を渡して、一擧に城を乘取らんとす　城中には、兼ねて用意をしたりければ、大力の兵共を俊つて、塀裏に立て、地利に隨つて、大木・大石を、拋懸け〳〵防ぎければ、楯も鎧も怺へばこそ、將棊倒しに異らず　矢面に立ちたる究竟の兵三十餘人、同じ枕に薙伏せらる。猶ほ寄手、是にも臆せず。味方の手負・死人を蹈越し、義を金石に比し、命を塵芥よりも輕くし、鬨の聲を揚げて、後へ一足も引退かず。手に手を取組み、鑓先を雙べて、曳々聲を揚げ、塀に熊手を打懸けて、既に攻入らんとするに、大將加々美四郞、仁義の勇士なれば、城、縷の如くなれども、膚、猶も撓まずして、勇士を勇めて曰、汝等、義を思はゞ、當城を枕にして、潔く討死し、骸は苔に埋むとも、名を後代に殘すべし。死生、我と共にせば、必ず泉下にて其功を賞すべしと、釆配を取つて馳廻れば、士卒、心を一致にして、爰を先途と防戰す。寄手も、今は攻倦んで、少し虎

加々美四郎、村上頼平に援を乞ふ

口をくつろげて、持楯の陰にさつと引き、暫く息を入れんとす。時に原・小幡、下知して、漸く軍兵を引揚げたり。此時、城兵、城戸を開き、穂先を雙べて駈出し、隊を魚鱗に作つて、弓取る敵を、突崩さんとす。四郎、之をきつと見て、必ず長く追ふべからず。夫れ城に籠るの法は、抜かれざるを以て勝とす。十分に勝つ時は、亢龍の悔あるものぞ、節を守れと、身を採み、馬を乗廻し下知しければ、士卒、爰に於て踏留る。斯くて、城中に引入れ、城門を差堅め、暫く忍の緒をくつろげて、士卒、息をぞ繼ぎたりける。

加々美四郎沒落の事

然るに、加々美四郎は、武田の軍士、攻寄せざる以前に、葛尾の城主村上頼平が方に使を馳せて、さても左京大夫信虎、慾心強盛にして、一族の好を忘れ、某を攻潰し、所領を奪はんが爲めに、無體に逆心の企ある由、種々に難題を揚げて、我を讒むる。其不儀不道の甚しき事、勝げて數へ難し。此上は、某、御幕下に屬ひ、日頃の憤を散

ぜんと欲す。天の照臨、實あらば、武田の家、滅亡近きにあるべきか。向後、力の及ぶ所、軍忠を勵み申すべし。就きては武田勢、近日、居城を取卷くべし。存亡、此一擧に候。然れば急ぎ、御加勢を賴み存ずる所なりと、いひ送りけるに、賴平も許諾し、人質等の事迄相調へ、賴平、後援に出づべきにぞ極りける。然るに賴平、折節、病氣差發つて、彼是援兵遲滯に及ぶ。去る程に、信虎は、小幡日淨・原大隅、攻亟んだる由を聞き給ひて、甚だ怒り、加々美四郎が武略、何程の事かあるべき。察するに、城兵等、村上が後詰を賴んで、機を屈せず、防ぎ戰ふと覺えたり。其儘にして差置かば、賴平、後巻して、猶ほ味方、難儀に及ぶべし。一時に蹈破つて、四郎を始め、城中の者共、一人も殘さず撫切にし、不義の程を思知らせん物をとて、山縣河內守虎淸・內藤相模守虎貧・原能登守友胤・横田備中守・鎌田織部・多田三八以下、人數三千五百餘人を引率し、先祖新羅三郎より、傳はりし御旗のうつし、地黑に上に朱の丸、中に朱の横筋、裙には朱にて、武田菱の紋附きたる旗を、眞先に押立てさせて攻寄せらる。城の大將、加々美四郎は、之を見て、大將信虎、自身出てたりと覺ゆるぞ。

賴平、後詰を諾す

信虎自ら城攻に向ふ

此人、極めて心荒く、片側破りの猪武者、生得の短氣に任せ、雅攻にして、一刻に揉落さんとぞ働くべし。敵おびき出すとも、我、下知をなさゞるの内は、一人も討つて出づべからず。精兵の射手を選んで、唯、矢種のあらん限りは、射取るの外、あるべからずとて、塀に歩行を渡し、家々の紋附きたるかひ楯を、羽重に衝竝べて、矢倉狹間を一度に開き、差取り引詰め、散々に射出す。寄手、むらがり立ちたれば、疵を蒙る者、命を落す者少からず。然りと雖も、猛勇の信虎、寔に虎の威勢を振ひ、無體に下知をし給ひければ、親、討たるゝと雖も、子、之を顧みず。主君、疵を蒙れども、之を引退くるに遑なくて、一向、城に攻近づく。城兵防ぎ兼ねて、弓弩の遲速、自然として怠りあれば、信虎、楯面に立ち顯はれ、大音を揚げて下知し給ふは、如何に者共、敵は數日の籠城に力疲れ、射る矢と雖も、武具の裏をかゝず。幾筋なりとも、鎧に請留め、唯、透間を射さすな。鎧づきして鉢を傾けよ。一足も後へ引くべからず。我れ後よりよく見居るぞ。後難を思ひ、義を守らば、必死に虎口をくつろぐべからず。埋草を入れて堀を渡れ、山縣・横田はなきか。城門を打破れ、

多田・鎌田はなきか。切つて入れとぞ下知せられける。斯くて、埋草を以て、片時の間に、追手の堀を埋上げたり。寄手、彌〻氣に乘つて、彼の埋草を渡り、大勢、塀際に攻近づく。中にも、黑絲の鎧着たる武者一騎、朱の半月の二尺餘なる前立に、紅の緥かけ、多田三八と名乘つて、今日の一番乘ぞ。後に爭ふ事なかれと、城中に乘込まんとす。城兵、之を突落さんと、鑓を差延べ、內甲へ突入るゝ。三八、無雙の勇士にて、心早き男なれば、振りはづして、鑓の柄に取附き、難なく塀を乘越し、則ち其敵を討取つたり。是に續いて、跡部勝五郞、乘込んで働きしを、相木森之介、能き敵ぞと打笑つて、押雙びて組みたりしが、相木、元より大力なれば、跡部を取つて押へ、終に首を搔落しけり。信虎、此者共が働を見給ひて、半月の前立は、多田三八と覺えたり。早は一番乘をしたるぞ。續いて二番に乘つたるは、跡部と見えたり。兩人を討たすな。續けや者共、あれこそ一人當千の働なれと、稱美し給ひければ、內藤相模守虎貲・山縣河內守虎淸・小幡・横田・原・鎌田などを始めとして、總勢、一度に乘込んだり。さしもの城兵、今は防戰に術盡きて、一支も支へず、二の丸へ引入

れ、門を堅め、射手を揃へて防ぎけり。原大隅は、此度、討手を奉り乍ら、我が働を以て、城を取らざる事を、無念に思ひ、我が手の足輕、筧十兵衞とて、隱なき大力ありけるを招きて、何卒して、汝、此門を打破れと言附くれば、筧、心得申すといひて、あたりをきつと見れば、大きなる材木の、多く積みてありける中に、其長さ二丈計りも、あるらんと覺えたるを、輕々と提げて走り寄り、關貫と思ふあたりを、曳々聲を出して突きけるに、扉くだけて、關貫折れ、雙方へ開きけり。得たり賢しと、原・大隅、一番に馳入る。押續いて軍勢共、我、劣らじと込入れば、城兵等、途を失ひ、爰に群り、彼處に集り、色を變じ、機を失ひたるを、追詰め〳〵討取つたり。城の大將加々美四郎、心は矢猛に勇むと雖も、防ぐべき樣なかりければ、此上は叶はじ。我討死すべけれども、暫時、命を全うして、重ねて本意を達すべしと、本丸に火を懸け烟に紛れて落行きけり。大將、斯くの如くなれば、士卒も思ひ〳〵に落去りぬ。武田勢は、城を攻落して、勝鬨を執行ひ、靜に首實檢あつて、城已下の政事、つど〳〵に沙汰ありて、其後、甲府に馬を入れ給ひける。

武田櫻井不和

武田・櫻井不快の事

玆に、櫻井兵部少輔は、武田の門葉たりと雖も、近年、加々美四郎と、緣者の好あつて、親しく睦び交りければ、信虎、思慮を廻らされけるは、此度、加々美を攻滅しぬる事、櫻井、やはか意恨を含まではあるべからず。逆心を企てんは、必定たるべし。先づ使者を以て、心中を引見んとて、此度、加々美四郞、不義の擧動あるを以て、早速、誅を加へ畢んぬ。是れ天道、其不義を惡み給ふの所謂か。全く信虎が、私に之を亡したるにあらず。天道の政を受くるなり。就きては貴邊の儀、加々美と親み深し。さるに依つて、信虎を恨み憤り、逆心の企ある由、世以て風聞す。若し實に於ては、其結構何事ぞや。石を懷いて、淵に入るに似たるべし。但し、加々美四郞と、緣者の親あるを以て、世人、推量して虛說を吐くか、其實否を知らず。若し心中、相巧まるゝ事なきに於ては、早速、參府して誤らざるの旨を、申し開かるべしとだ、いはせられける。兵部少輔、使者に對面して、今度、四郞滅亡の儀、己が身に不義あ

つて、天誅を受くる。某、不肖なりと雖も、門葉の列に連る身の、何んぞ惡人に徒黨して、御屋形に對し、不義の弓を引かん。某、近年、加々美と類緣の親あるを以て、世人、推量して虛名を得るの所、尤も不幸といひつべし。兒童の說を以て、讒人、府君の側に在つて、我を申沈むると覺えたり。早速、伺候仕りて誤なき旨を、申上げ候はんとぞ、返事せられける。斯くて兵部少輔、甲府に赴かんと、用意ある所に、家人上原大右衞門申しけるは、此度、甲府に赴かん事、御遠慮なき所なるべし。御存の如く、信虎、人を人とも思召さず。萬づ、心に任せて、惡逆を擧動(ふるま)ひ、大方ならぬ狂氣人故、無實の讒を信じて、既に四郎殿を攻潰され候。是のみに限り候はず。今迄の御行路を見候に、骨肉親疎の別もなく、左右に事寄せ、誅罰して其所領を奪ひ、大身にならんとの心入れと存じ候。然る時は、四郎殿の儀に就きて、其を幸に、櫻井の家をも斷滅せんとの企かと存じ候。推量の及ぶ所、斯くの如し。君、甲府に御越し候はゞ、御屋形に召寄せられ、力者共に命じ、方便(たばかり)討たんとの謀ならんか。尤も一大事の御事にて候ふべし。某、愚案の及ぶ所は、兎に角に、先づ今度の御越

は、御無用になされ、重ねて御尋ねあらんに於ては、虚病を構へて、事の樣子を御窺ひなされ、其上にて如何樣の御思案も候ふべし。能々、思召し定めらるべしとぞ申しける。兵部少輔、倩々と打聞きて、汝が申す所、理に中れり。無道至極の大將なれば、如何樣の謀あつて、某を失はんと巧まるゝも知らず。先づ此度は、延引せんとて、引籠りてぞ居られける。斯くて信虎は、櫻井が參府、遲々に及ぶは心得ずと、重ねて催促せらるゝ所に、仰の旨、恐入りて候故、萬事取敢へず、伺候仕らんと相催し候所に、計らずも瘧病に相侵され、身心惱亂致し、心ならず遲滯仕るにて候。これ止む事を得ざる所なり。何樣、本腹仕り次第、伺候致し候はんとて、使者をば歸されける。信虎、左思ひつる事よ。櫻井、隱謀を企つるに紛なし。急ぎ出馬して、蹈潰さんとて、已に陣觸をぞし給ひける。

櫻井落城の事

去る程に、左京大夫信虎は、櫻井誅伐の爲め、馬場伊豆守虎貞・内藤相模守虎資・横田

信虎・櫻井誅伐の爲め出馬

兩軍合戰

備中守・小幡入道・荻原常陸介・原大隅守・鎌田織部・多田三八を始め、四千餘人の士卒を從へ、永正十六年八月十三日、甲府を出馬あつて、櫻井に發向し給ふ。櫻井兵部少輔は、信虎出馬の由を聞き、中途に馳向つて、雌雄を一戰に決すべしと、手の郎從等を引率し、城を出で陣を取り、其守り、嚴重にして待ちかけたり。既に武田勢、相近づかば、兩陣、互に矢一筋射違ふる程こそあれ。鎌田織部・多田三八、眞先に進んで突入りたり。之を見て、死生知らずの甲府勢、人に先をせられじと、無二無三に切つて入り、互に追ひつ返しつ、火出づる程こそ戰ひけれ。櫻井方は、小勢なりと雖も、大將兵部少輔、究竟の兵なりければ、士卒を恥しめて曰、敵と雖も、互に類家の事なれば、知り知られたる中なるぞ。一命を義に代へて、今日の軍に討死せよ。前には一足も進むとも、後へとては引くべからず。唯、死ねや〳〵と下知して、近づく敵を、二三騎、鐙の鼻にて駈倒し、一文字に敵中に、自ら切つて入りければ、從軍、何かは猶豫(ためら)ふべき。一同に噇と入り亂れ、西より東へ駈靡け、北より南へ馳せ通る。互に破られず圍まれず、引組んで落つる所もあり。押へて首を取るも

あり、取らるゝもあり。何れ隙ありとも見えず戰ふ所に、武田勢、少し色めき立つて、三方に分れて引退く。櫻井勢、機に乘つて、備を亂して之を追ふ。信虎、飽迄不敵の將なれば、ちつとも騷がず、重代の旗を立居ゑさせ、穢はし汝等、信虎、是にあり。返し合せて、討死せよ。何國へか落行くべき。返せ〳〵と大聲揚げて、椋の木の大木、二三本繁りたる陰に、敵勢を待懸けて、馬に輪を懸けてぞ御座しける。然る所に、馬場伊豆守、五六騎にて馳來り、引行く勢を恥しめ勇めて、下知をなせば、此時、總勢、大返しにして、難なく芝居を蹈堅め、旗を揃へて散々に射る。櫻井勢は備を亂して駈來りしに、大返しに突立てられて、馬の足を立て兼ね、人を楯に取らんとす。馬場伊豆守・横田備中守、時分は能きぞ。一度に鑓を入れよと下知す。士卒、一同に穗先を揃へ、噇と喚いて突入れば、櫻井勢崩れ立ち、城中を指して引退く。寄手、愈〻機に乘つて攻付け〳〵、堀際迄詰寄せて、一擧に城を乘取らんとす。馬場・横田、深く制して、必ず勢に乘るべからず、日既に夕陽に及ぶ。旁〻軍を揚げよと下知して、虎口をくつろげ陣を取る。其夜は、人馬の息を休めて、翌早朝、士卒に

兵糧已下を支度させて、今日は無二無三に城を乘取るべしと、示し合せて、堀際に攻寄せ、鬨の聲を揚げしかども、城中には、靜まり返つて、更に人音もせず。甲府勢、勇みに勇んで屏につき、我先にと乘込みたれば、城中には、早や落失せて、兵部少輔を始めとして、一人もなかりけり。信虎、齒を切り、兵部目を討取らざるこそ、安からねとて、夫より陣拂して、甲府に歸陣し給ひけり。

山縣河內守虎淸諫言の事

扨も、武田左京大夫信虎、極めて心荒く座す故、一族骨肉の好もなく、我意に任せて、門葉を攻亡し、譜代忠功の郎從と雖も、少しの過ある時は、忽ち縛り、首を刎ねさせ、或は自身手討にし給ひ、之を心地よしとて悅び給ふ。さるに依つて、一家の人々を始め、譜代恩顧の郎從等も、信虎に親み參らする事なく、明日にも我が身の上に、如何なる事か出來んと、安き心もなかりけり。泰平の時すら、賞罰に私ある時は、國を治むる事難し。益ていはんや、今、戰國の時に當つて、斯かる無道の振舞し給ひて

山縣虎清信虎を諫む

は、目の下に、家を滅し國を失ひ給はん事、遠かるべからずと、諸人歎き合へり。斯かりければ、或時、山縣河内守虎清、信虎の御前に參り、謹んで申しけるは、扨も加々美四郎殿、御敵となられ候事、退いて愚按を廻し候に、皆これ、讒臣、君の側にあつて、申沈め候と推量仕りて候。加々美隱謀の企は、曾て之なき虛言にて候ひける由、委く承り候。加々美と櫻井、緣者の好淺からざるを以て、櫻井氏も同じく逆意を挿まるゝの由にて、兩人、已に滅亡に及ばれ候。是皆、奸曲の邪臣等、風聞せしめたるか。元來、兒女の說より出て、曾て證なき所なり。其實否をも正されず。誅伐の爲め一戰に及び、是非なき成行、尤も悔しき所なり。御一家の廣きをこそ、御家の繁昌とも申すべけれ。骨肉の好を思召し忘れられ、御一家を斷滅なされ、累代の郞從等を、少しの罪科に依つて、死罪に行はれ、御手討などにし給ふ事、慈愛の御心なき故なり。君視レ臣如二土芥一、則臣、視レ君如二寇讐一とこそ承り候へ。今日本國中、縷の如くに分れ、蜂の如くに起り、國々に割據し、所々に椅捔して、一日も戰の止む隙なし。村上・小笠原・平賀等の大敵、目の前にあつて、味方の虛分を計り、時節を窺ふの

最中にて候。內、和せざる時は、敵、外より窺ふ事、古今珍しからず。然るに、御門葉の人々を、敵になされ、譜代の郎從等を、動もして刑罰に行ひ給はんは、敵の種を植ゑて、味方の根を枯すと、いふ者にては候はずや。仁義を以て士を懷け、罰を以て輕くし、賞を以て重くする時は、諸人親まずといふ事なし。其德、四方に隱なき時は、勇士等、招かざるに馳集り、御恩を蒙らん事を望むべし。さあらんに於ては、御馬を向けらるゝ所、皆味方に歸服して、戰はずして御勝利あるの道、全く備るべし。行々は、東國・北國をも、御手に入れ給はん事、疑あるべからず。御家、繁榮座してこそ、御先祖への孝行ともなり、新羅三郎殿より以來、十八代の御名をも擧げらるべけれ。生得、御短慮に荒々しく座すを、御心に誠もなく、思召すまゝに、擧動はせ給ひなば、御當家の滅亡、近きに候ふべし。兎に角に、御短慮を止めらるゝ樣にと、且つは諫め、且つはなだめ、淚を流して憚る所なくぞ申しける。信虎、不興の顏色にて、倩々と聞き居給ひけるが、暫時あつて、山縣が申す所、一理なきにあらず。扨又、加々美・櫻井等は、皆共に隱謀疑なし。何ぞ累代の恩を捨てゝ、一族の端に連

りながら、信虎を傾けんと企つるの條、其罪輕からず。故に我、惡を責めて罰を加ふる所なり。其根を強くせずんば、爭でか、枝葉繁らんや。汝重ねて、いふ事なかれとて、帳内に入り給ひければ、山縣も是非なく、眉を顰めて出でにけり。

鹽川合戰附横田備中・多田三八八度の鎗

同平賀成頼敗北の事

國に諫臣なき時は、其國必ず亡ぶ。家に諫むる子なき時は、其家必ず敗るといへり。山縣、忠臣の道を守つて、諫むといへども、信虎、曾て許容し給はざれば、亡國の端ならんと、皆人恐れ悲みけり。然る所に、武田家の調はざる所を窺ひ知つて、平賀成頼、四千五百の勢を率し、若御子を打越して、駒井迄押寄せたり。此平賀成頼は、武田家と、年來雌雄を爭ひしが、今、此弊に乘つて、甲府を押倒さんとす。之を註進する事、只、櫛の齒を引くが如し。諸人皆、山縣が申しつる事は、爰なるものを、哀れ、武田殿には、野狐の一心に入變りぬるか。身の程をも知らぬ、狂氣人かなとぞ私語

平賀成頼武田信虎を攻む

きける。信虎は、些も驚く氣色もし給はず。何條、平賀が打つて出でたりとも、何程の事かあるべき。信虎が鋒に懸けて、生首を切離して除けんものをとて、先づ軍勢を集められ、自身、馬をぞ出されける。相從ふ者共には、馬場伊豆守虎貞・板垣駿河守信形・工藤下總守虎豐・荻原常陸介・跡部尾張守・原大隅守・横田備中守・小幡入道・安間三右衞門尉・多田三八を始めとして、其勢三千餘、甲府筋を押出して、鹽川を前に當てゝ陣を取る。兩陣、互に相近づき、雙方機權を廻しけるは、鹽川を越してや戰はん。又渡さでや勝負を決せんと、白眼合ひてぞ控へける。暫時、見合ひ居る程こそあれ。早雄の甲府勢、鹽川を一同に颯と打濟して、敵陣に押懸り、一聲鬨を作り、矢一筋、射違ふると等しく、横田備中・多田三八、一番に鑓を入るゝ。是に劣らじと、總勢、鑓を提げ〳〵馳合す。兩陣、互に入亂れて、或は組んで勝負をするもあり、刺違へて共に死するもあり。塵烟尺を掠め、馬蹄地を轟かして、一時計り相戰ふ。然りと雖も、雌雄、未だ決せず。斯かければ、敵味方の陣將、互に人數を引揚げ、暫く息を休め、又相懸りに懸つて攻戰ふ。此度も亦、多田・横田、一番に鑓を入

る〻。備中は、敵二騎突倒し、中間に首を取らせ、猶も深く進んだり。多田も、敵二騎討取つて、横田に續いて敵中へ入る。渠等が働に、平賀少し辟易して、馬を立直さんとする所を、信虎、釆配を振立て、敵は色めくぞ、懸れや〳〵と下知し給へば、跡部尾張守・安間三右衞門、直驀になつて、馬を馳入るれば、諸勢、一度に噇と懸つて、井(せい)の字に乗切り、巴の字に駈亂れて、萬卒に面を向ふ。猶も勝負は決せずして、東西に引分れ、一息ついでは駈合せ、離れては又合して、雙方、互に刃を削れば、敢て死するを顧みず、都合八度の駈合にて、前代例なき戰なり。多田・横田の兩雄は、八度ながら一番に鑓を入れて、能き首共を討取つて、四つの鞖(しほで)にく〻りつけ、靜々と引退く形勢、偏に鬼神の如くなり。爰に白畑助之丞といふ者は、信虎の逞兵二百二十人勝り出し、其中より七十五人選び、七十五人の中より、又卅三人選び出し、身を離さず、召仕はれける其一人なるが、今日の軍に、させる働もなく、何卒と心懸けて、深く敵中に働き入り、神命を限りに戰うたり。信濃勢の中に、飯室右京亮といふ者、椎形の甲に、柏の葉の前立物打つたるを着て、白き練絹に、不動明王を畫きた

平賀成頼
敗績

る指物、駮の馬の太く逞きに打乘つて、采配を持つて馳廻りける。白畑、之を吃と見て、天晴敵やと悦んで、鐙引きそばめ突いて懸る。左京も、太刀を拔合せて、暫し戰ふとぞ見えしが、右京、痛手を蒙つて、馬より逆樣に、どうと落つる。白畑、馳寄せて乘つ懸り、終に右京を討捕りけり。則ち其首に、采配を添へて退かんとするを、平賀勢、之を見て、白畑を中に取込めて、散々にこそ擧動ひけれ。斯かりければ、助之丞、忽ちに討たれぬべく見ゆる所に、横田備中守、之を見付けて、附卒に下知し、白畑、難戰して必死に谷れり。あれ馳寄せて、白畑を救へといふより早く、十四五人、喚いて鎗を入れけるにぞ、敵勢、四方に離散しける。助之丞、痛手を負ひければ、中間の肩に懸つて、後陣を指して引退く。横田なかりせば、危き白畑が命なり。斯くて戰半なるに、板垣信形・馬場虎貞兩將が備を一つになし、韮崎の北、穴觀音の後へ押廻し、香象の波を蹈んで、大海を濟る勢を見せ、敵陣の横を突拔かんと、急の太鼓を打つて、頻に進めば、信州勢、大に色めき、四度路になりて、後陣より崩れ立ち、故多川を西へ敗北す。甲州勢、逃ぐるを追うて、此所に追詰め、彼所に馳寄せ討取

りける。味方、今日の軍に打勝つて、勝鬨を執行ひ、甲府に馬を打入れらる。馬場板垣・多田・横田・白畑等に感狀を與へ、加恩を授けられ、其器を愛し給ひける。

武田三代軍記　巻之第一終

武田三代軍記 巻之第二

後柏原院御即位幷福島上總介甲州亂入の事

後土御門院崩御

後柏原院踐祚

人皇一百四代の聖主後土御門院、去ぬる明應九年九月廿八日、御歳五十九歳にして、黑戸に於て、崩御ありしかば、泉涌寺に葬り奉り、法諱を正等觀と號し奉る。同じき十月廿五日、皇子勝仁親王、踐祚ましまし、百五代の寶位を續がせ給ふ。後柏原院と申し奉る。御母は准三后朝子、蒼玉門院とぞ申しける。寛正五甲申年十月二十日、降誕ましまし、文明十二年十月三日、親王の宣下を蒙らせ給ひ、同じき二十日、前の左大臣の小河の亭にて、元服あり。明應二年正月六日、三品に敍し給ひけり。然るに明應十年、改元あつて元龜と號す。斯くて今年、大永元年に至る迄、已に廿一年に及べども、御即位の禮を行はれず。去ぬる應仁の大亂より以來、天下一

今川義元の老臣甲斐に亂入す

日も穩ならず。日本六十餘州に、兵革の止む隙なく、公武、共に衰微して、此大禮延引しけるとぞ聞えし。時に、三條內大臣實隆入道堯空、（逍遙院殿と號す）大に之を歎き給ひけるが、此入道殿の計らひにて、本願寺顯如上人より、御卽位料を調進ありて、大禮事故なく、遂に行はせ給ひける。是に依つて、顯如上人に、永代二品親王の綸旨をなし下されけり。然る所に、同じき三月廿五日、將軍源義植、京都を出奔あつて、淡州に赴かせ給ふ。京都は足利一家の人々、細川・畠山已下、互に寇を含み、恨を結んで、戰、絕ゆる間なく、國々には處々に割據し、彼を討ち此を攻めて、晝夜、靜かなる事なければ、如何に成行くべき世の中ぞと、諸人悲み合ひにけり。茲に、今川駿河守義元の老臣、遠江の國高天神の城主福島上總介といふ者あり。己が威勢の强きに誇り、主君義元をも侮り恥しめ、一身の計略を以て、甲州武田を攻滅し、我物にせんと思案して、叔父山形淡路守を先陣とし、嫡子常陸介と共に、駿河・遠江二箇國の勢、一萬五千餘騎を引率し、下山筋を押來つて、甲州に攻入りけり。其頃、左京大夫信虎、一族郎從に親しからず。萬づ心にまかせて、惡行、日々に超過しければ、諸

人、大に疎み果て、一門の人々を始め、累代恩顧の郎從と雖も、悉く身構をなし、己々が居所に引籠り、世の有樣を窺ふ。斯かる時節なれば、誰か出でて、支へんとするものなく、信虎、安からず思ひ給へども、參り集る勢なければ、さしもの信虎、如何はせんと、仰天してぞ御座しける。然れども、福島が勢、已に先陣、山形淡路守は、十日市場まで押寄せ、本陣を龍路に居ゑて、近日、甲府に押寄すると聞えければ、小勢なりとも討つて出で、骸を戰場の苔にさらすべしとて、信虎を始め、相從ふ人々には、穴山左衞門大夫信行・板垣駿河守信形・工藤下總守虎豐・馬場伊豆守虎貞・山縣河內守虎淸・內藤相模守虎資・荻原常陸介昌勝・原能登守友胤・嫡子美濃守虎胤・同名大隅守・小幡入道日淨・嫡子山城守虎盛・甘利備前守・横田備中守・飯富兵部少輔虎昌・跡部尾張守・安間三右衞門尉・鎌田織部正・白畑助之丞・野村・多田已下、纔に二千餘人、千塚邊に打出で、飯田川を前に當てゝ、對陣、數日に及びけり。遠州勢は、多勢なりと雖も、案內を知らぬ敵地といひ、殊に武田の陣法、他家に勝れければ、卒爾に備を動かさず。日々、足輕を出し迫合せて、矢軍に日をぞ送りける。斯くて、いつ果つ

福島、武田合戰

べき事ならずと、戰を始め、毎日、雌雄を爭ひしかば、既に武田家、滅亡に至りぬと、甲府の民百姓等、周章て騷ぐこと斜ならず。茲に、荻原常陸介昌勝は、信虎の軍術の師範として、智勇兼備へたれば、此度の軍、常の如くにしては、中々味方の勝利あるべからず。如何はせんと、肺肝を碎き思慮せしが、古へ、伊勢の國にての漁夫が物語を、思出し、相圖の據旗といふものを作り、大將信虎と密談し、甲府の町人、其外、國中の百姓等に觸をなし、女童までも駈催し、御館の後、長禪寺山、或は和田山などに取續け、旌旗を差上げ、夜は篝火を燒續け、後詰の大軍、近づく體をば見せたりける。荻野、奇妙の謀をなし、作勢·伏兵等の備を、旗の割符を以て彩り、飯田川を打越して、敵陣に押懸り、鬨を噇と作る程こそあれ。一騎當千の兵共、我も我もと鎗を入るゝ。福島が勢も、爰を先途と相戰ふ。太公が鳥雲の陣、唐の李衛公が奇正の術、互に知つたる道なれば、陽に開き陰に閉ぢ、弓手を撃ち馬手を遮り、唯一時に勝負を決せんと、雙方、一足も引かず相戰ふ。然りと雖も、甲府勢、必死になつて戰へば、寄手少し四度路になりて、兩方へ別れて引退く。大將福島、大に怒つ

荻原昌勝の奇謀

福島上總介敗走

て、武田勢、何程の事かあるべき。我が旗本を押出して、一戰に討散らさんと、采配を振つて、頻に備を進め、常陸介が手に突懸つて、相戰ふと雖も、樊噲陳平をも、欺く荻原なれば、敢て備を亂さず、士卒を勇めて馳廻れば、寄手、大勢なりと雖も、昌勝が一時の謀に陷つて、諸卒の心、大に變じ、臆病神に誘はれて、一致の心、碎けしかば、福島が軍、敗走して本の陣所に引退く。武田勢も、疲れぬれば、相引にして陣を取る。斯くて荻原昌勝、敵の心を察し、味方の軍士を勇めて、彼に勝つべき事の大意を知らしめ、間者を遣し、和睦の儀をぞ謀りける。さしも大剛の福島、荻原が謀略に氣を許して、和睦、調ふべきにぞ定めける。其上、人質の事迄沙汰せしめ、頓て遠州に、歸陣すべしとぞ聞えける。福島が軍勢、大に悦び、いつしか鬪戰の心を緩くして、自然と怠の氣を顯しける。昌勝、信虎の御前に參り、今は思ふ儘に、福島を方便(たばか)り候。早々、快よく一戰を遂げられ、一人も殘さず、御討取あるべしといへば、信虎、大に悅び給ひ、汝は、古の韓信・張良が謀にも、劣るべからず。其上、此度、不思議の瑞相共ある事、八幡菩薩・諏訪大明神も、未だ當家を捨て給はずと覺えた

り。急に懸つて討取れやと、陣中を觸渡して、已に用意をぞし給ひける。

飯田川原合戰附福島・山形討死の事

斯くて、武田の軍勢共、未だ横雲も引分れざるに、飯田川原に取懸つて、急に旗の手を進め、鬨の聲をぞ揚げたりける。寄手は、思ひ寄らざる事なれば、あわて騷ぐ事、斜ならず。定めて大勢ならんと、途に迷ひて、駈合はんとする者なかりけり。爰に、味方の陣より、白畑助之丞、一番鑓と名乘つて、眞先に進んで鑓を入るゝ。福島が先陣、山形淡路守、剛の者なれば、介副の鎧を追取つて肩に懸け、馬引寄せ打乘り、敵は、此間の和睦の約を變改して、味方を方便り討たんと、巧みたる穢さよ。續けや者共とて、自ら鑓を追取つて突出てしかば、士卒、爭でか猶豫すべき。皆、得道具を提げ〳〵攻合はす。然りと雖も、遠州勢、大に不意を討たれて、其列、五伍を失ひしかば、戰ふに術なくして、龍路を指して、後陣の勢になだれかゝる。山形、大に怒つて、蓬し者共、爰を引いて、何國へか落行くべき。敵は少勢なるぞ。返合せて備

を立てよ。骸を苔に埋めて、美名を後世に殘せと、身を揉み下知を加へければ、流石の勇士、百騎計り、一度に嘩と返合せ、引組んで落つる所もあり。差違へて共に泉下に赴くもあり。分捕高名、樣々なり。されども、一陣破れて、後、殘黨全からざるの謂なれば、終に福島が總軍、敗北に及ぶ。山形も戰ひ疲れ、矢疵少々蒙りければ、今は、とても叶ふべき事にあらずと、駒の頭を立直し、引退かんとして、鐙に立つ矢を折懸け、馬に鐙を當てける所に、小幡山城守、之を見て、鞭鐙を合せて蒐來り、先陣の大將、山形殿と見るは僻目か。穢くも敵に、後を見する武者振の見苦しさよ。返して勝負をし給へ。雙方、不足なき敵ならんぞ。小幡山城守なりと訇りければ、元來、剛なる淡路守、莞爾と笑つて引返すを、山形が着たる甃(かぶと)の鉢を、微塵になれと、丁と打つ。討たれて太刀を拔合せ、切拂はんとする所を、續け樣に二打・三打、したゝかに打たければ、山形大力に甃を打据られ、目暗れ心腦亂して、鞍の前輪に、手を懸けて差俯き居る所を、小幡、馬を馳竝べて引組み、どうと落ち、頓て上に乘懸り、山形が首を搔落す。之を見て、郎從ども十四五騎、取つて返し、小幡

を中に取籠みて、既に危く見えける所に、虎盛が郎徒、主を討たせじと、大勢馳來つて、敵を追散らし、味方の陣に引退く。斯かりければ、先陣悉く敗北して、右往左往に亂るゝを、武田勢、大に競ひ懸り、勝鬨を作りかけ、他の陣には、目を懸けず、大將福島が陣に討つて懸る。上總介、此由を見て、敵は少勢なるぞとて、備を鶴翼に連ねて、中に取籠めんとするを、甲府勢、又魚鱗に備へて、敵の中を割通る。信虎、大剛の猛將なれば、眞先に進んで、下知し給へば、士卒、義を金石に比し、命を塵芥よりも輕じ、短兵急に進んで、堅きを摧き、强きを破つて挒合ひければ、福島、一騎當千と賴みける三田崎・奈良川・土肥・熊井・佐田・神原の一黨を始め、宗徒の者共、許多討たれければ、上總介、怒れる眼に血を注いで、いひ甲斐なき者共の擧動かな。汝等、國を出でしより、再び生きて歸らんと思ひけるか。爰を逃れて、誰にか又面を向ふべき。骸は龍門原上の土に埋むといふとも、譽を後天に擧ぐべしとは、思はざるやと、鞍笠になりて、旬り勇むれば、大將に義を進められて、引返し討死するもあり。聞かぬふりして、退くもあり。已に寄手、大崩になりて敗走すれども、福島

は一足も退かじと、思ひ込んだる事なれば、氣色、眼の色に顯はれて、殘黨二十騎計り、前後左右に從へ、暫く控へ居る所に、飯富兵部少輔虎昌・原美濃守虎胤、之を見て、旗一旒、押立てさせ、二三十騎、眞丸控へたるこそ、大將福島よ。遁すな。一人も殘さず討捕れと、噇と喚いて切つて懸る。上總介を始め、盛返したる殘黨、一つに引堅まつて、何れも馬の鼻を雙べ、福島が矢面に蒐塞つて、必死になりて攻戰ふ。原美濃守虎胤は、鬼美濃と呼ばれたる大剛の勇士なれば、大半月の前立打つたる甃を着、黒き馬の太く逞きに、鏡鞍、置いて乘りけるが、福島を目に懸けて相近づく。上總も、同じく尋常に馬を乘寄せて、あはや太刀屆きになると見えしが、美濃守、三尺餘の刀を、拔き打に丁と打つ。福島、同じく拔合せて、しとゝ受け、馬に雙方、輪を駈けて暫く戰ふとぞ見えし。然りと雖も、互に逸物の馬共にて、自由に勝負、心に任せずとぞ見えにける。良ありて美濃守、馬をつと馳寄せて、上總が左の太股、草摺の透間を、鋒先はづれに、健にこそ切込みけれ。福島、鐙を蹈兪ねて、馬手に百と落ちたりけるを、原、下立ちて乘懸り、首を搔かんとせしかども、上總、元來大剛の者に

て、差添を抜きてあげざまに、虎胤が鎧の透間を突かんとす。虎胤、其手を取つて、己が膝の下に、しかと敷き、些とも働かせず、首、掻落し立上る。從兵、何れも猛勇の者なれば、斯程の亂軍なりければ、主人の戰を助くるに及ばず、暗々と討たれしかば、何れも死狂に戰ひて、一人も殘さず討たれにけり。斯かりければ、總軍、一同に敗北して、思ひ〳〵に引退くを、追懸け〳〵生捕・分捕、一人として、味方の兵印を得ずといふ事なく、切捨てたる骸は、累々として居所の如く、紅波、漲り流れて楯を浮べ、淺ましかりし分野なり。去る程に、左京大夫信虎は、荻原が奇術を以て、一戰に勝利を得、勝鬨を執行はせ、心静に首實檢まし〳〵て、大に喜び居給ひけるに、甲府の御館より、飛脚到來して、若君御誕生まします由、追々に註進すれば、信虎、悦に喜を重ね給ひ、勇みわたつて、甲府に凱陣ましましけり。

福島上總介討たる

信虎凱旋

諏訪大明神靈驗附勝千代殿御誕生の事

此度、福島上總介、甲州に亂入せしかば、六十餘日が間、對陣に及びけるに、不思議

諏訪大明神の示現

武田勝千代誕生

の事共も多かりけり。其對陣の初め、立烏帽子に、白張の裝束着たる男一人、是は諏訪大明神の御使なり。今般の合戰は、武田の若君の勝利なりとぞ。甲府の町中を觸廻つて、通りけるが、其後、何處に行きたるといふ事を知る者なし。諸人驚き、こは不思議の珍事かな。扨は諏訪大明神の應護し給ふにやと、大に頼もしくぞ思ひける。其後又程經て、何處ともなく、又例の男、拳に白彪（しらふ）の鷹を居ゑ來り、忝くも諏訪大明神の御鷹なりと、町中を觸れて、行方知れずなりぬ。是に依つて、諸人、愈々頼もしく、有難くぞ思ひける。然る所に、狄原常陸介昌勝が謀にて、大敵を一戰に討滅し給ふに、其時刻に、若君、誕生ありけるこそ不思議なれ。信虎、凱陣ましまして、若君を御覽なされ、喜び給ふ事斜ならず。吾聞く、古は喜ぶ事あれば、則ち以て物に名付く。忘れざる事を示すなり。周公は、禾を得て以て、其書に名け、漢武は、鼎を得て、以て其年に名付け、叔孫は敵に勝つて、以て其子に名付くといへり。今般、福島を討滅したる、其同刻に生れたればとて、御名をば、勝千代丸殿とぞ附け給ひける。後に大膳大夫晴信入道、法性院大僧正机山信玄と申しけるは、此勝千代

殿の御事なり。殊更、信虎、今年纔に、廿八歳にして、儲け給へる世繼なれば、悦び給ふも理なり。斯くて、都より敕使立つて、信虎を從五位上左衞門尉に、なし下されしかば、信虎、恐悦甚しく、敕使を種々饗應、善盡し美盡せり。敕使も、大悦斜ならず、歸洛に赴き給ひけり。

井上鐵炮を獻ずる事

後柏原院崩御

後奈良院踐祚

京都には、將軍義植、淡路に沒落ましまし、後は細川右京大夫高國が計らひにて、故法住院義澄(征夷大將軍)の御子義晴朝臣、播州におはせしを、呼び迎へ奉り、足利十二代の公方と仰ぎ奉れば、則ち征夷大將軍の宣下あり。高國、管領となりて、威勢日頃に百倍せり。斯くて、大永六年四月七日、後柏原院、御年六十三にして崩御ありしかば、武家よりの計らひとして、第一皇子知仁親王、同じき廿九日、踐祚あつて、萬乘の寶位にぞなり給ふ。御母は、准三后藤子儀、同三司敎秀卿の女なり。此君を、後奈良院と申し奉る。然るに今年、西國の牢人井上新左衞門尉といふ者、甲府に來つて、

樣々と所緣を求め、信虎へ奉公に出てけるが、鐵炮を持ち下つて、信虎に獻上す。諸士に仰せて、之を試み給ひけるに、其音、雷霆の如く、當る事速かなれば、是れ戰に用ひて、尤も最上の兵器なりとて、大に喜び給ひける。甲州に鐵炮出來る事、此時より始まれり。是よりして、東國・北國にも始まりしとかや。

信虎惡行附馬場・山縣諫死

去る程に、左衞門尉信虎朝臣、今川家の老臣福島上總介を、討取り給ひしより、其威彌々盛になり、其勇に誇り、益々惡行、心の儘にぞ擧動れける。吾れ累代甲州の大守として、威を遠境に震ひ、萬事、心に任せずといふ事なし。然れども、未だ懷胎したる女の腹の中、見度く思ふ事の、今に心に任せぬぞとて、夫より孕みたる女を、尋ね出させ、當月懷胎の女よりして、二月・三月乃至十月迄の、女の腹を切裂きて、男子・女子の境を見分け、又は十月迄の其間、月々の形勢を、見定め給ふに、既に十三人迄、其腹を切裂き、殺されけるは目も當てられぬ分野にて、皆人、大に恐れけり。長臣

馬場・山縣死を以て信虎を諫む

馬場伊豆守虎貞・山縣河內守虎淸は、信虎の惡虐を見るに忍びず、大に歎き悲み、兩人心を合せ、五十七箇條の書付を以て、主君信虎を諫め參らするに、少しも其言を用ひ給はず。結句引籠つて、馬場・山縣に對面し給はず。兩人、如何ともすべき樣なくして、密に評議しけるは、諫むべきを見て、諫めざるは、臣たるの道にあらず。よしや御意に違ひて、死罪に行はるゝとも、伍子胥が昔の忠貞を慕ひ、是非とも諫め奉らんと、二人、心を聢と合せ、或日の早朝に出仕し、刀士・阿筑とて、二人の局を以て申しけるは、一揆の奴原、起つて當國山梨邊迄亂入し、民屋を侵し掠むる由、今朝告げ來り候。急ぎ御出馬あつて、御退治あるべき由を申す。信虎、之を寔と心得、大に驚き給ひ、急ぎ兩人を寢所に召され、右の次第を御聞きある。其時、馬場・山縣、御側近く參り、畏つて、さん候。一揆の起りたると申すは、僞にて候。我々兩人、臣たる者の道を守り、此間、數箇條を書きて、諫め奉れども、曾て一事も御許容なく、剩へ、夫よりして御目見をも許されず。今は何として、申上ぐべき便りだに候はず。左ありとて、打捨て置きなば、恐れながら、當家の滅亡、近きにあるべく候。惡名を

永く末代に、殘させ給ふべし。心ある者は、何んぞ此事を歎かざらん。されば諸人、深淵に臨んで、薄氷を履む思をなすと雖も、君の御怒あらん事を恐れ、己が身を顧みて、一言の諫を、申上ぐる者も候はず。今、戰國の最中にして、村上・平賀・小笠原等の大敵、信州に充滿し、味方の虚を窺ふ時節なり。我々の諫言を、御許容なくんば、必定、御家を亡さん事、目の邊りに候はんと、憚る所なく申しければ、信虎、顏色變り給ひて、二人の者を、礑と白眼み、我れ汝等に諫められて、國を治めんか。其上、我を侮つて、僞を以て、予を方便る事こそ安からねと、御重代の左文字の刀を拔はづし、直ちに山縣を一打に切つて捨てられける。虎貞、少しも騷がず、畏つて候ひけるを、馬場、之を見たるやと宣ひ、にがり切つて立ち給ふ。伊豆守承り諫め爭うて、死を給ふは、臣たる者の道にして、又君たる者の道にあらず、古今、例多く候。身を顧る心底にて、何ぞ諫を申さん。倶に比干が刑を給はつて、快く相果て候はんと、いふも終てぬに、肩先よりずんど切つてぞ離されける。是より諸人、怖れをのゝき、諫言を申す者なければ、彌〻惡行をぞ擧動はれける。

佐保原合戰の事

今川義元信虎の婿となる

北條氏綱駿河に亂入す

斯くて、左衛門尉信虎、武威、盛なる上に、駿州大守、今川治部大輔義元を婿に取りて、彌〻威勢を振ひ給ひけり。其由來を悉く尋ぬるに、去ぬる應仁三年、伊勢新九郎氏茂といふ者、牢浪の身となりて、駿河に下り、今川家の高恩を蒙り、次第に立身し、相州小田原に在城し、兩上杉を敵に受け、合戰の止む間なく、氏茂、稱號を改めて北條と號し、入道して早雲庵宗瑞とぞ申しける。去ぬる永正十六年八月十五日、豆州韮山の城にて、終に卒去せられければ、嫡子新九郎氏綱、父の遺跡を守つて、威光を關八州に輝し、今川家の重恩を受けながら、駿河國に亂入し、富士川の北、悉く北條家の手に入りけり。然る所に、享祿四年、北條氏綱、六千餘騎を引率し、甲州を攻取らんと、駿州足高山の裾を、東へ押出し、佐保原に陣を取る。信虎、之を聞き給ひ、何條、浪人新九郎、今川家の情にて、大名となり、伊豆・相模を討從へたりし。其子氏綱が分際にて、甲州へ手を指さんと、するこそ優しけれ。氏綱が勇武、恐るゝ

信虎・北條氏綱と佐保原に對陣

佐保原合戰

に足らず。さあらば、出向ひて蹴散らせとて、已に出陣と聞えける。相從ふ人々には、穴山伊豆守信行・板垣駿河守信形・逸見・一條・於曾の人々を始めとして、工藤下總守虎豐・內藤相模守虎資・飯富兵部少輔虎昌・跡部尾張守・原美濃守・小幡入道・敎來石民部少輔・小山田備中守以下、四千餘人を引率し、駿州佐保原に討出でらる。先陣は板垣信形、承つて馳向ふ。北條の先手は、松田左衞門佐なり。斯くて、雙方、備を設け、列を正しうして、懸らず退かず、互に機を窺ふ所に、板垣、いらつて松田が備に押懸り、矢一筋、射違ふる程こそあれ。兩方、一度に驅つて鑓を合せ、入亂れて攻戰ふ兩方、互に猛勇の將といひ、敵、魚鱗に連ねて、突破らんとすれば、味方、鶴翼に解いて引包み、入違へ揉合うて、暫く白刃を削ると雖も、一手の戰にして、總軍の勝負にあらざれば、士卒も甚だ戰疲れ、兩方に引分れて、正兵、已に息を休む。二陣の穴山・飯富は、大道寺が陣へ押懸けて、十文字に駈破り、巴の字に廻つて突立つれば、大道寺、大に辟易して、既に敗走に及ぶと見えしかば、大將氏綱、身を揉み、大道寺を討たすなと、いひもあへず、旗本の備を押出し、鞆（しころ）を傾けて切つて懸る。信虎

北條氏綱の敗軍

も、旗本を以て、相懸りにかけられたり。今は兩方の諸手、一つになりて、敵味方一萬餘騎、入亂れ駈違ひ、鬨の聲矢叫の音、天地を響し、坤軸も碎けつべくぞ覺えける。爰に、教來子民郡少輔景政は、生年十八歲、今日、初陣にてありけるが、相模勢の武者大將神谷兵庫助友忠と組んで、上を下へと爭ひけるが、難なく兵庫を組伏せて、首搔切つて、采配・指物を添へて分捕し、我が從者に渡して、馬引寄せ打乘り、又、敵中に駈入りて、能き武者二騎に近づき、手もなく馬より切つて落し、二つの首を、我が乘つたる馬の取付に付けて引退く。安間三右衞門も、敵二騎、討取つて駈出でたり。斯くて戰、半なるに、內藤相模守・原美濃守、敵陣の横に、無二無三に突懸りければ、伊豆・相模の軍勢等、此奇術に列を失ひて、しどろになりて敗走す。松田・大道寺等の剛兵共、足を立て兼ねて、漸、殿を備へて、折々返合せ引退く。氏綱の旗本勢、大に散亂して引きければ、氏綱、既に危き場を逃れて、這々の體にて引入らる。此形此競を以て、北條の手に入られたる富士川の北、悉く信虎の御手に從ひける。此形勢なりければ、興國寺の城主青沼飛驒守、人より先に降參しければ、信虎、大に喜び

給ひ、飛騨守が嫡子與十郎を以て、足輕大將小幡日淨が、婿にすべしとぞ、仰付けられける。斯く信虎の威勢、日々に盛になりければ、今川家より懇望ありて、息女を義元の室家にぞなされける。此時、信虎、息女の假粧領として、北條と戰うて、切取り給ふ彼の駿州富士川の北、悉く今川殿へぞ渡されける。北條入道早雲は、元、今川の重恩を蒙り立身し、氏綱に至つては、猶ほ武威を振ふ。然るに、彼の富士川の北も、氏綱、出でて切取ると雖も、程なく信虎に取られ、再び今川の手に渡されける。天道自然なりとて、皆人いひ合へり。

信虎惡行諫言に就き工藤・內藤手討に逢ふ事

左衞門尉信虎は、惡行倘も超過して、信州岩田村の律宗の寺二箇寺、敵に內通の樣子ありとて、忽ち燒拂ひ給ふに、寺僧六十餘人、悉く燒殺されけることそ、哀れに覺えけれ。長臣內藤相模守虎資、之を歎き、不義惡行の品々を集めて、言葉を盡し諫めしかば、信虎、何とも言を宣はず、例の左文字の御刀を以て、拔打に討つて捨て給

ふ。工藤下總守、間を隔てゝ、之を見付け、押止め參らせんと、走り來るを、信虎、振返り、屹と見給ひ、己も內藤に一味して、我に不禮をせんとするかと、彼の血刀を打振つて、一打にと進み給へば、工藤驚き、其席を退かんとするに、何とかしたりけん、椽の閾に躓いて、屛風を倒す如くに、𣅜と伏すを、續けて二太刀打ち給へば、工藤も空しく死にける。武田累代の四臣といはれし馬場・山縣・工藤・內藤四人を始めとして、文武兼備の勇士等を、卅七人迄、手づから切殺し給ひければ、諸人、大に疎み果てたるも、理にぞ聞えける。今諸國干戈止む時なく、恰も戰國の七雄の如きの折なれば、互に隣境を侵して、我が手に從へん事を、日夜に工夫するの時節なるに、智謀の忠臣等を、片端より、心の儘に切殺し給ふ事、偏に武田の家の、滅ぶべき前表なりとて、悲まぬ者はなかりけり。

勝千代殿幼少の間行跡世に勝れたる事

勝千代丸殿、幼少の行跡、兒童の擧動に勝れて、皆人、舌を振ふ事多かりし。其中、一

つ二つを擧げていへらく、八歳よりして、關山派の長禪寺へ、手習學問の爲に登山あり。一字を學んで、十字を知り、自然に虎爪龍牙の筆勢を備へ、尋常ならずぞ見え給ひける。或時、師の坊、一卷の書を取出し、是は玄惠法師の作り置かれし庭訓往來と申す書なり。讀習ひ給ふべしとありければ、二三日の間に、早や其理に通達御座して、是はさのみ、武將の要とすべき物と覺えず。何にても、軍略に達すべき書を教導し給へとあれば、師の坊、大に驚いて、扨々、栴檀は二葉より香しとかや。流石、信虎君の若君にて御座すと、大に感じ、さらばとて、七書を出して、讀ましめ給へば、是こそ予が望む所に候とて、晝夜を分かず、勤學あれば、實に螢雪の功積みて、其理に悉く徹底し給ひぬ。夫より小僧に打交り、參禪參學し給ふにも、活達頓機、衆に超え、凡智にあらず見えにける。斯くて、月往き日來つて、勝千代殿、十二歳の秋の末、或夕暮に、御手水の爲めに、廣縁に立出でられしに、日頃に立置かせ給ふ木馬のありけるが、忽ち身震(みぶるひ)して、御名を呼びかくる。聞えぬ體にもてなして、餘り不思議さに、暫く其所に佇み給ふ。時に彼の木馬、又曰。如何に勝千代、軍術と

劍術、何れが是なりや。劍術・軍術、共に是なり。これ劍術の妙なりとて、拔打に丁と切り給へば、手答へして、緣より下へ百と落つる。其後、御小姓の今井市郎を呼び給ひて、廣緣の下に何事かある。見て參れと仰せらる。畏つて火を持ち、之を見るに、大きなる狸の、血に染みて伏したり。扨又、十三歲になり給ふ春、野に出て遊び給ふに、四十餘の男、草にひれ臥して、物を窺ふ體に見えける。御小姓を以て、問はせられけるに、夕雲雀を取らん爲め、今朝より此野に罷あるといふ。勝千代殿、之を聞き給ひ、蟹は甲に合せて穴を穿つといふ。誠なるかな。然らば某、取つて見せんと宣ひて、少し高き所に登り、麥畑、或は芝の生茂りたる中へ、雲雀の下立つ所を見定め、大勢、手を分け、下知をなして、取らせ給ふにより、十巢・二十巢程づゝ取り給ふ。又或時、信虎、人々を御伴ひありて、居物を遊しける。信虎、自ら切り給ひて、次郎に切れと仰せらるゝ。畏つて次郎殿、手際よく切落し給ふ。其後、勝千代殿に仰付けらる。深く辭し給ふ氣色なれども、信虎の仰せらるゝ儀なれば、止む事を得給はず、立寄り顏色變つて靑くなり、手震ひ御座しけるに、果して切損じ

られける。信虎、大に怒り給ひて、次郎殿の手を引き、奥に入り給ふ。勝千代殿、其時、色直り、打笑つて御快げに相見えし有様、尋常の者共、嘲り笑ひしも理なり。荻原常陸介、之を見て、此人、大丈夫の器にして、大に智勇の二葉なりと感じて、其後、甘利備前守・板垣駿河守に語りて、其より密に、勝千代殿を深仰せし事、甚だなりしとかや。

信虎父子不和起るの事

勝千代殿御父子の間、不和になり給ふ起を尋ぬるに、晴信、十三歳になり給ふ時、信虎の秘藏の名馬、鬼鹿毛と聞えしを、所望し給ひける。抑ゝ此馬と申すは、其長八寸八分にして、一度、鞭を當つる時は十丈の堀をも越えつべく、穆王の八匹の駒も、斯くやと思ふ計りなり。然るに勝千代殿、漸くに十三歳になり給ひしかば、使を以て、父信虎へ、彼の鬼鹿毛を給るべしとぞ望まれける。信虎、元來の狂氣人に變りて、氣に合はざる體には、見え給へども、さのみ怒り給はず。勝千代は、未だ當年

十三歳と覺えたり。鬼鹿毛などの荒駒を、若年の身には似合ふべからず。來年は十四歳なれば、元服をさすべし。其時、當家重代の御旗・無楯の鎧・義弘の太刀・左文字の刀・同短刀、悉く讓り與ふべしとぞ、返事し給ひける。勝千代殿、重ねて押返し、使を以て、當家重代の重寶共、悉く讓り下さるべき由、忝く奉存候。然れども、愚案に存ずる所は、御旗・無楯は、曩祖新羅三郎殿より、相傳の家寶なり。其外、太刀・刀等、皆以て、當家重代の物なれば、御家督を下されん時こそ、頂戴仕るべけれ。來年、首服を加へ侍ふとても、部屋住の體にては、爭でか給はり候ふべき。彼の鬼鹿毛は、勝千代、唯今より乘習ひ候て、一兩年の間に、何方にもあれ、御馬を出されんには、某、若年には候へども、御後備を快く蹈まへ申さんと存じてこそ、彼の馬を所望仕るに候。然るに、右の御返事共、更に心得申さずと、押返してぞ所望し給ひける。其時、信虎、大に怒り給ひ、眼をいらゝげ、荒らかなる聲にて、宣ひけるは、汝等、よく聞け。家督を讓らんも、讓るまじきも、信虎が心中にあれば、誰か之を知らん。累代の家寶を讓り與へんといふに、夫を不足に存ぜんに於ては、弟の次第を、信虎

が總領となして、家督を渠に繼がせ、親の下知に從はざる奴を、追出して除けんものをとて、備前兼光の三尺三寸ありけるを、拔はづし、使の者を追懸け給ひければ、主殿を指して逃延び、危き命を助かりけり。さて、勝千代殿と、御中、不和にならせ給ひて、使の者を切り給ふ由を風聞して、甲府の町人等、是は大方の事にはあらず。事の基なりとて、騷動する事、斜ならず。されども、春巴和尚とて、曹洞宗の知識にて、信虎、歸依淺からざりければ、此和尚、色々詞を盡し、御中直し給ひければ、何の恙もなかりけり。夫より互に御心、解け給はず。動もすれば、勝千代殿に、辛き目を見せ給ふ。さるに依つて、郎從共も、皆悉く、舍弟次郎御曹子を、重じ參らせて、勝千代殿を侮りければ、次第に威勢、薄くなりて、後には勝千代殿は、ありてなきが如くなり。勝千代殿、此氣色を見付給ひて、至つて聰明なる人なれば、如何なる深き志や在しけん。小山田備中守と密談し給ひて、虛病を構へて、出仕を止め、密に御屋形を忍び出で、五六日ありて、歸り給ふ事などありけれども、之を知る人なかりけり。扨こそ、此時より御志ありけるとは、後にぞ思ひ當りける。十三歲や十四

歲にての御思慮、寔に恐しき事共なり。其後よりは、一向、虛氣たる風情にもてなし、馬より落ちては、背に土塵を附け、或は泥にまみれながら、父の御前に出で、御側にて物など書き給ふ時は、態と惡しく書き、川に入り水を泳ぎ給ふとても、深き所に至つて、水に溺れ、助けよと呼ばはりては、郎從等に取上げられ、又は大木・大石などを引かせ給ふにも、二郎殿に負けて、不首尾なる樣にもてなし、御前の立擧動(たちふるまひ)或時は、躓きて轉び、又は何の用もなきに、周章て騷ぎ、萬事につけて、武田の總領には、立ち給ふまじきなりと、何れも私語きけり。

勝千代殿元服の事

晴信と名乘る

去る程に、天文五年三月、吉日良辰を選ばれ、今川義元の取持にて、勝千代殿、元服の儀式あり。此時、京都の將軍は、足利十三代の公方、大納言右大將源義晴卿にてましませしが、上野中務大輔淸信を以て、甲州に差下され、將軍家、御諱の字を給はつて、武田太郎晴信とぞ名乘り給ひける。然る所に、主上後奈良院、敕使として、轉

法輪三條左大將公賴卿、甲州に下向あり。晴信を、大膳大夫兼信濃守に任ぜらるゝ。公賴卿の息女を以て、晴信に嫁すべき由の敕諚にて、同じき七月、御輿入ありければ、猶ほ賑々しくぞなりにける。されども、信虎はさのみ悦び給ふ氣色もなく、唯、舍弟の次郎殿をのみ、寵愛あつて、國家を治むべき、其器に中れる晴信を、愛し給はざるこそ方見(うたて)けれ。

信虎、海野口の城を攻む

信州海野口の城軍の事

去る程に、信虎、信州海野口の城を、攻めらるべしとて發向あり。嫡子大膳大夫晴信・次男次郎信繁・穴山伊豆守信行・板垣駿河守信形・原能登守友胤・同美濃守虎胤・廿利備前守・加藤駿河守・跡部尾張守・飯富兵部少輔・敎來石民部、是等を宗徒の士大將にて、其勢、八千餘人を引率し、同じき十一月廿一日、甲府を御立あつて、海野口の城に攻寄せらる。城中には、平賀入道源心、勇猛の大將にて、力、七十人に對す。元來、武略通達の者なれば、持口々々差堅めて、射手を揃へて待懸けたり。甲府勢も

遠巻して、次第に攻口請取り、金鼓旌旗の節を違へず、嚴重の備を作りて、卷詰め、楯の羽を亂さず押寄せて、足輕を以てあやどり、駿兵を進めて、一時に乘破らんと、喚き叫んで攻めたりける。城中、矢狹間を一度に開き、射手を揃へて、爰を破られじとぞ、防ぎ戰ひける。城中の女童迄、强く働きて、石瓦を以て、近づく敵を打倒し、霰の如くに礫を打懸ければ、寄手、多く是に佂んで、見えける所を、城門を開き、究竟の騎馬、噇と一度に突出で馳立てければ、味方の軍勢、四度路になりて、色めき立ち、攻口を退かんとする所を、板垣・飯富・敎來石等、楯面に馬を乘出て、頻に兵士を勇め、一足も退かねば、又、旗の手前に傾き、其場を爭ひ、過半、城中に追込めけり。斯くて、戰終てざるに、板垣信形、御前に參り申しけるは、軍士等、命を捨て丶、手痛く攻寄せ、相戰ひ候と雖も、此軍の樣體、中々、近日にして、落城仕らんとも覺えず。寒中、大に疲れ果て候はん條、今日は、先づ軍勢を揚げられ、然るべからんかと申しければ、信虎も、其理に伏せられ、汝、武略を以て人數を揚げよ。大事の場なるぞと仰せける。信形、畏つて敵・味方、戰疲れたる中へ馬を乘入れ、味方を引揚げ

ける形勢、只、猿猴の梢を傳ふに異ならず。難なく備を立堅め、列を作つて、若し敵、慕はゞ防がんと、其守を備へし故、敵、敢て慕ふに及ばざりければ、向陣を取つて控へけるに、連日、大雪降積つて、人馬の足、自由ならざるにより、彌々戰ふべき方便なくて、日を暮す事、三十餘日に及びけり。斯くてあるべき事ならねば、十二月廿六日、信虎の御前に、穴山・板垣・甘利・加藤・教來石・跡部・荻原、以下の者共を集め、樣樣の軍議あり。時に、甘利・荻原兩人進み出でて、扨も、此間の大雪、例年に勝れ降り續いて、馬の足、自由ならず。殊に平賀源心法師といへる大剛の者栖籠り、城兵合せて三千餘人と承り候。尤も、當家の軍勢は八千餘人、急に我攻(かぜめ)に遊ばされ候はゞ、落城仕るべく覺え候へども、其は味方大勢討たれて、勝利あつて益なき儀にして、大に味方の負なり。其上年内も、早や寸陰に及んで候へば、一先づ、甲府へ御歸陣あつて、來春、重ねて攻寄せられ候へかしと申上ぐる。信虎、此旨を聞召して、各の了簡理に當ると雖も、信虎、若年より卷きたる城を解きて、軍を迴せし例なし。若し又、敵に喰留められて、難儀に及ばゞ、悔ゆとも其甲斐あるべからず。此上は無二

無三に取懸けて、勝負を一戰の中に決せんと宣ふを、甘利・荻原、押返して、君の御軍旅の練れたる事、城兵、手竝を存じ候へば、雪は深し。附慕ふ事、百に一つもあるべからず。早々、當表を御引取然るべしと、衆口一同しければ、信虎も、澁々、此儀に從ひ給ふ。明朝未明に引取らんと、定めらるゝ處に、晴信、進み出で給ひて、明朝の後殿を、私に仰付けられ候へかしと、願ひ給ふ。信虎、聞き給ひて、大に笑ひて曰、武田の家の名折を申す者かな。甘利・荻原を始め、功者共が、敵の慕ふまじきといふを聞きて、後殿を望むこそ可笑しけれ。縦ひ信虎が殿をせよと、申付くとも、弟の次郎に、仰付けられ候へかしなんどと申してこそ、當家の總領ともいふべけれ。次郎は中々、斯樣の殿をば、望むまじきものをと、大に怒つて罵り給ふ。されども晴信、其に少しも恥ぢ給はず、頻に望み給ひければ、此上は是非に及ばず。左あらば、後殿を致すべしと、晴信に仰付けられ、明曉陣拂とぞ、定め給ひける。

海野口落城附平賀源心最期の事

明くれば、天文五年十二月廿七日、未だ拂曉に、武田左衞門尉信虎、軍勢を引率し、海野口を御立あつて、甲州に歸陣し給ひけり。嫡子大膳大夫晴信は、後殿を請取り給ひ、其勢、僅か三百餘人にて、東道三十里程、跡に殘りて備へ給ふ。廿六日の夜宵に、晴信、我が軍勢に下知し給ふは、士卒、武具を着し、馬に物を能く飼ひ、鞍を置きて待明すべし。飯をも一人に、三人前計りの用意をせよ。極寒の時分なれば、打立つ期には、上戸・下戸に寄らず、酒を些(ちと)呑み過し候べし。五更に及ばゞ、打立つべきぞと、自身、觸れ廻り給ひける。士卒等、之を聞いて、晴信の深き謀をも辨へず。御父の誹り給ふも理かな。今、寒氣膚を犯し、大雪、誠に山の如くに積る時節に、何とて敵の慕はんや。大に敵を恐れ給ふ大將かなとて、片端に寄り合ひ私語きける。既に其夜も寅の刻、時分こそよけれ。すは打立てとて、甲府の方へは押し給はて、引返し海野口の城へ押懸けて、無二無三に攻寄せ給ふ。城中には、敵、引取ると聞いて、大に悅び、附慕ふ事は思ひも寄らず、虎口々々をくつろげて、此程の軍勞を休息し、春の欝をもせんと、皆々、武具を解き去つて、一盃の醉を進め、沈眠する事、唯無人情な

り。源心法師は、兼ねて聞ゆる智勇の猛將なりけるが、籠城に疲れけるか。又は運や盡きたりけん。晴信の術を、夢にも知らず。愚昧一孤の軍卒と醉を同じうし、枕を傾けける、折節、鬨の聲聞えければ、介副の鎧を、漸々肩にかけ、追捕太刀にて馳出でたり。其外の從兵等、大に騒ぎ立つて、少々打出で、防ぎ戰ふと雖も、寄手は之を事ともせず、塀際に着くとひとしく、乘込み〳〵、我劣らじと切つて入る。城兵は、寄手の是程に、少勢にあるべきとは、思ひも寄らず、大將信虎、總軍を以て乘り給ふと心得て、敵は一萬餘もあらん。如何に猛く思ふとも、何としてか持怺ふべき。命ありてこそ、後、幸も待つべけれと、妻子を引連れて、我先にと逃ぐる程に、岸より押落されて、谷に陷り死する者、其數を知らず。源心法師は、黒絲緘の鎧に、四尺三寸の大太刀を、眞向に差挿し、日頃は音にも聞くらん。今こそ近づきて能く見置け。平賀の源心法師が、死狂をするぞとて、群る敵を、弓手に相付け、馬手に請けて、或は甲の眞向、綿嚙のはづれ、切立て〳〵、あたりを拂つて戰ひけり。寄手、若干切落され、敢て羽向ふ兵なく、四方に颯と引分れ、暫く息を休めんとす。源心、少し小高き所

信虎、晴信初陣の功を賞せず

に上りて、大太刀を杖につき、己が額に柄を當てゝ、眼を塞ぎ立ちたりけり。暫くあれば、又、寄手、四方より群り來り、源心は手を負ひたるが、斯かる勇士は、立ずくみになりて死する事、古より例あり。痛手負うて死したるか。我れ首を取らんと爭ふ所に、源心、眼を見開き、戰ひ疲れて休息するを、推參なり。汝等も、此法師が首を取るべきかと、彼の太刀を取直し、又、大勢の中へ切つて入れば、寄手、四方に散亂る。兎角に打物の業に叶ふまじと、射手を揃へて、散々に射たりければ、源心、猛しと雖も、其身、金石にあらざれば、數箇所の痛手に弱る所を、大勢、走り寄つて、終に源心を討取りけり。去る程に、晴信は何の苦戰もし給はず。海野口の城を攻落し、源心法師を討取り、則ち太刀鎧迄相添へて、跡部を以て、しか〳〵の由、披露あるに、信虎、仰せけるは、晴信が敵城を乘取りたるは、働あるに似たれども、城に殘り留つて、使者を以てこそ申すべきに、打捨て來るは、臆病の擧動なりとて、此度の初陣の功を賞し給はず。以の外、御機嫌惡くて、父子の對面にだに及ばれず。彌〻不和の基となりて、苦々しくぞ聞えし。斯くて、初陣の御譽なれば、彼の源心法師を、石の

大門峠の石地藏

地藏に刻み、大門峠に立ち置かせ給ふ。又、源心が最期に帶したる四尺三寸の大太刀は、常に御弓の番所に、源心が太刀とて置かれたり。扨も大勇猛の信虎、攻落し得給はず、卷き解(はぐ)し給ふ城を、晴信、未だ十六歳、僅に三百餘人を以て、暫時に乘取られし事、皆、天の時を考へ、備の有無、彼我の虚實を察し、必勝の道理を知り給ひて、一擧に勝利を得給ふ。これ凡慮の及ぶ所にあらず。老後(おいさき)如何なる名將にかなり給はんと、皆人、感稱せずといふ事なし。

武田三代軍記　卷之第二　終

武田三代軍記　巻之第三

今井木工允貞邦禁籠の事

去る程に、甲陽の源府君左衞門尉信虎は、勇武、萬人に超倫を離れ、類に絶えて、剛強の猛將なれば、向ふ所には敵を靡け、攻むる時には忽ち城を陷れ、強さを破り、堅さを碎き給ふ事、さながら竹を破るが如し。去る鹽川合戰に、平賀成瀨に、戰ひ勝ち、敵を討つ事數を知らず。是より平賀も滅亡し、又其外、信州に更科の村上義淸、深志の小笠原右馬助長時、伊奈の諏訪頼茂等、何れも大身といひ、勇將なりしが、信虎の鋒先に當り難く、千度・萬度戰ふと雖も、甲州勢、一度も敗北の名を聞かず。是に依つて、村上・諏訪、小笠原の人々、何卒一つの計略を設け、本望を達せんと、晝夜、心を碎き、時節を窺ひ、折を待つて居たりければ、武田家譜代恩顧の者共も、

信虎猿を愛す

暫く泰平の思をなし、累年の軍勢を休めけり。然る所に、うたてしき事こそ出來たりけれ。信虎、平生猿を愛し、御膝元を去らずして召置かれける。其名を白山と號け給ふ。信虎、常に居給ふ所を、竹の間と號し、四方に竹を畫かせられてありける。常々仰せけるは、虎は百獸の長にして、一切の獸類、其威に恐れ伏すといへり。玆を以て、我れ信虎と號し、武家の長となりて、權威を振はんと欲す。唐の虎は、竹の林に住むといへりとて、竹の間を以て、常の御座の間となし給へり。竹の間に續きて、牧の間あり。其東南の間を、鷹の間と號して、樣々の鷹を畫けり。信虎、常々の荒き御行跡を、彼の猿、見習ひて、御座の間より、脇差を拔いて、次の間につる〳〵と走り出でけるに、折節、誰も知らざりけるに、今井木工允貞邦、鷹の間の當番にて、只一人、差うつぶきて居たりけるに、彼の白山、後より來りて、貞邦が右の肩先を一刀切付くる。頃は、天文六年六月十一日、暑氣甚しき時分なる故、今井、帷子の單を着したれば、忽ち手負ひて、背は朱にぞ染みにける。白山、此血の出づるに驚きて、泣き叫んで伏倒る。今井、大に怒つて、畜生目に疵を付けらるゝ事こそ、安からねと

て、只一討に、白山を討殺す。其音に驚き、鎌田・織部・小山田彦太郎・安間三右衛門尉等立出づる。木工允、右の次第を語り、某、數ならぬ者なりと雖も、若年より所所の戰に於て、一度も不覺の名を取らず。今、此白山が爲めに、薄手を負ひぬる事こそ口惜しけれ。あの畜類に追はれて、後疵を負ひたりなど、世人の笑種となり、後指をさゝれん事の無念さよと、涙を流して怒りける。信虎、此事を聞き給ひ、猿、元より畜生なり。何ぞ分別あらんや。手を負ひたるは、貞邦が不運なり。然るに、吾が祕藏する白山を切殺しけるこそ、信虎に向つて、太刀を振りたるに同じと、大に憤り給ひて、貞邦を召禁められ、其家を追捕せらる。貞邦が一子彌四郎、今年十五歲なりけるが、之を恨みて、身近き下人、一人召連れて逐電す。母方の親類なればとて、信州更科に立退いて、布下權左衛門尉を賴みければ、布下、彼の彌四郎を勞り置き、主人、葛尾の村上義淸に、綷の始終を申しければ、義淸悅び、去る者の子なり。召抱へらるべしとて、彌四郎に秩祿を與へ、姓名を改められ、布下彌四郎とぞ號せられける。

今井貞邦并妹、小澤誅伐の事

斯くて、左衞門尉信虎は、今井木工允を召禁め、所帶を沒收し給ひけるが、其子彌四郎、逐電して行方の知れざりければ、武田家領分の間は、木の葉を返して、尋ね出すべしと仰せけるに、信州に逃げ行きたる由、聞えければ、扨は敵國に至りぬるや。此上は力なし。父木工允は、縛り首を刎ぬべしとぞ、仰出されける。其時、長臣甘利備前守、信虎の御前に出て、今井木工允が儀、御祕藏の猿を切害仕候段、上を恐れざるの科、尤も輕からず。然りと雖も、何程の御寵愛も候へ。相手はこれ畜生にては候はずや。又今井は、數度の軍に、身命を捨て、武功を抽んでたる甲斐々々しき者にて候。申上ぐるは、恐多く候へども、是等の忠臣を、纔の科を以て、縛り首を刎ねられん事、然るべしとは存じ候はず。其故は、罰、法に過ぐる時は、諸人親まず候。當家の忠臣勇士等、君の刑罰を恐れて、他國へ退きなば、今、戰國の最中、隣國の剛敵等、當國に討入らんに、誰か君の御用に立ち、忠戰を勵み申すべき。斯樣の時節

は、賞を重くして、罰を輕く行ふものとこそ承り候へ。兎角、縛り首を刎ねられん事は、御宥免あるべしとぞ申しける。信虎、熟々と打聞き給ひ、暫くは物を宣はざりけるが、暫くありて、甘利、能く聞け。吾今、今井を以て、猿に代ふるにあらず。上を輕ずるが惡きなり。然れども汝が申すに任せ、此上は切腹を申付くべしとて、日向・栗原兩人を、檢使として差遣し給ふ。貞邦、兩人の檢使を受け、見事に切腹をぞ遂げたりける。茲に今井が妹に、小澤といへる女あり。漸く三五の頃より、御屋形に召出され、御側近く奉公を勤めけるが、早晩の頃よりか、信虎、淺からず思召し初められ、主君の妾となつてけり。是より諸人、崇敬する事斜ならず。萬づ、此人の心に叶はん事をぞ思ひける。されば古の巴といへる女は、今井四郎兼平が妹なりしが、主君義仲の妾となつて、其寵愛淺からざりしといへり。今此小澤も、今井が妹にて、信虎の妾となりたればとて、皆人、巴殿とぞ呼びにける。然るに、今般の罪科に依つて、木工允、切腹したる由を聞きて、小澤、身をもだえて泣き焦れ、忽ち絕入りたりけるを、付々の女共、氣付水なんどと走り廻り、聲々に呼生けて、漸々と

人心地出來にけり。小澤、泣く〳〵申しけるは、我れ三歳にて父に後れ、其後、母にも程なく後れ參らせぬれば、木工允殿の養育にて、漸く生長・親とも兄とも賴み居しに、計らずも災に罹り、君の御惡しみを蒙り、終に生害し給ひぬる事の悲しさよ。其身を召禁められ、所領を召上げられしだに、あるにもあられず、悲の餘り、色々と歎き申上げしかども、素より御心荒くましますす故、曾て聞き入れさせ給はざりし。今は水の出ばなとやらん。御憤も少しやすまりなば、其時に、如何樣の歎をも申上げ、再び所領にも、安堵せさせ參らせんと思ひしに、今斯くなき身となり給ひぬるこそ、悲しけれとて、夫より湯水をも曾て呑まず、唯打伏してぞ泣き暮しける。されば小澤、日頃君の寵愛淺からずして、日は終日、東籬の花の下に、酒盃を傾けて醉に和し、夜は終夜、南庭の月に宴を催し、星に誓ひて契り給ひしかば、其外の女は、花の中の深山木の、色香もなきが如くなりし。されば、世の中の情は、皆僻める習にして、鼻を掩はしめて、以て讒言の中立とする事、其例少なからず。此時節を見合せて、扨も小澤事、君を恨み奉り、樣々害心を挿み、種々の企を仕り、勿體なくも、忍

びやかに、君を弑し奉りて、兄の敵を討たんと相巧み候なり。能く〳〵御用心あるべしと、ありとあらゆる事共をぞ讒しける。飽く迄心荒き大將なれば、俄に面色變り、躍り上つて怒り給ひ、頓て小澤を召出され、汝、不便を加へ、日頃、榮耀に誇らするは皆、信虎が恩ならずや。又己が兄貞邦が事は、上を輕しめ、不禮不義の働を仕る。己が罪、己を責むるの道理を以て、縛首を刎ぬべかりしかども、年來の奉公に免じ、切腹を申付けし所なり。然るを汝、吾を恨み、竊に差殺さんと巧むらむ。其大惡心隱れなく、天罰忽ちに顯はれぬれば、陳ずるとも叶ふまじ。斯かる心底の女とも知らず、年頃、不便を加へぬるこそ無念なれ。累代の主に對し、殊に女の身にて、害心を挿む事、八裂にしても、猶あき足らずと、血を注ぎたる眼に、角を立て宣ひけるが、忽ちつゝ立ちて、小澤を膝元に引寄せ、長く美しき黒髪を、曲々と左の手に引巻き、刀を抜いて中に提げ、敢なくも提切にぞし給ひける。女の姦しき嫉妬の惡心より、故なき虎口の舌頭に懸りて、計らずも、兄弟不慮の難に逢ひ、終に切害せられぬるこそ哀れなれ。是に附けても、家嫡大膳大夫晴信を始め、穴山伊豆守信

行板垣駿河守信形・飯富兵部・甘利・加藤以下の老臣等、心に歎き思ひけるは、大將、斯く惡逆不道にましましては、終には當家の破滅とならん。臣等が諫をも用ひ給はず。如何ともすべき術もなしと、頭を掻き掌に汗を握りて、歎き悲みける。斯かりければ、晴信を諫めて、父信虎朝臣を廢去すべき方便を、長臣等、心に萠しけるとぞ聞えし。

信虎信州出馬 附 諏訪合戰の事

北條氏康威を關八州に振ふ

頃年、北條左京大夫平氏康は、伊豆・相模の間に跨つて、隣國の諸士を、己れが幕下に從へ、勢を關八州に轟す所に、上杉扇谷修理大夫朝興、天文六年四月下旬、重病に侵され、終に逝去し給ひけり。之を聞きて、北條氏綱父子、時を得たりと喜んで、橋本・荒川・多目・井浪等を始め、逞兵數萬騎を引率し、同じき七月十五日、川越の城を五十餘町隔てゝ、武藏野の北なる三木といへる所に打出で、松田・石卷・志水・朝倉の者共を、五手に分けて備へたり。扇谷朝興の家嫡上杉五郎朝定、此時、未だ十三歲

なりしかば、叔父左京大夫朝成、二千餘騎を相從へ、打つて出で戰ふと雖も、大勢に小勢、叶ふべくもあらざれば、一戰に戰ひ負け、散々に敗北し、朝成は敵の擒となる。大將五郎朝定、忽ち川越の城を落去つて、難波田彈正が栖籠りたる松山の城に、逃入りしかば、北條、彌〻强大になつて、靡かぬ草木もなかりけり。其外、越後には長尾信濃守爲景、越中の者共と戰うて、一日も靜かなる時なく、駿遠に、今川義元あり。參河に松平藏人廣忠、威を振ひ給ふ。斯くの如く、國々所々、亂れずといふ事なく、爭はざる所もなし。然れども、左衞門尉信虎、勇猛の剛將なるを以て、此頃は、甲州へ誰れ手を指す者もなく、諸卒、暫く軍勞を休めてぞ居たりける。去る程に、同じき八月上旬、信虎朝臣は、御嫡大膳大夫晴信・穴山伊豆守信行を、御館の留主に殘し置かれ、二男左馬助信繁・三男孫六信連・板垣駿河守信形を始め、四千五百の軍勢を引率し、教來石民部少輔景政・甘利備前守を先鋒とし、甲府を出馬あつて、小笠原右馬助長時の領分、又は木曾義高が領知等、方々民家に火を放ち、刈田をさせられ、諏訪に陣を取り給ふ。然るに小笠原方の者共少々、足輕なんどを、懸けて

遮ると雖も、敵の勇氣支へ難く、皆己々が城々に引籠る。斯かる所に、諏訪方の軍勢、高屋清次・鵜殿左内左衛門・菱田・上野・根來の且心坊以下、早雄の若者共を從へて、先陣甘利・敎來石が陣へ突いて懸る。元より備前守、大剛の勇士なれば、敵を察して、定めて、諏訪勢は騎馬を以て、味方を駈亂し、戰を一時に決せんと思へるならん。味方、足輕をよく備へて、炮弓のあやどりを第一にし、急に乘切らんとせば、中を明けて、左右より射すくめ、討ちすくめて、陸太刀の者に、目をかけそ。唯、騎馬を毛付して打落せと、士卒に下知して控へたり。案の如く、高屋・鵜殿・根來且心、一戰に駈破らんと、駒の鼻を雙べ進み寄る。甲州勢、鐵炮をつるべ立て、矢衾を作つて散々に射る。此矢炮に、射すくめられて、駒の足竝、しどろになり、引返さんとするもあり。馬にしさり口を引いて、ためろふもあり。此時、根來且心、馬を乘廻し、敵、如何程に射るとも、用ふべからず。本より戰陣に於て、正兵となるの隊、矢炮の害を計るは、戰はざるの以前なり。唯、甲の鞠を傾け、馬を見込ませて、一擧に進め、馬の頭を立直すべからず。鞭を與へよ。鐙を擧動へと、身を揉んで頻に下知

信州勢敗北

を加ふる所に、味方の歩卒、悪き敵の武者振かな。我れ打落さんと爭ひて、忽に且心坊を打落すに、あつと計りに息絶えたり。諏訪勢、一人當千と賴みたる者を、鐵炮の爲めに害せられて、勇氣を挫かし、諸卒、色を變じて、車の片輪をそこなはれたる心地して、足並しどろになり、弓弩、自然に怠れば、敎來石民部少輔、時分は能さぞ。今日の一番鎗は、誰なるぞ。名乘れ者共、突崩せ人々と、自ら鎗を提げて、一陣に進めば、附卒從軍、馳隔りて、馬前に列して、早や、一番・二番の鎗を入れ初むるや否や、總軍、一度に噇と懸れば、諏訪勢も同じく馳合せて、互に首を爭ひ、場を取り、或は取られて太刀打、組討の勝負、寔に勇々しき形勢なり。然れども武田勢、崩際(くづれぎは)の鎗を專用にして、二三箇所の場を此方へ取り、鎗衾を作り、聲を發して突立てしかば、諏訪勢、怺らず敗走す。民部少輔景政は、敵の士大將、鵜殿左内左衞門と渡合せて相戰ふ。左内左衞門、鋦刃(じふもんじ)の鎗を、眞中より切り折られ、少し退(しさ)つて、腰の刀を拔かんとせしが、小溝に足を蹈込み、たぢ／＼とする所を、景政透さず押込み、たゝみかけて、綿嚙の逃(はづれ)に切込めば、怺へず仰のけに噇と伏すを、乘懸りて首を搔落し、

信虎甲府に歸陣

指物を添へて分捕し、則ち下人に渡して、猶も敵陣に入らんとする。斯かりければ諏訪方、右往左往に敗走して、一返も返さず。主に離れ親を捨て、散々になるを、甲府勢、馬引寄せ打乗り〱、鞭を揚げて追討にす。斯くて、したるく追ふべからずと、追留の節を士卒に示し、輒く備を堅めたり。既に敵を討捕る數、一百四十餘級なり。信虎、大に悦び給ひ、刈田をさせ、在々所々を燒拂ひて、暫く諏訪に殘陣あつて、其後、喜の旗を卷き收め、甲府に馬を入れられける。

信虎、家嫡廢去思召立たるゝ事

斯くて、左衛門尉信虎は、奇計剛强の勇威を以て、一家類葉の人々を、大方殘りなく殺隨（きりしたが）へ、今は甲州の內にしては、弓を彎くべき人もなし。駿河は、富士下方を始め、信濃は已に佐久間郡迄切取り給ふ。然れども、信虎、短慮無法の荒人なれば、信濃も佐久間郡の外、上野の諸士、一人も味方に馳せ來らず。累代重恩を蒙りし者共も、纔の小科に誅せられ、又は世帶を沒收せられて、追放の身となり、他國に逃げ行き、武

田家の諸士は、日を逐うて滅じ、又適〻昵近の者共も、明日にも災の其身に來らん事を恐れて、暫くも安堵の思に住する事なし。斯くては、終に武田の家、今十八代に當つて、滅亡に及ばんと、歎かぬ者なし。其上、嫡子晴信、智勇萬人に勝れて、大將の器に相當り給ひぬれば、家跡を續ぎ家を立て、譽を萬代の後に仰がれ給はんは、此人ならんと、家中一統に思ひ入り、信虎は、早や致仕の身ともなり給はんなれば、晴信に仕へて、戰忠を勵み家を起し、名を立てんと擧つて、之を樂まぬはなかりしに、唯何となく、信虎、晴信を疎み、次男左馬介信繁を以て、總領となさんとのみ、一遍に思ひ定められければ、如何にもして晴信が失を見出し、夫に事を寄せて、國中を追放せんと、思惟し給ひて、數人の目付・横目を付置かれ、少しの過もやあらば、訴へよと仰付けらる。さるに依つて、家中大に信虎を欺く。晴信は、少しも憤の色を顯し給はずして、猶ほ忠孝を重じ給ふ。然りと雖も、總領に生まれて、家を追出されんは、末代の穢名にして、又、數代譽の名家、斷絶もやせん事を、深く心に病み給ふ。駿河の今川殿は、姉婿にてましませば、右の次第を、略ぼ密通ありて、如何樣と

も宜しき様に、頼み奉ると、度々文通に及ばれけり。斯くて、今年も暮れて、明くれば天文七年正月元旦の御慶あり。然るに信虎、盃を取上げ給ひ、嫡子なれば晴信へぞ差し給ふべきに、さはなくして、次男信繁に差し給ひ、其後、三男孫六信連に差し給ふ。晴信は、面目を失ひ、手持惡く退出ましませども、少しも恨の氣色なくて、彌〻恐れ謹んでぞ居給ひける。然る所に、同じき二十日、板垣駿河守信形を以て、晴信へ仰へ送られけるは、晴信儀は、今川治部大輔義元の吹擧を以て、忝くも大膳大夫を兼ね、信濃守に任ぜらるゝ所なり。尤も其爲性愚にはあらざれども、遠鄙に育ちし故、物每無骨に、田舍らしき所あれば、駿河に立越えて、姉婿義元に隨順し、今川の厚き家風をも見習ひ、萬事華奢に、作法諸禮等をも稽古あつて然るべしとなり。晴信、此旨を聞き給ひ、信形を側近く召され、扨こそ思ひつる事よ。晴信を目にも見えぬ所へ、追失ひて退けんとの御內存と覺ゆる。此御意趣、何事ぞや。定めて信形は、御內意を得てぞあるらんと宣へば、板垣、御側に躙り寄りて、咡き申すは、次郎殿を御寵愛遊ばされ、君を追失はんとの御所存と、相見え候へども、御存の如く、御

心の狂はしく座す故、既に馬場、山形以下の老臣、諫言を申上げたる御腹立を以て、死罪に行はれ候上は、如何樣の非道を、行はせ給ふとても、誰か諫言を申上候べき。然れども、甘利備前守・飯富兵部少輔等の忠臣を、召寄せられ、御密談を遊ばされなば、其上にては如何樣とも、御爲宜しき謀も候べし。さのみは御氣遣候べからず。此信形に於ては、御味方に參るべしと、既に誓文に及びければ、晴信重ねて、御邊が今の一言、寔に骨髓に徹して覺ゆるぞ。よも僞はあらじ。此上は兎も角も、能き樣に賴み思ふなり。然らば、歸つて申上げんには、御意の趣、一々承知し奉り候。如何樣とも御下知次第に、仕らんと申すべしと宣へば、信形、畏つて罷立ち、此旨を申上ぐる。信虎聞召され、重ねて信形に、飯富兵部少輔を差添へられ、來三月より、駿河義元の方へ立越して、一兩年も駿河に居て、萬の式法をも見習ひ、學問をもすべしと、御遣されけり。兩人又、晴信の御方に參り、右の趣を申上ぐる。晴信、兩人を閑所に召され、使者の趣を聞かせ給ひ、三人面を合せ、暫く密談ありと雖も、何事やらん、外の者は、更に知る事なし。其後、飯富・板垣兩人は、信虎の御方へ歸り來つ

て、仰の趣、承知仕り候。如何樣とも、御意に任せ候べしとの、御返事にて候と申す。信虎、聞召し、某が詞に從はんといふか。其は晴信がよき分別なるべし。此信虎が差圖を用ひず、否といふ程ならば、首を刎ねて、某が存分に任すべきものをとぞ宣ひける。

大膳大夫晴信逆心の事

斯くて、大膳大夫晴信は、御身の浮沈、今茲に谷りしかば、如何はせんと、樣々思慮を廻し給ひ、竊に穴山伊豆守信行・甘利備前守・小山田備中守・板垣駿河守・飯富兵部少輔を召寄せられて、密談し給ひけるは、扨も父信虎朝臣、某を廢去し、舍弟の信繁を以て、當家の總領となさんと、思召さるゝ事、既に數年に及んで、誰知らぬ者もなし。尤も、某を御疎みある事、晴信、一國をも治むべき器にあたらず、孝心薄きが故なり。又左馬頭が儀は、其心、直に仁義を守り、文字に心を寄せ、武略を嗜みぬる者なれば、大將の器に相當れり。さるに依つて、信繁を、嫡子に立てんと思召す御心

入、其理なきにあらず。然れども父信虎、非道の御行跡のみ多し。今、戰國の時に中つて、隣國互に其虚を窺ふ最中なり。爰を以て思ふ時は、家督を典厩に讓り給ふ迄もなく、當家滅亡に及ばんか。我れ之を深く歎く。假令ば我身は、諸國に漂泊し、山野に餓死すとも、父の命なれば、是非に及ばず。只歎はしきは父の惡行なり。既に、板垣信形・飯富兵部は、先づ我に心を寄せ、此度の安否に肺肝を碎く。甘利・小山田兩人の心底は、何とかある。包まず有の儘に、語るべしと宣へば、甘利備前守、進み出で丶、仰の如く信虎公には、左馬頭殿を寵愛なされ、總領に立ち給はんとの思食入れ故、此度、君をすかし參らせて、駿河に遣はされ、夫より京都の方へ、追拂ひ參らせんとの御内意を承りて候。如何樣とも、御爲宜しきやうに、密談を承り候はんといへば、小山田備中、今年やう〳〵、君十八歳にてましませども、武勇といひ、才智といふも、旁〻以て御家督相續あるべき所に、謂れなく追退けんとの御企は、信虎の御心に、天魔の入替りたると存ずるなり。板垣殿は、如何思食され候やといふ。信形聞いて、さればとよ、信虎朝臣は、大方ならぬ狂氣人にて御座す故、

今斯様の不幸出來れり。各の異見を承はつて、其儀の宜き方に隨ひ候はん。穴山殿は、何等の思食入れ候やといふ。信行、暫くあつて、老臣達の心底を承らんとあれば、小山田備中、げに〳〵、各の思召入れありと雖も、一大事の僉議なれば、互の心を計り、何れも宣ひ兼ね給ふ所、尤も理に存ずるなり。先づ理非は存ぜず。心底の趣を、御前にて申すべし。當屋形信虎君は、生得惡逆不道に座す故、馬場・山形・工藤・內藤等の長臣を、御手討になされ、或時は懐胎せる女の腹を裂き、又は律僧を燒殺しなどし給ふ類の惡行、其數を知らず。さるに依つて、諸人恐れ、疎み奉る。神明なんぞ加護し給はん。今、信州に、木曾左馬頭義高・小笠原長時・村上義清・諏訪賴茂等の剛敵あり。相州に、北條氏康といふ若手の名將、隙を窺ふ最中なり。上州には、上杉幕下の者共充滿せり。然れば威すに武を以てし、懐くるに德を以てして、民を慈み諸士を撫て、忠ある者には、時を移さずして賞を行はれ、小科を御取上げなく、輕く罪し、萬事廉直なるをこそ、諸士の上に將たるの器といはん。罪なきを罰し給ふ事、其數を知らず。さるに依つて、上下親まず、怖れ疎んで、八方に離散

し、隣國に奔走す。既に工藤下總守虎豐を、君、誅伐ありし故に、其子長門守・舍弟源左衞門尉等、東國へ出奔せり。渠等兄弟は、無二の忠臣の子孫にて、武勇に長じたる者共なり。去年、今井木工允貞邦、少しの罪科に依つて、死罪に行はれしかば、其子彌四郎逐電して、信州に至り、村上の幕下となれり。是等を始めて、當家譜代の者共、敵國に逃げ至りて、則ち敵となる。其上、信州・上州の諸士、當家を疎み、一人も味方に參らず。是に依つて、敵の勢は日々に增り、味方の勢は月々に減ず。斯くの如くにては、當家の滅亡、必定、近きに候はん。此上は、叛逆を思召し立たれ、信虎君を他境へ移され、推して世を取り給はんに、何條の事か候べき。列座の人々も其志あるべけれども、互の心底を計り兼ね、御申しなきと存ずると、憚る所なく申しければ、晴信聞召し、いやとよ。先立つて板垣等、此事を申す。然りと雖も、父の恩の莫大なる事、大山よりも高く、蒼海却つて淺し。其高恩の父を追出して、逆心の働をなさば、神明にも捨てられ、人道にも背きぬべし。照々たる天道、我れ何んぞ欺かん。此上は、腹掻切つて、父の御心を休めんにはと、淚をはら〱と、流し給

ひければ、小山田も涙を抑へ、重ねて、只今の御一言、骨髓に徹して、御理にこそ存じ候へ。然れども某、愚案を廻らし候に、尤も信虎君を廢去なされん事、不孝の罪、遁れ難しと雖も、滅亡に及ぶ御家を興され、仁義を以て、諸士をなづけ、武勇を以て隣國を切從へられ、當家、繁昌に及ばれなば、新羅三郎殿より以來、代々の君に對せられては、却つて御孝行にて候べし。これ不忠に似たるの忠、不孝に似たるの孝なるべし。能々、御思慮を廻らされ、御心中を極めらるべしとぞ申しける。板垣信形進み出で、備中が申す所、理に當り覺え候。是なる兵部少輔と、此儀を兼ねて進め申すと雖も、御許容候はず。御存の如く、信虎君は、御心狂はしく、惡逆無道の甚しき事、上古に未だ承らず。末代にもあるべからず。暴惡、己に歸して、自ら天の責を受け給ふの道理なり。何か苦しく候べき。早々思召立たるべしと申せば、甘利も、此儀尤に候。御心を一遍に決せられ候へと、進め申しければ、晴信も、此上は是非に及ばず。然れども何としてか、父信虎朝臣を廢去すべき。先祖に對し、家の爲めに、孝行に當ればとて、正しく父に向つて、弓を彎き、後難、天の責を蒙らん事、立

所に疑ふべからずと、涙を浮べ兩手を組み、差打向きてぞ御座しける。玆に晴信の御居從今井市郎、今年二十歳になりけるが、進み出でて申しけるは、若輩の某、斯く一大事の商議なるに、一言をも申す事、憚少からず候へども、兎角は君の御爲なれば、申すにて候。斯様に賢老智化の人々、諫め參らせられ候上は、御許容候べし。又信虎君を廢去の儀は、板垣・甘利を始め、老臣の面々に御心を合され、何卒信虎君を賺し、駿府へ御越なさるゝ様に、相計らはれ候へ。今川殿へは、兼ねて御父子の中、快からず、典厩を家嫡になさんと、思召さるゝの間、偏に頼み思召すの由、度々仰遣されたる上なれば、義元朝臣、疎略にはよも思召されじ。然れば某、御密意を承り、駿州へ忍び往き、信虎君御越に於ては、駿河に御取留なされ候様に、義元朝臣を、一向御頼みなされ然るべし。某、心の及ぶ程は、調略仕つて見候はん。義元、御許容に於ては、信虎君御越の跡にて、押して國中を治められんに、何の煩か候べき。愚意短才の及ぶ所、斯くの如くに候といへば、穴山殿を始め、板垣・甘利・飯富・小山田等五人の人々、皆、此儀に同じ、若輩の今井が、思慮の厚きを感じ、頓て市郎を駿

府に遣され、此計略を廻らされよと、一同に進め申せば、晴信、止む事を得給はず。然らば汝、忍びて駿州に參り、調略を仕るべしとて、密書を今井に與へられ、駿州に參る御暇を、下し給ひける。

今川家來由附今井市郞駿州に密使の事

今川氏の始祖

玆に、駿河・遠江の大守、從四位下治部大夫義元と申せしは、當時、將軍家同流の貴族なり。水尾帝六代の後胤八幡太郞義家より五代左馬頭義氏朝臣、是れ足利家の元祖なり。其子左衞門尉長氏、其一男上總介滿氏、これ吉良の始めなり。二男四郞國氏は、父長氏、隱居の所領を相續す。これ今川の始祖にして、國光寺殿と號しけり。夫より三代の嫡孫從四位下上總介範氏、將軍尊氏卿に仕へて、元弘・建武の大亂に、勳功ありしかば、駿河の國を恩賜あり。府中に在城せられけり。慶壽寺殿心省と號す。夫より四代の後を、從四位下治部大輔兼上總介義忠と號す。長保寺殿これなり。其家嫡修理大夫上總介氏親、增善寺と號す。其一男上總介氏輝早世す。

之を臨濟寺と號す。然るに氏輝、未だ實子なかりしかば、同腹の舍弟出家して、善德寺といへる禪院にありけるを、還俗なさしめて、家督を繼がせける。治部大輔義元朝臣これなり。母は大納言宣胤卿の女なり。義元室家は、左衞門尉信虎の第一の姬君にて、晴信の姉君なり。已に此御腹に、姬君一方儲け給ひ、武田家とは、親子の睦深く、同胞合體の思をなし給ふ。然るに義元、釋門を出でて、武門に還り、父祖の業を受け繼ぎ給ひ、臨機應變の謀、義貞・楠をも欺く程の文武兼備の名將なれば、尾張・參河を攻靡け、一度上洛に心を懸け、野戰城攻に日を送り給ふ折節、武田晴信の小姓今井市郎、忍びやかに參向し、主人の密書を奉り、隱謀の事共を、密々にぞ申しける。義元朝臣は、海道を攻め隨へ、上洛を遂げ、四海一統の大功を思召し立ち給ひぬる折なれば、我れ駿遠の大守として、隣國の諸士、譽風に偃すと雖も、甲陽の信虎は、我が舅といひ、勇將といひ、しかも年老なり。旁ゝ以て、我が下風に立つ人にあらず。然れば今般、晴信が隱謀に一味し、信虎を當國に押籠め、晴信に武田の家を繼がするに於ては、我心の儘に、晴信を以て、幕下に從へ事を行ふに於て、天下

一統の功、速ならんと思惟し給ひ、早速、此密計に許諾せられ、密計の細談、今井に悉くいひ含め、甲州にぞ歸されける。斯くて、信虎は、彌晴信を廢去の事、急に此事を遂げんとて、同じき二月廿三日、晴信の方へ、甘利備前守・飯富兵部少輔を兩使として、兼ねて申遣す如く、今川家は、公方の親族なるが故に、將軍家の異風あつて、式法、他家に勝れたり。其上義元、文學に長じ武道に達し、和歌・蹴鞠の道迄、其名を得たる良將なり。晴信、早々駿府に至り、今川の家風を見習ひ、諸禮を稽古あつて、然るべしと、一時の間に、使三度に及ぶ。されども兩使、晴信に一味なれば、密談を以て、返詞を相應に詐り賺して申しける。

晴信父信虎を廢去の事

斯くて、板垣駿河守信形・甘利備前守兩人、大將の御前に參り、扨も此度、晴信朝臣御廢去の御企、頻に事を決せんと思召され候段、恐れながら、御誤かと奉存候。其故は、當時村上義淸・小笠原長時・諏訪賴茂・木曾義政・北條氏康・上杉憲政、武田家を

傾けんと、隙を窺ふ最中に候。然れども君の威風、敵よく御手並を存じ候故、實に御備の之ある間は、手を出し難く、虚に乘らんとのみ思ふ時節なり。然るに晴信朝臣を、頻に御催促候はゞ、憤を含まれ、若し害心を起され、隱謀の企あらんも知らず候。さあらんに於ては、諏訪頼茂の室家は、御姨子にて候へば、當時を忍んで出奔なされ、諏訪などへ御越も候はんか。其時は、御曹子の御手の者共は、申すに及ばず。當國の中に、晴信へ心を寄する者も、亦少なからずと推量申して候。此等の者共、過半、諏訪に御供して、晴信を慕ひ、家中二つになりて、內、亂るゝ時、頼茂、龍の水を得たるが如く、木曾・小笠原・村上以下、牒じ合せ、甲州に打入らば、立所に當家の滅亡とならんか。其時に至りて、矢猛に思召すとも、猛獸檻に籠められ、冥鴻翅を殺がれたる御心地、其甲斐あるべからず。遠き慮を廻らされ、近き憂の來らざらん御思慮、專一に候。何卒して、安々と國を追放あらん御謀こそ、あらまほしく存候へと、眉を顰めて述べけるに、信虎、兩人が利口を、實と心得給ひ、大息を繼ぎ給ひ、默然として、少し俛まれたる色に見えければ、兩人、差うつぶきて、事を思案

する體にぞもてなしける。暫くありて、信虎、汝等が申す所、一々理に中れり。扨又、如何にして廢去すべき。兩人が心中を聞かんとある。其時、板垣申しけるは、御尋なれば是非なし。愚意を述べざるは、忠貞にあらず。先づ君には、急ぎ駿河に御越なされ、今川殿に此密謀の旨を、悉く御語あつて、義元と御心を一つになされ、其後、駿府より使者を以て、晴信を御呼びなされ然るべし。先立つて、君、駿河へ御越あつて、御召といふに、よも否とは仰せ候まじ。晴信朝臣、駿河に御着候はゞ、其儘、押籠めて置かるべきに、何事か候べき。御供の者共と雖も、小人數にて御越あるやうに、某共、差配仕るべし。御留守の間は、老臣等に御預け候はゞ、これ籠鳥の如くなれば、御心許なき事、聊もなし。御屆の爲めとて、歴々御供仕らんに、路次、猶ほ危き事候はず。此儀、決して追放なさるべき密計の、最上ならんかと存ずると、辯舌を美しうして、面色に實を顯し、方便(たばか)りけるにぞ、流石の信虎、天道の惡む器なりければ、神明にもはなたれ給ひけるにや。忽ちに智惠の明鏡曇りて、晴信朝臣を、甘利備前が方に預け、當月の末、駿府より一左右次第に、指越すべき由にて、御

留守には、次男左馬助信繁を置き給ひ、萬事穴山殿を、頼み思召すの由仰置かれ、天文七年三月九日、近習の人々、少々召連れられ、甲府を御立あつて、駿州に赴き給ひける。斯くて、晴信・穴山・板垣・甘利・飯富・小山田の人々は、信虎を美く方便りすまし、安々と駿府に追出し參らせて、今は事遂げたりと、悦ぶ事限なし。されども晴信は、父を廢去し、逆心自立の企、人倫の道にあらず。增して諸人に將たるの身に於てをや。長く惡名を、末代に殘すのみならず。天道、豈惡み給はざらんやとて、千度・百度、思惟し給ひしかば、甘利・板垣、諫め參らせて、君の嚴親にて、渡らせ給ふと雖も、斯く當家を、斷滅し給はんと欲する惡將なれば、君、仁義を守らせ給ひて、斯く計り給はずんば、我々として、御家を佐けて滅亡なきやうに、信虎君を抑籠め奉り、兎角に御先祖への忠貞を立て、臣たる者の道を守らんと欲して候。然らば何ぞ君の惡逆ならん。若し天道之をせめば、臣等、速に其罰を蒙り、長く弓箭の名を穢し申さん。此上は、氏神八幡大菩薩、御旌・無楯の御前にて、鬮を取らせ給ひ、兎角神慮に任せらるべしと、申しければ、晴信も今は、御心解けて、骨肉合體の思を

捨てられ、御旗・無楯の別當、山下伊勢守・甘利備前守・板垣駿河守三人に命ぜられ、三度迄、鬮を取り給へば、信虎朝臣を廢去すべき由の神慮、明白なり。然らば、疑ふべきにあらずと、御心一決して、同じき十七日、押して御館に入らせ給ひ、逆心の色をぞ顯しける。斯くて、今川治部大夫義元は、兼ねて密契の事なれば、信虎を取留め參らせ、種々に饗應ありて、怒を止めらるゝやうにぞ、計られける。斯くて晴信は、市川・笠井・青沼・古屋・大石・小鹽等を始めとして、信虎に隨順し、駿州に赴きたる者共の妻子をば、人質に取り給ひて、彌々治國の政道を正されければ、彼者共、之を聞きて、信虎朝臣を駿州に捨て置いて、我先にと甲州に逃げ歸り、晴信朝臣にぞ從ひける。斯くて、晴信朝臣、卽時に國中平均の功を立て給ひ、火の燃ゆるが如く、泉の涌くが如く、威力盛に、板垣・甘利・飯富・小山田の長臣等、武備嚴重に、君を輔佐し參らせしかば、誰か兎角の一言にも及ぶべき。御舍弟左馬助信繁・同孫六信連・小幡山城守虎盛・淺利式部少輔信音・諸角豐後守昌清・敎來石民部少輔景政・小山田彌三郎信茂・長坂左衞門尉・安間三右衞門尉・鎌田五郎左衞門を始め、國中の諸士、殘らず御目見を

遂げたり。譜代恩顧の者共さへ、信虎の暴惡に、疎み果てたる折柄なれば、民百姓に至る迄、悦ぶ事限なし。さしも、大剛の勇將なりと雖も、一時の謀略に陷れられて、安々と甲州を押拂はれ、暫時に晴信、國中を押靜め、武田十九代の家跡を繼ぎ給ひける。

武田義信并今川氏眞誕生の事

斯くて、武田大膳大夫兼信濃守源晴信は、今年、纔に十八歳にして、事故なく、甲州を平均に治め給ひ、政道を改め、國法を定め、忠あるを賞し、科あるを罰し、民を撫で士を愛し、國家興隆の志、深かりしかば、權威、日を逐うて盛なり。然るに、晴信の室家は、轉法輪三條從一位左大臣藤原公賴公の御息女にて、去々年、御輿入ありけるに、程なく心地例ならずましませしが、御懷胎の由にて、樣々の御祈、諸寺・諸社への御立願、殘る所もなかりけるに、十月の日數を重ねて、男子平産ましましければ、管根周防守が妻を以て、御乳母となされ、御寵愛大方ならず。生長の後、太郎

武田義信誕生

今川氏眞誕生

義信と申せしは、此若君の御事なり。斯かる所に、晴信の御姉君、今川殿の北の御方も、今年、男子出生ありける。後に上總介氏眞とぞ申しける。兩家御連枝の間、何事なく、然も男子誕生ありしかば、武田・今川兩家の御喜、申すも中々愚なり。去る三月より、信虎も駿府に浪客となつて、ましましけるが、義元、他事なく饗應し、新たに別館を營み、外舅の尊釋にて、萬づ、疎ならず沙汰し給ひける所に、家嫡、誕生ありければ、駿遠兩國の諸士、若君の外祖父にて、渡らせ給ふと、彌々恐れ敬ひ、信虎朝臣も、今は中々、心安き方もありて、以前の怒を止められて、月日を送り給ひける。

小笠原長時家系并韮崎合戰の事

小笠原家系

同元祖

同始祖

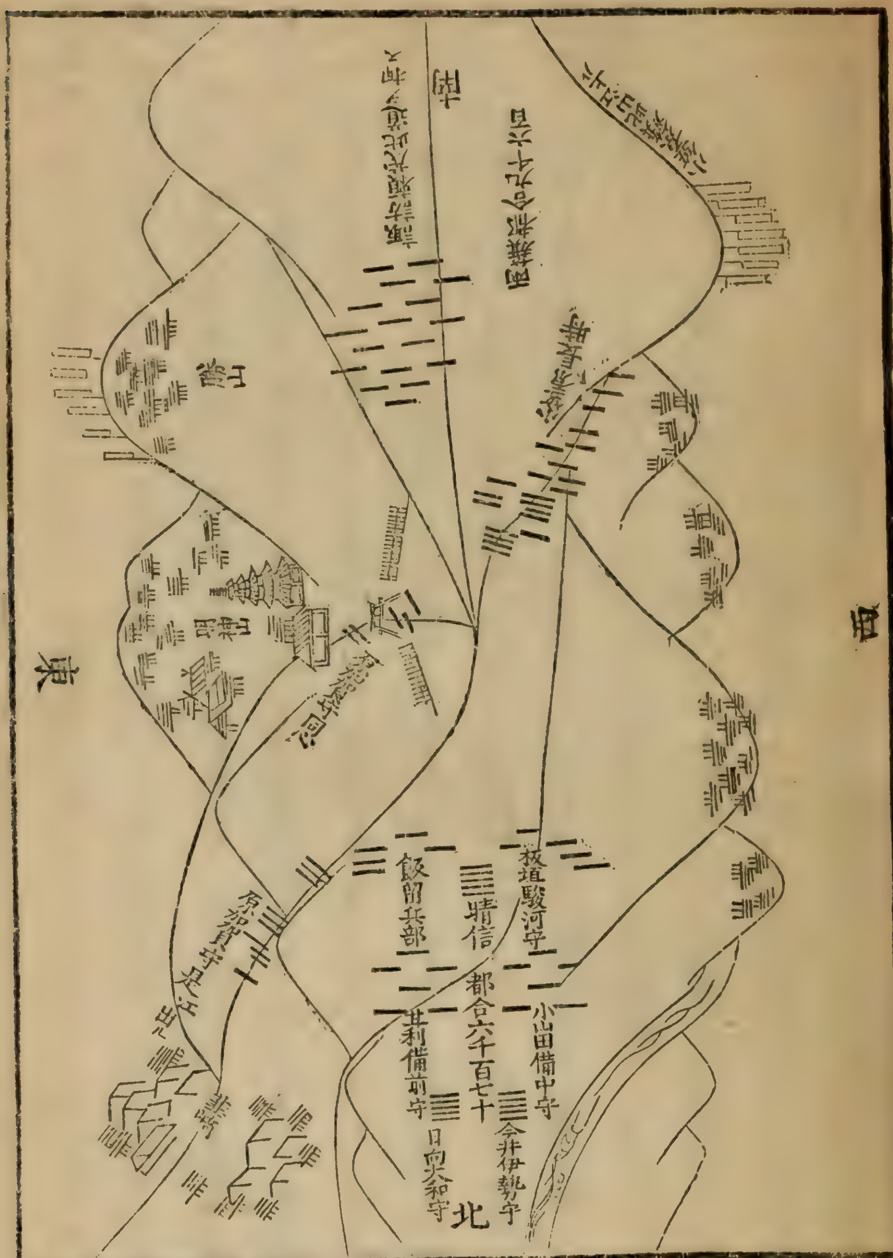
玆に、信州深志の城主小笠原信濃守長時と申せしは、武田同流の源氏なり。其先祖を尋ぬるに、淸和天皇六代の末新羅三郎義光の孫、逸見冠者淸光、是れ武田小笠原の元祖なり。其子太郎信義、武田の家督を繼ぎ、舍弟信濃守加々美次郎遠光、其子從四位下相模守長淸、入道して長淸寺榮曾と號す。これ小笠原の始祖なり。八代

の後胤兵庫頭政長、足利將軍家の大祖、尊氏卿に仕へて、尤も軍功多し。惠禪院入道これなり。其子信濃守長基、大通寺殿俊中正健と號す。其子大膳大夫政康、入道して天開と號す。其嫡、次郎大膳大夫持長、高岳正隆と號く。其子又次郎は、信濃守清宗と稱す。法名は喜叟觀公、其嫡子次郎大膳大夫長朝は、徹叟正源と法名す。其子修理大夫貞朝、因山宗堅と號す。其家嫡、又二郎長宗、修理大夫と號す。二郎右馬助長時は、此長宗の長子なり。然るに信虎、信州を悉く殺隨へんと志し、一家の好をも思はず。諏訪・小笠原・村上の人々と、數年梓楯に及んで、干戈止む時なし。信虎、勇猛の剛將なれば、信州一國の諸將、皆、武田家の變を待つて居たりける所に、晴信、父の信虎を追出し、甲州騒亂するの由、聞えければ、小笠原長時大に悅び、時節到來せりとて、同じき六月、同國伊奈の城主諏訪頼茂と、商議せられけるは、扨も甲州の武田、父子不快にして、嫡子晴信を惡み、次郎信繁に、家督を譲らんと欲せし所に、晴信、不孝の罪を顧みず。今川と心を合せ、父信虎を追出し、畜生同前の擧動故、國中譜代の諸士、二つに破れ、互に害心を挿んで、騒動に及ぶの由、信

虎、近年當國の中をも、少々切隨ふると雖も、今に至つては、甲州さへ、晴信が麾下に隨はず。信州の者共は、思も寄らず。大半、村上に隨ひ附きぬ。兩虎、爭ふ時は、一虎、其隙を窺ふといへり。今、此虚に乘じ、諏訪・小笠原の兩族を以て、甲州に攻入らば、手に立つ者は候まじ。太郎晴信の虚氣者、若輩なれば、何程の事かあらん。武田家を討滅さん事、今、此一擧にあり。武田を亡しなば、小笠原殿は、甲州を一圓に領し給へ。殘りし郡邑は、賴茂と分ち領すべしと、契約一決して、小笠原長時・諏訪賴茂、兩家の軍勢都合九千六百餘騎、天文七年七月上旬、信州諏訪筋を押出し、甲斐の武田八幡城山鍋山を馬手になし、鎌梨河原・韮崎迄、攻入りたり。去る程に、大膳大夫晴信は、漸く甲州を押靜め、政道に私なく、民を安富にあらしめんと、晝夜、心を碎かれければ、前代に引替へて、民・百姓・女童迄、其德に歸服して、喜の色をぞなしにける。七月七日は、七夕の御賀儀とて、幕下の諸士、御禮を申上げて、千秋を唱へけるに、其翌日、諏訪・小笠原の兩家、甲州に攻入らんと、陣觸をなして、其催火急なりと告げける。されども晴信、少しも驚き給へる色なく、何條の事ある

べきとて、板垣・甘利等の諸將を集め、軍の試(ならい)、嚴なる所に、忍の者共、馳參つて已に諏訪・小笠原兩家の旌、臺が原邊迄、見え申し候と言上す。晴信聞召され、敵は兩家の軍勢なれば、一萬よりは少からじ。味方は此度の騷動故、附隨ふ勢、多からざれば、近々と引愛て〔受けカ〕、敵に心を許させ、雌雄を一戰に決すべしとて、先陣は飯富兵部少輔、二陣は甘利備前守、三番は小山田備中守、四番は板垣駿河守、是等四人の士大將、鬮を取つて次第を分つ。本陣の後備は、今井伊勢守・日向大和守、左右は敎來石民部少輔・原美濃守・小幡織部正・横田備中守・安間・鎌田を始め、都合其勢六千餘人、同じき十八日の午の刻、甲府を御立あつて、立梨原(たてなしはら)へ討つて出で、鹽川・鎌梨の兩川を前に當てゝぞ陣し給ふ。是より敵の方を遙に見やれば、諏訪・小笠原九千六百餘人、韮崎の向ふ舟山に陣を取り、家々の旌、思々の馬印を、白日に耀し、軍勢、沓の子を打つたる如くに控へたり。武田方の先鋒、飯富兵部少輔、十八日の子の更(とき)に、鹽川を押渡る。軍は明日の辰の刻と定められ、大將晴信の本陣と、後備に控へたる日向大和守昌時・今井伊勢守清冬とは、飯富虎昌と、一同に鹽川を打渡つて、臺へ備を押

上げさせ、さしもするどき切岸に、河原表へ打下る道形を附けさせて、其夜の明くるを待ち給ふ。先鋒飯富虎昌を始め、甘利・小山田・板垣の人々、川を打渡り、弓手に附いて押出し、韮崎の宿、穴觀音を後に當てゝ、備を立て、明くるを遲しと待ち居たり。明くれば十九日辰の刻、先陣飯富兵部少輔、時分は能きぞと押出す。諏訪方の先陣西條式部、一戰に駈散らさんと進み寄る。兩陣鬨を作るほどこそあれ。兩方入亂れて相戰ふ。互に一足も引退かじとぞ揉だりける。素より晴信、武略神通の良將なれば、日向・今井の兩手の士卒、三百餘騎を一手になして後陣とし、割菱の旌・諏訪の旗、悉く後陣に押立てさせて、晴信の旗本は後陣なりと、敵疑ひ味方定まる。自身は、赤地に八幡菩薩の旗、只一旒、眞先に押立てさせ、兼ねて臺より作らせ置きたる道筋を押下し、西條が左の方へ、一文字に突いて懸る。小幡織部正虎盛、一番鎗と名乘つて、向ふ者を幸に、邊りを拂ひ突廻る。流石の勇士に突立てられて、敢て羽向ふ者もなし。思も寄らぬ晴信の奇術に、突立てられ、西條、一戰に打負けて、散々に敗走す。二陣は大將諏訪賴茂、龍虎の勢を見せて、先陣敗走の機を深く憤


板垣駿河守
晴信
飯富兵部
原加賀守昌俊
都合六千百七十
小山田備中守
甘利備前守
今井伊勢守
日向大和守
北

り、無二に懸つて、必死に戰を挑めと下知して、甘利備前が手先へ押懸り東風西風攻戰ふ。甘利、大剛の士大將なれども、賴茂自身の働といひ、大勢なれば、備前守が備、數度に及んで崩れんとす。晴信、人數を丸めて、又、以前の如くに、橫合より押懸り給ふ。此時又小幡虎盛、一番鎗と名乘つて突亂す。是に續いて、橫田備中、鎗を入れて敵三騎突伏せ、猶も進んで見えし所に、多田淡路守も、敵と組んで首を得たり。斯くて、敵・味方入亂れて、分捕高名、互に其場を爭ひ、引組んで倒るゝ所もあり。太刀討の勝負ありて首掻落し、引退かんとするに、敵走來りて、其首、得こそ敵の方へは渡さじと、追懸けて首を取返し、則ち敵を討取る所もあり。數箇所の疵を蒙りて、引取り難き者あれば、我が主人なりといひて、肩に懸け引退る場もあり。互に太刀の目釘のあらん限り、死を方寸の場所に守つて、足を蹈直さず、爰を必死と攻戰へば、敵の大將賴茂、陣頭に進んで、敵は小勢なるぞ。引裹んで討取れと、勇みかゝつて、下知せらるれば、士卒、何かは猶豫ふべき。大將の眼前にて、潔く討死し、剛臆の程を顯し、名譽を子孫に殘せ。引くな進めと、聲々に恥しめて、場所を蹈

まへ、鞆を傾けて、嚴しく防ぎ戰ひたり。爰に甲州の足輕大將、數度の武功を顯したる原美濃守虎胤、士卒を勇めて、此度の一戰は、國家安危の戰、一人も生きて、甲府に歸へらんと思ふ心底あらば、大敵に對し、勝利あるべからず。敵は客戰なり、我は主戰なり。地利を得る事、我にあり。必定始終の戰、味方の勝利に疑なし。忠あらん輩は、予が眞似をせよといふ儘に、眞一文字に敵中に殺入りて、陸武者をば、鐙の鼻に當て蹴散し、馬上なるをば、馬より逆樣に切つて落し、近づく者を引違へて引落し、或は鞍の前輪に押付けて、首を搔落し、獅子奮迅の怒を顯し、命を風塵に比して、戰ひければ、究竟の敵、五騎切落し、六騎に手負はせ、當るものを、幸に擧動へば、敵大に辟易して、備まばらに見え透き、後陣の旗の手、入亂れしかば、橫田備中・鎌田五郎左衞門・御小姓今井市郎、押續いて咄と切入れば、諏訪勢、若干討たれて引退く。晴信の旗本は、又、甘利が備と入違へ、難なく諏訪を切崩し、韮崎の方へ押廻して、備を堅めらる。三番長時家臣・雨森修理亮、小山田備中守に駈合せて、兩陣互に入亂れ、東西に開き、南北に圍み、戰已に半なるに、晴信又、旗本を以て、

小笠原長時敗軍

長時、板垣と戰ふ

無二無三に突いて懸り、七顚八倒して戰ひ給へば、雨森、足を立兼ねて、既に敗走に及びけり。斯くて晴信、又、本の所に備へて、猶も勇猛の勢、たゆまず見えけるに ぞ、士卒も大に感じて、如何樣、勇武は、楚の項羽といふとも、是には增り給はじと ぞ私語きける。已に三度の戰、三度共に味方の勝利なれば、四番は大將小笠原長時、今度の一戰に、敵を追崩さずんば、再び晴信に對して、弓箭を取らん事、永く叶ふべからずと、深く心中に愼みあるといへども、差蒐りたる軍、廻すべくもあらず。廻さば追討に撃たれん事の危きを計り、進退、此一擧に谷りて、千々に心を碎かれける。頃しも初秋の事なれば、未だ木々の梢そも、時雨るゝ空の染兼ねて、青々たる秋草、紅波瀧なつて、總べて紅葉ならずといふ事なし。されども長時、膚、撓まずして、大音を揚げて士卒を勇め、列を嚴重にして、備を進めらる。武田方には、板垣駿河守信形、駈合せて防戰す。味方、魚鱗に備へて敵を突破らんとせしかども、長時、鶴翼に連ねて、大勢を以て引包み、一人も殘さず討取れと、火出づる程こそ揉んだりけれ。其時晴信、軍士を勇め、鞍笠になつて下知し給ふは、今日の戰、今此一奇

にあり。三蓋菱の大旗は、大將長時が陣と覺えたり。奇兵、下立たずして乘切にせよ。大將に近づき、組んで譽を殘せ。唯一擧に、備を乘亂せと、下知し給ふ。小幡織部正は、今朝より三度の駈合に、三度ながら一番に鎗を入れて、比類なき高名し、餘多の疵を蒙れども、之を事ともせず、眞先に進んで、我と思はん者は、續けや續けと、一番に又馬を入るゝ。士卒も是に劣らじと、一同に駈入りて、兩陣、互に喚き叫んで、命を鴻毛に比し、義を金石の如くにして相戰ふ。然るに、今井市郎は、土方大九郎と、馬上にて組んで落ち、土方を取つて押へて、首を搔かんとする所に、大九郎が同心六七人落合うて、終に市郎を討取りける。今井が姉は、飯富兵部が妻女にて、兄弟の好をなしける。晴信の小姓達にして、物馴れし剛者なりけるが、今日、韮崎の戰場にして、譽を後代に殘しける。扨亦、安間三右衛門は、敵多く切つて落し、其身も深手を蒙りて、是非なく其場を引退く。小幡織部正虎盛、今朝より四度の戰に、三度一番に鎗を合せ、四度目に、一番に乘切つて、向ふ者を選ばず切捨てけるに、例の大

半月の前立打つたる甃を着、黑絲縅の鎧に、月毛の馬の太く逞しきに打乘り、働、衆に越えければ、敵にも之を討留めんと、何れも透間を射ると雖も、近づく敵、一人も生きて歸らざりければ、深く小幡を怖れけり。爰に、長時の足輕大將木村又次郎と名乘つて馳近づく。虎盛、哀れ敵やと打見て、馬を馳寄せ、共に馬上に相戰ふ。木村が下人只一人、走り來つて、鎗を持ち、小幡が馬の平頸三途の邊を、たゝみかけてぞ突きたりける。虎盛、二人を敵に受けて、之を事ともせず働く所に、小幡が中間走り來り、敵の郎等と渡し合せ、相討して死にたりけり。兩雄、互に深手を蒙りければども、退かずして相戰ふ。まだるしといふ儘に、雙方、馬を乘違へて、無手と組み百と落ち、忽ち木村が首を搔切つて、取附に附けて引退く。其身、七箇所疵を蒙り、馬も六箇所、手を負うたり。流るゝ血は、踵に至り、四つの鹽手に付けたる首の血、自身の疵より出づる血、馬の疵より流るゝ血に、月毛の馬、朱に染みければ、栗毛の乘替に乘つて引きたるやと、皆人いひける。是よりして、甲州はいふに及ばず、近國他境の兒童等、高名をせば、月毛の馬の栗毛になる程に、名譽を顯せといひ

ける は、此小幡虎盛が事なりけり。智勇兼備の晴信、今日を限と働き給へば、士卒、命を輕じ、前に怖るべき敵なく、後に退くべき心を忘れて、必死に其場を爭ひて、皆、段になりてぞ戰ひける。然りと雖も、辰の刻より未の刻に至つて、四度の奇合正術に、六千の味方、皆勞力して生きたる心地のなかりけるは、寔に理なりけり。孫吳を欺く晴信の兵、既に敗軍に及ばんと見えし所に、典厩を輔佐して、留守居にありし原加賀守、此度の軍、難儀ならん事を、兼ねて察しければ、西郡・東郡の百姓共、又は甲府の町人等に至る迄、二十歲より五十歲迄の者を選び、古鎧を集めて、之を着せ、竹鎗又は草鎌を取持たせ、紙旗を作りて、諸士の紋を畫かせ、數十旒押立て、勝山嵐に翻し、大將加賀守は、本道を押し、相圖の據旗を以て、勝山に登せ、晴信の奇戰、危さを見て、戰はずして鬨を作り、さゞめき渡つて、五千餘人、敵を中に取籠めんと、急の太鼓を打つて進みよる。これに機を得て、板垣信形、手痛く下知をなして戰はしむれば、敵陣しどろになりて、四角八方に敗北す。一萬に及ぶ敵軍なれば、右往左往に亂立つて、小返し守返しを、心懸くると雖も、武田勢、透間を計へ、手

先へ押懸け〳〵、其場々々の鎗合、汐を拔かさず、追詰めしかば、一返も返さず、一同に敗走す。武田勢、猶ほ追留の節所に至り、輒く備を疊みて、勝鬨を執行ひ、首實檢ありけるに、敵の首を獲る事、二千七百四十八級、小を以て大に勝ち給ふ。偏に晴信の奇術の、いみじきに因つてなり。其後、悦喜の旗を卷き收めて、御館に歸陣し給ひける。

武田三代軍記　卷之第三　終

武田三代軍記 卷之第四

撚場野邊山・蔦木合戰の事

應仁年中より以來、五畿七道、干戈動き止む隙なく、兵家はいふに及ばず、民百姓に至るまで、賣買利潤の道を絶ち、農業耕作の便を失ひ、夜となく晝となく、騷しかりし年も暮れ、新玉の春に移り替る。天文八年己亥、甲州の大守大膳大夫源晴信朝臣、歳旦の御禮を受け給ふ。門葉の歴々を始め、武田家譜代の人々、御土器を給はり、又中にも、原美濃守虎胤・小幡織部正虎盛・横田備中守・多田淡路守、是等四人の者共は、父信虎朝臣より以來、數箇度の武邊、覺を顯し、軍に妙を得し者共なり。彌〻勳功を抽づべしとて、去年、韮崎の合戰の功賞に因つて、御感狀を下され、御加恩を與へられける。四人の者共　殊に面目を施して、御前を罷立つ。然るに晴信朝臣は、

文武を左右にして、國を治めん事を思召し、禪學に御入あつて、法を崇敬遊ばし、惠林寺惟高和尙・上條法城寺策彥和尙を始め、虎哉・湛堂・物外などといふ博識の僧達を集め、軍旅の御暇には、參禪に御心をしづめ、詩文和歌の道を嗜み、杜子美・東坡が古を慕ひ、人丸・赤人の遺風を追ひ、月を愛し花を翫び給ふに、今、奸佞輕薄の邪臣等、晴信朝臣の若氣を唆して、同じき二月、都より朧といへる容顏美麗なる遊女を、一人呼下し、寵愛し給ふこと斜ならず。寔に色に溺るゝの習、賢愚同一にして、平生を誤つ事珍しからず。是より軍事を抛ち、國政をも忘れ給ひ、遊宴に日を暮し、沈醉に夜を明してぞましましける。然るに今、戰國の最中にして、四方に敵を受け、國を守るの時節なれば、互に彼我、其虛を窺ひ合ひて、片時も安き心なし。就中、諏訪・小笠原は、去年韮崎合戰に敗北して、會稽の恥を雪がんと思ふ時分、旁、斯かる御身の行跡にては、當家の滅亡、近きにあらんと、心あるも心なきも、歎かぬ者はなかりけり。之を聞きて、時節既に到來せりと、信州更科の村上義淸・同國伊奈諏訪賴茂、甲・信兩國の堺に砦を築き、軍勢を籠め置き、甲州へ攻入つて、武田家を、一戰に

討滅さんとぞ巧みける。既に義淸は、金山隱岐守に、千七百餘人、軍勢を差添へ、甲州に發向す。諏訪賴茂は、去年の憤を散ぜんと、桐原主水正を大將にて、千五百餘人、同じく甲州へ差向けらる。兩家、牒じ合せて、信州を打立つ程に、桐原が千五百餘人、諏訪筋を押出し、武田八幡を妻手に見て、臺が原迄、攻寄せたり。村上家の軍勢は、長澤筋を押來つて、若御子に陣を取る。此旨、甲府に告げ來れども、晴信、今は軍事を忘れ給ひ、遊宴をのみ、事として御座しければ、さのみ軍の評議もなく、一方をば飯富兵部少輔を隊將にて、八百餘騎の軍勢を、若御子に差向けられ、板垣駿河守信形を以て、一方の大將として、士卒七百餘騎、諏訪勢の諸手として、臺が原に差向けらる。敵味方、互に對陣して、足輕迫合に日をぞ送りける。時に飯富兵部少輔虎昌、謀略を廻らし、西卷又兵衞を近付け、今度、寄手の中にある岡野原隨流齋は、御邊が舊友と聞く。如何にもして、賺し調べて見られよといふ。西卷、畏るといひて、隨流齋が方へ、矢文を以ていひ遣しけるは、此度、味方の謀に同心あり。陣中に味方を引入れらるゝに於ては、甲州にて、千五百貫の恩賞を與ふべしと、いひ

撚場野邊山合戰

村上義清敗軍

送る。元來、慾心强盛の隨流齋、天の與と悅び、早速許諾して、物馴れたる人々を、當陣中に御入れ候べし。一戰の節、手引し後切を仕り候べしと、人質をぞ遣しける。扨は事なりぬとて、忍に馴れたる出抜共六十餘人、金山が陣中に忍入り、信州勢に紛れ、敵中に分散して、相圖の時をぞ相待ちける。虎昌、思ふまゝに、調略をしすまして、閏六月二十日、卯の上刻に、一戰を遂ぐべしと定めけるが、味方に、一番、二番の爭、出で來つて、既に辰の刻にぞ及びける。さりとて、止むべきにあらずとて、金山が陣取りたる撚場野邊山に押寄せて、一聲、鬨を作る程こそあれ。敵・味方入亂れ、鋒より火花を出し、陣雷、天を響して、互に引かじと防戰す。然る所に、兼ねての相圖、其刻限に及んで、岡野原隨流齋、己が役所に火を懸けて、散々に切立つる。六十餘人の忍の者、爰に隱れ彼所に起つて、岡野原と一手になり、勇みかゝつて切立つれば、須破、味方に逆心の者こそあれ、前後の敵に圍まるなと、噇と崩れて敗走す。甲府勢、機に乘りて、追慕はんとせしかども、虎昌、士卒に下知して、彌、備を堅うし、前後を警固し、勝つて甃の緒をしむるといふ諺を、知らずやといひて、

首實檢するに、今日兵部少輔が手に、討取る首數、雜兵共に九十九級なり。猶も撚場野邊山に陣を取り、勢、猛にして居たりけり。臺が原に向ひたる板垣駿河守信形は、既に飯富兵部少輔、村上勢を切崩し、大に勝利を得たりと聞き、予が合戰の汐ぬけたり。何日迄、斯くて日を送らん。諏訪勢を蹴散らして、高名せよ人々、流石にきたなき後切抔を作らんは、本意にあるべからずとて、同じき廿三日の巳の刻に、七百餘騎を引率し、桐原主水正が陣取りたる蔦木に、噇と押懸けて、無二無三に攻戰ふ。諏訪方の軍勢は、去る二十日に、村上勢、飯富兵部に切崩されて、敗走の色を見聞し、力を落し機を挫いて、見崩に崩れて、若しくは味方、岡野原が如き者もやあると、互に胸を抉りければ、我先にと逃支度し、敢て刃向ふ者なし。信形、敵の擄旗の、仰に靡くを見て、大音揚げ、如何に者共、敵の旗色を下墨に、今日の合戰、轉々しき事なし。斯かる敵に向ひては、高名も不覺も、皆平等なり。あれ蹴散らして、のけよと呼ばはりける。得たり賢しと、早雄の勇士等、喚き呼びて懸けたりけり。志を立て、義に死なんと欲する敵の軍士等、少々取つて返し、防ぎ戰ふといへども、

板垣信形飯富虎昌甲府に凱陣

晴信遊宴に耽る

味方、之をものともせず、切伏せ突臥せ、分捕高名をぞしたりける。或は實衆に附くもあり、溢れ者を討つて、印とするもあり。今日、信形が手に討取る斬首雜兵、合せて百七十五級、飯富・板垣の兩將、潔く軍に勝利を得て、悦び勇んで、甲館に引返しける。

武田晴信奢侈附板垣駿河守諫言の事

去る程に、板垣信形・飯富虎昌、一戰に打勝つて悦ぶ事限なし。されども、主君晴信は、唯、軍旅國政を忘れ給ひ、朧を寵愛御座して、夜は終夜宴會を催し、晝といへども、四方の妻戸障子を差廻し、古人も燭をとつて夜こそ遊びぬれとて、蠟燭に火を點ぜさせ、山海の珍肴・美酒を調へ、或時は又、齡、三五・二八ばかりの女を俊り、數十人集めて、梅花・芙蓉・櫻花・桃花等、あらゆる作花を、長さ一間ばかりの竹の柄に附けさせ、手々に之を持たせ、左右に立別れさせて、花軍と號けて、鬪はしめ給ふ。夏は後園の池水に、御船をしつらはせ、是も同じくなまめける女人に、紅の一重衣、或

は生絹の羅を着せ、立て雙べて船を漕がしめらる。女姓等、棹の歌を諷へば、絲竹の緒を調和して、之を囃されければ、江底の龜も、猶ほ萬代の春を迎へ、水上の魚も、上生の臺に生るゝかと疑はれける。或時は又、女に鵜を遣はせ、種々の遊興、無益の奢侈、盡されずといふ事なし。適、表へ出で給ふ時は、惟高・策彦・淺海・鐵甃・南化・說山・虎哉・湛堂・物外などといふ僧を集め、詩會の興行ありて、政事は曾て聞き給はず。然るに甘利備前守、之を歎き、卅七箇條の書を奉つて、樣々諫め參らすと雖も、露ばかりも聞入れ給はず。剰へ引籠り在(ましま)して、諸臣に對面ある事稀なれば、重ねて諫め參らすべき便なし。信形、色々思案を廻しけるが、當國西郡の側に、友夢居士とて、詩歌の道に長じ、世を離れ隱遁の身にて、花月を友とし、幽かに暮せる老翁あり。駿河守、之を傳へ聞き、竊に、彼の友夢居士を招き寄せ、同じき九月下旬より、虛病を構へて出殿せず。晝夜を分たず、詩文を學びけるに、纔か三十餘日の間に、起承轉合熟學、平仄を胸中に浮め、詩作、形の如くにぞ作りける。信形、今は思ふ儘なり。如何なる題を得るといへども、卽席に蜂腰を綴りて、主君を諫めんと思惟して、

詩會の興行をぞ待ちたりける。斯くて、同じき十一月朔日、晴信、惠林寺の惟高、法成寺の策彥を始め、鐵嵜・說山・虎哉・春國、大川寺の高僧桊昌院の大益抔を召集められ、詩會を催し給ひけり。板垣信形、緣に畏つて候ひけるが、進み出で、某も、一首仰付けられ候へかしとぞ望みける。晴信、打笑ひ給ひて、戰場に向つて、利を破り堅きを碎くの道、誰か汝を欺かん。今、信形が詩作を望むこそ心得ざれと、仰あれば、信形謹んで、さん候。能くは仕るまじく候へども、臣として君の好み給ふ事を、無下に嫌ひ退けぬる事は、勿體なく存ずる間、兼ねて心懸け候。是非に御免を蒙らんと、達て望みけるにぞ、則ち題を下し給ふ。板垣、暫く沈吟して抑藏き、卽席に一首を作り差上ぐる。晴信、不審に思食して、重ねて一首望み給ふ。畏つて又仕る。言下の妙句、玉を連ね詞の林に花開けて、諸人、あつと感動せり。晴信、猶も之を寔にし給はず。是は兼題なるを以て、兼ねて詩文に通達せる者に作らせて、晴信を欺くにやと宣へば、信形承り、左思召し候はゞ、別題を給つて、仕らんと申す。晴信、則ち三首の題を給ふ。板垣又、卽席に仕る。此時晴信、大に驚き給ひて、信形、何國に

板垣信形晴信を諫む

て、いつの間に、斯くの如く詩文を學び熟せるにやと尋ね給ふ。板垣承り、此二十日餘が間、稽古仕つて候と申す。晴信聞召し、汝、何故に今、詩文を學びたりや。さん候。身、不肖に候へども、信形、長臣の名を汚せり。君の好ませ給ふ道を知らずんば、爭でか臣たるの禮ならんやと、謹んで平伏す。大膳大夫殿、甚だ怡悅あり、臣の道を以て、我を思ふ事、今、斯くの如くの式に及ぶ。其志、至れり盡せりと宣ひて、御氣色快然たり。板垣、又申しけるは、某が如き者、詩文に達し候はん事、何箇年をか經候はん。晴信、答へて宣はく、汝、此道に秀でん事、今より何の勞かあらん。好まば頓て達せんとありける。其時、板垣、涙をはら〳〵と流し、居直つて申上げけるは、君、詩文を嗜ませ給ふ事も、思召止められ候へかし。御當家は、忝くも淸和天皇の御苗孫新羅三郎殿より十九代に當らせ給ひ、武田の家の御總領として、當國の太守にて渡らせ給ふ。然れば、國中の四民、皆、君を以て父母の如くにす。君も亦、四民を以て、子の如くに撫育し給ひて、御政に私なく、賞罰嚴重にましましてこそ、御父信虎朝臣を、廢去し給ひぬる理も可なり。今になりては、信虎君の惡逆は、

物の數ならず、御跡、押領し給ひて、未だ三年に過ぎず、御心の好む所に任せ給うて、少しも御愼の御心なき故に、美女を以て、晝夜の友となされ、遊與にあたら月日を送り給ふ。今日の日又來らず。能々御遠慮あつて、軍旅を忘れ給ふべからず。適、僧を召すといへば、詩歌のみ、實の理學にあらず。唯、艶なる御心の赴く所に因つて、詩歌を好んじ給ふ。是等の道も、和漢の風俗にして、尤も國を治むるの端ともなるべけれど、差向ふ所に、御貪着あつて、自然の御遊は又可なり。累代舊功の臣等に、疎く渡らせ給へば、まして況んや、新參外樣の輕士をや。斯かる御行跡にては、甲州一國を永く御治めあらん事、此信形に於ては知らず。唯、御心、晝夜醉へるが如し。漢王重レ色思レ傾國一といへり。彼代の將たる人、何ぞ之を愼まざらん。大將の惡事は、其日を出でずして、千里を走る。君、色に迷ひ政事を忘れ、暗然として、御座す事、隣國に隱れなく、既に村上・諏訪・小笠原の人々、甲信の堺に砦を築き、去る閏六月、若御子臺が原邊迄相働き、武田家を滅し、其地を領せん事を巧む。然るに、兵部少輔、某兩人馳向ひ、防戰して追拂ふ。これ危き事に候はずや。斯く申す

信形、惡しと思召さるゝに於ては、御庭に引出され、速に首を刎ねらるべし。元より君に進上る所の一命、戰場にて死するも、今、諫言を申して死するも、心は同意なるべし。何卒御行跡を改められ候はゞ、假令泉下に罷在りとも、悦の色、是に過ぐべからずと、聲を揚げ、さめ〴〵と泣きければ、列座の人々も、理を感じ、皆、涙をぞ流しける。惟高・策彥を始め、其座にあり合ふ出家・隱者の輩、折惡しとや思ひけん、皆拔出でて退かれけり。晴信も伏目になつて、熟と聞き給ひ、御座を御立ありて、信形を閑所に召寄せられ、我れ若年にして、前後の辨なく、計らずも女色に耽り、今汝が諫、肺肝にこたへて恥しく、今更、臍を嚙むに益なく、千悔すと雖も返らず。汝、忠臣の道を守つて、一命を抛ち、我を諫舌す。これ氏神八幡大菩薩、御旗・無楯も、未だ捨て給はず、正しく神說とこそ覺ゆれ。向後、前非を飜し、汝が忠言を守るべしと、暫く涙を流し給ひて、誓紙を書きて、信形に給はりければ、板垣、主君の心中を感じ、今の一言忝き上、誓紙に及ばれける事を思ひ、彌々涙にかき暗れてこそ退きけれ。斯くて晴信、朧女を京都に返し、其餘の女を、一人も殘さず、己が故鄉

に歸し遣され、忽ちに行事を改められけるこそ、又有難く聞えし。

信州海尻開城附一揆蜂起、長坂左衞門尉城中出奔の事

晴信、信州海尻城を攻む

茲に、信濃國海尻の城と申すは、筑摩川の西、眞名頭の南にあり。更科の村上家より、藥師寺右近進・多治三太兵衞・小沼川舍人介、三人の者共に、山内喜田村氏房・芳賀・須々井等を差添へ置きける所に、天文九年正月、大膳大夫晴信、八千餘人を率して、信州海尻に押寄せ給ふ。此時、板垣駿河守、計策を設け、城中に間者を入れ、今般、晴信八千餘の軍勢を帥ゐて、當城を取圍む。附きては義淸、隱なき勇將にてましませども、晴信、武略に秀でたるを以て、當城に楯籠られん事、努々思も寄らず候。其上、殘雪數丈に積り、山野一つになつて、往還の便を失ふ。義淸、いかに思召すとも、後援の勢を出されん事、叶ふべからず。籠城の人々は、これ籠の中の鳥の如し。落城、只一戰の中に候べし。早々當城を開け渡されて、宜しからんとぞいは

せける。薬師寺・多治・小沼川を始め、寄合勢の淺ましさ、衆議一決せずして、さしも鬼神の如き父信虎を、安々と追出したる晴信、自ら大勢の士卒を從へ、當城へ向はれたらば、とても味方の勝利あるべからず。又、義淸君の後詰も、此大雪には叶ふべからず。早く開城すべしと、評議一決して、仰に隨ひ、當城を開け渡し候べし。然りと雖も、一戰に及ばず、安々と城を渡し候はん事、後難遁れ難し。此上は、明日、諸手一同に、當城へ攻寄せらるべし。一防ぎ仕る體を示し、開城仕り候べしとぞ返詞しける。此旨、信形、晴信へ言上す。大膳大夫殿、大に悅び給ひ、正月十六日の拂曉、八千餘人を以て、東北の二方を開き、西南の二方に押寄せ、鯨波を三度作る。城中、兼ねて契約の事なれば、少々、鐵炮を打懸け矢を射出して、支へ戰ふ體にもてなし、北の搦手より、悉く落去りけり。斯くて、薬師寺・多治・小沼川等、海尻の城を開け渡しければ、則ち城代を居うべしとて、板垣駿河守・飯富兵部少輔・小山田備中守・甘利備前守四人を召して、鬮を取らせらる。小山田、鬮に取中りければ、備中守を以て城代とし、本丸に居ゑ置かれ、二の丸には、日向大和守昌時、三の郭には長坂左衛

門尉を、目付として差置き、甲府へ凱陣し給ひけり。斯かる所に、降參に出でける淸野・井上・隅田・高梨等の地侍共、竊に葛尾に飛脚を立て、大將を一人差向けらるべし。海尻の城を取返し候べしと、註進しければ、義淸悅び、藤島刑部を大將として、三百餘騎を差向けらる。淸野・井上以下、是に氣を得て、士卒を駈集めて、八百餘人を以て、海尻の城を取圍む。三の郭に居たる長坂左衞門尉、元來、怯弱なる男なれば、大に怖れ、本城の小山田備中守、二の丸の日向大和守と會合し、味方一抓の勢を以て、多勢を引請け、當城にあらんこと、とても叶ひ難からんか。此上は、城を開渡し甲府へ退かんとぞ申しける。當時、出頭の長坂なれば、日向は否といふに及ばず、兎も角も、義の宜しきに隨ひ申さんといふ。小山田、聞きも敢へず、如何に敵、大勢なりといへども、一戰にも及ばず、何ぞ城を開けて落去すべき。旁々は如何にもあれ。此小山田に於ては、身不肖なる某を、城代として、差置かるゝこと、莫大の君恩なれば、當城を以て枕とし、一命を限りに叶はぬまでも、討死を遂げんの外、他のことなしと、詞を放つて申しければ、されども長坂、臆病神に誘引せられて、頻に

城を退かんことを思ひ、様々に思案し、如何に小山田殿、矢猛に思召すとも、大勢の敵に取り卷かれ、後援の味方なくしては、終に落城せんこと、疑なし。左あらんに於ては、何ぞ其甲斐あらん。某、一方を切抜けて、甲府に歸り、君へ此旨を申上げ、後詰の御馬を出させ給ふやうに仕らんと、ひたすら、此議に傾きければ、小山田聞きて、さあらば、御邊一人にては危からん。日向殿も、少しの路次を送り給へとて、已に評議一決しければ、長坂・日向手勢組の士卒を從へ、搦手より忍び出で、甲州へぞ赴きける。日向大和守昌時は、海尻の城より海野口まで、其道一里が間、長坂を送り、夫より左衛門尉に引分れ、又取つて返し、海尻の方へと急ぎけるに、早や隣郷の一揆ども、方々より寄手の勢に馳せ加はり、雲霞の如くに群りて、海尻の城を取り卷きしかば、城中へ歸り入るべき方便盡きて、いや〱、我れ一手の小勢を以て、大勢の敵を打破らんこと、思ひも寄らず。却つて不覺を仕出さんと、夫より跡へ引き返し、海野口の城に入り、小宮山丹後守と一手になつて、大將晴信の出馬をぞ、相待ちける。

晴信、海尻後援附一揆敗北幷長坂左衞門尉勘氣を蒙る事

甲府より、兼ねて附置かれたる忍の者共、追々走せ歸つて、海尻近郷の一揆、大に蜂起し、城を攻動かす由、註進する事、唯、櫛の齒を引くが如し。晴信、之を聞き給ひて、何程の事かあるべきぞ。自身、後詰をして、一揆の奴原、撫切にせんと、既に陣觸をぞせられける。然る所に、長坂左衞門尉、海尻の城より逃げ歸り、村上方多勢を以て、海尻の城を取圍み。城中難儀に及び候。急ぎ後詰の御勢を出され候へかし。此旨を告げ知らせ申さん爲に、敵の圍を切拔けて馳せ參じ候と、さも嚴しく言上す。晴信、聞きも敢へ給はず。大敵の圍を受けて、小山田が難儀に及ぶを、見捨てゝ逃げ歸ることそ、言語道斷の働なれ。諸勢、跡より押來れとて、中村鹿毛と呼び給ふ祕藏の名馬に乘り給ひて、近習の人々、纔に三百計りにて、馳向はせ給ひしかば、諸勢、之を聞き傳へて、一騎駈にして駈け行きけり。海野口に着き給へば、小宮山丹後守・日向大

和守・大將を待ち受けて、悅ぶ事限なし。追々軍勢馳せ來つて、其勢七千餘人、是等を後陣に備へさせ、同じき正月廿九日の曉天、海尻に着陣あり。去る程に、小山田備中守は、我が一手の勢、纔に五十騎餘、海尻の城を持堅め、義を金石に守つて、晝夜三日が間防ぎ戰ふ。然るに晴信、其翌晦日の辰の刻、後援の軍勢七千餘人を引率し、旗本を以て先陣とし、據旗をうつぶけて列を正し、金鼓の節を守つて押寄せらる。寄手、急に後詰のあらん事を計らざれば、諸手、大に騷ぎ渡つて色めく所に、城中の小山田、龍の水を得たるが如く、城戶を開き、一同に噇と切つて出で、一擧に追崩さんとぞ揉んだりける。寄手は、元來、一揆の寄合勢なれば、前後の敵に途を失ひ、親を捨て主を顧みず、我れ先にと蜘蛛の子を散すが如く、四角八方へ逃げ行くを、備を解して少々、敵を追はしめ、其後、軍勢を引揚げられ、堅く備を催け給ふに、首を獲る事、一百九十三級、其日の午の刻、勝鬨を執行ひ給ふ。此度、小山田が忠義を、大に感悅し給ひ、感狀を給はりけり。是よりして、武田家の手に入る城々へは、必ず先づ小山田が移り居ずといふ事なし。斯くて近邊の邑里を、多く手に入れら

れ、仕置堅固に仰付けられ、同じき二月五日、甲府に歸陣ましましけり。扨も此度、長坂左衞門尉が事、怯弱至極の擧動なりと、甲府の諸人、爪彈をして笑ひければ、長坂も、流石恥しく思ひ、これ皆、日向大和守が臆病より出でたりと僞り欺く。大和守、之を洩れ聞きて、大に怒り、己がいひ甲斐なき擧動をして、今更、昌時に、詑けぬることそ安からねと、兩人、大に之を爭ひ、終に晴信の御前にて、雙方對決に及びけるに、長坂、己が怯弱を包み隱し、諸人を僞り欺きし事、一々に顯はれしかば、晴信、之を怒り給ひ、所領を沒收せられ、勘當を蒙りて、浪牢の身とぞなりにける。如何なる故にや、暫く左馬介殿の許に召置かれけり。

小荒間合戰の事

然る所に、藥師寺右近進・小沼川舍人助・藤島刑部を大將として、淸野・井上・隅田・高梨・須々井・喜多村・堀内等相集つて、既に其勢、三千五百餘騎、同じき十八日、甲州に押寄せんとて、小荒間迄出張し、近鄉の民屋を放火して、少々亂妨すと雖も、早晩よ

り餘寒甚しく、未だ殘雪深かりければ、自ら心の儘に、擧動ふ事能はず。此事、甲府に聞えしかば、晴信、近臣を集めて評議ある時に、多田淡路守、進み出て申しけるは、村上家の軍勢共、去月海尻合戰に敗北し、面目なく存ずるが故に、義淸の手前の申開きに、斯く足長に、深く働入りし者にてぞ候はん。又義淸は、海尻に罷在り、小山田備中を能く押へんとて、中々、今明日の間には、小荒間迄は、よも押出し候べからず。敵の心を察し候に、春になりて、雪、冬より深く候へば、甲府勢も、輕々とは働かじ。其上、先月、海尻にて勝利を得ぬれば、諸士、敵を侮り、何程の事かあるべきと、軍議に日を送らんか。其間に、信州に引取り、放火したるを印にて、己等が恥を雪がんと、思ふにてぞ候ふらん。然らば明日は、敵早く引取り候べし。片時も早く、御馬を出され、夜合戰に仕懸けられ候はゞ、必定、味方の勝利にて候べしと、申しければ、晴信聞召し、汝が申す所理に中れり。此度も我れ旗本を以て先驅すべし。續けや者共と仰せられ、又彼の逸物の中村鹿毛に召され驅出し、在々の郷民等に觸れて、道筋の雪を掻かせ、一騎駈に馳せ向ひ給ふ。旗本勢と、甘利備前守一手と、漸

村上勢敗軍

く其夜の戌の刻、小荒間に馳着きたり。村上方の軍勢共は、甲州勢、斯く卽時に打出づべしとは、思ひも寄らず。素より慾心強盛の、一揆原の集なれば、武田勢は、定めて明後日の程にぞ、打出づるとも打出でんぞ。徳分を得て、妻子への土産にせよと、在々に走散して、民屋に押入りて、心の儘に亂妨す。さるに依つて、三千五百の軍勢なれども、陣中にある所、纔に千人にも足らざりけり。扨、刻限を尋ね給ふに、近習の者共、戌の刻と申す。時分大に能きぞ。押懸けよと、甘利備前守を以て、後陣となし、旗本を以て、先備とし、靜々と押寄せらる。兩陣の間、一町計りに近づきて、鬨を喧と作り懸けて、鐵炮を打入る。信州勢、思ひ寄らざる事なれば、大に狼狽へ、上を下へと騷動せり。中にも隅田彦次郎、究竟の者なりければ、介副の鎧を追取つて肩に懸け、馬に打乘り、馳廻つて靜めけれども、一圓に陣中騷動止まず。鎧を着るに、其隙なかりければ、多くは素膚にて駈出でたり。晴信、頻に軍勢を勇め、采配を取つて下知し給へば、堀無手右衛門、今宵の一番鎗と名乘つて、鎗を入る。則ち敵を突倒し、首をも取らず、猶ほ深く働入る。是に續いて、士卒一同に突入れば、

村上勢、一支にも及ばず、信州を指して敗北す。甲州勢は、備を亂し追詰め〳〵、何れも印を持參せり。討捕る首を數ふるに、雜兵共に百七十二級なり。然る所に、原加賀守・飯富兵部・淺利式部少輔以下の士大將、追々に馳付けしかども、手に合はざれば、各牙を嚙んで後悔す。原加賀守、大將に向ひ、鬪終ての千切木とやらんは、此戰に於て、我々が事にて候とて、手を打つて笑ひける。斯くて、段々の備を分ち、御馬を收れられける。多田が武功を以て、察する所當れりとて、大に感じ給ひけり。

晴信軍評議の事

去る程に、天文十一年正月元日、武田大膳大夫晴信、甲府の御館にして、諸士元旦の賀儀を受け給ふ。去年は、海尻、眞名頭の向ふ尾臺、岩村田邊にて、武田家の諸士、村上勢と少々足輕の迫合あり。又諏訪通り、臺が原筋に、蔦木・青柳などといふ所あり。此兩所に於て、番手の者共、賴茂方と、日々足輕を出し、迫合ふと雖も、隣國の敵方より、軍勢を差出さず。味方も敵地へ働かず、暫く休息してぞ居たりける。其

上、去年は、晴信の御二男龍寶君、誕生ありしかば、御悦限なし。觀世大藏を召され、御祝の御能仰付けられ、目出たき中に、年の緒のくるともなしに暮れにけり。然る所に、信州葛尾の村上義清は、去年、海尻の城を、甲州方へ攻取られ、其上、味方數度敗北に及びし事を、無念に思ひ、如何にもして、此恥辱を雪がんと思惟し、小笠原長時・諏訪頼茂・木曾義高等に牒じ合せ、甲州に攻入つて、鏖にせんとぞ計られける、兼ねて信州へ入れ置かるゝ忍士に、坂西市六といへる者、甲府に走り歸つて、此旨、板垣駿河守にぞ告げたりける。信形、此由を晴信へ言上す。卽日にして、老臣等を集め、日々の軍議あり。時に板垣信形・飯富虎昌・原大隅・甘利・日向・諸角以下の功臣等、內談を以て、晴信へ申上げけるは、義清、去々年の鬱憤を散ぜんため、諏訪・小笠原の諸將を語らひ、當國に亂入し、武田家を無二無三に、攻滅さんとの結構にてぞ候はん。然れば、敵は多勢にて候べし。先づ海尻・海野口の兩城を明けられ、小山田備中・小宮山丹後兩人を召寄せられ、且つ又、駿河今川殿を、御賴あつて、義元朝臣の御出馬を、望ませ給ふか。然らずんば、一萬騎の加勢を御請ひなされ候て、

諸軍勢を、甲州の中に押しつぼめ、敵の働を御覽なされ候べし。諏訪・村上の軍勢共、二手に分れて、甲州の堺迄も押來り、輕々しくも働かず、備を堅め居るに於ては、左馬助殿に、板垣・甘利を差添へられ、務川口へ差向け給ひ、君は若御子口へ御馬を出され、待付けて一戰を遂げらるべし。若し又、敵は大勢を頼み、味方の微勢を侮り、甲府迄も攻入り候はゞ、思ふ儘に、敵を引入れ、雌雄を一戰に決せられて、然るべからんとぞ申しける。晴信聞き給ひ、方々の異見、一理なきにあらず。敵は信州勢、當國へ攻來るとも、地形を暗ずる事能はじ。味方の勢は、自國にて案内を能く知れり。然るときは、敵は客戰なり、味方は主戰なり。これ主客の異同あり。既に諏訪頼茂・木曾義高・小笠原長時・村上義淸の四將、去る天文七年より、當國に手を出すに付きて、數度戰に及んで追散し、予が手並の程を知る所なり。此度といへども、亦然ならんぞ。敵は我意地ましに、村上は諏訪が上に立たん事を思ひ、木曾は小笠原が下に屬せじと、心中互に威を爭うて、軍議一決せず。これ味方の勝利の據所にして、多勢、却つて小勢の爲めに、敗るゝの想なり。又義元に、加勢のことは、決して

申遣すまじ。其故、如何となれば、さる天文七年、父信虎君を方便り出し、今に至つて駿府にましします。これ義元、晴信が申せし事を、許容あつて、計略に一味せられし故と雖も、倩義元の心中を量るに、其身、大功を立てんと思ふ望あり。然れども、父信虎は舅といひ、剛强の大將なれば、今川家の幕下にせん事叶ひ難し。又義元は、予に二歲の年增といひ、姊婿なれば、晴信が密計に同心し、信虎朝臣を駿河に取留め、某に甲州を能く治めさせて、往々、幕下にせんとの巧みならんか。然るに今、駿州へ加勢を請はゞ、晴信、今川家の旗下に極るべし。さあるに於ては、晴信假令、天下一統の大功を立つると雖も、今川の幕下より出でたりと、天下の人にいはれんは、子孫迄の瑕瑾ならん。殊に信虎の傳へ聞き給ひても、いひ甲斐なく、思召さん事口惜し。此度に於ては、晴信に任すべしとて、近年、信州より召抱へ給ひたる出拔七十人の內より、究竟の忍の剛者三十人を選出し、妻子を人質に取り給ひて、板垣駿河守・甘利備前守・飯富兵部少輔三人に、右の人質十人宛預けられ、彼忍士三十人を御前に召出され、直に仰含められけるは、汝等十人は、村上が城に忍び入り、

十人は小笠原が方に紛れ入り、十人は諏訪勢に紛れ、隨分と忍んで、敵の樣子を見聞き、二人宛歸るべし。此方より又、士卒を半途に出し置くべし。其者共に、樣子をいひ通し、汝等は又、敵方に歸り入りて、段々と其首尾を合すべし。又板垣・飯富・甘利三人の內より、身近う召使ふ侍を、二三騎宛、甲信の堺に出し置き、忍の者共の註進を受取り、早馬にて甲府に申來るべしとぞ定められける。然るに、御舍弟左馬助殿、宣ひけるは、先づ甲斐一國の軍勢を、悉く甲府に召集められ、扨御館の堀を廣げ、櫓少々掻揚げられ、城普請をなさるべし。然らば信州勢、之を傳へ聞き、武田方、小勢なるを以て、大敵を怖れ籠城の支度するぞと風聞して、うか／＼と押寄すべし。敵を半途に引出し、其不意を急に攻討ちなば、必定、味方の勝利にて候はんと申さるゝ。晴信、悅喜し給ひ、御邊の諫面白し。これ敵を計るの上策ならんと、國中の人數を召集め、町人・百姓迄も課役を懸け、城普請あるべしと、披露あつて、內證にては諸士を集め、密々の軍評定樣々なり。去る程に、信州には、村上義淸・諏訪賴茂・木曾・小笠原の四將會評して、軍の商議ありけるは、此間、世人の風說を承

るに、今般、信州の四將、一國十二郡の勢を帥ゐ、甲州に亂入の由、味方、纔か一萬に足らぬ小勢にて、大敵に當り難し。其上、敵は若御子・韮崎二手に分つて、押寄するの由、味方、素より小勢なれば、二手に分たん事叶ひ難く、防ぐに術なかるべしとて、老臣等が諫によつて、晴信、甲府の居館の堀を廣め、櫓を上げ、矢狹間を開き、一向籠城の用意の外、他事なしと承る。然れば、此方へ軍勢を出さん事は、思ひも寄らず候。唯、晴信、我國に墻をするの心地なれば、此時、味方の大勢、噇と押入らば、甲州勢、途に迷ひ甲をぬぎて降參せん事、疑あるべからず。先づ甲信の堺迄押出し、其所に於て、二三日も逗留し、人馬の足を休め、諸手の備を定め分配し、若御子口・務川口より二手になりて、甲府に押寄せ、卽時に攻潰して、晴信が首に對面せんと、斥候・間者の差別もなく、都合其勢一萬八千餘人、段々に押出して、甲信兩國の堺なる瀨澤に、陣をぞ取りにける。

甲信堺瀨澤合戰附原美濃守虎胤武勇の事

斯くて、信州の四將、甲信の堺瀨澤に陣を取つて、先づ爰に、三日滯留し、人馬の足を休め、若御子・務川より二手になつて、甲府に押寄せ攻干すべし。甲府は、籠城の用意すと聞ゆれば、定めて味方を引受けて、夜軍をぞ仕懸けんずると、夜戰の術を議り、衆議區々なる所に、七日の未の刻より、雨頻に降出し、暫く小止あつて、翌八日の夜半より、又大雨降りしかば、甲州勢、よもや寄すべしとは、思も寄らず、酒宴を催し、亂舞してぞ居たりける。時に、兼ねて信州に入れ置かれたる忍士の者、追追、敵の密計を通じける。晴信、此由を聞召し、元より七重の試、調りたる上なれども、板垣駿河守信形・飯富兵部少輔虎昌・甘利備前守・原大隅守・日向大和守・小山田彌三郎、足輕大將には、原美濃守虎胤・小幡織部正虎盛等を集め、敵、既に瀨澤表迄押出せる由、忍士の者の方より註進せり。尤も敵の謀略機術の儀は、前以て各が方へ申越す趣なり。信州勢、一兩日、人馬の足を休め、務川・若御子の方より、手を分けて押來らん。敵は一萬八千の着到と聞ゆれば、味方八千の軍士を、二手に分ちなば、是れ危き軍ならん。然れば敵の未だ手を分たず、油斷してあらん所を、此方より押寄

信州勢襲撃の部署

せ、其不意を撃つて、急に勝負を定むべし。義淸・賴茂兩陣を攻崩さば、木曾・小笠原の兩將は、戰はずして敗走せんと覺ゆるぞ。附卒等追々に馳來れと、天文十一年三月八日の子の上刻、甲府を發向あつて、揉みに揉んで押し給ふ。漸々明くる九日辰の上刻、瀨澤表に馳着く。是より西の方、敵陣を見渡せば、北に當りて、八が嶽とて、其峯、八つに分れ、さながら削りなせるが如き大山あり。其裾野、瀨澤の東、老俵の原に陣を取つて、家々の旌旗、八が嶽颪に吹き靡かせ、白刃の光は、秋の霜の枯葉の蘆に置けるが如く、整々として備へたり。甲州勢は、之を見て、七段に備を立つる。先づ飯富兵部少輔虎昌・甘利備前を以て、左右の前備とし、次は大將晴信の本陣なり。板垣駿河守信形・小山田彌三郎信茂を以て、左右の翼の如くにして、脇備と定む。日向大和守昌時・淺利式部丞信音を後備となし、敵陣の前、瀨澤の後の廣き原へ押出し、鯨波を噇と揚ぐる。信州勢、之を見て、流石、名を得し村上・諏訪・小笠原等の良將等、陣中を靜め、備を堅め機を催けてぞ侍懸けたる。一番に飯富兵部少輔、采配を取つて、備を進め、諏訪勢に突懸り、東風西風戰ひしが、兩陣勞れて引退く。

瀨澤合戰

原虎胤の武勇

左の先手甘利備前守は、村上義淸の旗本へ、無二無三に突懸る。素より義淸、大剛の大將なれば、自ら眞先に進んで、下知し給ふは、敵は小勢なるぞ。引裹んで討取れ。藥師寺、布下者共はなきか。鎗を入れよと勇められ、士卒一同に進んで、甘利が備を攻擊たんと、箕手形になつて押出す。甘利勢、會釋もなく、眞中を突破つて、火花を散らし攻戰ふ。旌旗、東西に靡き、南北に入り違へて兩陣、爰を引退かじと、必死になつて戰ひたり。分捕高名を顯はす中に、先備の陣將甘利備前守、自ら働きて、首を得ること三級なり。其身も三箇所疵を蒙る。然りと雖も、我れ引取らば、味方の備、敗走せん事を愼み思ひければ、猶も其場を退かず、頻に軍士を勇むるに、四將の隨一、義淸の多勢、命を風塵の如くにして、進み戰へば、甘利勢、既に敗北に及ばんと見ゆる所に、大將晴信、旗本を以て、橫を用ひ、難なく義淸の備を追崩さる。旗本、敗北に及ぶ上は、餘隊、怺へ兼ねて、一同に崩れて、右往左往に散亂す。此時、原美濃守虎胤は、敵中に駈入つて、萬卒に面を進むる所に、村上家の足輕大將、黨野原車之介と名乘つて、采配を手に懸け馳廻るを、能き敵餘さじといふ儘に、馬

を馳違へて引組んだり。互に聞ゆる勇士等、馬に離れて落重り、兩方、獅子の怒を顯し、暫く勝負を爭ひけるが、難なく車之介を取つて押へ、首搔切つて馬の取附にぞ附けたりける。鎌田五郎左衞門も、是に劣らぬ高名して、則ち首を得たり。板垣駿河守は、小笠原黨と馳合せ、千變萬化して相戰ふに、雌雄、未だ決せざれば、戰勞れて相引にす。郡内の小山田彌三郎、士卒を勇め、自ら鎗を入れて、木曾義高の本陣に突懸り、馬煙を立て、追ひつ返しつ揉んだりけるが、信茂、無雙の剛將にて、射れども突けども、事ともせず馳合せ、士卒を左右に從へて、義高の首に對面せんと、勇み懸つて切立つれば、木曾勢、小山田にまくり附けられて、若干討たれて引退く。飯富兵部少輔、士卒に息を續がせて、又、賴茂の旗本に突懸る。諏訪方は、多勢といひ賴茂、自ら手を下し、鎗を取つて戰はれければ、士卒、何かは猶豫ふべき。眞蕩になつて相戰ふ。兵部少輔虎昌、敵四五騎が中に取籠められ、鎗疵四箇所被つて、既に危く見えし所に、舍弟飯富源四郎手の者、七八騎左右に立つて馳せ來り、諏訪方の者共を追散し、二人は此方に討取りたり。虎昌が勢、多く討たれ、既に崩れぬべく見

えしかば、又晴信、旗本を以て、左の方へ押廻し、横鎗になつて突入り給ふに、此時、諏訪勢、多く討たれ疵を蒙る者、數多あつて、勇氣を失ひて敗走に及ぶ。甲府勢、大に戰ひ勝つて、鬨を作りかけ〳〵、追討にして印を得る。一陣、既に破るゝ上は、殘黨、悉く崩立つて、西を指して引退く。今朝、辰の刻より未の刻迄、九度の戰に、敵を討つ事、一千六百廿一級、扨も原美濃守は、今日九度の戰に、首を得る事十一級、中にも黨野原車之介・横山監物、是等二人は、信州にて、釆配を免されたる武略覺の者共なり。何れも再拜を添へて分捕し、比類なき譽なればとて、晴信、大に御感あつて、御感狀を下され、加祿を給はりける。其外、鎌田五郎左衛門等、夫々に上中下の品を別けられて、皆感狀をぞ下されける。其後、悅喜の色を逞しうして、甲府に凱陣し給ひけり。

平澤合戰の事

斯くて、村上家の士大將、藥師寺右近進淸三・小沼川舍人助・布下平次入道知十軒等

大將義淸に向つて申しけるは、扨も去月、瀨澤合戰に、味方、勝利を失ひし事、信州勢の怯弱にあらず。味方の不意を擊たれし故、陣中騷ぎ、漸々として武具を堅むると雖も、未だ朝の兵糧をもつかはず。まして備の手配もなく、諸卒、途を失ひ、戰ひ疲れ、敗走に及ぶ所なり。之を此儘に打捨て置かれ候ひなば、晴信、素より若大將といひ、心勇剛の人なれば、定めて當地へ働き入り、春は早苗を散らし、夏は麥作を振り、植田をこね、秋は毛薙なんどとて、思ふ儘に働くべし。然らば、當家の諸士困窮し、兵糧等缺乏に及びなば、大なる味方の障となり申さん。急ぎ君、發向ましまして、海尻・海野口の兩城に、差置きたる小山田備中・小宮山丹後二人の者共を攻殺し、會稽の恥を御雪ぎ候へかしと、申しければ、汝等が申す如く、去月九日、不慮の敗軍に及びし事、信州勢の恥辱なりといへども、我手に於て、討たるゝ者、雜兵かけて纔に三百餘人なり。甲州方にも、飯富・甘利、痛手を負ひたる由、渠等は、晴信が家にては、第一の功臣なれば、强ち味方の大なる負けとも、いひ難し、何ぞや、小山田・小宮山などの小臣目に、義淸が馬を出さん事、長氣なきに似たり。汝等、甲

村上勢平澤に出陣

州へ攻入つて、去月の怨を報じ、敵の働を見計らひ、早馬を以て註進すべし。其時、義清、馬を發し、先づ海尻・海野口の兩城を攻落し、夫より甲州へ押入つて、年來の素懷を遂すべしとて、先づ軍勢を差向けらる。隊將には、藥師寺右近進清三・布下平次入道知十軒・相木周防守・同じく犀右衞門尉・小沼川舍人助・清野六郎二郎、是等六人の者共、軍士二千五百餘騎を引率し、同じき閏三月十一日、信州更科郡葛尾の城をぞ打立ちける。斯くて、井上・高梨等を以て、小宮山・小山田を押へさせ、甲州若御子迄押入つて、郡邑を侵し掠め、引返して、甲・信兩國の堺、猿橋の西の方、八が嶽の麓なる平澤に陣を取る。斯くとは知らず、武田大膳大夫晴信は、同じき十九日、惟高・策彥以下の僧達を召され、詩會興行ありけるが、既に會終つて、諸僧も退かれ、晴信も、常の間に入らせ給ひし所に、村上勢、小宮山・小山田を押へ、甲・信の堺、平澤迄押來り候。近日、義淸、馬を出され、海尻・海野口を攻落さんと、支度仕り候とぞ告げたりける。晴信、大に驚き、諸士を集めて、商議し給ひけるは、先月九日、諏訪・小笠原・木曾・村上の四將、一戰に敗北しながら、夫にも懲りず、又、勢を出しぬることそ

安からね。退いて思慮を廻らすに、先日の合戰に、甘利備前・飯富兵部、手負ひたる由を聞き、武田の功臣、既に疵を蒙る上は、晴信、未だ若輩なれば、是に力を落し、氣を失ひ、捗々しき戰は、よもなるべからずと、義淸、推量を以て、士卒を差向けたりと覺ゆるぞ。晴信、年若きを以て、軍事、皆老臣の計らひなりと、敵に取沙汰せらるゝならば、某が鋒弱り、小山田・小宮山も、攻殺されんは必定なり。然らば、去る天文七年より以來、今に至つて五年、信州の諸將を敵にし、數度戰を挑むと雖も、晴信が兵、終に敵に押付を見せたる事なし。然るに、敵今、左の如く計らば數年の功、皆空しからんか。予、苟くも新羅三郎義光より、既に十八代に相當り、先祖代々、弓箭の道に通達し、譽を顯はさずといふ事なし。然るに、晴信が時に當つて、家の瑕瑾に及ばん事、末代迄の恥辱なり。此度に於て、予が旗本を以て、萬死一生の戰を遂げ、武名を子孫に殘すべし。若し戰ひ負けなば、戰場を枕にし、腹掻切つて、骸を軍門に曝さん事、何の煩か之あらん。御旗・無楯も照覽あれとて、無二の一戰にぞ極められける。武田の家の習にて、御旗・無楯を以て、誓言の上は、再び變改し給はぬ

事、累代の作法なれば、老臣等も、此上は留め參らするに及ばずとて、板垣駿河守信形・諸角豐後守昌淸・日向大和守昌時三人に、鬮を取らしめらるゝに、昌時、鬮に取當つて、先鋒と定めらる。斯くて、晴信、頓て鎧を一縮し給ひ、例の中村鹿毛に、銀覆輪の鞍置かせ、紅の厚房懸けて乘り給ひ、其夜の亥の刻計りに、八幡宮に社參あつて、今般の軍、全く勝利を得せしめ給へと、種々の御祈請終つて、旣に打立ち給はんとし給ふ所に、宍山左衞門大夫信行は、此頃、癩病に腦みて、身體苦痛し、合期せざりければ、先月九日の合戰にも、甲館の留守に殘り給ひたるが、甲斐々々しくも、鎧取つて着、馬に打乘り、士卒を引連れ、大將の前に來り給ひ、此度に於ては、是非とも、信行先鋒を仕らんとぞ、望まれける志の程、神妙には存候へども、病中といひ、殊に甲府の留守居なくては叶ひ難し。貴殿は、予が叔父にてましませば、心易く存ずるなり。跡に殘りましまして、若し晴信、討死を仕らば、幼少の太郎を守立て、武田家を繼がせて給はるべし。必ず留守に殘り給へと、仰せければ、信行、重ねて仰にては候へども、先日、飯富・甘利手負ひ申す故を以て、甲府の留守に殘り候。兩

人、手勢をも多く持ちて候へば、究竟の留守居にて候。殊に郡內の小山田へも、飛脚を以て、唯今、告げ知らせ候へば、跡に御氣遣はあるまじく候。信行、とても死病に罹りたれば、下藟の諺にいふ、去懸の駄賃とやらん。諏訪・白山も照覽あれ。君の御身に替つて、信行、潔く討死を遂げ候はんと、金打をなし給ひ、信行、先鋒に進まれければ、其夜の夜半より、甲府を打立ち、馬を蹴立て丶、三十里打つて若御子に着き給へば、夜はほの〴〵と明けにけり。爰にて、人馬の足を休め、備を七手に分け給ふ。

武田勢の部署

先隊は宍山殿と定め給ふ。二陣は板垣駿河守、三陣は則ち旗本なり。左備は諸角豐後守昌清、右備は日向大和守昌時。後は左馬助信繁・跡部大炊介勝資なり。

平澤合戰

斯くて、二十日の卯の中刻、若御子を打立ち給ひ、纔か一時の間に、十八里の道を打つて、巳の上刻、平澤に押付きたり。晴信、軍使を以て、先隊の信行備と、板垣備へ、軍の密意を仰遣さる。敵陣の旗先、夫ぞと見るや否や、宍山信行、鬨を作つて鐵炮を打たせ、無二無三に懸り給ふ。布下平治入道、老功の勇士なれば、士卒を下知して、備を堅固にし、鎗衾を作つて挑み合ふ。平治入道、自ら鑓を取つて、志の勇士は、

穴山信行の奮戰

村上勢敗軍

我に續け、尋常にして、此戰利あるべからず。向ふ度に、皆々味方利を失ふ。勝つても負けても、唯死ねや者共と、あたりを拂ひ馳廻るに、究竟の騎士二三十騎、平治入道を討たせじと、穴山勢を押隔てゝ鎗を合す。村上勢、大に競懸り、十文字に駈破り、巴の字に廻つて、萬卒に面を進め、一擧に死をぞ爭ひける。穴山勢、今は怺へ兼ねて、覺えず後へ引退く。信行、病身なりと雖も、必死になつて軍勢を下知し、馬を少しも立直さず、采配を揚げて麾き、如何に汝等、武田の軍士として、群敵の陣に向ひ、今日迄、終に後を見せて、敗走の名を聞く事なし。勝つとも負くとも、千騎が一騎になるとても、仕場居（しばゐ）をさるべからず。我れ一足も引かじと、身を抓み、頻に下知をなし給へり。村上勢も、究竟の者共、藥師寺・相木一手になりて、穴山勢を、中に追取籠めて、火水になれとぞ揉んだりける。兼ねての相圖の事なりければ、晴信旗本の守る旗を、一振振り給ふや否や、板垣信形、備を南へ押出し、横鑓に瞳と突入りて、蜘手十文字に駈亂す。村上勢、是に突立てられ、四角八方に敗北するを、甲府の總軍、備を解き、爰に押詰め彼所に突伏せて、敵を討取る事、三百十九級なり。

信州勢、一度も返し合せず。猿橋の方へと逃ぐるもあり。從者は主に離れ、子は親を後にして、我先にと敗軍す。斯くて晴信、勝鬨を執行ひ、靜に首實檢し給ひける。今朝、巳の刻に軍始りて、午の刻の末に至つて、戰ひ散ず。晴信、微妙の計略を廻し、臨機應變の智謀を以て、小勢にして大勢に打勝ち、威を隣鄕に振ひ給ふ。其夜は、平澤に陣營をなして、甲府に馬を入れ給ひける。寔に晴信、弱冠にして、飽く迄軍旅に賢く、向ひ給ふ所の城、拔かれずといふ事なく、戰に臨んで、勝ち給はずといふ事なし。此人の老長、いかならんと、皆人、感ぜぬはなかりけり。

武田三代軍記巻之第四　終

高島・小城等城軍附尾阿落城并安國寺合戰の事

去る程に、大膳大夫晴信は、天文十一年閏三月二十日、平澤表に於て、村上家の士大將藥師寺・小沼川・相木・布下以下の者共を、一戰に蒐散らし、平澤に陣を取り、暫く滯留し給ひけり。玆に、郡內の小山田左兵衞尉は、穴山金吾より、急を告げ知らされしかば、大に驚き、士卒百五十騎を從へ、早速、甲府に馳付きたり。時に甲府の留守に止りたる甘利備前・飯富兵部兩人、樣々思案して、味方小勢なれば、平澤表の御軍、難儀ならんと覺えたり。あたら兵者を、此所に徒に置かんも無益なりとて、飯富・甘利兩人が組下の同心共を、三手に分ち、一手は甲府用心の爲めに殘し置き、一手は勝沼入道に相添へ、諏訪口の加勢として、差向けたり。殘る一手をば、小山

田が百五十騎と合せて相從へ、翌る廿一日の巳の刻に、平澤に着陣す。昨日の軍に打勝つて、士卒勇み合ふ所に、小山田、又馳付きしかば、彌〻悦び勇むこと限なし。爰に於て、御舍弟信繁を始め、穴山信行・板垣信形等、大將の御前に出で、先月といひ、當月といひ、兩度の合戰、共に打勝ち候へば、敵は定めて氣を呑まれ、茫然として候べし。此競拔かさずして、佐久・小縣の兩郡に亂入し、燒働致すべし。然らば、先君信虎の御時、降參せし信州の者共、信虎朝臣廢去の節、當家を危ぶみ、忽ちに心を變じ、皆己が城々に引籠り、運を兩端に見合せ罷有り候。此者共、悉く御味方に馳參るべしと申す。されども晴信、如何なる思慮かおはしましけん。曾て許容し給はず。其翌廿二日、凱陣すべしと宣ひければ、板垣、又進み出で、是より海尻迄、纔か十八里にて候へば、直に御馬を寄せられ、海尻・海野口等巡見なされ、堺目の仕置なども、仰付けられ然るべからんと、申しけれども、晴信、何とか思しけん。其も聞入れ給はず、思の外、機嫌宜しからず。廿二日に、陣拂あつて、翌廿三日、甲府に歸館あり。直に八幡宮に社參し給ひ、夫より御館に入り給ひける。斯くて兩月、士卒に休息せ

晴信、諏訪頼茂の居城を攻む

甲州勢尾阿城を陥る

さて、同じき六月四日、晴信又、七千五百餘人を引率し、信濃の諏訪郡へ押寄せ給ひ、民屋に火を放ち、在々所々を侵し掠めて、諏訪左馬之助が居城高島の城に押詰めらる。左馬之助、安からぬことに思ひ、士卒を引具し、討つて出づると雖も、甲州勢、殊に大勢なれば、一戰に打負けて、城中に引入るゝを、追懸け付入にせんと、大手の門際迄、押詰めたり。されども左馬之助、門を閉ぢ引橋を引いて、丈夫に相支へしかば、味方も勢を引揚げて、城下を放火し、翌日、諏訪頼茂の居城小城に押寄せ攻働かす。然るに頼茂、六日の夜より、背に癰瘡を生じて、身心惱亂す。門葉老臣等を始め、如何はせんと、周章てふためき、中々討つて出づる事は、思も寄らず。城を抜かれざるを以て面目にし、只茫然たる計りなり。武田勢は、競ひ懸つて堀際迄押詰め、守の小屋に火を懸けて、勝鬨を作つて引取りけり。扨又、板垣駿河守を以て、隊將として高木の此方、尾阿の城に攻寄せ、忽ち城を乘取り、城兵二百餘人悉く首を切懸けさせ、城に火を懸け、一片の煙と燒立てけり。其外、高木・湯脇方々を攻掠め、桑原に要害を構へ、駿河守信形を籠め置かれ、同八月朔日、歸陣に赴き給

ひける。然る所に、伊奈の地侍に、輿田彌市左衞門といふ者あり。數代諏訪家の幕下なりけるが、大將賴茂、難病を受けて、存命不定の折なるに依り、甲州勢の爲めに、領內を蹈散らされ給ふぞ、安からねと、伊奈・木曾・松本邊の山家住の諸士を語らひ、山中の狩人・野伏など、あらゆる溢者共の、鐵炮に鍛錬したる奴原を呼出し、足輕に拵へ、一揆の黨を立て、都合三千七百人、板垣信形が籠りし桑原の城に押寄せ、急に城を、攻干さんと支度す。信形、驚き急ぎ、此事を甲府に告ぐるに、板垣が早馬三騎、九月廿三日の三更に及んで、甲館に至り、此旨を斯くと言上す。晴信、此急を聞き給ふや否や、近習の士計りにて、後援の爲めに馳出で給へば、軍勢共、驚き騷ぎ、取る物も取敢ず、我れ先にと馳向ふ。先づ藍河原に打出で、軍勢を待合せ、諸勢の手分をぞし給ひける。浪人組百五十騎を以て、三備に分つて先手とし、次に晴信の旗本なり。諸近習百二十騎・在鄕近習三十騎・奧近習百三十騎、凡そ旗本の勢二百八十騎之を三備に分けられたり。しまりの胴勢には、足輕大將・物奉行、或は持鎗・長柄の者、又究竟の若者共、二百人選び出し、是に野太刀を被(かつ)がせらる。其外、步若黨百二

十人、小人中間旗指等に至る迄、纔に三千餘人、晝夜の分けもなく、捫に捫んで押し給へば、廿五日の巳の刻に、桑原の弓手の方、宮川に着き給ふ。一揆原は、三千五百を三手に分け、安國寺に備へたり。甲州方浪人組百五十騎、鬨を作つて戰を始む。敵は、素より深山を馳廻つて、鹿・熊なんどに馴れたる、弓・鐵炮の手垂共なれば、炮弓、都て化矢なく、甲州勢、多く疵を蒙りける。されども甲州勢、之を事ともせず、短兵急に進んで攻立てしかば、一揆等、打物に得ざれば、大に散亂して、左右の備を押出し、引堅まつてぞ戰ひける。此時晴信、旗本を繰出して、横鎗に噇と突入り給ふ。一揆も、聞ゆる溢者の與力なれば、命を思はず、無法に強く相働けば、味方五伍の列を解き、態と亂れて相當り、巴の字に廻り、井の字に馳亂して、晴信、自ら相當り給へば、肩先に二箇所迄、矢疵を蒙り給ふ。斯かりける所に、一揆の逞兵、岸脇十八は、木曾の山中に育生ちて、勇力無雙の兵なるが、五尺三寸の大太刀を、眞向に差かざし、向ふ者の鍪の鉢、左右の小手・竪割・胴切、唯當るを幸に、無體になぐり立て、邊を拂ひ、手下に數十人薙伏せたり。爰に晴信の二十人組の者（歩行士なり。百二十人あるを以て、武田家に、二十人衆）

ふといに、窪寺平次左衞門渡合せて、寔に能き敵、御參なれと、一文字に走せ寄り、鎗を以て相戰ふ。難なく岸脇が內甲へ、鎗を突入れけるに、十八、流るゝ血、眼に入れば働くに及ばず、太刀を杖に突き、差うつむく所を、敢なく突倒し、乘懸り首を搔落す。元來、一揆も爰を先途と、喚き叫んで戰ひしかども、賴み切つたる岸脇は討たれぬ。四角八方に敗集り勢の淺ましさは、亂れて無法の備なれば、小返をせん樣もなく、四角八方に敗走して、宮川に添うて逃げ行くを、追蒐け〳〵討取りけり。午の上刻より、未の半に至る迄、二時餘の戰に、敵を討つ事、五百廿七級なり。晴信は、宮川原に備を立て、勝鬨を執行はる。今度、近習馬廻の者の內、粉骨を抽んでし內、分けて窪寺平治左衞門、岸脇を討ちし事、大なる働なればとて、感狀をぞ給はりける。後に、二十人頭を承りし相川甚五兵衞といひしは、此窪寺が一子なり。晴信は、夫より桑原の城に馬を寄せられ、歸陣に赴き給ひけり。

諏訪大明神靈夢の事

晴信、賞罰を正し國政を改む

然るに大膳大夫晴信は、父信虎、暴惡甚しく、賞罰の正しからざる事を歎き、國中の政務、悉く改められ、今は民、以前の苦脳を忘れて、悦びあへる事限なし。譜代相傳の家の子をも、信虎、自ら誅伐を加へられしを、其筋目を尋ね抉つて、名跡を立てられなどし給ふ事、其臣としては、誠に有難き事にぞ覺えける、工藤下總守虎豊が嫡子、同じく長門守舍弟源左衞門尉、共に甲府を出奔し、東國に落魄せしを召還され、安堵の所領を給はり、又其外、沒收せられたる諸士の所領を改め、仔細を正して還補せらる。又去る天文七年より以來、忠戰を抽んでたる足輕陸若黨共の感狀を持ちたるに、少し宛の知行を與へ、騎馬の者になして、三百騎選び出さるゝ。其上、在鄉に於て、新衆を附けて千二百人揃へられ、馬上二十騎・三十騎、歩卒五十・六十、諸手に差加へ給ひ、都合八千餘騎を引率し、信州に出陣あり。

晴信、信州に出陣

飯富兵部少輔・甘利備前守も、手疵平癒せしかば、是も御供を勤めけり。又、桑原の城へは、逸見・南部・勝沼入道・粟原左兵衞尉詮冬・日向大和守昌時、此五頭を以て入替らしめ、板垣駿河守は、御供を仰付けらるゝ。去る程に、十月七日、甲府を首途あつて、甲・信兩國の堺、葛窪に

三日滯留ましまし、夫より湯川に至り給ひ、又爰に、兩日の逗留にて、同じき十二日、大門に着き給ひ、少々民屋を放火あつて、此所に三日滯留あり。同じき十五日には、長窪を放火し、民家を悉く追捕し給ひ、爰にも又、一日の逗留あつて、同じき十七日には、大門峠の此方に陣し給ふ。當所に七日の滯留にて、廿五日には、海尻の城に入り給ふべきにぞ定まりける。晴信、思慮ましまして、此度は、新衆を勇ましめんがため、亂取小屋落し等、心の儘に仕るべき旨の仰なれば、歩足輕・中間原、喜び勇む事斜ならず。在々所々に馳散つて、民屋を追捕し、雜具・金銀・衣服等剝取り、又は刈田をして、大分の德付きたりと勇みけり。十九日・二十日、兩日亂取せしに、當所御滯留の間も、今四日ならではなし。然れば亂妨せんも、今三日計りなり。明日は未明より排ぎ廻つて、所得を得んとぞ訇りける。斯かる所に、一の先手の隊將甘利備前守、廿一日、未だ東雲も明けざるに、二の先に備へたる板垣信形が陣所に來り、未だ夜陰なりと雖も、俄に信州に、申談ずべき事ありて、甘利參つて候とぞいはせける。彼者、急ぎ主人の寢所に入れば、信形は幄中に起上り、默然として座したり。

右の仔細を聞きて、急ぎ甘利を招き入れて對面す。備前守、座に着いて、某、唯今參る事、餘の儀にあらず。今宵、不思議の靈夢を蒙り候故、夜の明くるを待ち兼ねて、早速、先づ貴殿に談じ候はんと存ず。扨、斯くの知くなりといひ果てざるに、信形、某も唯今、不思議の夢想を見て、目の覺めて候故、其許の御陣所へ、使者を以て申すべきか。自身、參つて談ずべきかと、思案して罷在り候所に、是は奇特の事共かな。先づ甘利殿の夢物語を承らんといふ。備前守、聞いてさればとよ。聖賢の人、夢を用ひずとかや、諺にいへり。此度、仰を以て、諸手悉く亂取を仕る。然るに今宵、夢ともなく現ともなく、其形、凄じき山伏の眼、竪に切れて、赤鬚は、帶の邊迄も長く生延びたるが、五尺餘の刃刀を、十文字に帶びて、某が枕元に來り、我は是れ、當國諏訪法性上下大明神の神使なり。今般、下﨟の亂妨狼藉を仕る事、大に非義なり。堅く停止仕るべしと、怒り告げて、忽ちに夢覺めたり。信形、手を拍つて、某が見たる夢も、其に少しも替らず。是れ不思議の事共なりと、靈告の正(あらた)なる事を感じて、二人語り居る所に、三の先に備へたる飯富兵部少輔、周章しく出來ると告ぐる。兩人

則ち對面す。虎昌曰く、少し以前、某、營中に於て、不思議の夢を見たるにより、覺るや否や、夜中、他陣を禁止せらるゝと雖も、法令を犯して、直に參上といふ。信形聞いて、甘利殿も唯今御出で候。是も同じく夢想を蒙られ候故、御來儀なり。信形も同じく夢を見候。先づ〳〵、兵部殿の御夢の次第を、承り候はんといふ。飯富、夢の有樣を語るに、兩人又、横手を打つて大に感ず。三人の夢、分合毛頭の違なく、時刻又、符節を合せたるが如し。是れ諏訪大明神の御告なり。神明、能く當家を加護し給ふ事、寔に弓箭の大功を立てらるべき瑞想なりと、悅ぶ事限なし。斯くて、三人の陣將、垢離をして、諏訪法性上下大明神を遙拜し、三將の營中、速に觸をなして、亂妨を停止す。總軍、此事を傳聞いて、斯かる奇瑞を知らずして、不義を擧動はんは是非なし。之を閣捨にして、敵國を掠めば、必ず冥罰疑あるべからずと、諸軍、悉く亂妨を止めて、一人として出づる者なし。此靈夢の根元を尋ぬるに、去る二十日晴信の御前に、板垣信形を召し、竊に仰せらるゝは、我れ今度、新衆と號して、取立てたる者共を、勇ましめん其爲に、亂取を免す所に、下繭の好む所に從つて、未明に走

り去つて、漸く黄昏に歸る。今は相應に得物なき者は、あるべからずと覺えたり。然るに信州勢、よも打出でざる事はあるまじ。其時に至りて、諸卒亂妨の爲めに走散つて、何を以て敵に當らん。是は晴信が命を下すと雖も、忍び／＼に、人目を掠め、夜に紛れて出づるに於ては、制して誅伐するの外なし。誅を加ふる時は、法を犯す者、あるべからずと雖も、陣中にして人を誅する事、良將の心にあらず。唯願くは、亂妨を諸卒自ら相嗜みて、犯さゞる計略やあると、暫く工夫御座して、此儀を仰出され、飯富・甘利、汝三人が、陣中を先づ禁ぜよ。諸手は其枝葉なれば、必ず制せずして止まんと、夢想の術を、悉く仰含められ、飯富・甘利に、此事を通じ、三人、心を合せて、斯く計らひけるとなり。晴信、今年廿二歳、若將と雖も、微妙の謀を以て、言はずして、諸軍の亂行を止め、忽ちに陣中嘩しからず。諸卒の心を、金石の如くになさしめ給ふ事、寔に神明の名將なり。

大門峠合戰附妓女御宿の督の事

晴信、兼ねて雅量ありしに、少しも違はず。村上義淸・小笠原長時・佐久・小縣の諸士を催し、兩家の軍勢、都合一萬三千餘人、大門峠へ押來る。同じき廿三日、早朝に武田家の諸士共、敵の軍勢、峠へ相見え候と申す。其時晴信、小宮山内膳正・秋山十郎兵衞兩人を以て、物見に仰付けられける。二人打連れて馳行きしが、頓て歸りて申しけるは、小笠原・村上、兩旗を以て懸り來り候。其勢、一萬餘と相見え、然も後に備へし三番手迄、軍を以て懸り候とぞ申しける。晴信聞召し、さあらば、味方の備を催けよとて、八が嶽の麓、甲州通り梶が原に、陣を取り諸勢の內、足輕隊將横田備中守・同息彥十郎、甘利が手へ加はつて、一の先に備はれば、二の身を甘利堅めたり。同じく多田淡路・嫡子新藏、是等父子は、板垣に加はつて、第二の備の先手なり。同じく安間三右衞門尉は、飯富兵部に加はつて、三の先手に備へさせ、虎昌、後を立堅む。本陣の前備は、士大將原加賀守昌俊、右備は原美濃守虎胤・小幡山城守虎盛、左陣は市川采女正・一子三九郎・原與左衞門・同じく與九郎、後備は武者奉行加藤駿河守昌賴・多田治部右衞門・市川入道梅印なり。然る所に信州勢、大門峠を打越えて、村上家

大門峠合戰

の先手布下平治入道知十軒、其外、宗徒の者共、何れも奇正の列を正し、懸合の潮を相計つて、知十軒、先づ備を進め、横田備中守が手先に押懸る。兩陣、鬨を合せて、炮弓の迫合を始め、鎗の穂先を揃へて、互に場をぞ爭ひける。平治入道は、大剛の者なりければ、自ら鎗を追取つて、士卒を下知し、眞先に突いて懸る。甲州勢、平治入道が働に驅散らされ、一町計り引退く。之を安からず思ひて、二の身の甘利、押懸つて、勝誇つたる信州勢をまくり立つる。終に知十軒、勝負けて、峠の方へ引取るを、二三町追立て、備を亂さず引退く。次に、小笠原長時の先手鳴野山、多田淡路守と懸合せて、入亂れ戰ひしが、小笠原勢、一戰に戰負け、大勢、討たれて引退く。信州方の先鋒、兩度共に打負けしかば、大將義淸、大に怒り、我が旗本を以て、勝敗を一戰に決せんと、競ひ懸つて押來る。安間が勢、請取つて、兩方、互に鑓を入れ、爰を必死に戰ひたり。信州方は多勢といひ、大將義淸、一戰に敵を突崩さんと、競ひ懸つて進ませらる。安間が勢、戰負けて、四度路に崩れて、半町計り引退く。二の身に備へし飯富兵部、士卒を勇めて、村上勢に突懸る。大將小笠原右馬助長時、

采配を取つて、兵部が勢に馳合せ、追つつ返しつ戰ひたり。其時、旗本の前に、備へたる原加賀守昌俊、横鎗に突入らんと、妻手の方へ備を押廻せば、大將晴信、自ら采配を取つて、旗本を以て、左の方へ押廻し、原加賀守が備と、左右より敵を中にして横鎗に噇と突入りて、巴の字に廻り、井の字に敵を突敗る。さしもの信州勢、晴信・昌俊兩備の横鎗に、敗走して噇と崩れて散亂す。先手の二備を亂して、追留を限に印を揚げ、其首を數ふるに、帳面一千七百廿一級なり。味方、命を落す者、疵を蒙る者、雜兵合せて三百四十三人なり。◎今日の軍、巳の上刻に始まりて、午の中刻に終りしに、戰半より雨降りて、黒雲、戰場の上に棚引き、敵・味方の旌旗見分かず。諸人不思議をなさずといふ事なし。然るに、軍の終るに隨ひ、風雨、忽ちに晴々たり。晴信、神武の名將なれば、微妙の諫を用ひて、此度も又、安々と敵を追退け、直に海尻迄、御馬を寄せられ、堺目の仕置等、沙汰ありて、數日、彼城に逗留ましく〵けり。

信州勢敗軍

信州の敵は、何れも剛强の將帥にて、其幕下に屬するの輩、風儀を似せて、怯弱の色なく、味方敗軍に及ぶと雖も、輒く城を開いて、逃げ去るなどの臆病の働、曾てなく、

猶も城を堅固に守つて、義を先んずる族なり。晴信、敵の心を察し、勝軍にならひて、敵を侮るは、良將の擧動にあらずとて、敵城の枝葉を攻められず。味方の陣を堅うして、萬法、怠を示し、深く愼んで居給ひける。茲に、信州佐久郡相木といへるは、海尻の城より、岩村田への道筋、甲州長澤より行けば、馬手の方の山邊なり。此所の城主をば、相木市兵衛尉と號す。去る天文九年より、甲府へ内通の仔細ありけるが、此度、味方に參るべき由の密約、既に相究り、大將晴信、十一月下旬、甲府に凱陣ありしかば、十二月十日、相木市兵衛尉、甲館に出仕して、御禮を申す。明年正月、舍弟甚四郎を人質に差越しけり。其頃又、信州岩村田に、御宿の督といへる妓女ありしが、極めて舞の上手なり。又、美しき女の二八計りなるを、己が弟子と號して、引連れ方々と徘徊し、酒宴の座敷に出て、舞諷ふを聞けば、扨も花の村上や、錦の直垂袴着して、來れども甲斐を好むは、御大事よと、聲面白く諷ひ舞ふ。されば、去る天文七年より以來、數度の戰、一度も晴信、敵に押付を見せ給はず。皆勝利なれば、賤しき女童迄、斯く風流に作りて諷ふ。然るに今年、越後の大守長尾爲景入道

道七は、越中に發向して、一揆の爲めに討死し給ふ。其子息猿松丸、十三歲になり給ひけるが、父の家督を續いて、六十六部の廻國の僧に伴ひ、今年、國を出でられける。

晴信、山本勘介を召抱へらるゝ事

去る程に、明くれば、天文十三年正月、武田大膳大夫晴信、廿四歲になり給ふ。然るに元日の御賀儀あり。三日には、板垣駿河守信形・飯富兵部少輔虎昌・甘利備前守以下の老臣を、召集め給ひ、當年中の軍の內試をぞし給ひける。中にも、信形進み出で申しけるは、信州佐久・小縣・諏訪郡の間、敵・味方の堺に、城々を築き、大夫に持抱へ候事、專一に存じ候。然るに、砦を築かれんには、城取の習こそ、肝要に覺え候へ。千騎を以て守る城に、三百騎を入れて落ちざるは、全く繩張の利害に因る所なり。夫に付いて、三州牛窪の浪人に、山本勘介と申す者軍旅に長じ、城取・陣取の達人、孫吳の妙術を熟學して、劍術は行流の上手にて候由、是等の事を以て、朝夷奈兵衞大

夫を頼み、今川家の臣たらん事を、望み候へども、義元君を始め、近臣等評議致し候は、彼の山本と申す男、元來、小兵にて色黒く、眼、一眼にして趁跛なり。斯程の離口夫者にて、然も三州牛窪の小身より出て、一僕をも從へ得ざる男、何ぞ軍旅に通達せん。城取・陣取も、己一生に、一城をも預り持ちたらば、然ならんか。終に其儀を聞かず。一方の隊將をも承つて、一隊をも預らば、社營を作すの道をも知らめ。曾て左樣の者ならず。又、劍術も、新當流に增るはなし。此者、大なる虛言を吐きて、當家を方便んとするなどと、惡名を蒙らしめて、當年に至つて既に九年、庵原安房守が方に、寄食して居候へども、誰あつて取上ぐる者もなく候。此者を、御家來に召抱へらるまじくやと申しける。晴信聞召され、扨は今川も、家運盡きて、武道、末になりたるよな。夫れ性は、道に因つて賢ければ、皆人、天性自然と發明して、脇より力を借るの謂なし。大身の家より出て、猶ほ無藝の者多し。其儀を以て、論ずる時、結句、小身の家に、身を寄せたる志の勇士は、孤臣の思をなして、一度、大身の主に奉公し、身を立て、家を起さんと思ふなれば、藝能に通ぜる者、小家中の武士にある

べし。陣法權略、臨機應變の妙は、假令、孫吳の書籍を、手に取らずといふとも、本性の明智を以て曉り、發明せんに、何ぞ至らずといふ事あらん。其故、如何となれば、古今の明醫、六脈を勘へ知つて、其病を治す。其醫師、種々の病をやんで、其人の病を治するにあらず、軍旅、亦然るなり。又、新當流を譽めて、行流を誹る。これ又、兒童の擧動なり。兎角、其人の執行に因る所なり。今川家、武運、末になりて、諸事、不穿鑿の致す所なり。勘介が武名は、予兼ねて聞き及ぶ所なり。急ぎ召抱ふべしとて、板垣に命ぜられて、百貫の所領を給はるべしとの契約にて、既に此儀、極まりけり。其上、信形承つて、衣服・乘馬・弓鎗等、若黨小者に至る迄、半途迄差越し、勘介を迎へらる。山本、大に感悅して、美々しく出立ち、同三月上旬に、甲府に來つて板垣を以て言上し、御目見を仕る。晴信、仰せけるは、聞及びしよりも、猶ほ増れる骨柄なり。全體、不具の男にして、指をも切落されたると見えて不足し、其上、數箇所の手疵、旁々以て、今川家に用ひざるも理なり。斯かる有樣にて、其名、四方に隱れなきは、武略秀でたるの故なり。人を探るに、貌を論ぜざるは、古人の心なり。既に、楠

正成は、其長五尺に足らず、色黒くして骨細く、容貌衆に勝れて醜し。又、武略神通せること、古今の諸將に冠として、殆んど敵の情を見る事、神聖の如し。勘介に於ては、百貫の祿、不足なりとて、卽時に二百貫になし給ふ。斯くて、晴信の一字を給はつて、山本勘介晴幸と號け、足輕を預けられて、旗本の足輕大將になし給ひける。勘介、面目を施して、御前を退出したりける。爰に、原加賀守昌俊、默然として居たりしが、進出てて申しけるは、唯今、召抱へられ候者、傍輩の儀、讒言申すに似て候へども、愚意の趣を申上げざらんは、臣たるの道にあらず。抑、勘介、其身不具なるを以て、高祿を望まんには、如何樣、才藝堪能の者ならんとの御賢察、其理あるに似て候へども、退いて短智を廻し候に、甚だ君の御麁忽かと存じ奉り候。されば今、天下の諸侯を始め、私如きの者は、猶更我慾を備へずといふこと候はず。是れ人情の常なり。勘介、一度も戰場に臨まずして、武略に通達するとは、今川家の評議、的中する所にして、皆、口才を以て祿を望むの謀か。又、敵の爲めに、疵を蒙りたるを以て、譽とせば、世に類多かるべし。百戰百勝して、疵を蒙らざるこそ、武勇

冥加の士ならん。其ことを試みずして、其理を推さん事は、更に遠慮にあらず。先づ一兩年も召仕はれて、彼が働をも、御覽あつて、御加恩をも下し賜はんは、然なり。されども、君の人を見給ふ事、神の如くに候へば、如何なる御遠慮もか候。承りたしと憚る所なく、我が武邊を、鼻に懸けたる樣にぞ申しける。晴信、猶ほ笑る顏にて、汝が不審、一々其理に中らずといふ事なし。我れ幼少より、父信虎君に疎まれ、良もすれば、諸士の面前にて、比興の汚名を受け、無念の鬱胸、止む事を得ず、惡逆の名を穢すといへども、一度、武家の棟梁となつて、天下を併呑せん事を、晝夜工夫し、大功を思立ちし事、未だ我れ代を探らざるの昔なりき。さるに依つて、小山田備中守と示合せ、十四歳の時、竊に三州牛窪に立越え、勘介と主從の契約をなし、夫より武者修行と號して、諸州を廻國させ、國々の風俗を聞き、要害は繪圖を調べさせて、我れ之を見るに、彼の者、地利に能く通達せしにより、恰も其地にして、其所を見るに等し。我れ諸國の地利を能く知る事、是れ勘介が功にあらずや。扨又、父信虎廢去の後は、彼の目付として、駿州に差置く。勘介程の者、實に今川家を望まば、九

箇年の間、茫然として、駿河に何ぞ滯留せん。今に於ては、我が勇名、隣鄕に響き、今川家、恐るゝに足らず。板垣が勸めを幸にし、今、呼寄するものなり。當代にして、弓矢の知識ならんぞ。向後、晴信が師範なれば、汝等も水魚の交をなして、此上に、猶ほ軍學、懈怠すべからずと、宣ひければ、昌俊、あつと感じて、御前を退出したりける。

信州尾臺落城附廣瀨・曲淵等高名の事

茲に、眞田彈正忠幸隆、上野國箕輪に、落魄して居たりけるを、山本勘介が進めに就いて、晴信、招寄せ給ひ、本知を給はりしかば、幸隆、本意を達し、夫より無二の忠臣となれり。後に眞田入道一德齋と號せしは、此人なり。去る程に、大膳大夫晴信、天文十三年霜月中旬、八千餘人を引率し、信州に出馬あつて、同じき下旬より、十二月中旬迄の內に、蘆田下野守を始めとして、小室・內山・岩尾・前山・依路・平原・望月等、武田家の武威に恐れ、間者の調略に、二心出來て、皆、降參をぞしたりける。茲に、

晴信、尾臺の城を攻む

笛吹峠の此方、輕井澤より平尾・岩村田への通路、小室通の追分と、岩村田の中央に、尾臺の城と號するあり。城主尾臺又六郎・舍弟次郎左衞門尉、武田家に從はず。晴信、間者を以て、降參すべき由を、仰へ送らると雖も、曾て聞入れざりければ、此上は、隣國への見懲めの爲め、攻潰して鏖にせんとて、極月十四日、板垣駿河守を、先鋒として押寄せ給ふ。之を見て、城主又六郎、士卒を從へ、討つて出づる。板垣が組下廣瀨鄕左衞門・猪子才藏、眞先に鎗を入れ、敵一騎宛討取れば、三科傳右衞門も、鎗下に敵を討つて高名す。爰に又、曲淵小左衞門といふ者あり。元來、板垣が小者にて、鳥若と名付けて、草履を取りし者なりしが、數度、武功の譽ありしかば、晴信、召出し給ひて、直參になし、駿河守が同心にして召仕はれ、今日も又、鎗下の高名せり。甲州勢の鋒先に當り難く、城兵殘らず引入りたり。信形、競懸つて、無二に乘落さんと押懸けしを、晴信、軍使を以て、明日は城を乘取るべし。早々、勢を引揚げよと、仰遣されければ、信形、人數を引揚げたり。廣瀨鄕左衞門、信形に向つて申しけるは、某、能き馬を持たず候故、思ふ程に、働かれざるこそ口惜しけれ。今

小幡孫次郎の武功

朝、城主尾臺又六郎が、金の馬鎧かけて、乘りたるこそ、究竟の名馬と見て候へ。明日の城攻には、某、取つて乘り申さんといへば、曲淵小左衞門、側にて之を聞き、世に人もなげなる廣言かな。よし〳〵、御邊は馬を取れよ。此曲淵は、大將又六郎が首を、取らんずるぞと申しける。去る程に、明くれば十五日、是程の小城を攻取るに、晴信、總勢を以て攻むるに及ばず。板垣乘取つて、高名にせよとて、舍弟孫六郎信連に、工藤源左衞門尉昌豐・原隼人佐昌勝を相從はせ、其勢、五千餘人を、板垣に差添へらる。甲州勢は、勇み進んで、卽時に城を乘取らんと、塀際迄攻寄すれば、城兵も敵を入立てじと、力を盡して戰うたり。されども寄手、事ともせず、難なく城戶を打破つて、城中に乘込んだり。又六が舍弟尾臺次郎左衞門尉は、二の曲輪に居たりけるが、今は何をか期すべきと、近習の心知り共を、左右に立て、眞驀になりて突いて出づるを、小幡虎盛が子に、孫次郎と名乘つて渡合せ、終に次郎左衞門を切伏せ、首を取つて立揚るを、尾臺が老臣上原市之介、主を目前に討たせ、一足も引かじと、切つて懸る。孫次郎、心得たりと、又、上原と切結ぶ。小幡、したゝか者なれ

諏訪越中守の武勇

ば、苦もなく、上原を討取り、主從の首に、次郎左衞門が采配を添へて分捕す。城兵二の曲輪を攻破られ、本丸に引入れば、寄手は透さず、本丸へ付入らんと嵩みければ、廣瀨鄕左衞門曲淵小左衞門等、昨日、敵を毛付して、廣言の手筈を合せんと、一番に乘込みたり。甲州方に、諏訪越中守と名乘つて、近く敵を大身の鎗を以て、突伏せ叩伏せ、死生知らずに働きしが、持ちたる鎗を突折つて、下人に持たせし長柄を追取り、猶も敵中に馳入つて、四方に當り、四隅を拂つて、近づく者を、十七人、立所にして突倒せば、城兵、大に辟易して、敢て刄向ふ兵なし。時に岩津鐵右衞門と名乘つて、馳向ふを押並べ、無手と組んで取つて伏せ、物々しや、首搔かんも、穢しと聲かけて、首、ふつと捻切り、弓手に引提げて、晴信の見參に入れたりしかば、是れ人間の業ならず、唯、鬼神の擧動なりと、諸人畏れて感じける。城將又六郎、馳廻り下知を加へけるが、敵、群擧懸つて、今は斯うよと見えしかば、涼しく最期の戰して、腹切らんには如かじと、馬よりゆらりと飛んで下り、傻兵を左右に從へ、如何に甲州の兵等、我れ身不肖なりと雖も、正しく當城の主將なり。今、不運にして、晴

廣瀬郷左衛門の武功

信の爲めに滅亡す。義を曲げて降參せば、永く當城の主たらん事を、免すと雖も、夫は武將の道にあらず。義に死せるの命は、永く萬代の後に、名譽の壽を傳へ、不義に永ふるの汚名は、千載を經るとも、恥辱雪ぐに所なからん。今客等、一擧に攻入つて、既に落去の期に及ぶ。最期の軍をする事、身に懸る火を拂ふに似て、甚だ見苦しからん。然はあれど、安々と首を授けんも、我が心にあらず。我と思はん者は、馳寄せよ。敵に採りて、不足あるべからずと、十文字の鎗の、其長、一丈に餘ると見ゆるを、片手に採つて振廻し、向ふ者を、幸に突捨にてぞ働きけれ。近習の逞兵、鞠を傾け、大將の扶翼となつて、義を金石の堅きに比し、命を死地の方寸に谷つて、祕術を盡し摑合ひしかば、甲州勢、多く討たれ、疵を蒙る者、猶ほ餘多なり。廣瀬郷左衞門は、何卒又六を討つて、馬を乘取り、信形に見せんと、爰彼所に相當りけるが、彼の乘捨てたる馬を見付けて、天の與なりと、悦んで馳寄せ、中間を叩伏せて、其儘、身輕に打乘り、又六郎を目に懸けて、驅倒さんとぞ進みける。曲淵小左衞門、此形勢を見るより、一文字に走り寄つて、大將か御參なれ。昨日より預置きし首

尾臺の城陷る

なれば、人手には渡さじと、競ひ懸つて突懸る。又六郎も、心得たりとて、發しと鎗を打合せ、まいつ卷かれつ突合ひしは、汐らしくこそ見えたりけれ。又六郎、手疵を多く蒙りければ、突鎗重く見えし所に、曲淵透さず、內甲を狙ひて、鐵壁も通れと打込んだり。忍の緒を突切らせて、眉庇額に落懸るを、小左衞門、續けざまに、二鎗・三鎗思ふ樣にぞ擧動ひける。又六郎、眼暗んで、立悚になる所を、其儘、首を得たりける。城兵、之を見るよりも、さらば泉下の先陣して、大將に追越さんと、敵の中に馳入つて、枕を並べ死にたりける。斯くて、首を實檢し給ふに、雜兵合せて五百餘級、晴信、悅喜淺からず。此度、手に入る所の山內の城には、飯富兵部少輔、小室には、小山田備中守を移らせ、岩尾の城には、村上勢の押として、眞田彈正忠幸隆を籠め置かれ、甲府に歸陣し給ひけり。是れ皆、山本勘介晴幸が、肺肝の中より出でたる勝利とぞ聞えける。

武田・諏訪兩家和睦附賴茂誅戮幷普文寺合戰

諏訪祝部最期の事

去る程に、天文十四年正月、舊冬より甲州家に、申入る丶仔細あつて、信州室賀入道・丸子三右衞門尉・矢澤・根津・武石・小泉等降參して、武田家の幕下にぞなりにける。斯くて晴信、山本勘介と密談あつて、同じき二月十日、信州諏訪へ發向あり。老臣板垣駿河守が計略を以て、舍弟左馬助信繁を引入れ參らせ、已に賴茂の居館小城を、攻落さんとぞ議せられける。信州の諸士、多く武田家に從ひしかば、賴茂も如何はせんと、心苦しく思はれけるに、武田家より使者を以て、賴茂の御事は、晴信が爲めに、正しく叔母婿にて座せば、近き一家にて候へども、父信虎と矛盾發り、和平なき内に、晴信、武田家を續ぎ候を以て、止む事を得ず、合戰を挑むに候。身に探つてさせる遺恨も候はぬに、士卒を苦しむる事、大將の本意ならず。今日より和平をなして、交を深く仕らんと、いひ送り給ひければ、賴茂、喜び早速許諾し、和議相調り

て、所領の堺は、蔦木を限つて領すべしと、契約を相究め、同じき三月、晴信は甲州に歸陣し給ひける。斯くて賴茂、甲館に來り、御禮を述べられしかば、晴信も悦喜し給ひ、種々饗應あつて歸されけり。之より賴茂、心解けて甲府に出仕せらるゝ事、既に三度に及びける所に、晴信、賴茂に心を免させ、勘介に密談あつて、三度目に及びける時、賴茂饗應の爲めとて、大藏大夫に仰せて、能を興行せらる。已に能、半にして、颯聲に心を澄まし、賴茂、餘念なく見ゆる所を、中間頭荻原彌右衞門尉に命じて、時分を窺ひ、飛懸つて主君の命なるぞと、言葉を懸け眞向に切付くる。流石の賴茂なれば、心得たりと脇差を拔いて、荻原を突通さんとし給ふを、二の太刀にて切伏せ、終に心本を刺通しけり。是によりて、諏訪家譜代の諸士、大に憤り　諏訪の祝部を大將として、武田家を攻滅し、此鬱憤を散ぜんとぞ犇きける。晴信、此事を聞き給ひ、何事かあらん、急ぎ誅伐すべしとて、舍弟典厩信繁に、板垣駿河守信形・日向大和守昌時を相副へて、信州に差向けらる。左馬助信繁、三千七百餘人を引率し、板垣信形を先鋒とし、日向大和守を後陣として、天文十四年正月十九日、甲府を立

普文寺合戰

つて、信州諏訪に赴かれける。祝部、之を聞いて、敵を城下に入立てゝは、叶ふまじと、中途に出張して、三千餘人を相從へ、尾河湯脇上の諏訪を打越えて、普文寺に働きける。甲州勢も、桑原を打過ぎ、宮川安國寺村を弓手に見、細窪をも打越えて、普文寺に押懸る。板垣が先手の勢、鬨を作りかけ、鐵炮を始めて攻懸る。諏訪勢も、一戰に切崩さんと、互に鑓を入るゝ程こそあれ。兩陣入亂れ、或は圍みつ圍まれつ、爰を先途と戰ひたり。戰既に半なるに、板垣信形、備を弓手へ押廻し、嚖と喚いて突入り、切立て〳〵相戰ふ。時分を見合せ、大將左馬助信繁、懸れ〳〵と下知して、備を押出し、急の太鼓を打たせられけるに、敵、辟易して後陣より崩れ立ち、諸勢一同に敗北するを、遁さじと追蒐つて、高島の宿城まで付入れば、晴信勢、城へ引入る事叶はず、士卒、そゞろに湯脇を押廻つて敗北す。爰に、長坂左衞門尉は、一年海尻の城に於て、怯弱の擧動をなし、晴信の勘氣を蒙り、左馬助殿の情を以て、掛人となりてありけるに、今一度、歸參せん事を、願ひ居たりけるが、此度の戰、晴信、出馬なき事を、幸と悦び、信形が先備を借つて、働きしかども、さまでの高名もなく、哀れ

能き手柄もがなと逃ぐる敵に追ひすがりて馳せて行く。斯かる所に、大將諏訪祝部、湯ノ脇の後の山へ馬を馳上せ、大音揚げて、爰を引いて何國か逃行くべき。武士は、死すべき所にて死せざれば、見苦しき死をする者ぞ。退いて誰にか面を向けん。皆、守返して場を取り、大返にせよと采配を揚げて麾くに、何とかしたりけん。逆樣に落馬せしが、五丈計りの高岸を、盤石を轉すに異ならず、敢なく下へ落ちたりける。長坂左衞門、得たりと走り寄り、引組んで取つて押へ、頓て首を掻落す。大將、既に討たれぬる上は、殘黨、一返も返さず、八方に敗走す。斯くて、追討の勝負終つて、今日、甲州勢へ討取る首、三百二十餘級なり。諏訪家、既に滅亡に及びぬれば、板垣駿河守を以て、諏訪の郡代に仰付けられ、諏訪先鋒の者共を、左馬助殿に附けられしかば、伊奈の諸士を先手として、松本の小笠原領へ働き給ひ、鹽尻を堺目として、甲府に歸陣し給ひけり。

長坂勘氣を免さる幷諏訪頼茂の息女晴信の妾となる事

扨も此度、長坂左衞門尉、敵の大將祝部が首を取りし事、類なき高名なりとて、典厩信繁、晴信の前に來り給ひ、長坂が働の次第を、悉く披露あつて、御勘氣恩免の歎を、樣々に宣ひければ、晴信、聞召され、典厩、斯樣に宣ふ上は、是非に及ばず。夫長坂を召せと仰す。左衞門尉、畏つて御前に平伏す。我聞く、汝は典厩の取持を以て、日向昌時とも和談し、殊にさる正月二日の夜、昌時が見たる夢を買取りたる由、夫程に思ひ入つて、歸參を望む事神妙なり。其忠貞の實より、夢、自然として符合せりと、晴信、あざ笑ひ給ひける。此度、大將祝部を討ちたる働、大に感悦せり。汝は予が乳母子なれば、曾て疎略に思はずといへども、先年、海尻にての働、臆病の擧動せしを以てなり。元來、汝が爲性、怯弱なるにあらず。勇あつて譽の働をも仕ると雖も、事に思慮なきに依つて、率爾の仕方多し。以後を愼み、忠節を抽づべしと仰

晴信、賴茂の女を妾とす

せければ、長坂は有難く存ずる旨を演べ、感淚を押へて、御前を退出しける。玆に、諏訪賴茂の息女、今年十四歲になり給ひけるが、容顏美麗に、あてやかなる事、又世に類なかりしを、晴信、風に聞召され、召寄せられて、妾となし給はんは、如何あるべきと、密に老臣等に尋ね給へば、板垣・飯富・甘利を始め、女とはいひながら、正しき敵の娘なれば、如何あらんと評議せしに、山本勘介、忍びやかに申しけるは、君の威勇少しくましまさば、內緣を幸に、如何樣の巧をか仕出し候はん。吾が君、未だ莊年に及ばせ給はずと雖も、武勇の謀略に於ては、唐の孔明、我朝の楠氏河陽侯にも、劣らせ給ふべからず。行末は、必らず本朝無雙文武兼備の名將と、武名、四海に轟かんか。されば晴幸、凡そ日本を見聞仕り候に、中國の毛利元就は、纔に七百貫の領主なりしが、今、中國を過半從へて、威を西海に震ひ給ふと雖も、如何でか我が君に及ばれん。然る上は、諏訪先方の者共も、武威に恐れて、隱謀を巧むの內存は、十にして、九つ迄はあるべからず。却つて能き御謀ならんかと存じ候。仔細は、姬君の腹に、若君誕生あらば、若しや諏訪家の、再昔に立還るの悅びもやと、諏訪譜代

の臣等、忠節を抽んで申さん事、必定ならん。是れ宜しからんと申しければ、皆、此儀にぞ同じける。是より賴茂の息女を召置かれ、御寵愛淺からざりけるに、晴幸が申せし如く、諏訪家譜代の者共、之を悅び、人質を差越し、悉く降參をぞしたりける。晴信の御子四郎勝賴と申せしは、此姬君の御腹なり。

武田三代軍記卷之第五　終

武田三代軍記 巻之第六

鹽尻合戰并板垣信形揺奸に乘る事

晴信、信州に出陣

斯くて、大膳大夫晴信、信州に發馬あるべしとて、同じき五月十三日、辰の刻に甲館を進發あつて、十五日には、小室に着かせ給ひ、當所の城代小山田備中守・岩尾の城代眞田彈正忠・內山の城代飯富兵部少輔を召し、佐久郡の樣子、委細に聞召し、次に相木市兵衛尉・蘆田下野守・望月甚八・前山主殿・依路・平原等を召され、太刀・脇差・馬具なんど、夫々に給はり、其外、在々所々の仕置等、仰付けらるゝ所に、同じき十九日、午の刻に及んで、諏訪高島の城代板垣信形、飛脚を以て、木曾・小笠原の兩勢働き出で、桔梗ヶ原を押通り、鹽尻峠を打越えて、此方へ働き申候。伊奈勢も、同じく打出で申し候と言上す。晴信、之を聞きも敢へ給はず。則ち小室を打立ち給ひ、諏

訪を指して發向あり。伊奈勢には、板垣、馳向ふべしとて、自身は諏訪通を押出して、木曾・小笠原の兩敵に打向ひ給ふ。先備は、甘利備前守・諸角豐後守昌清・原加賀守昌俊、次は大將の旗本なり。右は栗原左兵衞尉詮冬・穴山伊豆守信良、左は山田左兵衞尉・武田左馬助信繁なり。後陣は、日向大和守昌時・小宮山丹後守昌友・勝沼入道・今井伊勢守清冬・長坂左衞門尉・逸見・南部の人々なり。小笠原右馬助長時は、度々の軍に討負けぬれば、大に憤り怒つて、此度に於ては、十死一生の一戰を志し、木曾左馬頭義昌を以て、胴勢となして、鹽尻峠に備へさせ、長時は、峠を越えて押懸り、甘利が備に突いて入る。兩陣、入亂れて戰ひしが、甘利が勢に突立てられて、小笠原の先備、色めき騷いで、既に崩れぬべく見えけるを、長澤兵衞大夫、二の備を以て押懸り、火水になれと戰ひたり。武田の軍士、場を去らず、一揉にもみ崩さんと働きしかども、敵の奇術に勞れ偃んで、備まばらになり、小印、後に傾けば、諸角豐後守昌清、急の太鼓を打たせて、横より鐵炮を放させ、足竝を揃へて突入りけるに、敵・味方七顚八倒して、奇正の縫道、恰も手の裏を返すが如し。長澤、自身軍事の制を下し、

小笠原木曾の兩軍敗北

諸役者の事務を添削して、馬に鐙を當て、鞭を加へて馳廻り、數度敗北の恥を、此一戰にして清くせんと、思入れし事なれば、爰にあるかとすれば、忽然として彼所にあり。命を敵箭の的にさらし、競ひ懸つて下知をすれば、甘利・諸角が堅陣、五伍の作法を失ひて、忽ちに敗れ去らんとするを、原加賀守備を進め、敵を馬手になして、又横鎗を入れんと欲す。是に機を得て、甘利・諸角等が軍士、詰り〳〵に場を堅め、新に備を立直す時に、小笠原の軍勢、四度路になり、敗走の色を顯すに依つて、長澤、大に怒り旬つて、再び備を堅め、四方にあたり、四隅を拂ひ、萬卒に面を進め、一戰に死をぞ爭ひける。斯くて、兵衞尉大夫が軍强うして、二人の隊將、氣を失ひ、方便の變術も盡きたりと、見えける所に、右の方に備へし栗原左兵衞詮冬・穴山伊豆守信良、二手の軍勢を、右の山脇へ押出し、山手に就いて、鹽尻峠に備へたる木曾勢に突いて懸る。典厩・小山田の兩手も押出す。小笠原勢は、之を見て、敵は後陣に押迴して、引包んで撃たんとするぞとて、嚔と亂れて、大將長時の本陣に崩れ懸る。此色を見て、甲州勢、總懸りにして押立つれば、長時の旗本、亂れ散つて、是非なく敗軍

に及びけり。木曾・小笠原兩家の勢、散々に逃行くを、追詰め〳〵討取つて、分捕高名の品を別ち、其首を計るに、都て六百廿九級なり。斯くて、勝鬨を執行はれて、由由しき勢にぞ見えたりける。當手の戰、今日午の刻に始まり、未の刻に至つて終りけるに、木曾・小笠原打負けて、散々に敗北せしかども、守に備へし伊奈勢は、靜まり返つて見えし所に、陣中、何となく騷立ち、申の下刻に及んで、悉く陣を拂ひ、一人も殘らず引退く。此手當に備へたる板垣駿河守信形、之を見て、敵は引退くぞ。追蒐けて咬留めよと、頻に下知を加へしかば、諸卒、備を亂し追懸る。伊奈勢は、少しも騷がず、殿を備へて敵をあやどり、返合せ〳〵、靜かにこそは退きけれ。爰に、板垣が別腹の妹の子に、荻原與三左衞門尉・同九郎次郎とて、兄弟の若者あり。弟の九郎次郎は、生年廿一歲にして、若輩なりと雖も、兄に劣らざる覺の勇士なりけるが、與三左衞門に向つて、如何思ひ給ふ。鹽尻表の合戰、已に信州勢、打負けたるに、さしも軍術に練れなる伊奈勢共、よも目付を出し置かぬ事は候はじ、然らば、追手の敗軍を、知らざる事はあるまじきに、今、申の中刻迄、爰にこたへけるこそ心得

ぬ。其上、風も靜かなるに、陣拂するに、火をも懸けず。少々火を懸け、再び打消しなどしける事、是れ敵に設けたる謀あるに似て候。其方便に陷りなば、悔ゆとも後に甲斐あるまじといひければ、與三左衞門聞いて、此議、尤なりと同じ、兄弟馳連れて、信形が前に行向ひ、側近く馬を乘寄せ、鞍坪に畏つて、伊奈勢の引取る樣子、心得難く候。能々、御思案あるべしとぞ申しける。信形、元來、勇猛にして武略に通達し、其身の知勇に慢じ、我が組下の族の、諫むる事を、常に用ひざる男なれば、大に怒つて、若者共にも、似合はざる怯弱の詞かな。陣中にて左樣の事、士卒の耳に入れざる事なり。鹽尻の戰、既に敗走に及ぶ上は、何ぞ其枝葉の隊備として、敵を覆すの術、思ひも寄らず。唯、人の後に居ずして、追討の印なりとも持ち來れ。我と思はん者は續けや。人々とて、眞先に駈けたりけり。日既に暮れんとして、霧掩ひ雨降りて、前後暗く、物のあやめも分らざるに、相圖の太鼓を打たせ、取つて返し、備を疊んで、又一戰を始めたり。伊奈勢、兼ねて計略を廻し、究竟の逞兵三百餘人、三手に分れて、割符を作り、合詞を定め、陣拂せし隈々に伏置きたり。暫く敗

兵踏留まつて、爰を先途と防ぐ中に、又、相圖の貝を、一聲吹立つるや否や。奸一同に起立つて、鬨を作り懸け、甲州勢の後より切懸る。板垣、少しも騷がず。我が馬の廻りの後兵、戰、半なりといへども、暗夜の害を恐れて一所に屯し、引堅つてありければ、急に前後を遮り兼ねて、先手の足輕、崩れ懸る時に、信形、馬に流鼓を懸け、隨兵の中を乘廻り、百人計りを四陣に立て、我が手の如くにして、座作進退をなさしむ。暗さは暗し、前後の敵に取卷かれて、騷動する事斜ならず。荻原九郎次郎は、最前、信形に恥しめられ、安からず思ひければ、一番に切つて入り、能き敵に引組んで首を取り、馳歸つて、信形に一目見せ、莞爾と笑つて、又、敵中に切つて入り、終に討死をぞしたりける。其外、小熊豐前守・八木原新藏・成瀨又左衛門・古川宮內右衛門・山上六郎左衛門を始め、究竟の兵、前にて十八騎、後にて廿三騎、枕を竝べて討死す。去る程に、板垣、漸々にして軍勢をまとめ、後殿を備へて、諏訪筋を引退く。伊奈勢は、能く案內は知りつ。後陣の奸、思ふ儘に討勝つて、岸を傳ひ岩が根をくゞりて、谷へ駈下り、一人も討たれずして、何地ともなく引取りける。板垣勢、敵の首

板垣信形一生の不覺

を得る事、馬武者三騎、歩卒十一人、合せて十四級なり。味方の討死、雜兵共に、都て百五十三人、信形、一生の不覺とぞ、皆人評しける。斯くては、諏訪の郡代をも取上げられんと、諸人、思ひ居たりけるに、晴信、さのみ怒り給はず。則ち山本勘介を召して、是非の異見を問ひ給ふに、晴幸畏つて、木曾・小笠原の者共、大に勝利を失ひ、潔き味方の勝利なれば、板垣、此旨を聞いて、はやられ候段はさもあるべし。如何樣老功の陣將としては、思慮の薄き所なるか。世俗の申習はす如く、猿も木より落つるといふ類にて候はん。扨又、敵引拂ひて、其陣屋に軍勢を伏置くをば、捨奸といふ者にて候。敵、虛を示して引取ると見せ、態と咬留められんとするに、味方、夫に乘つて追懸け、列を亂し寬るを、己れ地利を得る所にして守返し、其相圖を究めて、同時に伏を起す。斯くて、前後より引包めば、必勝の理、彼に備はる。然るに因つて、信形程の猛將だも、大に士卒をそこなふ。されども、甲斐々々しく軍勢を引揚げ、退く所の武功は、又、信形にあらずんば、誰か能くせん。是も君の御試の能く調り、軍の作法、他家に異るに依つて、偏に尊君の肺肝より出づるの武略なりと、申し

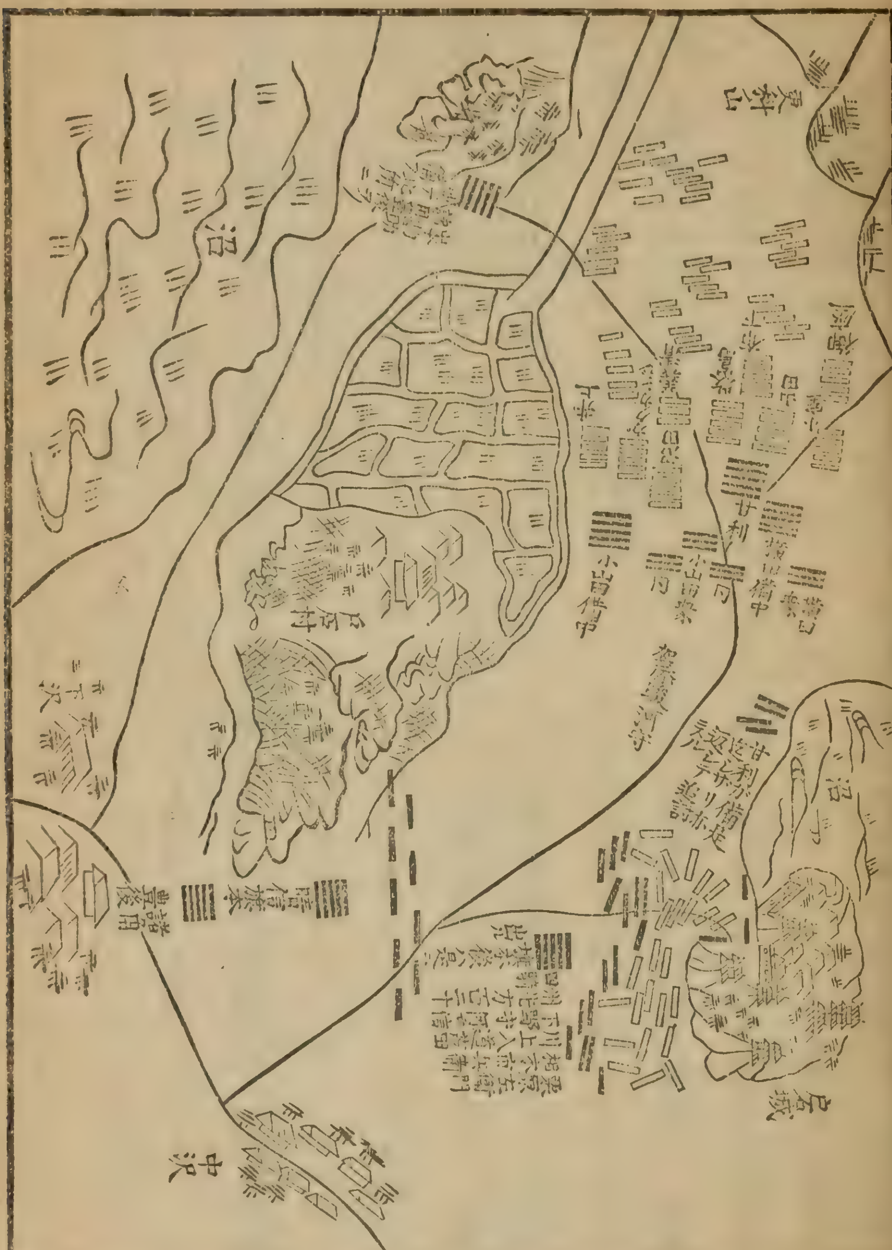
ければ、晴信、結句、機嫌よくましまして、我もさこそ覺ゆれとて、信形が罪を免されけり。然るに、鹽尻より深志へ通ふ道路に、廣々たる原あり。桔梗ヶ原と號く。其中に、鄕原・村井などといふ所あり。同じき廿四日・五日、彼の鄕原・村井の兩所に押懸けられ、燒働あつて、木曾領分木山の宿を、放火あり。手遣を仕給ふ所に、又、村上義淸、小縣へ打出でられしと註進す。晴信、之を聞召され、夫より諏訪に歸陣あつて、一日、人馬の足を止め、同じき廿七日、小縣へ發向あり。義淸、何とか思はれけん。早々に引取りぬ。さるに依つて、晴信は、小室に三日滯留あり。村上家の領內田中・海野・戸石の邊民屋等、方々放火あり。又、諏訪に至り給ひ、爰に一日逗留あつて、伊奈への手遣等を定められ、六月十四日、甲府に凱陣し給ひけり。此度の合戰に、武田方、勝利を得られしかば、是に氣を失ひて、鹽尻・小曾・和田・福澤等の者共も、今年皆、武田家に降參をぞしたりける。

晴信、甲府に凱陣す

信州戸石合戰附山本晴幸妙策の事

晴信、信州戸石に出陣

去る程に、天文十五年三月上旬、甲陽の太守晴信、信州小縣郡戸石の城を攻めらるべしとて、出陣の用意あり。去年、板垣信形、伊奈勢の捨奸に乘りて、士卒、多く討たれしかば、是に氣を得て、伊奈・木曾・小笠原の軍勢共、諏訪へ打出づべきは、必定なりとて、先づ木曾・小笠原の押の爲め、左馬助信繁・穴山伊豆守信良・小山田左兵衞尉・日向大和守、足輕大將には、小幡山城守虎盛、旗本よりの檢使には、金丸若狹守を差副へて、下の諏訪に馳向つて、鹽尻口を押ふべしと下知せらる。板垣駿河守信形に、旗本より足輕大將、原美濃守虎胤を差添へて、伊奈勢の押の爲め、諏訪の內、花岡有雅鄉に備へさせ、飯富兵部少輔に、小宮山丹後守昌友を相備として、足輕大將には、多田淡路守を相添へて、笛吹峠に差向けらる。是は上野上杉家の者共、信州の木曾・小笠原と內通あるの由、其聞えありしかば、關東勢を押へん爲めの方便なり。扨又、勝沼入道を、甲府の留守に殘し置かれ、信州に發向あり。總て、此時は、甲州勢、先づ小勢なり。仔細は、右の如く、諸方に押を差置き給ひけるに依つて、城を攻むる所の戰隊、纔に四千百七十人なり。又、板垣信形、伊奈衆の奸の爲めに、士



信州戸石合戦附山本晴幸妙策の事

卒、大勢討たれて、敵は競ひ、味方猛威を挫がすの砌にて、然かも少勢を士卒あやぶみけるに依り、此戰、大に不手際なり。斯くて敵地に至り、寒川の妻手の方に陣し、三月十四日、栗原左衞門尉詮冬に、手勢五十騎・三十騎持ちたる者、或は十騎・二十騎の足輕大將を相加へ、蘆田下野守・相木市兵衞・川上入道・依路・福澤・平澤等を始めとして、何れも、信州先方の者共を以て、戸石の城を攻めさせらる。

戸石城の地勢

抑、戸石の城と申すは、山城にして、後、峯に續き、右に當つて、一つの池あり。左は、戸田の鄕邑、此村の後左、皆田ぎれなり。右は茨・枳殼の茂りて、人數の進退、自由ならず。此所に於て、義淸の後詰を押へさせらる。其人々には、甘利備前守に、旗本よりの檢使、横田備中守・同息彥十郎・加藤駿河守等なり。城を攻むるの人數と、後詰を押ふるの人數、此兩陣の中途、しまりの要備として、前に小山田備中守、其次大將晴信、曾根七郎兵衞・山本勘介・安間三右衞門等を、四方に從へ、後備には、豐角豐後守昌淸なり。

戸石合戰

甲州の總人數、戰隊纔に、四千百十七人とぞ聞えし。斯かりける所に、案の如く、義淸、其勢七千六百人を引率して、戸石の後詰せらるゝ由、註進す。村上勢の

先陣、樂岩寺右馬之助、足輕大將には、小島五郎左衛門を相副へて、眞先に進ましめ、旋風の發るが如く、眞驀になりて戰を始むる。甘利一頭に、村上勢六頭懸つて切崩す。流石の甲州勢、是こそ九死一生の戰なれ。君の御大事、此一戰にあり。何れも魂魄の二つは、再び甲州に歸るといふとも、今日の軍に打負けて、生きながら、甲府に立歸らん事は、思も寄らず。一足も爰を去るべからずと、互に恥しめ合ひて、目と目を見合せ、弓・鐵炮を、鎧の袖に受留め、直に鑓を入れて、死狂にぞ擧動ひける。然りと雖も、村上勢、勢強大にして、射れども突けども用ひず。無體に爰を追散らして、一擧に旗本に切入らんと、大浪を立て攻戰ふ。中にも、小島五郎左衛門は、大剛の荒者なれば、味方の足輕を乘拔けて、眞先に進み、如何に、汝等高名して、御感に預かれ。進めや者共、敵は小勢なるぞ。唯、一捫に捫み散らせと、釆配を採つて馳廻り、歩卒を蹴立て、陣頭に進んだる武者振は、天晴、一人當千の大勇の者とぞ見えたりける。茲に、横田備中守が一子彦十郎といひしは、原美濃守虎胤が嫡子なりけるを、備中守、養子として、横田彦十郎と號し、去る天文九年、甲州

小荒間合戰に、生年十六歳にて、初陣の高名し、今年廿三歳迄に、勝れたる高名、既に五度に及んで、武名を發せし壯士なれば、小島が働を、屹と見て、好む所の相手ぞと、一文字に、つと馬を馳寄せて、押竝べて無手と組み、兩馬が間に百と落つる。元來、彥十郞、父美濃守が武勇を、受け繼ぎけるに、勝れて猛勇の兵なれば、小島を取つて押へ、少しも動かせず。既に首を掻かんとする所に、小島も、聞えし心早き剛者なれば、組敷かれながら、馬手差を拔いて、上なる橫田が、草摺の透を、既に突かんとする所を、やさしの敵の擧動かなと、小島が刀を、もぎ取つて、其刀にて、直に首を掻落し、采配を添へて分捕す。されども其身、鎗疵、刀疵を、四箇所迄蒙りければ、朱になりて引退く。小島、既に討たれしかば、此手の諸勢、氣を屈して、後陣を指して引退く。樂岩寺右馬之助は、賴み切つたる小島を討たせ、安からず思ひければ、少しも猶豫(ためら)はず切つて入り、雌雄を一戰に決せんと、四角八面に切立つる。綿內・井上・須田・槇島等、火花を散らし、小印を前に傾けて、入れつ亂れつ戰ひて、引組んで落つる所もあり、首を取らるゝもあり、取るもあり。或は馬より突落して、首

搔切り、引退かんとする所を、其は我が主君の首なり、敵に首を渡さじと、追懸け則ち取返し、又其敵を討取つて、首を提げて歸るもあり。東西に入亂れ、南北に靡け、坤軸も碎けよと、喚き叫んで相戰ふ。大將義淸、身を採んで、旗本を以て、晴信が旗本に打合せ、有無の勝負を一決して、晴信が首を見ざらん內は、一足も引くなと罵りて、急に備を進めんとせられけれども、元より地利を此方に得て、押を置きし切所なれば、思ふ儘に懸られず、時刻移る其隙に、甘利・橫田が當手の戰、大に激しき形勢にて、既に崩れて半町計り引退き、城の馬手なる池水の中へ、步卒、少少追込まれて、右往左往になる所を、城兵見すまし、城戶を開き、鬨を發して突いて出づる。栗原が軍勢、色めき立つて、旗の手、後へ靡くを見て、後陣に備へし川上入道、見崩に崩れて、相木・福澤・平澤が備に逃げ懸れば、後陣、蹈留るに及ばずして、攻兵一度に崩立つて、大に散亂するを見て、甘利・橫田、一陣に進み、城を攻むるの臆病者共、既に敗走に及びぬるこそ口惜しけれ。爰を破らでは、晴信の旗本、難戰たるべしと、粒語きて、馬の頭を少しもなびけず、必死に心を沈めて攻戰ふに、手疵多く

甘利備前守横田備中守戰死

蒙りて、働き難く見えけれども、武具の矢を折懸け、隙なく鎧をゆり合せ、神心腦亂すれども、義を金石に守つて、二人は猶も引退かず。從兵悉く討たれて、難なく討死を遂げたりける。されども兩人が備は、立直して敗軍が名を汚さず。場に怺へぬるこそ、流石に勇士の練兵なれ。殊に、甘利が組に控へたる米倉丹後守、大剛の勇器なれば、少しも後にしさらずして、赤白段々の旗を押立てさせて、神命を限りに攻戰ふ。斯くて、甘利が軍使、旗本に來つて、甘利備前守・横田備中守、兩人一所にして討死を遂げ候。然りと雖も、兩手を以て、六頭を切所に受留め、未だ敗走に及ばず候。急ぎ御勢を加へられ候へかしと訴ふ。さる程に、山本勘介晴幸、此時迄は足輕廿五人を預りて、旗本を堅めけるが、安間と曾根に、我が組を預け、其身は、晴信の御前に參り、如何思召し候ぞ。義清自身、旗本を以て、甘利・横田が殘黨を追散らし、直に御旗本へ切懸り、申すべき所存と相見え候。既に、備前守と備中守兩人、討死を遂げたる由、流石、彼の者が備なればこそ、其將討たれて敗北に及ばず候。如何に強きとても、左樣には怺へられぬものなり。彼の備の敗軍せざる中に、急と思

慮を廻らされ候べしと申す。時に、晴信宣ひけるは、是程に崩れ立つたる軍なれば、予も命を下すべきに其暇なし。應變の術も、今は弓折れ、矢盡きたり。此上は、小山田備中守と、諸角豐後守を左右に立て、晴信、旗本を押出して、義淸に相當り、九死一生の戰を挑んで、骸を戸石の戰場に晒すの外、他事なしと、思切り給ひたる體に見えしかば、山本、さしも名君にて渡らせ給ふものかな。然はあれども、御年若にましますに依つて、御短慮の命を承り候。之も武勇の功臣を始め、多くの士卒、亡びたるを憤り、思召すと存じ候。夫れ危戰を挑まず、身を全うして、始終の勝利を、肝要と致す事、申さずとて、御存の前に候。怒る時は、率爾の軍をするものに候。今、君の宣ふ所の御一戰は、尋常の者も、悟る所にして、更に權略のいみじきにあらず。某、思慮を仕るに、今日、敵の胴勢を以て、南に向はせ候時は、必定、味方の勝利にて候べしと申す。晴信宣はく、斯かる軍になりては、味方の軍勢だに、如何ともすべき樣なし。何としてか、敵の備を自由にすべきと仰せければ、晴幸、重ねて、然らば後陣に備へ候諸角が五十騎を、晴幸に暫時御預け下され候へかし。一術仕つ

て見候はんと申しけり。此上は、兎も角も、軍は汝に任するぞとて、諸角を召して、勘介に引合せられけるに、諸角畏つて、左樣の謀之あるとは承り及び候へども、曾て覺悟せざる淺才の淺ましさ。早々晴幸に組子を相渡し候へと申しければ、山本、大に喜び、諸角と一手になりて、下澤の方より押廻り、戶石の邑の後に至り、其道、東道、一里押出し備を立つる。村上勢は難所を越し、一筋に旗本へ、切懸らんと揣みけるが、味方の備、村上勢の跡を取切ると見えければ、胴勢、悉く南の方へ押向ふ。敵勢、南へ向ふや否や、味方の旗色旭々として、備、眞黑になりたりける。之を見て、山本晴幸、鞭を揚げて本陣に馳歸り、小山田備中守が五十騎を連れて、甘利勢・橫田勢の跡を詰むる。小山田が寄合組卅五騎を、旗本の武者奉行、加藤駿河守下知して、之も同じく、小山田勢の後を詰むる。其時、小山田眞先に進んで、すは、軍には勝ちたるぞ。各、忠戰を勵んで、御感に預かれと、自ら馬を馳出せば、從軍、喚いて喧と懸け、四方に中り、八面を拂つて攻戰へば、村上勢、色めきて見ゆる所を、晴幸、諸鐙を合せて、甘利が備へ行向ひ、軍大に味方の勝なり。何れも戰忠し給へと訇りて、又、城

を攻めて、崩れたる相木・蘆田等が備に行向ひ、軍勢をまとめ、直ちに敵を城中に追込んだり。斯くて晴信は、城を攻むる備を詰めて、始終戰ひ給はず。小山田、急に備を進めて、忽ちに敵を追崩し、總軍、足を亂して思々に分捕せり。今日、信州勢を討取る事、纔に百九十三人なり。味方、命を落す者、雜兵合せて七百廿一人。然りと雖も、難なく仕場居を蹈留め給ひて、勝鬨を執行はれ、首實檢し給ひて、軍勢を息め給ひけり。今日、山本晴幸が武略に依りて、既に敗走せんとする軍、忽ち味方の勝利となる。扨又、敵の胴勢を、南に向けて勝利となるといふは、大に意味深き事なり。晴幸、軍配を考へて、天の時を知る故なり。尤も奇術の宜しきに從ふ所にして、權謀の機略と相兼ねて、斯かる大剛を得るものなり。是より山本晴幸が事を、隣國にも聞及び、生魔利支天とぞ沙汰しける。

山本晴幸は生魔利支天

晴信、恩賞を教來石・工藤以下の諸士に行はる 幷甘利玉千代丸が事

斯くて、大膳大夫晴信、戸石の軍に打勝ち、同じき廿一日、甲府に凱陣し給ひけり。晴信、耳目の臣と頼まれたる甘利備前守・横田備中守を始め、士卒七百餘人討たれしかば、機嫌宜しからずと、諸人、潛まり居る所に、思の外、快然たる氣色にて、觀世大夫・大藏大夫等を呼び給ひて、同じき廿四日より廿六日迄、猿樂能を興行あり。萬事、賑々しく見えけり。斯くて、信州先方川上入道、此度、怯弱の擧動をして、見崩に敗走せし事、其罪輕からず。諸士の見懲の爲めなればとて、廣瀨鄕左衞門に命じ給ひ、放討（はなしうち）の成敗にぞ行はれける。其外、栗原組の者共を始め、臆病の働せし士大將、多く所領を沒收せられ、其身は悉く追拂ひ給ひけり。其後、敎來石民部少輔景政を召出して、馬場・山縣・工藤・内藤の四家は、當家累代の長臣といひ、殊に馬場・山縣は、世々緣者を取結んで、一家の好み深かりしに、父信虎、短慮に座して、四臣どもに、斷絕に及びけり。幸に敎來石は、馬場同流の一家なれば、今日より馬場伊豆守虎貞が名跡を、續ぐべしとて、馬場民部少輔になされ、騎馬五十騎を預け下されけり。敎來石民部少輔といへるは、淸和天皇の苗裔六孫王經基の孫、攝津守賴光よ

敎來石の先祖

菊一黨

山縣の先祖

り四代の後源三位入道賴政の後胤なり。賴政卿の父兵庫頭仲政、始めて馬場と號す。家の紋は、十六葉の裏菊なり。馬場・大内・下妻、是れ皆、賴政の末葉にして、菊一黨と號しけり。馬場氏は、三つ蝶の内に、十六葉の裏菊なり。其後、民部少輔景政を、美濃守になされし時、武田家の刻菱の紋を、免されしかども、武田菱を、直に附けん事を憚りて、武田菱に、目を入れて四つ目結にぞ改めける。山縣といへるは、桃園左衛門賴綱が三男、馬場兵庫頭仲政が舍弟美濃の三郎國直、濃州山縣郡に住し、始めて山縣と號しける。山縣河内守虎淸は、此國直が後胤なり。其外、工藤源左衛門尉に、内藤相模守虎資が名跡を繼がしめ、内藤修理正昌豐と號けられ、騎馬五十騎を預けられ、淺利式部丞信音に九十騎、秋山伯耆守晴近に、五十騎預け下されけり。此二人は、此度改易ありし諸士の同心被官なり。玆に又、甘利が幼子、玉千代とて、今年十三歲になりけるを召出され、父備前守、專ら忠臣の道を守り、殊に武名を重んじ、戰死を遂げし事共、殘り多く思召す由を仰せられ、玉千代を藤藏になされ、父が遺跡、相違なく給はり、同心の騎馬百五十騎、父が如くに預け下さ

る。後、甘利左衞門尉晴吉と名乘りしは是なり。斯くて、同じき七月廿一日、山本勘介を召して、軍功の賞として、五百貫の扶祿を與へられ、以前の三百貫と合せて、八百貫の領主となされ、足輕五十人、初の足輕と合せて、凡そ七十五人、晴幸に預け下されしかば、晴幸、恐悅の餘り、駿府に至つて此事を披露し、又は庵原安房守、年來の情を禮謝の爲め、御暇を申受け、駿府にぞ赴きける。庵原安房守、晴幸に對面し、晴信君の智勇の程、種々の物語を尋ね聞きて、夫より甲府に志を通じけるとかや。

板垣信形笛吹峠合戰幷三科・廣瀨高名の事

然る所に、武藏・上野に在住する上杉幕下の諸士、會合して評議しけるは、扨も、甲州の大膳大夫晴信は、去る三月、信州戸石に於て、村上と合戰し、甲州勢の勝利のやうに、いひ觸すと雖も、甲州の浪人共に、能々、其實否を聞くに、武田勢、手負・死人、三千人に及び、中にも晴信が耳目と思ひし甘利備前守・横田備中守も討死して、板垣信形は、諏訪の郡代に差越す所に、伊奈・木曾・小笠原等を押へ居て、日々、甲州に

加勢を請ふの折なれば、餘の方へ、手を出さん事は、思ひも寄らず。飯富兵部少輔・小山田備中兩人は、村上勢の押なれば、これ又叶ひ難し。蘆田・眞田・依路・相木などの、信州先方の者共ありと雖も、昨今、降參の者共なれば、武田家を、大切に思ふ程の事はよもあらじ。其外、武田譜代の者共に、武勇の名を得る者ありと雖も、當時、飯富・板垣・小山田が外は、皆、小身者にして、勢の百騎とも、從へたるはよもあらじ。武田一家の者共に、左馬助信繁・舍弟孫六信連・右衞門大夫信龍・穴山伊豆守信良、士大將に、栗原左衞門・郡内小山田などぞ、勢も少々あるべけれども、是等は屑なり。扨こそ晴信も、大に力を落し氣を呑まれて、大病を引受け、存命不定の由風聞せり。いざや、信州佐久郡へ討つて出で、甲州へ押詰め、武田家を攻滅さんと、議したりけるに、諸將皆此議に同じける。爰に、上州箕輪城主長野信濃守は、武名、勝れたる者なりけるが、暫く思案して申しけるは、某、退いて思案を廻し候に、當時上杉家は、武備末になりて、弓箭の道を取失ひたるかと存じ候。其故は、纔かなる北條、武略に賢々しく、數度の合戰に勝利を得て、關八州の諸士、多くは北條氏康が幕

下に屬し、日々に强大になり、當家は、日々衰微せり。此上は面々、力を盡し、北條に攻潰されぬ樣の謀こそ肝要なるに、何ぞや、構はざる武田家に向つて、鉾楯を起し、益なき戰を好み給ふ。能き人々の心に、野狐の入變りたるに候はん。武田家に對して、軍仕給はゞ、必ず味方の敗軍ならん。其故如何となれば、晴信、十八歲より以來、數度の軍に、一度も敗北の名を聞かず。去ぬる戶石合戰にも、多勢討死すと雖も、芝居を去らずして、首實檢迄し、勢猛にして歸陣せらる。敗北の名を汚す事は、義淸にあり。負軍に芝居は蹈まへられぬといふ事は、各の存の前なり。然るを、晴信の負軍など評する事は、近頃、武道不案内の至なり。これ皆、戶石の戰に見崩れ後崩して、甲州を腰拔拂ひに、逢ひたる臆病者共、當國に惶へ來つて、惡しく誹るを、各、實と心得られ、うか〳〵と、甲州を攻潰さん抔は、思も寄らず。方々は、味方、戰負けて敗走せば、早速、晴信の幕下に從はれん事、掌を指す如し。斯く申す某は、子孫は知らず、命のあらん限は、武田の旗下には、得こそ參るまじと、心の及ぶ程惡口し、座席を蹴立てゝ、己が居城、箕輪にぞ歸りける。一座の者共、大に呆

晴信は瘧を病む

れ、暫し言を發する者なかりしが、よし〳〵、長野なかりせば、軍仕らるまじきかとて、倉加野六郎を大將として、同じく淡路守・見田五郎左衞門尉・上田又次郎・松本兵部丞・和田左衞門尉・同じく兵部丞・新田・館林・山上・白井・忍・深谷・五甘・廐橋・沼田・白倉・長根・松井田等相集つて、都合二萬三千餘人、天文十五年九月下旬、上野を打立つて、甲州にぞ押寄せける。去る程に、晴信は、九月上旬の頃より、瘧病に侵され、發熱甚だしく、身心惱亂し給ひければ、板坂法印を始め、諸醫、樣々手を碎くと雖も、更に其印なかりけり。然る所に、信州の眞田彈正忠幸隆、早馬を以て、上州勢、大軍にて發向の旨註進す。こは何事ぞと驚く所に、相木・芝田・海野を始め、追々に訴ふる事、絡繹として、唯、櫛の齒を引くが如し。今、大將、病床に臥し給ふと雖も、事既に火急なり。片時も打捨て置かれ難し。穴山殿か左馬助殿か、兩將の中何れにても、急ぎ差向はれて、然るべからんかの由、衆議區々なりけるに、晴信、如何思慮し給ひけん。左馬助信繁・穴山伊豆守信良に、足輕大將四人を差副へ給ひて、諏訪郡の番手として、差向けられ、上州勢の諸手には、板垣駿河守を大將として、栗原左衞門尉

詮冬・日向大和守・小山田左衞門尉・小宮山丹後守昌友・逸見・勝沼・小曾・南部に、信州先方蘆田下野守・相木市兵衞尉を差副へられ、其勢、都合七千餘人、十月四日に、甲府を立つて、捫に捫んで押す程に、同じき六日の巳の刻、小室通の追分を過ぎ、輕井澤を打越えて、笛吹峠に馳付けたり。上州方の先陣は、上田又次郎・見田五郎左衞門・松井田なり。既に三萬三千餘人の軍勢、先手は五千餘人、笛吹峠を此方へ打越し、後陣は、段々備を立て、峠の彼方に押付けたり。大將板垣信形、今日の先鋒は、信形仕り候べしとて、笛吹峠に馳付き、向ふを屹と見上げたれば、敵は漸く三分一、峠を此方へ打越えたり。後陣の勢を待付けて、合戰を始めんと、時刻をぞ移すらん。敵の大勢、峠を越えざる以前に、急に討つて攻崩せと、一陣に馳出で、采配を取つて下知をなし、下着合戰（おりつきかつせん）といふ者に、敵の先陣上田又二郎が先備、藤田丹後守が陣へ、會釋もなく突いて懸る。三科肥前守・廣瀨郷左衞門尉、一番に鎗を入る。是に續いて、士卒、我れ後れじと突入りて、追ひつ返しつ戰うたり。之を見て、上田又二郎、藤田討たすな。續けやとて、丹後守と一手になつて相戰ふ。藤田、士卒を勇め、白旄

笛吹峠合戰

廣瀨郷左衞門の武功

を取つて馳廻る所を、廣瀨鄕左衞門、生年十七歲と名乘つて、丹後守と押雙べ、引組んで兩馬が間に落重つて、しばし勝負を爭ひけるが、難なく丹後を取つて押へ、首掻切り立揚れば、藤田が從兵、主を討たせ、屑にせんと追取卷く。廣瀨が郞等、之を見て、追々に馳重り、敵の郞從を、中に取籠めて、足下に五人突伏せたり。殘黨、疵を蒙つて、是非なく其場を敗走す。上州勢は、後陣を待つて、緩々と支ふる所を、板垣、急に切崩すにより、大に敵軍辟易して、旌旗、四度路に亂れしかば、丹後守も、早や討たれぬといふ程こそあれ。噇と崩れて敗走す。二陣師岡隼人、之を見て、穢し者共、守返せと、坂中におり下り、前後を見合せ、我が軍勢を以て、競ひ來る敵を請取つて、此場をさらじとぞ搦んだりける。味方には、曲淵庄左衞門、一番に鎗を入れて、然も能き敵を討取り、猶も進んで攻立つる。二番に續いて、曲淵に劣らぬ剛兵等、鎧の袖をかざし連れて、鬨を作つて馳入りしかば、峠の此方に、打越えたる五千餘人の軍兵、立足もなく、一戰に駈立てられて、右往左往に逃走る。師岡隼人、踏留りて、守返を心懸けたる風情にて、敗士を恥しめ居る所に、三科肥前守、生年十九歲、

三科肥前守の武功

其に控へ候ふは、正しく今日の、先手の御役者とこそ見えたれ。斯く、敗軍に及ばるゝ上は、所切所にして、心の儘に小返もなるべからず。見事に夫には控へらるゝ者かな。速に勝負して、數ならぬ首なりとも、殿(しんがり)の土産にし給へといふ儘に、鎗提げて渡り合ふ。心得たりと、師岡も互に鎗を打合せて、暫く戰ふと見る所に、三科、力足を蹈んで、鐵壁も碎けよと突く鎗に、隼人、内甲を突かせて、馬より逆さまにぞ落ちたりける。肥前守、左右なく首を取る事なく、二鎗・三鎗、思ふやうに擧動ひて、則ち首を搔落す。松井田、是由を見て、大に怒り、扨々、比興の振舞かな。是非に返して、討死をせよと、究竟の者を、馬前に連ね、備を雁行に連ねて、切所を越え、無二に懸つて攻擊たんとするを、栗原・日向・相木・蘆田を始めとして、胴勢、どつと突きかゝる。中にも、上野豐後守、白倉彌太郎が首を取り、己も手負ひ引退く。上

上杉勢敗軍

杉勢、散々に討負けて、峠を越えて敗走するを、追詰め〳〵討取る程に、敵の首を得る事、一千二百十九級、武略に因つて、小を以て大に勝ち、其日の午の刻に至りて、大將駿河守信形、勝鬨の法式を執行はせ、其身、床机に腰を懸けて、軍政を奉行せる

形勢は、さながら主將の如くして、天晴、美々しくぞ見えにける。

晴信重ねて笛吹峠合戰の事

晴信笛吹峠に出陣

晴信朝臣は、瘧病に惱んで、晝夜、寢食を忘れ座しけるが、近習の臣を集めて、宣ひけるは、上杉、累代關東の管領として、數萬の軍勢を領しながら、北條氏康が纔の勢に、やゝもすれば打負け、家名を汚すのみ。氏康が爲めにだに、手怺のなき臆病者共、予に對して、一戰を望む事、晴信、武勇なきに似たり。予が病惱、重くなりて、假令、死に臨むとも、何ぞ緩々の沙汰に及ぶべき。予、笛吹峠に馳向つて、惡徒等が首を晒すべしとて、既に甲府を打立ち給ふ。相從ふ者共には、甘利藤藏・馬場民部少輔景政・淺利式部丞信吾・秋山伯耆守晴近・原加賀守昌俊・內藤修理正昌豐・諸角豐後守昌清、足輕大將には、小幡織部正虎盛・原美濃守虎胤・山本勘介晴幸・曾根七郎左衞門・安間三右衞門を始め、都合其勢四千五百餘人、同じき五日の辰の刻に、甲館を首途あつて、笛吹峠に赴き給ふ。斯かる所に、志賀の城主笠原新三郎、兼ねて上杉家に、內

通やしたりけん、晴信の出馬を支へんとて、手勢を以て討出づる。春日源五郎を以て、笠原に差向けらるゝに、晴信、仰せけるは、笠原が働、惡き擧動なり。汝、馳向つて蹴散らすべしとて、本軍は、構はず備を押させらる。春日、承るといつて、手勢を率し、少しもためらはず、一文字に突懸れば、城兵叶はず引退くを、追討にして、少々、首を討捨て、須臾(せつな)に本軍に追着き、大將に斯くと申す。晴信、悦び給ひて、摑に摑んで押す程に、翌六日の未の刻に、輕井澤に着陣あり。然る所に、村上勢を押へ居たる飯富兵部少輔虎昌・眞田彈正忠幸隆・小山田備中守、大將、病室に臥し御座す所に、敵不意に發つて、味方を掠めんとす。板垣を以て、差向けらるゝといへども、小勢にして、覺束なく思さん事、病惱の上の御惱ならん。急ぎ信形に馳加つて、速に敵を誅伐し、晴信の病枕を休めんとて、行程を急ぎ馳付けゝるに、思の外、甲府君出馬あつて、其勢强大なり。殊に信形、一戰に敵を切退け、悅び勇む事限なし。然るに上杉の先陣、板垣に打負けて、散々に敗北せしかども、後陣に控へし諸將等、手に合はずして、峠の彼方にあり。寄合つて評議しけるは、此度、甲州勢に打負けて、此儘

にて引取らば、長野が惡口、的中せしと、彌々此後、彼が笑種にせん事、無念類なし。いざや方々、死を善道に守つて、今一度、有無の一戰を決せん。夫れ武士の道たるや、名をこそ惜め。命をば惜まぬものをとて、既に其勢一萬六千餘人、二の合戰を待つて、笛吹峠を打越えたり。晴信、兼ねて斥候を以て、敵を見切らせ、須臾に備を設け給ふ。昨日の合戰に疲れたる、板垣・栗原・日向・小宮山・相木・蘆田の者共を、後陣に備へ、飯富虎昌を以て先陣となし、既に軍を始めらる。虎昌、士卒に下知を加へ、鐵炮を以てためらはず、馬武者を毛付打落す。敵も負けじと、炮弓を用ひて相爭ふ。互に備を進め、士卒の鎗になるや否や、武田の强兵、穗先を雙べ、噇と突いて駈入れば、大將倉加野六郎も、昨日の恥を淸くせんと、先陣、何れも旗を進めさせ、爰を先途と揉合ひけり。晴信、既に旗の手を進め、我が備を以て、兵部少輔が跡を詰めらるゝにより、味方、旗色整々として、黑雲の起るに異らず。敵軍、氣を吞んでしきりに備へし、五甘山上峠を越えて敗北す。すは、後陣より崩れたると、主を捨て、親を顧みずして、我先にと崩走す。甲州勢は、坂を上りに追懸けて、今日、未の下刻より

晴信甲府に凱陣

酉の刻の終り迄に、敵を討つ事、雜兵共に四千三百六人なり。其夜の亥の刻に至りて、首帳したゝまり、勝鬨を執行はる。其威儀、嚴重にして堂々たり。先づ晴信、采配を携へて、床机に腰を懸け給へば、飯富兵部少輔虎昌、御太刀に候しけり。板垣駿河守信形は、團扇の役を蒙つて、左の方に畏まる。白膠木の弓に、眞鳥羽の矢に添へて、原美濃守虎胤、右の方に候す。山本勘介晴幸は、貝の役を承つて、吹かずして手に捧げ、右の方に畏まる。小幡織部正虎盛は、太鼓の役にて、中間に背負はせ、大將の側に伺候せり。旗は加藤駿河守昌頼、旗差を側に引付けて、旗に左の手を打懸けて畏まる。南天の手水は、金丸筑前守虎義、太布の手拭は、飯富源四郎昌景なり。酌人二人は、割紙の髻にて、髪を結上げ、四度入の土器にて、四度宛加へて十六度、肴は、搗栗・昆布にて、勝悦ぶと祝はれたり。其後、織部正虎盛、撥を取つて、太鼓を三度打鳴らす。時に晴信、榮々と三度唱へ給へば、諸軍勢、一同に大山も崩るゝ如くに、王と聲をぞ擧げたりける。斯くて、此所に三日、逗留し給ひて、猶も上杉勢の押の爲め、板垣を以て、輕井澤に殘し置かれ、同じき十日、甲府に歸陣ましましけり。

板垣饗應黑赤を分つ井眞田彈正忠幸隆計略の事

斯くて、板垣駿河守信形は、上杉勢の押となりて、笛吹峠の此方、輕井澤に陣營して居たりけるが、元來、短慮に剛强なる勇將なれば、士卒の戰忠を勵さんために、假屋を廣くしつらはせ、去る十月六日の合戰に、高名せしも、働かざるも、悉く饗應す。先づ上・中・下の三段に分ち、勝れたる高名には、三の膳、中には二の膳、下は本膳計り、二の膳・三の膳は、何れも赤椀を以て、種々の魚鳥を備へたり。本膳計りの輩は、何れも黑椀を以て精進の料理なり。三科肥前守は、先手の隊將師岡隼人を討ち、廣瀨鄕左衞門は、同じく藤田丹後守を討取りし其高名、何れも勝劣分ち難くして、兩人に鬮を取らせ、左右に分けて、一の上座にぞ定めける。曲淵庄衞門も三膳居り、上野豐後守も二膳すわる。扨又、手に合はざる族、黑椀にて精進なれば、斯樣の事は、餘りしたる面當の仕形ならんかと、臣等、密に信形に告げけれども、板垣曰く、

眞田幸隆は海野幸氏の後裔

否々、慈悲心の深き族、後生大事にかけて、人の首を伐たざる者は、定めて、平生受戒して、精進食をぞ喰ふらん。夫に破戒を與へたらんは、信形が本意にあらずとて、件の我儘をいひて、一圓に同心せざりければ、臣等諫め兼ねて、其儘にして、今日の饗應、此の如くなれば、手に合はざる者は、大に面目を失ひける。去る程に、信州佐久郡岩尾の城を預りたる眞田彈正忠幸隆は、淸和天皇の後裔、滋野井の姓にして、海野小太郎幸氏が末孫眞田左京大夫幸義が一男なり。武田家の幕下に屬して、無二の忠臣とぞなりける。然るに、同じき十一月三日、板垣駿河守・飯富兵部少輔・小山田備中守三人を、居城岩尾に招寄せ、種々饗應して後、幸隆、板垣に向ひ、某儀、晴信君の御恩、深く蒙りし事、生涯に報じ盡し難し。さるに因つて、忠貞の切なる事、憚り乍ら、方々にも、劣り申さじと、存詰めて候なり。飯富兵部殿は、當時、內山に在城あり、小山田殿は、小室に在城ましませば、折々會合して、幸隆が心底をも、大方知り給ひて候。板垣殿には、親しく參會仕りたる事も、候はぬに去月、笛吹峠の合戰、味方、勝利の故を以て、當月中は御逗留の由、幸隆が身に取つて、幸とこそ存じ

候へ。彌、君の御前宜きやうに、取成を賴み存ずるなり。就いては、內々飯富殿・小山田殿に、申談じ候通り、村上義淸、越後へ申通ぜらるゝ趣あり。越後の長尾爲景の次男猿松丸、家督を相續し、當時、景虎と名乘られ候、其景虎と和睦して、長尾家の加勢を以て、甲州を攻めんと、企てられ候へども、越後の內、一郡計り村上家の所領あれば、之を長尾家へ返されば、和平すべしと申さるゝ故、和議未だ調らず。若し兩家和睦せば、由々しき大事にて候べし。さるに依つて、幸隆、一術仕り度候といふ。信形聞いて、眞田殿の仰、定めて御良策とこそ推參仕り候へ。仄かに樣子を承りたしといふ。彈正、重ねて、信虎の御時、荻原常陸介昌勝不思議の術を以て、福島が多勢を、纔の小勢を以て、勝利を得られぬる由、承り傳へ候。夫は、奇術の武略にして、是は少智の謀なり。虎昌聞いて、其常陸介は、某が姨母婿にて、武勇智謀の者にて、天晴、離倫絕類の逞しき男なりしと語るに、幸隆聞いて、其常陸介殿の良才にこそ及ばずとも、何卒愚意を振ひ、方便を廻らし候はんと、數刻密談して、三將、何れも退出したりける。茲に、信州の住人に、須野原若狹守・舍弟總左衞門尉とて、

村上義清眞田幸隆の術中に陷る

武勇譽あつて、才智俊秀の兄弟の者あり。中にも、弟は猶ほ、究竟の者なりけり。元來、海野が老臣なるを、幸隆、渠等兩人を語らひて、葛尾に差遣す。須野原兄弟、葛尾に至り、村上義清に對面し、我々が謀を以て、眞田が居城岩尾を、安々と乘取つて參らすべしとて、熊野の牛玉に起請文を書いて、義清に渡しければ、義清、大に悅び、藥師寺右近進淸二・淸野六郎二郎を始め、究竟の勇士、五百人勝り出して、渡されける。扨又、須野原兄弟には、所領の朱印に、太刀・刀を相添へて、鞍置き馬をぞ與へられける。兄弟、太刀・刀をば給はりて、馬鞍御朱印は、此謀略を仕果て、後こそ頂戴仕らんとて立ちければ、義清、彌〻賴もしくぞ思はれける。斯くて兩人、村上を方便すまし、五百人の者共を引連れて、岩尾の城に引入れ、二の曲輪迄引籠んて、前後の門を、丁と打つて、三の曲輪より、鐵炮を以て打禁め、精兵の射手を揃へて、一人も殘らず打殺す。村上勢、方便られて、討つて出でんとすれども、內より門を明け得ざるやうに、兼ねて拵へ置きければ、唯、齒を嚙み、的になつてぞ死にたりける。斯くて首共を取持たせて、甲府に獻じければ、晴信、よくも仕りたりとて、御感淺からざ

りしとかや。

板垣信形、諏訪の郡代を辭する事

今度、上州の諸士に、一味せざる長野信濃守は、二千餘騎の大將なれば、己が手勢を以て、笛吹峠へ打出づる事もやとて、信形を輕井澤に殘し置き給へども、極寒になり、雪深く積りなば、働出づる事も叶ふまじ。十二月朔日迄、在陣すべしとの仰にて、極月二日に、信形、陣拂ひし信州を立つて、甲府に凱陣をぞしたりける。頓て暇を給つて、諏訪に赴くべきにぞ極りける。一子彌二郎信里、父を招請して、種々の饗應をぞしたりける。信形、彌二郎に向つて申して曰く、忠節に心を碎き、武道を嗜むべき事共いひ含め、笛吹峠にての諸士、戰功の事共を評し、不圖、向を見けるに、押板の折釘に、物書きたる扇の、懸けてありけるに、信形、倩々と詠めて、扇に詩歌などを書くは、公家の人々か、又は出家か。屋形などこそ書き給ふべけれ。汝等如き者は、能書なりとも、憚るべき事なりといへば、さん候。十日計りも以前、某が持

ちし扇を取らせ給ひ、大將の遊ばされて、賜はりしといふ。扨は君の御手跡なるやと、座を立ちて扇を取り、押戴き讀みて見れば、

誰も見よ滿つればやがて缺く月の十六夜空や人の世の中

といふ歌を遊ばしたり。信形、此歌を二三遍沈吟して、眼を塞ぎ暫く思案し、涙をはら〳〵と流し、申しけるは、去る十月、君、病室に伏し給ふに依つて、苟も信形、御代官として、七千餘人の軍勢を率し、笛吹峠の一戰に打勝ち、信形、君に代りて、床机に跨り、勝鬨を執行ひし其法式、嚴重にして、則ち主將の如し。其上、關東の管領上杉家と、始めて戰を挑んで、見事に勝利を得たること、生前の面目、何事か是に如かん。殊に當時は、君恩に依つて、諏訪の郡代を承り、御舍弟左馬助殿よりも、上手のやうに覺ゆるなり。君、此度、信形が勝鬨の體を聞召し、彼是、思召し入れあつてぞ、汝が扇に、此歌を遊ばされつらん。功成り名遂げて而して身退くといひし陶朱公が、古も理なり。今、身の上に引きあてゝ、猶ほいみじく覺ゆるぞとて、是より諏訪の郡代を、差上ぐべき旨、樣々、訴訟申しけれども、晴信、曾て許容し給はず。信

形、猶ほも種々に、訴訟を申して、是等の事に計會し、甲府にて越年をぞしたりける。

武田三代軍記卷之第六 終

武田三代軍記 卷之第七

板垣信形大物見を出す附原美濃守虎胤武略の事

斯くて、板垣駿河守信形は、諏訪の郡代を辭退し、度々に於て、之を願ふと雖も免許なく、兎や角とする內、其年も暮れて、明くれば天文十六年二月上旬、此時に至つて、未だ甲府にありける。同月二日、晴信、山本晴幸を呼び給ひて、去年三月十四日、信州小縣郡戶石合戰の時、汝が一身の武略を以て、敵の多勢を切崩し、危き戰の仕場居を蹈まへ、大に勝利を得る事、寔に凡慮の及ぶ所にあらず。偏に摩利支尊天の再來とも、いひつべしとて、種々軍旅の問答し給ひ、山本が諫に依つて、先づ五十五箇條の制法を定められ、其後、箇條二つを增加し給ひて、五十七箇條となし、軍法の基を

板垣信形信州海野平に出陣

立て給ふ。同じき十五日、八幡宮に社參あり。迴廊に於て、又、晴幸を召され、孫子が五事七計、又は二五の妙などといふ、深々の問答あつて、其後、下向座しけり。同じき廿一日、馬場民部少輔景政・秋山伯耆守晴近を兩大將として、旗本よりの檢使には、足輕大將小幡織部正虎盛を差添へられ、信州伊奈へ手遣の働あり。馬場・秋山、信州に發向し、保科が持城、三箇所迄攻落し、伊奈郡を、少し切治めしかば、秋山晴近を以て、郡代として差置き給ひけり。此頃、村上幕下の士に、樂岩寺右馬助・布下新左衞門尉・依路右近進等、信州海野平の乾の方、上田筋の北、時田山の東の方の岨續きに、三箇所の陣城を、構へ栖籠れり。急ぎ之を追落すべしとて、板垣駿河守信形・淺利式部丞信音を、兩大將として、旗本よりの檢使には、原美濃守虎胤を差添へらる。板垣・淺利の兩將、軍勢を從へ、海野平に陣を取る。信形、物馴れたる騎士を、六十騎選び、步卒一人も相從へず、大物見として、如何にも敵陣近く、見屆けて歸るべしと下知しける。爰に、信形が甥の萩原與三左衞門、進み出でて申しけるは、村上勢は、弓箭の道を嗜み、武勇を心懸け候、風儀兼ねて御存の所なり。然るに、送足

輕、迎備等の事もなく、殊に弓・鐵炮・持鎗の者迄、一人も召連れず、馬上の者計りにて、敵近く大物見を出されん事は、大に危き事に候。先づ今日は、大物見を止められ、物見番の侍一兩人を以て、下墨せられて、然るべく存じ候。能々、かやうの事は、御愼みあるべしといふ。信形、元來、短慮なれば、大に怒つて、萩原は殊の外、敵を恐るゝと見えたり。信州勢の手竝は、知りたる者をとて、究竟の騎馬六十騎、大物見にぞ出しける。萩原がいひしに、少しも違はず、樂岩寺右馬助、二百餘騎を左右に立て、眞驀になりて切つて出づる。物見の勢は、唯六十騎といひ、從者一人も召連れず、皆、馬上にて、得道具をも携へざれば、叶はじと引退く。樂岩寺、之を見て、得たり賢しと下知して、逸散に駈けて追ふ程に、五町計りの間にて、既に追付き、信形が勢、討たるべくと見ゆる所に、原美濃守、檢使なれば、先備に陣取つてありけるに、萩原が一言、理に當れりとて、己が同心二三十騎、何れも鎗を持たせ、鎧をも着せず。陸太刀にて、敵より物見に早馬を付けなば、何町にして追付かんと、兼ねて其場の利害を謀り、士卒を先に立てゝ、自身は、馬上迎備の格に思惟して、屹と備へ

原虎胤の武略

て居たりけるに、物見の騎馬、追立てられて、既に危く見えけれども、畔の陰に伏して、左右なく兵を起さず。其身も馬より下立ちて、鎗引きそばめ待懸けたり。樂岩石、馬に鞭を加へて駈來るを、虎胤、眞先に進んで、大音揚げ、桓武天皇の苗裔、千葉介常胤が後棘、原能登守友胤が嫡子、美濃守平虎胤といふ者なりと、名乘りかけて、先登に進む馬武者を、四騎突いて落しけり。是に續いて、原が同心、下新兵衛と名乘つて、是も一騎突いて落す。其間に、虎胤、馬引寄せ打乘つて、采配を振つて下知しけるは、人を必ず突くべからず。馬を選んで突伏せ、唯𩥭落させよとぞ制しける。郎等等、心得たりといふ程こそあれ。馬武者を目懸け突落せば、矢庭に廿七騎迄ぞ突落しける。樂岩寺が二百騎、是に少し猶豫ふ所に、物見の六十騎、取つて返し、轡を雙べて駈入らんとする勢を見て、樂岩寺右馬之助、武功の勇士なりければ、敵味方の中に駈入つて、輒く二百餘騎を引揚げたり。物見の勢、之を見て、付慕はんとせしを、虎胤、大に之を制して、物見の勢を引揚ぐる。武略名譽の虎胤が謀術により、地利を鑑み、彼が機變を察し、斯かる形勢、寔に稀代の勇士かなと、感ぜぬはなかりけり。

信州志賀落城并上田原合戰の事

信州志賀の城陥る

茲に、信州猿が馬場峠の此方なる浦野の城主浦野民部丞は、村上義清の幕下なりしが、去る年より、同國内山に、居城せる飯富兵部少輔虎昌に内通し、晴信、御出馬に於ては、御味方に馳參るべき由、數度申送りしかば、さらば先年、笛吹峠の合戰の時、上杉家といひ合せ、武田家の出陣を妨げし事の惡しければ、先づ笠原新三郎を誅伐すべしとて、同じき八月二日の辰の上刻に、甲府を打立ち、同じき六日、笠原が居城信州佐久郡志賀の城に押寄せ、十一日の未の刻に、城を乘取り給ふ。城主笠原新三郎をば、荻原彌右衞門尉討取りければ、晴信、甚だ之を感じ給ひて、荻原に感狀を下されける。其文に曰く、

今十一日未刻、於信州佐久郡志賀城、頸一つ、笠原新三郎、討捕之段、神妙に候。彌、可抽忠信者也。仍如件。

天文十六年丁未八月十一日　晴信　花押

萩原彌右衞門どのへ

斯くて、晴信は、夫より小室の城に入り給ひ、爰にて滯留ましまして、其後、仕置の爲めに、一萬餘人を引率し、小室を立ちて、飯富兵部少輔が內山の城に、御馬を寄せられ、砂原峠通より、上田原に着陣し給ひけり。茲に、更科の村上義淸は、志賀落城の由を聞いて、味方の幕下に從ひし笠原新三郞は、旣に討たれぬ。浦野民部も、今は武田に內應して、當家を滅さんとすることそ安からね。敵に、義淸が鋒を、見侮られなば、當國の諸士等、悉く敵とならん。其上去年、眞田幸隆に計られて、義淸が一騎當千と賴みし藥師寺・淸野等を始め、多くの郞等を討取られし事、骨髓に徹して口惜し。此度、晴信が打出てしこそ幸ひなれ。一戰を快くし、骸を軍門に曝すべしと申さるれば、小沼川舍人助、進み出でて、去年、岩尾の城に於て、眞田彈正に方便(たばか)られ、武勇の名ある者共、五百餘人討死して、當時、罷ある者共は、させる武功もなき、皆若手の士卒、又は一兩年以來の浪人新參者共なり。晴信は、武威盛にして、飛龍、天に在るが如くなれば、此度の一戰は、捗々しからじと存じ候。能々、思

慮をなされ候べしといへば、義清、聞きも敢へ給はず。我れ强ひて勝負を、心に懸くる所にあらず。今度の一戰に於ては、必定、晴信が旗本へ切込み、晴信と、自身勝負を決するか。又は眞田が首を、義清が鋒に貫くか。兎角、十死一生の軍と思ひ定めたり。其上軍は、勢の多少に依るべからず。よし〳〵、神命を惜む輩は、とても捗々しき事あるべからず。義清、唯一騎にても、馳向はんものをとて、既に用意に及ばれければ、臣等此一言に恥ぢ、敢へて諫むるに詞なく、其勢、都合七千餘人、葛尾城を首途して、榊の道を押出し、筑摩川を打渡つて、上田原に陣を取る。義清、日頃の出陣ならば、一萬にも及ぶべき軍勢なれども、此度の一戰には、旗下の族、疑をなして、身構をする時節なれば、從軍、常より減少せり。武田方には、眞田彈正忠幸隆、是非に先鋒を承らんと、望みしかども、去年、眞田が諫を以て、義清の逞兵數百人、討取りぬる事、紛なければ、其鬱憤に因つて、義清、無二に切入るべし。さあらんに於ては、幸隆、若し討死をもすべきかと、晴信、遠慮を迴らし給ひて、眞田は、

武田勢の部署

右の脇備に定められ、板垣駿河守を以て先鋒とし、二陣飯富兵部少輔虎昌・小山田

武田家しまりの備

上田原合戰

備中守・同じく左兵衞尉・武田典厩信繁、旗本の後備は、馬場民部少輔・内藤修理正、又旗本より五六町引下つて、原加賀守昌俊、三百餘騎にて、物見の如く、態と開いて備を立つる。これ山本勘介が軍術に依るなり。之を武田家にて、しまりの備といふ。大に深祕の事共なり。斯くて、八月廿四日の辰の刻、板垣信形、相備共に三千五百餘騎の軍勢を、六備に作り、正奇の機變、天の時を察し、金鼓の節を嚴重にして、既に戰をぞ始めける。村上勢も、義淸の憤戰を思ひければ、一足も引かじとぞ議したりける。兩陣、互に弓・鐵炮の迫合烈しうして、玉箭の飛走、唯、五月雨の降るに異ならず。甲府勢には、曲淵正左衞門・三科肥前守・廣瀨郷左衞門など、一人當千の勇士一番に鎗を入れて戰へば、原田十郎左衞門・八木宗七・松野一齋を始め、武邊覺の者共、馳合ひて火花を散し、相當ると雖も、甲州の選兵、之を物ともせず、一々に鎗付けて、右三人を討取りたり。其外、所々にて雙方分捕、高名の品、祕術を盡し、防戰するに、村上方の先陣、旗色惡くなりて、啮と崩れて、二の身の備に逃げ懸る。二の備も、共に怺へずして、一道に敗走す。信形、士卒を下知して、追討の法を下し

人數をまとめ、首共を數ふるに、其數一百五十餘級なり。然るに信形、武功第一の將なりしに、我が身の勇威に誇りけるか、又は去年、一子彌次郎が扇に、晴信、歌を遊ばして下されける。若くは此歌の心を以て、意恨に思ひ、一向討死を心懸けけるにや。當春より弓箭の風俗、上氣になり、敗軍の敵の退くべき方に、味方の諸勢を離れ、首實檢して居たりし形勢は、あながち無敵にぞ見えたりける。玆に、村上勢の先手に居て、一番に討死せし八木宗七といひし者は、上杉の管領、憲政の幕下、上野の安中が甥なりけるが、浪人となりて信州に來り、去年より村上家の郎從となる。渠が兄に、安中一藤太といひし者、今日の合戰に、やみ〳〵と弟を討たせし事を、無念に思ひ、物見の爲めに、敵陣近く馳行きて、信形が、首實檢して、緩々としてありけるを、見るより早く馳歸り、敵の先備板垣信形、甲州勢に引離れて、然も此方へ向ひ、備表に首實檢して罷有り候。急ぎ御勢を差向けられ候へ。敵の不意を攻めて、怠氣を討つと申すは、今、此時に候といひければ、義淸、尤もと同心あつて、士卒を二手相添へらる。一藤太、下知して旗・指物を卷かせ、靜まり返つて、物陰より

板垣信形安中勢に討たる

廻つて、敵陣近くなりければ、同音に鬨を作り懸けて、無二無三に突いて懸る。板垣勢、凋章て上を下へと、騒動する所を、信形、馬引寄せ、打乗つて流鼓乘(りうごのり)を以て、馬廻りを四つに乘分け、前後左右を下知して、信形、自身に鎗追取り相戰ひ、馬を以て駈亂して、四方八面に相當ると雖も、胴勢を離れ、小人數なれば、防ぎ兼ねて見ゆる所に、一藤太、究竟の若黨十人計り從へて、面も振らず、信形に切つて懸る。安中が悴者の内に、左近丞、板垣をよく見知りければ、是こそ信形、餘すなとて、八方より鎗をつくる。中間に千介・甚介などいへる者共、其外、上條織部を始め、我れ先にと鎗つけければ、さしもの信形、數箇所の鎗疵を蒙りければ、神心亂れて、忽ち其所に倒れたりけるを、上條織部正、鎗下をくゞつて走り寄り、頓て首をぞ得たりける。村上勢、勢ひ猛になりて、已に守返さんとする所に、相組の五備に、信形が手勢合せて七備、少しもひるまず突いて懸る。栗原左衞門尉詮冬、眞先に進んで喚いて懸る。其時、味方の二の身の面々、飯富兵部少輔・小山田備中守・同左兵衞尉・御舍弟典廐、殘らず總懸りにして、難なく敵を追崩す。大將義清は、兼ねて思ふ仔細あれば、味

方七千人の中より、逞兵を勝りて、二百餘騎駿馬を選んで、之を乘せ、究竟の步卒二百人に、得物を持たせ、一隅に一人宛從へて、是は事に臨まん時、鎗をば主人に渡すべし。又其外に、力者の足輕百人に、長身の鎗を持たせて、我が馬の前後左右に進ませ、精兵を選んで、百人、矢の根を吟味し、各五手宛、竹箙を負はせて、之を從へ下針を打つ。足輕五十人に、鐵炮を持たせ、各々飛玉三放宛、是は弓の間に組合せて、雙方共に助合ひ、術を碎くべし。扨又、五人組にして、小頭一人宛相加へ、座作進退は、予が下知に從ふべしとて、手組を堅く相定め、指物をさゝせず、袖印を以て割符とし、都合六百餘人を相從へ、我が軍勢の飯富虎昌に碎かれて、敗走するを餘所に見、晴信の旗本へ、會釋もなく、押懸り、義淸、大音を揚げて、兵足輕を下知せられけるは、五手の矢を悉く放すべからず。又鐵炮の物共は、三放を早く打放し、刀を拔いて騎馬に從ひ、鎗脇を詰めよ。騎馬は、馬にて敵を乘切つて、列を亂すべし。敵の馬を突いて驂落させよ。爰を墳墓に極めて、少しく退くべからずと、勇猛の義淸なれば、身を揉み雙眼に血を浮べて、頻に我から擊勵せらる。去に因つて、村上

村上勢敗北

義清、晴信と接戰

勢、鋒より火焰を出し、柄を碎き鐔を割つて、一人も漏すなと攻戰ふ。流石、晴信の旗本も、防ぐに術盡き果てゝ、今は敗走に及ばんとす。後備にありし馬場景政・內藤正豊、備を弓手に押出し、橫筋違に突いて懸り、東西に馳せ南北に駈つて、馬場・內藤、三度分れて三度合す。兩將、士卒を勇めて曰く、君の御大事、此一戰にあり。義名を恥づる者共は、討死して君恩を報ぜよと、自身各々、大身の鎗を、馬の平首に引添へて、片手に突いて馳廻れば、附卒、心を一致し、義を金石に守り、命を鴻毛に比べ、萬卒に面を進めて戰ひければ、終に村上勢、捫み崩され、是非なく敗走にぞ及びける。義清、勝敗を目に懸け給はず、晴信に組まんと、八方に目を付け、猶敵中に亂れ入つて、爰や彼所と求むる所に、晴信、卯の花縅の鎧に、諏訪法性の甃を着給ひ、黑き馬の太く逞きに、金覆輪の鞍置かせ、紅の厚房懸けて打乘り、士卒を勇め居給ふに、眞一文字に切つて懸り、餘さじと打つ太刀を、心得たりと、晴信則ち太刀を拔合はせ、丁と受けてはつしと打ち、二太刀・三太刀打合されけるに、雙方名馬の逸物なれば、敢へて太刀屆きに寄付かず。其間に、晴信の馬廻走り來つて、鎗を以て突落

さんとするに、中にも窪田助之丞、義淸の馬の平首、唯一突にと、丁と突くに、馬は突かれて、屛風を倒す如くにぞ伏したりける。義淸、たまらず百と落ち、鼻より血を引き給ひ、今は斯うよと見ゆる所に、村上勢十四五騎、步卒四五十馳來つて、義淸を馬に介乘せ、中に引包み、眞丸になつて引退く。脇備にありし眞田彈正忠幸隆・諸角豐後守昌淸・淺利式部丞信音は、敵敗軍して引取る道を取切り、大將義淸を討取らんと、妻手の方に馳行きて、榊の道を遮つたり。義淸、歸路を敵に取切られて、居城葛尾に入る事叶はずして、漸々辛き命を助かり、猿が馬場の峠の下、桑原へ打出で、夫より古市を渡つて、深山に分入り、峯に攀ぢ谷に下つて、越後國へぞ落ちられける。今朝、辰の時より、申の時迄の戰に、首を獲る事二千九百十九級、味方も、先鋒の大將信形を始め、雜兵共に、討死七百餘人なり。晴信既に二箇所迄、疵を蒙り給ひしかども、甲州島の湯に御入あつて、程なく平癒ましましけり。此時に至つて、戶谷の城も開城しぬ。是よりして仁科・更科の兩郡、大方武田家の領地となり、高坂・井上・綿內・須田・高梨又は仁科の瀨場以下悉く降參し、武田の威勢、是より彌々强大にぞ

なりにける。

村上義淸、長尾家を賴む并海野平對陣 同諸方勝利註進の事

去る程に、村上義淸は、上田原の合戰に打負け、桑原・古市より、越後路に懸り、春日山に至り、長尾平三景虎に對面し、義淸、十箇年以來、武田と戰を挑み候所に、去ぬる廿四日、上田原にて一戰を遂げ候。然るに義淸、此度に於ては、必定、晴信に近付き、自身に、勝負を決せんと存詰めて、既に晴信が旗本に切入り、雙方、馬を馳合せて、太刀打を仕るといへども、互に逸物に乘り候故、思ふやうに、寄合せ候事ならぬ内に、晴信が近臣馳來つて、某が馬の平首を突くにより、馬は怺らず、屛風を倒すやうに伏し候。自ら忽ち落馬して、鼻を打ち眼暗みて、討たれんと致す所に、恩顧の臣等、助け來つて乘代に乘せ、引退き候所に、晴信が陣將等、居城葛尾への道を遮つて、如何ともすべきやうなきに付いて、腹搔切つて失せ候はんかとも存候へど

景虎義淸の請を諾す

も、死せんに於ては、安かるべしと存じ、是迄參つて候。公の父祖と、我が先祖は、代々武威を爭ふと雖も、義淸、今、其恥辱を忘れ來つて、降を請ふ。公又、英雄の名君なり。某が心中を察し、一度、本國葛尾に歸往する事を、計り給はらば、生前の大幸、何事か是に如かん。越後に候所の某が領地を、悉く景虎に返し遣し申さんと、餘儀なく、賴まれけるにこそ、流石の景虎なれば、領掌して、先づ上田原合戰の始終を悉く尋ね、其後、義淸に向ひ、某が父爲景、加賀・能登・越中の間にて、數年合戰を挑み、武威を北州に震ひしかども、越中に於て、不慮に戰死を遂げ候。貴公に於ても、御聞及候べし。然れば、父の孝養の爲め、先づ越中を討從へ、加賀・能登・越前等を始め、東國を悉く幕下に屬け、帝都に上洛して、將軍義晴公に謁し、天下の權を掌に握り、武名を四海に輝し、名を後代に殘さんと存ずるなり。然れども某、今年十八歲、斯く若輩の某が心中を察せられ、今爰に來り給ひて、賴み思召すとの御一言、此上は、晴信と一戰して、追付、公を更科に歸國させ申さん。扨、晴信が軍立は如何とある。されば候。晴信が父信虎とも、數年戰を仕り候ひしに、甚だ强き鋒にて、天晴、豪

長尾景虎信州に出陣

晴信、信州小室に着陣

傑の勇將にて候ひしが、晴信は、又、父に增りて武略に長じ、軍を大事と心得て、麁忽の働を曾て仕らず。勝つては、彌〻愼むものにて候。されば天文七年より以來、數度の軍に終りしが、仕場居を去つて、敗走したる事、一度も承らず候と申されければ、景虎聞き給ひて、扨は晴信は、人數の扱、上手にして、陣法を以て敵に勝つと見えたり。我れ先づ試に、信州に打出で、一戰を相挑み、敵の奇術を候はんと、六千餘人を引率し、同十月九日、春日山を首途あり。信州に押出し、敵方の領分を悉く放火し、勢大にして民鄕を侵し、所々に狼藉す。されども、運を兩端に窺ひ、己が居城に引籠り居る者には、少しも構はざるは、これ味方に降らしめんとの謀なり。斯くて長尾景虎、村上義清に賴まれて、信州に發向せしと、國人等、早馬を以て甲館に告ぐる事、唯、櫛の齒を引くが如し。晴信、少しも驚き給はず。同じき十二日の申の刻、甲府を雷發あつて、十六日には、信州小室に着陣あり。同じき十九日、海野平にて戰ふべしとて、則ち彼地に押出さる。晴信、山本晴幸・小幡虎盛・原虎胤、是の三人を召され、景虎、若大將と雖も、項羽をも欺く勇將と聞けば、義清に賴まれて、今日の

合戰は必定、十死一生たるべし。これ大事の事なり。汝等三人、物見に行きて、能く見積り來るべしと宣ふ。三人則ち馳向つて、敵の樣體を下墨(さげすみ)馳歸つて、山本勘介が申しけるは、敵の備、速なる中の濁りと申す物にて、合戰を持つて持たず、始めて當手との取合なれば、甚だ備の作法、嚴重なりとぞ申しける。原小幡が申しけるは、敵、なる程合戰を持つて、備、蕁(しぐら)みて相見え候。人數六千の內外とぞ申しける。斯くて三人、又誰にても差遣され、御見せ候へかしと申す。晴信聞召して、汝等三人の外、又何れをか遣さんとて、山本を近づけられ、備の商議あり。晴幸、味方、備の立てやうを悉く演舌して、景虎、如何に勇將にもせよ。味方は一萬五千餘騎。今日午の刻迄、兎角して時刻を移し候へば、此方の吉刻に罷成り候、若き剛强の大將に付、味方、勝つべきと存ぜずして、敗せざるの術をなさば、敵は次第に弱り、味方は行末の勝利と存じ候と申せば、汝が申す所、一々理に中れり。さあらば、備を配るべしとて、陣を鶴翼に定めらる。先づ先手の右の方は、小山田備中守、信州先方の相木市兵衛尉・望月甚八・蘆田下野守・友野・平尾・岩尾・耳取・依路・平原、左は郡內の小

海野平合戰

山田左兵衞尉、信州先方には、長窪左衞門尉・木曾甚八・鹽尻五郎左衞門・和田・福澤・内村なり。中の先手は、栗原左衞門尉昌淸、信州先方には、須田淡路守・室賀・綿内・井上なり。旗本の前備は、眞田彈正忠幸隆・丸子・屋澤、是は旗本と一手なり。旗本の右の方、五町計り隔てゝ、飯富兵部少輔虎昌、是は鋒矢に備へたり。旗本の後備は、馬場民部少輔景政・内藤修理正昌豐・日向大和守昌時・勝沼入道・穴山伊豆守信良・武田典厩信繁、此六頭を以て、本陣の後より弓手の方へ、雁行に備へたり。原加賀守昌俊は、九千騎を從へて、引下つて跡備にぞ立ちたりける。越後勢は、龍の丸備に備を立て、景虎自身、旗本を以て、晴信の旗本に打合せんとぞ、議せられける。然りと雖も、飯富虎昌、馬上・步者、凡て一千五百人、景虎の奇術を察して、旗本の右に備を立堅め、例の赤備にて、馬武具・旗・指物、光り渡つて見えければ、さしも猛勇の景虎、案に相違の氣色なり。斯くて、十九日の午の刻、小山田備中守、越後勢の先陣長尾正景が手と、互に寄合せて、鐵炮を打違ふる程こそあれ。手々に鎗を提げ〳〵突いて入り、爰を先途と攻め戰ふ。越後勢、戰ひ負けて、二町計り颯と引く。次に直江山

城守・栫崎和泉守・安田上總介、甲州の左の先手、小山田左兵衞尉と戰ひしが、小山田既に戰負けて、二町計り引退く。之を見て、栗原左兵衞尉請取つて、敵を横に引合せて、急の太鼓を打たせて、甘糟近江守が備に突いてかゝる。時に景虎の旗本より揚貝を吹立てさせ、大將景虎自身、宇佐神駿河守良勝を連れて、只二騎、先手へ馳行き、采配を取つて、手輕く勢を引揚げらる。武田方には、戰半に、山本晴幸、大將の御前に來り、敵は魚鱗に備へて、無二の一戰と相見え候へども、味方の陣法、堅固にして、敗らんとするに、虚なきが故、景虎、戰を迴はして、引取り申さるゝと見えたり。士卒長追を仕らざるやうに、御下知御尤に候と申しければ、晴信、則ち百足の指物十二人を以て、小山田・栗原が備に觸れさせられけるは、追留を越して、敵を追ひ候者は、大に嚴科に行はるべき條、制法より內場にて、追留り然るべしとぞ告げさせらる。さるに依つて、諸勢、附慕はず、輕々として軍を收めける。今日、午の刻より未の半迄の合戰に、敵を討つ事二百六十三人、味方の討死百卅一人、其日の申の刻に及んで、首帳認まり勝鬨を執行はる。斯くて、翌日武者奉行加藤駿河守昌

賴・足輕大將山本勘介晴幸・原美濃守虎胤・小幡織部正虎盛、右の四人を召して、長尾景虎の武勇軍術を勘へたるかと問ひ給ふ。勘介申しけるは、若大將なれども、智勇兼備し、近代の名將とこそ存じ候へ。當時君の軍術に敵し難く、速に軍勢を揚げられ候形勢は、中々、大方ならぬ智謀の器にて、勇猛飽迄逞しく、其身の爲性、健にして、差懸りたる軍を、廻さぬ氣質と見え候。向後、當家と戰はんに、勝てば譽、負けても君より若年なれば、恥辱ならず。强に力戰して、旗本と旗本とを打合せ、有無の勝負を決せんと、覺悟せらるべし。此方よりは、唯陣法を堅固にして、景虎の武略に、切崩されぬやうに、大事に兵を扱はれ候べし。始終の勝利こそ、肝要に候へと申しければ、諸人皆、山本が智謀をぞ感じける。玆に、伊奈勢の押に、差置かれたる秋山伯耆守晴近、去る十六日、伊奈勢と相戰ひ、馬武者十七騎、歩卒廿五人、凡そ四十二級の首を得て、三千貫の地を、味方に切取り候と註進す。亦木曾・小笠原の押の、下諏訪・鹽尻口にありける甘利藤藏・多田淡路守、去る十八日の夜、敵を夜討にして、小笠原勢を九十三人討取る。甘利、未だ十四歳にて、幼若なりと雖も、比類なき働の由

註進せり。然る所に、上杉勢の押として、笛吹峠に差置かれたる、小宮山丹後守昌友・淺利式部丞信音、當月廿一日、上杉家の松井田と迫合ひ、敵卅三人討取り候と、飛脚を以て、悉く小室に註進したりけり。諸方の味方、何れも戰ふに及んでは、必ず勝たずといふ事なしと、晴信、怡悅淺からず。斯かる所に、甲州より、脚力を以て告げけるは、去る十九日午の刻、御旗屋より出火仕り候所に、別當山下伊勢守、能く防ぎ候故に、卽時に消し留め候。夫に付いて、不思議なる事の候は、白き大鷹二つ、御旗屋の上に、晝夜三日居て、其後、飛去り候と註進す。晴信、聞召し大に感喜あり。卽時に、諏訪・石淸水の方をぞ遙拜ましましける。然る所に、同じき廿三日、景虎、越後へ引返されければ、鼠宿の仁科、上田の海野・浦野を始めとして、尾見・會田・青柳等、悉く甲州に降參し、人質を出しければ、則ち小室內山の兩城へ請取らせ、同じき廿八日、甲府に馬を入れ給ひけり。

晴信・景虎、小縣對陣并鹽尻峠合戰の事

景虎、晴信對陣

斯くて、大膳大夫晴信、天文十七年五月七日、甲館を發馬あつて、諏訪に赴き給ひ、夫より士大將二三頭宛、足輕大將を差添へて、高任・松本の兩城に手當あり。旗本を以て、保科持の砦へ押寄せ、二日の內に、砦三箇所破却せられ、高任の城に、取詰め攻落すべしとある所に、同月下旬の頃に及んで、長尾景虎、小縣へ出張の由、內山に在城せる飯富兵部少輔虎昌が方より、早馬を以て、註進しければ、晴信、早々引入れ給ひ、和田峠を打越し、長窪筋より押し給ひ、內山に着陣あり。此所に本陣を居ゑらる。景虎は、戸石に陣を取つて、六月四日より十三日の間對陣あり。折々、兩陣の先手より足輕を出し、筑摩川を涉つて、迫合ひけれども、味方、左右なく押懸らず。陣法を堅固にして、諸手の怠を責め、敵陣の虛を擊破らん事を謀るにより、景虎、遠慮を廻らされ、味方、引取らんとせば、敵、咬留めんは必定なり。其時、速に取つて返し、味方に地利を得て、一戰を挑むべしと、同じき十六日の辰の刻、陣拂して軍勢を引揚げらる。されども、晴信、景虎の胸中を察し給ひ、必ず、敵を追ふべからずと、下知せられければ、景虎、方便相違して、手を空しうしてぞ引取られける。晴信

は、六月中、信州に滯留あつて、七月朔日、內山を打立ち給ひ、直に笛吹峠を越え、松井田に押寄せられ、近邊を放火あつて、同じき三日前に引取り給ひ、同じき六日、甲府に歸陣し給ひけり。斯かる所に、同じき十六日、信州高島に在城せる故駿河守信形が嫡子彌二郎信里、飛脚を以て註進しけるは、伊奈・木曾・小笠原、一萬餘人の軍勢にて、信里が居城高島を、攻干さんと僉議し、既に打出で候。敵は主戰なり、我は客戰なり。其上、一箇の孤軍を以て、敵の猛勢を碎かん事、思も寄らず候。早々、御出馬を希ひ候と言上す。晴信、倩、聞召して、扨は察するに、伊奈・木曾・小笠原の者共、越國の景虎に心を通じ、先づ鹽尻邊迄、空働をさせて、我れ信里を助けんと出馬せば、早く峠に引揚げさせ、其後、伊奈・木曾・小笠原の三將、旗本を以て、晴信と對陣し、數日を移し、其間に、景虎、川中島へ打出てんとの謀と覺えたり。敵の先陣、峠へ押上らざる以前、三將の旗本、押付けざる先に、急に駈付け追崩し、敵に相圖を逊させよと、一騎駈に馳せ給ひ、同じき十八日、古市にて軍勢を揃へられける。此度は、先手旗本只六千餘人を以て一戰し、脇備・後備は、三將の押の爲め、遊軍となつ

て備へよと、十八日の夜の五更に及んで、打出で給へば、翌日、卯の刻に鹽尻峠に押着きたり。敵・味方一聲鬨を揚ぐるや否や、拔き連れて切つて入り、鎗を合せ、追崩し立直し、爰を先途と戰うたり。されども敵は主戰なり。味方は長途に勞れ、其上、一萬有餘の敵兵に、味方、僅に六十を以て相戰へば、甲兵大に勞れ果てゝぞ、見えたりける。されども、晴信、屑ともし給はず。旗本を以て、横入れにし、七顛八倒して戰ひ給ふに、或は馬上にて組んで落ち、首を取らるゝもあり、取るもあり。何れに隙ありとも見えざりけり。然れども晴信、自ら兵を麾き、軍卒を勵し給へば、

敵兵、過半追崩され、足竝、四度路になる所に、敵軍の中より黒革の鎧着て、鹿毛なる馬に乘つたる武者、差物を切折られ、仰蓋になりて、つと馳來り、鎗を以て、晴信の右の股を、したゝかに突く所を、晴信、其儘、彼の鎗の鵜の首を握り給ひ、騒がぬ體にて、まします所に、小山田平治左衛門尉馳來り、其武者を、馬より逆樣に引落し、押へて首を掻落す。斯かりければ、敵軍、大に亂れ立つて、總軍怺へず敗北す。信州の三將、未だ着陣せざる内なれば、皆、寄合の集り勢、思ひ〳〵に一手切の合戰し

て手負・死人若干なれば、從者は主を捨て、子は親を顧みず、峠を上りに逃げ迷ふを、追詰め〳〵討つ程に、首を得る事八百七十三級なり。晴信の思慮し給ふに、少しも違はず。安々と敵を追崩し、軍勢大に勇みあへり。諸卒粉骨を盡す中に、小山田平治左門が働、他に異りとて、則ち感狀をぞ下されける。其辭に曰、

今十九卯刻、於二信州塚魔郡鹽尻峠一、一戰之砌、頸一つ討捕條、神妙之至候。彌、可レ抽二忠信一事肝要也。仍如件。

天文十七戊申年七月十九日　晴信 花押

小山田平治左衞門どのへ

後に、相川甚五兵衞といひしは、此平治左衞門が一子なり。斯くて、大將晴信、薄手三箇所蒙り給ふに、其內、腕は矢疵なり。同じき二十日に歸陣あり。直に島の湯に入らせければ、十日計の內に、手疵平癒座しければ、同じき八月八日、又、甲府を發馬あつて、信州川中島に發向し給ひ、村上一味の諸士の領地、亂妨放火等あつて、苅田をさせられ、味方の城々に取籠ませらる。然れども景虎は、此度、鹽尻合戰に

相圖相違しぬれば、川中島への發向も叶はず。既に陣觸迄ありしかば、此儘、打捨てんも如何なりとて、越中の一揆退治と號して、越中に出陣ありし故、晴信は川中島に滯留あれども、敵一騎も打出でざれば、同じき十月十日、甲府に馬を入れ給ひける。

武田三代軍記 卷之第七 終

武田三代軍記　卷之第八

伊奈・木曾・松本等手遣附小幡孫次郎初陣血戰の事

武田大膳大夫兼信濃守、源朝臣晴信、天文十八年四月十二日、甲府を雷發あつて、同じき十三日、信州諏訪に着陣し給へば、伊奈の保科彈正忠正景、味方に馳參り、人質を出しければ、晴信、怡悅淺からず。頓て伊奈・木曾・松本の三方へ、手遣あり。先づ松本筋へは、板垣彌次郎信里・日向大和守昌時・原加賀守昌俊を大將として、足輕大將には、小幡織部正虎盛・其子孫次郎・原與左衞門尉・其子總五郎・横田十郎兵衞尉・市川梅印・其子傳五郎、都て七頭を差向けらる。伊奈郡へは、淺利式部・馬場民部少輔を兩將として、足輕大將には、山本勘介・安間三右衞門尉を相副へ、軍は山本に任す

べしとて、差向けらる。木曾へは、甘利藤藏・内藤修理正を兩將として、足輕大將には、原美濃守・曾根七郎兵衞尉、軍は原に任すべしとぞ仰せける。斯くて、甘利・內藤は、木曾筋に發向し、鳥井峠の此方悉く放火して、習井峠を打越え、木曾方と少々足輕迫合して、騎馬三騎、步卒八人擊取つたり。爰に、板垣・原・日向の三將は、松本筋に押懸る。小笠原方にも、一千五百餘人にて打出で、同じき廿一日より兩日に、三度相戰ふ。時に二科の日置の城主丸山肥後守が伯父に、丸山筑前守とて、大剛無雙の勇士、步卒五十餘人を相從へ、小笠原に一味して、松本勢、三手に分れて、備へたる弓手の方、二町計り、後に備へしが、己唯一騎、步卒六人前後に從へ、馬にひたと打乘りて、一町計り馳出で、丸山筑前守と、高聲に名乘り、馬より下立ちて、小高き處に走上り、甲州勢を見積つてこそ控へけれ。武田の右備は、先手小幡織部正・橫田十郎兵衞、次は日向胴勢となりて備へたり。此時、小幡虎盛は、軍議の爲めに、板垣が本陣に行向ひて、居たりけるが、其子孫次郎、彼の丸山が擧動を、屹と見て、惡き奴原が働き哉、いで物見せんといふ儘に、遠藤彌市郎といへる、賴み切つたる

小幡孫次郎初陣功名

郎等唯一人に、徒立五六人を從へて、丸山を目懸け、蹄せより、弓長十丈計り、此方にて、馬よりゆらりと飛下り、鎗追取つて名乘りけるは、小幡山城守虎盛が子に、同孫次郎、生年十六歳、今日初陣なるぞ。小笠原の方人丸山殿は、兼ねて聞ゆる勇士なり。若輩の身に取つては、不足なき相手とこそ存ずれ。潔く勝負を決し、敵・味方の人々に、見物せさせ申さんと、無二無三に鍛いて懸る。敵は二人なり、小幡は一人、殊には若輩の勇士なれば、心ならず、弓手の方の小高き芝に、鍛上げられて、既に危く見ゆる所に、遠藤を始め、歩卒六人馳續く。横田十郎兵衞尉、眞先に進んで、小幡討たすな。續けや者共と、眞一文字に押懸るを見て、丸山、今は叶はじと、少し引退きて、鎗を從者に渡し、馬引寄せ、飛乘らんとする所を、小幡、手先を廻さず、飛懸つて太刀を拔き、丸山が右の膝を、節懸けて鋒逃れに、したゝかにこそ切込みけれ。さしも大剛の丸山も、痛手なれば働き得ず、仰に百と倒るゝ所を、乘懸つて首を搔落す。之を見て、丸山が郎等、取る物も取敢ず、我れ先にと引退くを、小幡追蒐け、己等も、主人の供をせよと呼ばはつて、三人迄突留めたり。孫次郎も、腕の逃れ、

肘の曲り、太股、都て四箇所の痛手を蒙りける。鎧の胸板、捻返しの邊り、六箇所迄鎗疵あり。小幡、未だ十六歳、然も初陣の高名に、比類なき働なりと、諸人、舌をぞ震ひける。斯くて其日の巳の刻、原加賀守、眞先に進んで、小笠原の野木・水野が隊に鍛入り、火を出して鍛戰ふ。小笠原の先陣、戰負けて、八方に敗走するを、追蒐け追蒐け首を取る事、百七十五級なり。則ち本陣、諏訪に進上致しければ、晴信、悦ぶ事限なし。然るに小幡孫次郎は、手疵保養の爲め、甲州に歸りけるに、諏訪に參着したりければ、晴信、働の樣を尋ね聞き給ひ、手疵の體を點見ありて、大に感ぜられ、流石、虎盛が一子なりとて、感狀に一文字の薙刀を、添へ給はりけり。斯くて此上は、松本に發向あつて、一戰に雌雄を決すべしとて、既に打立たんとし給ふ所に、同じき廿四日の午の刻、長尾景虎、小縣に發向し、是非に一城をも、攻干さんずる覺悟の由、早馬を以て訟ふる事、唯櫛の齒を引くに異らず。然らば、松本は差捨て、小縣に向へとて、板垣・原・日向をも呼返され、廿五日の午の刻に、諏訪表を發向ありて、小縣に向ひ給ひけり。

飯富虎昌、長尾景虎を追蒐く并再び海野平對陣

同上州三寺尾合戰の事

長尾景虎内山城を攻む

去る程に、長尾三郎景虎は、直江山城守兼續・宇佐神駿河守良勝・柿崎和泉守・柴田入道道壽・安田上總介以下、八千餘人を引率し、信州小縣へ出張し、先づ飯富兵部少輔が、内山の城に攻寄せらる。虎昌、是に少しも騷がず。僅か八百餘人を從へ、城戸を八文字に押開き、眞驀になりて鍛出づる。されば、項羽をも欺く景虎、然も其勢八千餘人、虎昌が勢に、十倍せりと雖も、小印、後に靡き、少し白氣てぞ見えたりける。景虎、之を見給ひ、虎昌とやらんが働、流石に晴信が武備を似せて、さしも勇氣なる擧動かな。何ぞ我れ、渠を擊取る事を、忍びざらんやといひて、軍勢を引揚げ、矢澤の奧に引入れらる。兵部少輔、咬留めんと馸り、東道三里餘ぞ追蒐ける。引くも良將、追ふも勇士なりと、皆人感歎せずといふ事なし。然るに、大膳大夫晴信、廿五日に、諏訪を打立ち給ひて、小室に着陣ありければ、景虎、則ち矢澤の奧より打出て、

晴信、景虎海野平に對陣

景虎北越に發向

虎昌が內山の城を押へ、海野平に打向ひ、同じき五月朔日より、五日が間、對陣あり。翌日、景虎、使者を以て申されけるは、某、信州に打出づる事、慾心を挿み、信濃國を從へて、領せんと欲する志にあらず。村上義淸に賴まれて、武の一道を守つて、唯、義戰を挑む事、止む事を得ざればなり。義淸を、本地へ還住の儀、同心なきに於ては、景虎こそ、貴公の堅陣に駈入つて、戰死を致すの外、他事なしと申越さる。晴信、此事を聞き給ひて、村上に賴まれて、當表への出張こそ、返すゞゝも神妙に覺え候へ。然れども、義淸を葛尾に還住致させ候はん事は、晴信が一命のあらん限は、思も寄らず候。合戰を望み給ふに於ては、貴殿より軍を始め給ふべし。某に於ては、軍を廻すべからず。亦、予が本國、甲州の地へ、誰に寄らず、手を入るゝに於ては、速に軍を出し、無二の一戰を、此方より初め候べしと、返事あつて、使者を歸し給ひけり。其後、同じき十日、早朝に景虎、又、使者を以て、申されけるは、兎角に一戰を、挑み給ふまじき樣子に相見え候條、景虎は、能登か越中の方へ、出陣致し候はんとて、其日の午の刻に、陣拂して引取り給へば、晴信は、七月迄、信州に滯留あつて、

三寺尾合戰

八月朔日、甲館に馬を入れ給ひけり。去る程に、同じき十五日には、八幡宮に於て、流鏑馬の神事を行はれて、諸卒、緩々と軍勞を休め申しけり。同じき十八日の巳の刻、晴信、遽に甲府を打立ち給ひ、上野に發向あり。武藏・相模の堺、神奈川迄押詰められ、近郷を放火あつて、引取り給ふ所に、安中越前守を隊將にて、和田・倉ヶ野以下九頭、相議して、六千餘人、蕪川（かぶらがは）の此方、和田の城の馬手の方、三寺尾にて、咬留めんとぞ働きける。晴信、之を見給ひて、優（やさ）しき者共の擧動かな。晴信に向つて、戰を挑まんなんどとは、且つ志あるに似たり。然はあれど、吹笛峠の切所を越えて、敵地へ深く働き入りたれば、闔（みかた）は曾て地利を知らず。敵は主戰なれば、案内者なり。必ず敵を侮るべからずと、下知し給へば、諸手の備は動かずして、内藤修理正昌豐・馬場民部少輔景政・原 加賀守昌俊・嫡子 隼人佐昌勝・淺利 式部信音・小宮山 丹後守昌友、是等六頭の手を以て、九月三日、合戰を始めたり。内藤は、一の殿なれば、疊みたる備を押廻し、二手に分つて、噇と鬨を一聲合せて、互に弓・鐵炮の迫合、甚だ急なり。馬場・淺利・原・小宮山、左右より押出し、引包んで奮ひ撃つ。敵・味方の旌旗、入亂

れ捫み合うて、矢叫の聲、天に響き、馬蹄、坤軸を轟かせり。味方には、曲淵庄左衞門・和田八郎が郎等磯谷與三郎等、一番・二番の鎗を入れて、命を塵芥に比して、攻戰へば、上杉勢、散々に戰負けて、四角八方に敗頽す。斯くて、甲州に討取る首數、五百廿七級なり。其日の巳の刻に、勝鬨を執行はる。然るに、倉ヶ野・和田の兩城に續いて、烏川より此方に、安中・松井田とて、二つの城あり。此內、何れをか取詰められんと、軍議區々なる所に、同じき六日、諏訪より飛脚到來して、小笠原長時、下の諏訪へ出張せられ候。これ長尾家と、內通之あるかの由、板垣彌次郎註進す。小城にある所の諸角昌淸・市川梅印・原與左衞門が方よりは、何とも申來らず。然れども、晴信、此註進を聞き給ひ、同じき七日、安中を陣拂あつて、諏訪へ發向し給へば、長時、早々引入れらる。晴信、夫より翌月迄、諏訪に滯陣ましまして、城々の普請以下、宜しく沙汰あつて、霜月三日、甲府に馬を入れ給ひけり。

信州佐久郡合戰附僧大益小幡彌三左衞門忍監の事

佐久郡合戰

甲陽の源府君晴信朝臣、天文十九年三月十一日、午の刻、甲府を發馬あつて、上州松井田の城に、取詰め給ふ所に、小笠原大膳大夫長時、木曾左馬頭義昌と、兩旗を以て下の諏訪へ發向し、小城居り殺さんと、胥議するの由、聞えければ、松井田を引拂ひ、同廿一日、諏訪へ打向ひ給ふ。之を聞きて、木曾・小笠原、早速、勢を打入れらるれば、四月六日に、桔梗が原へ向ひ給ふ。然る所に、松本と木曾の兩方より、敵又、討つて出でしかば、味方の勢を分けて、義昌が勢を押へ、小笠原と雌雄を決すべし、小笠原さへ追崩さば、木曾は戰はざるに敗すべしと、軍議、既に一決しける所に、上杉景虎地藏峠を打越えて、佐久郡邊迄、働くべき樣子にて、長沼へ打出でられ候と註進す。晴信聞き給ひ、先づ木曾・小笠原を打捨て、景虎に向ふべしとて、諸軍勢を從へられ、猿が馬場へ打上り、深志の道を取切つて、本陣を居ゑ給ふ。景虎も、越後路を押來つて、犀川の彼方、善光寺山に押上り、旗本を備へらる。同じき十一日、甲州勢、桑原より押出して、段々に備を立つれば、景虎も、犀川を打渡して備へらる。甲州の右の先は、飯富兵部少輔虎昌、左は小山田備中守、中陣は眞田彈正忠、此等に、信州先

甲州勢の畏署

方の諸士を、相組と定め備へたり。旗本の前備は、左馬助信繁・穴山伊豆守信良、右の脇備は、馬場民部少輔景政・內藤修理正昌豐・淺利式部丞信音・日向大和守昌時、左は諸角豐後守昌淸・甘利藤藏・小曾・勝沼、此等の人々、左右の翼に備へたり。後陣は、栗原左衞門尉・小山田左兵衞、是等は、旗本と一手の如くに備ふれば、遙の跡に引下つて、原加賀守昌俊、しまり備へとなりて、備へたり。景虎は、一萬人を一手の如くに組合せ、一の先に備へて二の身をば、景虎旗本と定め、兩陣、既に鐵炮の迫合をぞ始めける。時に天遽に掻曇り、白日の影消えて、眞丸なる黑雲、晴信の旗本の上に舞下り、山颪に吹かれて、景虎の本陣を指して靡き覆ひ、暫くあつて、四方へ散亂しけり。時に大將景虎、采配を採つて馳廻り、諸軍を須臾に引揚げらる。此時、景虎、武田勢に始めて、後を見せ給ふ。翌日卯の刻、景虎、書札を以て申されけるは、是より越中・能登へ發向仕る間、貴殿も暫く軍勢を休めらるべしとの書面なり。晴信、仰遣されけるは、義淸還住の事、思止り給へ。然る時は、景虎と晴信、干才を締ぶに及ばずと、大様なる返酬をぞし給ひける。其時、山本勘介晴幸、進み出で申しけ

るは、景虎、越中・能登の敵と、合戰を挑む樣子、忍者を以て、見聞せさせられ候へかしと申す。晴信聞召し、馬場民部少輔・內藤修理正を召され、晴幸が申す所、如何あらんと尋ね給へば、景政・昌豐、詞を揃へ、是こそ御思慮の入るべき所にて候へ。先づ彼の國の案內を、よく知らずしては、叶ひ難からん。自然顯はれて召捕られ、拷問に及ぶ時、眞直に白狀せば、景虎を深く怖れ給ふと、敵方に推察せん事、然るべからず。兎角に、勇猛堅固にして、然も辯舌利口の者、假令、敵の爲め、擒となるとも、恙なく其場を、拔出づべき者をこそ、遣さるべき所なれと、申しければ、兩人が申す所、理に中れりとて、吾が朝に隱れなき曹洞宗の會下僧大益、是は其名高けれども、曾て其面體を知る人なし。今一人は、故小幡入道日淨が六男彌三左衞門尉を差添へらる。兩人、越中に忍び行きて、能々、候ひ立歸りて、景虎、當家へ向つての軍とは、格別にして、唯、合戰を大事にし、奸を以て敵に勝ち、或は半途に伏兵を催けて、不意に起つて切崩し、我が軍勢を手足の如く用ひて、愼み深く、弓矢を取申され候と、大益を以て證人として、小幡委く申しければ、山本晴幸承り、扨こそ、景虎を名將なり

と存じ候に、愚案に違はず候と感じける。其故は、如何といふに、景虎、晴信を深く剛敵なりと怖れ、尋常に戰ひては、勝利なき事を知つて、堅陣を破らんと欲するに、武略を専にし、我が軍を亂す如くにして、然も亂れず。唯、敵に虚を示す。假令負けても、晴信に負けたるを、曾て恥ならずと思はるゝの心底明かなり。必ず近年の内、思切つたる奮戰を、仕懸けらるべし。夫を味方に侮つて、少しも弓矢に疵を附け給ふべからず。景虎の武略に對せん事、唯、陣法の宜きにこそ、侍るべけれと申しければ、晴信、大に感じ給ひ、馬場・内藤へも、斯くと宣ひて、兎角、景虎の手當を、大事にし給ひける。斯くて、閏五月は、海津に滯留ましまして、六月中旬に、歸陣し給ひけり。

今川義元の使者甲館に來る附信州法福寺合戰
竝景虎榊退口の事

茲に、北條左京大夫氏康、駿府の今川義元を頼まれけるは、扨も、兩上杉と合戰を挑

む事、氏康に至つて、既に三代、戰ふ時は必ず勝ち、攻むる時は必ず取る。然りと雖も、元來上杉、大身なれば、根を斷ち、葉を枯す事を、得ざるに因つて、有無の一戰を挑み、上杉家を、永く亡さん事を思惟せり。夫に就いて、上野國は、管領憲政の住國なり。然る上は、武田晴信、手を懸け給ふ事、思召し止り給はゞ、氏康が本望、是に過ぎず。然れども晴信は、心猛き大將の樣に、承り及び候へば、氏康が、申遣さん事も如何なり。今川殿は、親しき御緣者に候へば、貴所より仰入れられ候はゞ、やはか、御違變は候ふまじ。偏に此儀を賴み存ずる由、いひ送られしかば、治部大夫義元、早速許諾あつて、天文十九年九月、重九の使者として、四宮右近を甲州に差越さるゝに、庵原彌兵衛尉を副使として、氏康より賴みの旨を、いひ送らる。さるに依つて、武田の老臣、此事を評議しける。中にも、源加賀守昌俊、諸角豐後守昌清、大に悔み、去年、松井田か安中かを、何れにても、一城を攻落すに於ては、治めかけたる國なればとの御返答も然るべきに、流石、一向に賴み越さるゝ事を、否とも仰せられにくき處なり。今又、急に攻むるとも、速に其功なり難かるべし。然る時

は、村上義清を、還住せさせじとの、景虎に對せられての君の廣言も、相違すべし。今より君、隣國を討從へ給ひ、大身にならせ給ふべき方便もなし。此上は、景虎と和睦あり、伊奈・木曾・小笠原を、退治なされ候へかしと、春日源五郎・飯富源四郎・原隼人佐三人を以て、諫書を差上げければ、晴信、披見ましまして、兩人が申す所、尤もなりと雖も、晴信、此度、若輩なる景虎と和親せば、伊奈・木曾・小笠原を、一日に討從ふとも、其甲斐あるべからず。晴信こそ、景虎が武威に怖れ、和平したりなんどと、天下の人に嘲弄せられんは、末代の瑕瑾なり。景虎と和睦して義清を、信州に還住せさせん事は、御旗・無楯も照覽あれ。思ひ寄らざる事なりと、御氣色損じ、卽時に、小山田兵衞尉・板垣彌次郎兩人を召し、下の諏訪より打出て、深志表桔梗が原へ、働くべしと仰せ下され、翌日九月十五日巳の刻に、甲府の館を雷發あつて、信州に發向あり。先づ佐久郡に押出し、海野峠を打越え給ひ、法福寺に陣し給ふ。小笠原長時も、軍勢を引率し、鄙倉峠を打越して、甲州の先陣へ、無二無三に討つて懸り、敵味方の矢炮、飛行する事、百千の雷の鳴轟くに異ならず。雙方の士卒、命を塵

法福寺合戰

芥に比し、義を金石になぞらへて、火出づる計り戰ひけり。甲陽の先鋒、飯富兵部少輔・小山田備中守・蘆田下野守等、長時の正機に碎かれて、覺えずして、二三町計り引退く。甲州の總勢、四度路になりて、既に總崩に崩れんと、見えける所に、故甘利備前守が嫡子藤藏、生年十七歲、去る九日、左衞門尉になされて、其上、晴の一字を給はつて、甘利左衞門尉晴吉と號し、父に劣らぬ大剛の勇士にて、今日も、旗本の前備の將を蒙つて、備へけるが、味方崩るゝを見て、士卒を從へ押出し、場所に怺へて、難なく味方を守返さす、飯富・小山田も、備を立直しけるに、其時又、甘利、備を分けて、左右より敵を切崩せば、信州勢、叶はずして散々に敗走す。長時、馬を引返し、守返さん〳〵と、身を揉み下知をし給へども、大勢の崩立つたる事なれば、志ある勇士も、押立てられて、鄙倉峠を刎越し、松本を指して敗北す。甘利が一手に擊取る首數、二百七十三級、先手の諸將へ討取る首、二百四十六級、總べて雜兵共に、五百十九級なり。此勢に乘じ、松本へ亂入し、小笠原を一時に攻亡さんと、衆口區

小笠原長時の敗軍

區なる所に、長尾勢、亦海野平に出張の由、註進しければ、晴信、先づ小笠原を擱く

べしとて、法福寺表を引拂ひ、海野峠を打越し、上田を過ぎて、筑摩川の此方、鼠宿に陣し給ふ。越後勢は、榊へ引取り、同じき廿八日より、十月十日迄對陣あつて、時々、足輕迫合あり。然るに、武田家にて、武功勝れたる者を、十二人、使番と定めらるゝに、之を蚿の指物衆と號す。白地に黑き百足、黑地には赤き百足、亦金にても畫きけり。色は其身の好み次第なり。晴信は、常に毘沙門天王を信仰座しけるが、諺にいふ、蚿は毘沙門天王の驗蟲なりといへば、心を此說に、寄せられけるとぞ聞えし。飯富兵部少輔が弟源四郞・春日源五郞、此兩人も、十二人の內なりしが、此度、法福寺表にて、兩人共に、先陣の將飯富兵部少輔が備に於て、能き敵を一人宛討取り、各、采配を添へて分捕す。又此度も、兵部少輔が備に、軍使として馳來り、十月二日より兩日の內に、首二つ宛討取る。其翌四日には、又小山田備中守が備にて、敵一人宛討取りしかば、晴信、大に感じましまして、二人の者共に、感狀褒美をぞ下されける。斯くて十一日、互に雌雄を決せんと、敵味方備を押出す。景虎の魁將北城・柴田、二陣は、柿崎和泉守・甘粕近江守、次は大將景虎なり。味方には、飯富

景虎歸陣

兵部少輔・小山田備中守・蘆田下野守、先陣に備ふ。大將晴信、思惟あつて、旗本の前備、跡部美作守・曾根七郎兵衞などの小勢にて、然も、若手の者共を、手先へ繰出し、飯富・小山田等を、二の身に立替へ給ひける。景虎、此備の樣を、下墨給ひて、智謀兼備の名將なれば、晴信の胸慮を早く察し、俄に軍勢を引揚げ、歸陣し給ふ。先陣の北城・柹崎・柴田・甘粕の者共に、村上義淸・長尾正景以下相加つて、八備後殿となりて榊の切所に控へたり。中にも、景虎の姉婿長尾正景、一の後殿に備へて、追來る敵を會釋ふ。甲州の魁帥飯富・小山田、眞先に備を進めて追蒐る。爰に、小幡山城守虎盛が弟小幡總七郎は、蛟の指物十二騎の內なりけるが、飯富兵部少輔が備に、軍使として來り、高名せんと悅び、一番に進んで、引捕る敵を、咬留めけるに、能き馬武者に追付、其の武者の總角を摑んで、我が乘りたる馬の鞍の前輪に、引付けゝるに、敵もしたゝか者なれば、無手と組んで落ち重る。小幡、上に乘懸つて、首を搔かんとする所を、敵、馬手差を拔いて、小幡が草摺の逃れを、續けざまに刺す程に、三刀迄ぞ刺したりける。惣七郞、之を物ともせず、竟に首を搔落す。飯富・小山田、敵味方の

中に、馬を乗入れて、必ず長追すべからずと、追留を限り軍勢を引揚げたり。斯くて、同じき廿一日□□に馬を入れ給ひける。此度、小幡總七郎、組打の事、尤も高名なりと雖も、其身三箇所の重手を蒙りければ、同じき廿九日、終に死しけるこそ、哀れなりし事共なり。則ち甲府の本立寺といへる日蓮宗の寺に葬りけるに、晴信、殊に惜み給ひて、本立寺に參詣ましまし、墳墓に向ひ、燒香ありけるにぞ、諸人大に感じける。名將の忠臣を愛し給ふ事、斯くの如くなり。末代の武將たる人、之を思はざるべけんや。

板垣・小山田怠軍吟味の事

扨も此度、法福寺合戰に、板垣・小山田以下の者共、追手、桔梗原より攻入りなば、忽ちに、小笠原家、滅亡に及ぶべきに、板垣彌次郎信里、兼ねて長尾家へ密通の仔細あつて、虛病を構へ、打出でざりければ、小山田左兵衞尉も、心ならず日をぞ送りける。是に因つて、使番金丸筑前守・春日源五郎・飯富源四郎の三人に命じ給ひ、則ち

三人、諏訪に行向つて、上下諏訪の町人・百姓等、十人計りと、鹽尻峠番手の長坂左衞門尉が同心、二三騎を召連れ來るべし。且つ又、十日計り諏訪に滯留し、彼地の風聞を、聞屆け來るべしと仰す。二十人衆頭一騎、中間頭一騎差添へ給ふ。三人、十一月朔日に、甲府を立つて諏訪に至り、同じき十九日、町人・百姓を召連れ參りける。彼の者共を、二三人宛、四度に御旗屋に召され、桔梗原筋へ仰付けられたる先手・二先、小山田等が樣子を、悉く尋ねられ、筆者を召して、口上の趣を書留めさせられ、彼の者共を、二三日の餘も、禁足させられて、引出物を給はり、其日に諏訪へ歸されける。扨、板垣・小山田に相副へ給ふ目付島田外記・横目の原加賀守を召され、兩將の樣子を尋ね給ひ、次に小山田左兵衞尉を、常の間へ召され、金丸・飯富・春日の三人を以て尋ねらる。小山田承つて、味方、追手・搦手より、一時に亂入候はゞ、小笠原家、一時に滅亡掌握にありと、思惟致し候に、板垣信里支度と稱して、七日延引致し、其後、病と號して、出陣仕らざるに依つて、是非に及ばず。某、一人なりとも、相働くべしと、支度仕り候ひしかども、原加賀守・島田外記、堅く制して出陣を免さず。強

ひて申し候ひしかども、假令兩人、此儀を制して、後日死刑に行はるゝとも、叶ひ難き由を申すにより、心ず九月十八日、某、下の諏訪に參着致し、十二月二日迄、空しく日數を送り、漸く鹽尻迄、罷出で候へば、三日の早朝、眞田方より飛脚を以て、海野平にて、長尾家と御對陣の旨を告げ候。然るに、飯富兵部少輔承りにて、引入るべき由の上意に任せ、同月十一日、下の諏訪迄、引退き候と申上ぐる。飯富・金丸・春日三人が、諏訪にて聞きし次第、原・島田が口上、今又、小山田が申す所、一々相違なかりければ、小山田は別儀なく、十二月二日、御暇給はつて、郡內にぞ歸りける。板垣彌次郎が逆心、風說に露顯したりけれど、父信形が忠義を思召して、兎角の儀に及ばず。先づ其分にて止めにけり。

武田大膳大夫晴信薙髮の事

武田大膳大夫晴信朝臣、同じき十二月二十日、旗屋へ御出あつて、足利より呼越し給ひし桃首座、片側町の當松庵兩僧を召され、本卦を尋ね給へば、兩僧承り、君の御

本卦は、豐にして、尤も宜しき御生れにて候へども、六二の辭に曰、豐ニ其蔀一、日中見レ計。往得ニ疑疾一有レ字發苦。吉なりといへり。晝より以前は、吉なれども、晝以後虛盈ありと申す詞の、顯はれ候へば、其御思慮なさるべき由、申上ぐる。晴信聞き給ひ、其儀は思ひ當れり。我れ若輩より父信虎に惡まれ、樣々の危難に遇ひ、近年長尾の大敵と、雌雄を爭ひ、其上、上州をも、手に入れんと思ひしに、北條氏康、望みの旨を、義元の取持にして、今は是をも妨げられしなれば、豐ニ其蔀一といふに違はず。日中以後、虛盈あるとなれば、晴信、入道して天命を恐るべし。我れ兼ねて其志あり。故如何となれば、一つに世上の體を見るに、古き家は、悉く亡び失せて、漸く武田家滅亡の時節にも、廻り來りなんと覺えたり。當家は、新羅三郎義光より、代代、弓箭を取つて、未だ家勢を落さず。然るに晴信が時に當つて、國家を失はん事は、末代の恥辱なり。古の平清盛は、身命を惜んで出家入道す。今、晴信は、天道を恐れ、家名冥加の爲めに、入道せん。二つには、人間の定命、六十歳といへり。然る時は、日中は三十歳にして、後の三十年は、日中以後ならんと思ふなり。三つには、我

甲州の遠鄙に居住して、君に仕へ奉る事もなくして、官位の昇進を望まん事、其恐れ少からず。出家入道の身とならば、奏聞を遂げて、大僧正迄も進むべし。是等の慮を以て、晴信、薙髪せんと欲すと雖も、其奥意をいふ時は、世人の知る如く、父信虎を廢去し、自立して國家を治むる事、不孝の罪、萬人に傳へて、誹り何ぞ遁るゝに所あらん。論語は聖人の金言にして、孝道を以て本とすれば、我れ十八歳より以來、終に論語を手に觸れず。これ不孝の過を恥しく思ふ故なり。然れば父への恐なり、早く入道すべし。猶も兩僧蓍(めど)を執り、吉凶を考ふべしと宣ひける。斯くて、桃首座は御旗屋、當松庵は八幡宮にて、其日に蓍を執りけるに、兩方合して、大に吉事の旨なりければ、晴信、喜悅まし〳〵て、小松大和守を使者として、三條左中將實綱朝臣を以て、奏聞し給ひ、明くる天文二十年二月十二日の申の刻、大膳大夫兼信濃守晴信入道出家し給ひ、徳榮軒と號し、道號は機山、法名は信玄とぞ付け給ひける。玄は、唐にては、臨濟義玄の玄、吾朝にては、關山惠玄の玄なりとて、長禪寺の岐秀和尚、號け參らせられけり。斯くて帝都より敕使下向ありて、大僧正の宣下あり。法性院大僧

正とぞ申しける。此時、法體仰付けられ、剃髮しける面々には、原美濃守、入道清岩と號し、山本勘介は、道鬼と號す。これ弓箭の道の鬼神なりとて、信玄自ら號け給ふ。小幡山城守は日意、長坂左衞門尉は釣閑、眞田彈正は、一德齋とぞ號しける。斯くて、同じき廿八日、板垣彌次郎が、諏訪の郡代を召上げられ、長坂釣閑を差置き給ふ。

馬場・甘利、桔梗が原に發向竝時田合戰の事

信玄信州に出馬

武田大膳大夫源晴信入道、法性院大僧正機山信玄、同三月、信州に發馬あつて、五月迄滯留あり。又八月に發向し給ひて、十月迄滯留まし〳〵、春は植田を混ねて、秋は苅田の働あり。諏訪に在陣し給ひて、伊奈・木曾・松本の三方へ手遣あり。馬場民部少輔景政・甘利左衞門尉晴吉を兩將として、小笠原長時在城の深志に、亂入すべしとて、差向け給ふ。先手は甘利晴吉、二の手は馬場景政、桔梗が原へ打出て、郷原・村井を始め、山の根の村々を、放火して攻動かす。小笠原方よりも、軍勢を出し、數

度の合戰迫合ありと雖も、戰ふ度に、馬場・廿利の兩將、打勝たずといふ事なければ、信玄、喜び給ひけり。然るに同じき十一月、小笠原長時、越後へ使者を以て、甲州武田の領內へ、働き給はるべき由、申送られければ、景虎、兼ねて其用意あつて、天文廿一年三月二日、春日山を發向し、同じき八日未明、時田邊の民屋を放火あり。士卒、走り散つて亂妨する事、大方ならず。元より信玄、此儀を察し給へば、越後境に大勢出拔を付置き給ふに、六日の辰の刻、甲府に來つて、景虎、出張の旨を註進す。信玄、之を聞き給ふや否や、其日に、甲府を雷發あり。一騎駈に打たせて、長澤通を押付け給ふ。然るに景虎の、小室の押、早や引取る由の使を、野澤の阿方にて聞き給ひ、扨は景虎、引取るこそとて、揃にもんで打ち給へば、同じき八日の子の刻、時田に着陣し給ふ。越後勢の先陣長尾景政は、三千餘人を雁行に連ねて、地藏峠を刎越えたるに、大將景虎、案の外に、甲州勢、大急に打出でければ、方便相違して、此上は、速に軍勢を引揚ぐべしと、其夜の寅の上刻、景虎、城入道伊庵を以て、先鋒政景の手へ、使を立て、其方の一手を以て、敵と一戰し、引取り候へといひ送り、地藏峠

より須坂迄、手輕く引取り給ひけり。景虎は、姉婿正景と、日頃不快なりしかば、之を幸に、見殺にせんとの謀なりしとかや。甲州の早雄の勇士等、すは、越後勢は引取るぞ。咬留めよと、いふ程こそあれ。飯富兵部少輔・小山田備中守・同左兵衛尉・栗原左衛門尉・眞田入道一徳齋・蘆田下野守等、遁さじと追蒐くる。長尾正景は、景虎に一戰を進められ、大に怒つて、若き景虎に、我れ何ぞ戰の汐を習はんやと、眼をいらゝげ、齒を咬縛つて、三千餘人を一手に立て、地藏峠へ引取るかと見えしに、さはなくして、大返に取つて返し、坂を眞下りに、まくり立て切崩せば、さしもの小山田左兵衛尉・栗原左衛門尉、痛手を蒙りけり。其外、究竟の者に、志村金助などいへる大剛の勇士、數輩討たれて、甲州勢二町計り崩して引退く。山本勘介入道道鬼、先の峠の敵兵、返して助來まじきを察し、旗本の前備の人々に、方便を委しく談じ、前備に控へたる馬場民部少輔景政・甘利左衛門尉晴吉・内藤修理正昌豐、此三手、既に守返す、眞田一徳齋も、遙に引きけれども、一度に喧と守返し、面も振らず鍛いて懸れば、越後勢、少し色めき見ゆる所を、眞田、急に擊勵して、采配を採つて下知

越後勢敗軍

小山田備中守死去

小山田氏由緒

すれば、甲州勢、大に奮ひ撃つて、四方に當り、八方を突いて攻戰へば、さしもの城兵、一戰に打負けて、峠を上りに敗軍す。遁さじと、甲州勢、切所々々に追詰めて、多くの敵を討取りけり。其外、敵、深谷に陷つて、命を殞す者、數を知らず。這々、正景從者二三騎にて、峠を打越し、辛き命を助けられけり。今日、味方に敵を討つ事七百十三人なり。斯くて、味方の討死を算ふるに、都べて三百七十一人なり。

小山田・栗原死去附小山田氏由緒の事

去る時田合戰に、小山田左兵衛尉、痛手を負ひ、樣々療養しけれども、更に其驗なく、同じき廿九日、終に死しければ、嫡子小山田彌三郎信茂、所領都留の郡を辭し申しけれども、累代の所領なれば、何ぞ相違あるべきとて、先規の如く、都留郡一圓に領すべき旨、仰出されけり。抑、小山田氏の由緒を尋ぬるに、武田の先祖太郎信義五代の後胤武田安藝守信宗といひしは、六郎安藝守時綱の家嫡なり。然るに、安藝守信宗、故あつて落魄の身となり。甲州を出奔あり。笛吹峠を越えて、上野より武藏に

至り、瀧山といふ所に、さまよひ給ふ。然る所に、役優婆塞の跡を追へる人と見えて、行ひ澄せる聖あり。信宗の形勢を、倩々と打見て、君はこれ何人ぞと問ふ。信宗答へて、我は甲州の者なり。左いふ御邊は、當國の人かと宣ふ。聖いはく、愚僧は、則ち生國甲州にて候が、君の御姿を見申すに、尋常の人にあらず。委しく語り給へといふ。信宗聞き給ひて、今は何をか隱し申さん。我は新羅三郎九代の後胤、甲州太守武田安藝守信宗なりと名乘り、事の次第を語り給ふ。扨こそ、始めよりたゞならぬ御形勢と見請け候。御物語を承つて、御痛はしく存ずるなり。愚僧は、甲州都留郡の出生にて、小山田氏を名乘つて、數ならず候へども、桓武天皇の末流にて、平氏の者なり。本國の主なれば、此法師が爲にも主君なり。此上は、何にても御爲め宜しき事候はゞ、神命に替へて承り候べしといふ。信宗、大に感悅あつて、然らば、賴みたき事こそ候へ。甲州鹽の山の後に、大なる杉の根を穿ち、武田重代の家寶、御旗・無楯を埋めて、上に落葉を掻き集め、掩ひ藏せり。汝、彼所に至り、取來つて得させよかし。此儀、偏に賴む由を仰せける。彼の僧、安く領掌して、甲州鹽の山に

至り、御旗・無楯を取つて、直に瀧山に歸り、信宗に捧げしかば、安藝守、大に怡悦あつて、我れ本意を達し、甲州に還住せば、子々孫々に至る迄、永く都留郡を與ふべしと、堅く契約ありけるが、其後信宗、甲州に立歸り給ひ、前代の如く、國を治め給ひしかば、彼の聟を召出され、都留郡を與へらる。是の時より、郡内を領して、都留郡に在城し、郡内の小山田とぞ號しける。其時よりして、信の一字を給はつて、代々、信の字を以て、家嫡に傳ふ。爰に又、栗原左衞門尉詮冬も、去る時田合戰に、深手を蒙りしが、四十五日を過ぎて、四月廿三日に、終に死しけるこそ哀なれ。嫡子左近進、二百騎の同心を辭し申しけれども、信玄、曾て免し給はず。然れども、左近進、達て訴訟申しければ、百騎をば、今迄の如く預け下されて、殘る百騎を以て、春日源五郎に預けらる。左近進が辭し申す所、神妙に思召して、左兵衞尉にぞなされける。

武田三代軍記 卷之第八 終

武田三代軍記 卷之第九

板垣彌次郎信里勘氣を蒙る事

扨も今般、時田合戰に、板垣彌次郎が擧動、旗本の前備四手の內にありながら、馬場・甘利・內藤の三將は、粉骨を盡すに、信里計り、一戰に及ばざる事、信玄大に怒り給ふ。板垣が事、諏訪の郡代として、敵・味方の境にありて、酒宴遊興にのみ耽り、其上法福寺合戰にも、虛病を構へ出陣せず。剩へ小山田迄も軍を怠らしめ、亦今度、馬場・內藤等、信里より拔群年老なりと雖も、苦戰を挑む所に、信里若手として、之を餘所になし、暗然として一戰を遂げざる事、更に心得難し、甘利左衞門尉は、信里には、大きに年劣りなれども、日數度の場數を顯し、信玄が證文數通を得たり。信里が同心被官に、名譽の勇士を、多く持ち乍ら、一度も高名なきは如何。信形が嫡

子なれば、尤爲性怯臆未練にはあらじ、是れ忠貞の薄さが致す所なり。加之、諸側輩に横平にし、同心被官を使ふに、我意のみ多く、曾て仁義を以せず。是等の事を面にして、七箇條の書付をなされ、原隼人佐・市川宮内助、兩使を以て仰せられ、同心悉く召離され、信里勘氣を蒙りける。板垣が信州に召置かれ、百二十騎の同心の内七十騎と、甲州にある八十騎と、合せて百五十騎を以て、飯富虎昌が弟の飯富源四郎に、預け下さる。源四郎其時、名を改めて、三郎兵衛尉昌景とぞ號しける。信州にある所の板垣が同心殘りて、五十騎を春日源五郎に預けられ、以前の栗原が同心百騎を合せて、百五十騎の士大將となされ、源五郎を改めて彈正忠にぞなされける。

苅屋原落城附米倉丹後守初めて竹把を造る
幷荻原彌右衛門尉高名の事

上杉憲政管領を謙信に讓る

茲に、東國の管領上杉憲政は、累代北條と雌雄を爭ひ給ひけるが、終に憲政、戰負け勇威衰へ、方便盡きて、去年越後に落下り、上杉の姓名及び管領職を、長尾景虎に讓

武田信玄苅屋原城を攻む

り與へ、本意を遂せん事を望まれしかば、景虎悦び許容して、長尾氏を改め、上杉と號し、越國の管領彈正少弼上杉景虎と名乘られけるが、法體あり、謙信とぞ號せられける。さるに依て、上杉入道謙信、憲政を偕ひ、上野へ出向ひ、上杉家の者共と、軍評定隙なかりけるを、信玄、時分こそよけれと、同じき八月二日、甲府を雷發あつて、小縣表へ打出でられ、左馬助信繁を始め、二三頭を以て、深志の小笠原を押へ、同じき五日の未明より、旗本の前備馬場民部少輔景政・甘利左衞門尉晴吉以下の諸將を以て、太田彌助が楯籠る苅屋原の城を攻められける。城兵何れも、鐵炮手垂の者共にて、矢頃に引受け、散々に打立てければ、楯も鎧も怺へずして、手負・死人大勢なれば、味方大に攻僊んでぞ見えたりける。爰に甘利左衞門尉が手に、米倉丹後守とて、數度武功を顯はしたる大剛の勇士なり。元來工夫巧みにして、大に武事に賢き男なれば、鐵炮を防ぎ留めて、城を攻めん事を深く思慮し、初めて竹把を造る。其形鞍懸の如くにして、敵受の方に、竹を把ねて搔付け、其長け七尺に極めて、矢狹間を明け、内に足輕を入れて、鐵炮を防ぎ、然も進退自由にして、懸るべき時は進み、

馬場景政の高名

退くべき則は退く。之を號けて、牛竹把と稱する。其名の據は、牛能く物を負ひて道路を行く。此器を以て、城門虎口を遮るに、其形、自然と牛に似たればとて、牛竹策と呼習はせり。之を用ひて、狹間を閉ぢ、虎口を破るに、其習あり。斯くて此器を多く作つて、喚き叫んで、城際にぞ攻寄せける。城將太田彌助も、大剛の者なれば、いざや敵を追拂はんと、城門を開き、突出づる事、既に九度に及ぶ。然りと雖も甲州の押、堅固にして、大將長時、後援に出づべきやうなく、今は落城近きにありと、太田思ひ定めし風情にて、同じき十三日の未の刻、宗徒の城兵、前後に從へ、門を開き突出でて、仕寄を押破り、今日を限りに防戰ふ。爰に味方の荻原彌右衛門尉は、城將太田彌助と緣者なりければ、九度の戰に、九度ながら使者に行き、馬場民部少輔が備を借つて働きしが、以前の九度乍ら高名す。然るに馬場・甘利、士卒を勇め馬を馳違へて、急の太鼓を打つて、攻立つれば、城兵戰ひ勞れ、城內に颯と引退く。彌助は、之を物ともせず、逞兵を優り、二十騎計り、馬場が備へ押懸けて、四方八面を薙立つる。されども寄手大勢なれば、中に取籠めて攻立つれば、防ぐに術なく、又城中

荻原彌右衛門の武功

苅屋原城陷る

に引入れんとする所を、馬場が軍勢透さず咬付きて、付入るにせんとするに、城兵も門を立合せんと、火水になれと揤合ひける。されども寄手、否が上に重ねて、競に城戸を打破る。荻原彌右衛門も、同じく城に乘込んで、彌助を目に懸け、追蒐けしに、太田取つて返し、荻原が甲の鞠に、鎌鎗を引懸くる。荻原心得たりと、鎗をたぐり引組み、太田を取つて押へ、首を搔落す。以上十度の駈合に、十度乍ら高名し、首を得る事十一級、殊に城將彌助を討取る事、比類なき働の上、武運に叶へる冥加の武士なりと、皆人感じける。斯くて城を破却して、九月中、信州に逗留あつて、苅田をさせられ仕置等あり。其後歸陣し給ひける。此苅屋原と申すは、深志より程近く、其上上杉入道謙信、當表へ不圖打出てんも、計り難ければ、長々と攻めん事は、如何なり、急に攻落すべしとありけるに、堅固に城を持つにより、日數を取らずんば、落城し難く覺ゆる所に、米倉奇妙の器械を作り、僅か九日を經て、攻落しけるこそ由由しき武略なれ。信玄仰せけるも、此度の軍功は、偏に米倉が肺肝より出でたりとて、甚だ賞美し給ひける。吾朝竹把を以て、城を攻むる事、此時よりの事にして、其

製、右りに出づる事を聞かず。猶ほ後世に及んで、植竹把の製法ありけるとなり。

武田太郎義信鎧着初賀儀附桔梗原合戦
并深志開城の事

武田義信元服

法性院大僧正信玄の嫡子太郎殿、元服あり。今出川右大臣晴季公を、頼み給ひて、將軍義輝卿に申し給ひけるは、信玄苟くも、故萬松院義晴卿より、御一字を給はりて、晴信と名乘り候ひき。今般太郎に、御諱の一字を給はり候へ。信玄が望是に過ぎずと、仰せ入らるれば、義輝則ち、義の字を給はつて、武田太郎義信とぞ號け給ひける。斯くて天文廿二年四月、信州に出陣あるべしと、既に陣觸をぞせられける。殊に太郎義信初陣の用意あつて、吉日良辰を選んで、旗屋に御出あり。飯富兵部少輔虎昌、鎧を着せ參らする。信玄斜ならず悅び給ひ、武略、虎昌にあやからば、天晴武勇の名將ならんとて、則ち飯富虎昌を始め、小幡入道日意・原美濃入道清岩・山本入道道鬼、此四人の者共を、側近く呼び給ひて、信玄自身、酌を取り給ひ、太郎義信の

義信の初陣

盃を下されば、四人の面々大に面目を施して、諸人擧つて、之を羨みける。馬場民部少輔・內藤修理・飯富三郞兵衞・春日彈正以下の功臣、列座して候ひけるが、屋形の忠臣を愛し、武德を尊び給ふ擧動を感じ、涙を流しける。斯くて甲府を發馬あつて、小笠原家を攻干すべしとて、木曾口へ押を手當てありて、桔梗原に押向ひ給ふ。先備甘利左衞門尉・飯富三郞兵衞尉・馬場民部少輔・內藤修理正・春日彈正、是等五頭は、眞先に進んで、既に桔梗原に打出づれば、旗本を始め、後陣の勢は、未だ鹽尻を打越えず。大膳大夫長時は、一家江間治部少輔貞恭・舍弟刑部少輔以下三千餘人を、差向けらる、此勢、五月六日の巳の刻、桔梗原に馳出でて、既に鐵炮を打違ふる程こそあれ、互に鎗を入れて追ひつ返しつ相戰ふ。小笠原戰負けて、六百七十九人討死して、深志を差して引退けば、長時大に怒つて、軍勢底を叩て、其勢四千五百人、桔梗原に押出し、翌七日の卯の刻より、戰を始めて、敵味方馳合せ、鶴翼に開き、魚鱗に閉ぢ、汗馬東西に馳違ひ、旌旗南北に入亂れて、防ぎ戰ひける分野(ありさま)は、唯百千の雷の一度に落懸るかと怪まる。小笠原勢は、今日を限りと、思ひ定めし事なれば、切れ

小笠原敗北

桔梗原合戰

小笠原長時の奮戰

ども鍛けども用ひず、味方の手負・死人を、蹈み越えて、我先にとぞ進みける。武田勢突立てられ、噇と崩れて、二三町計り引退く。長時大に競ひ懸つて、頻に士卒を制せられける。爰に甘利左衞門尉は、遊軍となりて、控へけるが、味方既に崩るゝを見て、浮勢の働、此時なりと、追來る敵を、弓手に引受け、鐵炮を以て打禁め、敵是に漂ふ所を、横入に噇と突入つたり。長時の旗本是に辟易して、足竝四度路になる所を、飯富・春日・馬場・内藤等、悉く備を立直し、一度に噇と大返にす。時に長時の勢、悉く敗走して、右往左往に亂るゝを、大將長時、馬を駐め、義を思ふ者は討死し、譽を子孫に傳へよと下知し、太刀を馬上に拔きて、邊りを拂ひ、向ふ者を竪割にし、近づく者を引違へ差通し、爰に顯はれ彼所に變化して、血戰數々手を碎かれしかども、一陣破れて、殘黨全からざれば、大將の働をも助けず、深志を指して引退く。今朝卯の刻より、軍始まり、巳の刻に至つて、散じけるに、甲州方に、敵を討つ事一千四百九十三級なり。其日の午の刻に、勝鬨を執行はれ、同じき十日、深志の城に取詰め給ふ。斯くて信玄、使者を城中に遣し、急ぎ城を開渡さるべし。御命に於ては、別議

深志開城

候はじと、斯樣に仰入られけるに、長時、返答に申されけるは、當城を枕にして討死せん事、本意なれども、累代の諸士を、悉く殺し捨てん事、長時が心にあらず。諸卒悉く助命あらば、城を明渡すべしと、數度使者の往返あつて、其後、起請文を取替はされ、長時出城し給ひければ、日向大和守昌時を以て、深志の城代とし給ふ。是より猶ほ、信玄の武威強大にぞなりける。抑、武田の枝葉たる小笠原家を、一時に攻亡し給ふ事、其故は、上杉入道謙信、村上義清還住の事に寄せて、信州を討從へんと、小笠原と內通あるに依りてなり。されば年に一度宛、川中島へ出張せられ、內應の事ありけれども、信玄の武威、日を逐うて、盛なれば、思ひの外、信州も手に入れ難しと、思煩はるゝ時節、上杉憲政落魄の身となり、越後に至りて、管領職を與へられしかば、謙信大に悅び、上野國を治むるに於ては、武田・北條は、自ら我が幕下にならんと思惟し、上杉先方の者共を引付け、去年三月より、北條氏康と合戰を始め、當年は曾て、信州へ働かざれば、信玄、此所を見澄し、急に攻入つて、斯く勝利を得給ひける。是偏に、長時の滅亡の時節、到來と謂つつべし。其後、信玄、使者を以て、

小笠原家由來

當家の幕下に屬し給はゞ、少しの所領を進ずべしと、再三言送らせ給ひけれども、曾て許容なかりけり。長時常に申されけるは、元來、武田・小笠原は、其先兄弟にして、逸見冠者義清の子孫なり。武田は嫡流なれども、數代甲州の邊鄙に住し、小笠原は庶流なれども、代々將軍家に昵近し、鎌倉右大將賴朝卿以來、代々武名天下に秀で、弓藝の師範たり。元祖相模守長清六代の後胤、從三位信濃守貞宗、足利征夷將軍尊氏卿上洛の時、隨順して忠戰他に異ならず。其後、義滿公治世の時、四海泰平に治りしに、武藝頽廢に及びしかば、訴訟を達し、將軍家の政事・犬追物を司れり。さるに依つて、代々の武將、小笠原を尊敬ありて、譽を天下に輝かせり。其上、我が四代の祖信濃守清宗は、信玄が曾祖父武田信昌に緣結して、骨肉同胞の好み淺からず。其同肉を喰ふ大惡無道の信玄に、我何ぞ降伏せんや。省よ〳〵惡逆不義の信玄、積惡己を責めて、家運忽に盡きて、國家を失はん事、踵を廻すべからずと、一向義を宗として、信州を出奔し、攝州芥川に至り、一家なれば、三好修理大夫長慶を賴み、廿四年の春秋を送られしに、三好家も滅亡の後は、永祿十二年の頃、北越に漂寄し、

上杉入道謙信を賴み、越國に滯留ある事十六年、天正十二年、陸奧國に立越え給ひしに、會津黑川の驛にして、家人坂西といふ者の爲めに、害せられ給ふこそ、痛はしき次第なれ。

信玄海津城を築く井原美濃守入道勘氣を蒙る事

斯くて武田入道信玄は、信州河中島の內淸野が館を召上げられ、急に城を築くべしとて、山本道鬼が繩張にて、八月朔日に、鍬初あり。同じき十月下旬迄、纔か八十餘日に、普請已に成就して、海津の城と號けらる。本城に、小山田備中守昌辰、二の曲輪に市川梅印原與左衞門尉を入置かれ、同じき十月、春日彈正忠を、小室の城代として、差遣し給ひけり。斯かる所に、同じき極月二日、甲州に於て、淨土宗と日蓮宗と、宗論出來たりけるに、原美濃守虎胤入道淸岩、如何思ひけん、國法を背き、法華宗の方人となりければ、信玄、大に立腹あり。制法を背きし條、其罪輕からずと

雖も、數度忠戰を挑み、粉骨他に異なる者なれば、死罪を恩免あつて、所領を沒收せられければ、馬場景政・內藤昌豐・飯富昌景、心を副へ、美濃入道を、相州小田原へ送りければ、北條氏康、弓矢の智識を得たりとて、悅び給ふ事限なし。

今川義元北條合戰

信玄駿河賀島に出陣附原入道淸岩働の事

天文廿三年、北條氏康、今川義元と矛盾に及ばれけるに、尾州の大守織田上總介信長、武威强大にして、今川家と爭戰半なれば、義元は前後に、敵を受けて、支ふべき方便盡きて、同じき二月中旬、武田家を賴み給ふ。さるに依て、信玄軍勢を引き給ひて、富士の大宮通より厚原に打つて出て、賀島の柳島といふ所に、加藤下野守といふ地侍の居所を、本陣に用ひ給ふ。三月三日、北條左京大夫氏康嫡子氏政、出陣

北條氏政出陣

ある。先陣は松田尾張守・笠原能登守・北條常陸介・志水大道寺以下の者共なり。大將氏康は、天香久山に旗本を居ゑて、池贄の河端に、軍勢を備へらる。甲州の魁帥は、馬場民部少輔景政 小山田彌三郎信茂なり。馬場が手勢五十餘騎に、小幡入道

原虎胤の武者振

日意が同心十五騎・足輕七十五人と、合せて七百餘人、眞先に備へて、其日の辰の刻に、一戰を始めんとす。爰に原美濃入道は、去年より、小田原に在りて、北條家に仕へけるが、紺絲の鎧に、半月の徑五尺計りなる前立打ちたる甲の眞向に、原美濃守平虎胤入道清岩と、象眼入れたるを、猪首に着なし、駮の馬の、其長け六寸もあらんと思はしきに、沃懸地の鞍置きて、小斥候として、出でたりけるが、小幡山城入道が隊に向つて、莞爾と打笑み、小幡が手先へは懸らずして、西の方へ馳向つて、小山田彌三郎が陣へ、切つて入る。小山田、之を眈と見て、如何に若者共、今場中に進む武者は、慥かに原虎胤入道とこそ見えたれ。馬上の骨柄・鎧着の見事さ、備表を乘切る汐相能き手本なり。見習ひて高名せよといひければ、士卒原が武者振を感じ、馳合せんとする者なく、唯見物して居たる處に、進藤何某といへる者、此時浪人にて、武者修行し、劒術を敎へて、諸國を廻りけるが、此時、甲府にあつて、今日、小山田が備を借る。虎胤入道を目に懸けて、三尺餘りの大太刀を、手綱に取副へ、高聲に名乘つて、一陣に駈出でたり。清岩、眈と見て、優しき奴原が擧動かな。忝くも原美濃

入道清岩が鋒に懸つて、黄泉の思出にし、閻魔の廳の訴にせよといふ儘に、太刀を抜いて、盤石も碎けよと、打太刀に、進藤が甲の吹返より、首の骨に懸けて、したゝかにこそ切込んだれ。進藤、是に弱りながら、流石大剛の者なれば、猶も太刀を振立つるを、續けさまに二打・三打打ちければ、進藤、馬上にたまり兼ね、眞逆樣に落つる所を、原に續きて、乘りたる武州江戸の住人太田源六郎、進藤が首を取らんとて、下立たんとするを、入道制して曰、甲州にては彼者、此清岩が方へも、折々出入したる者なり。生きば其儘にして、助けてたべといひて、二人打連れ、靜かに引きける形勢(ありさま)は、天晴一人當千の勇士かなと、敵味方ともに、暫時聲止まざりけり。

賀島合戰附小幡山城入道父子武勇并原入道甲府に歸參の事

斯かる所に、小田原の先手三百騎計りの中より、大剛の者と見えて、唯六騎進み出で、細道を半町計り、蹄(あえ)せ出て、小さき塚の上に馳上げ、味方を睨んで控へたり。爰に

小幡入道父子奮戰

小幡山城入道が一子又兵衞尉、生年廿一歲なるが、數度の場數を顯し、感狀を得る事、十一通。此者共の擧動を見て、願ふ所の幸と、馬を飛ばせて、鎗を引提げ、六騎の敵に渡合ひ、獅子奮迅の怒を出し、追ひつ卷くつつ鍛合ひけるが、難なく三人を鍛留めたり。然る所に、熊井孫四郎藤右衞門といふ小幡が中間悴者、走り來りて、殘り三人をも、渠等二人して討取りたれば、小田原の後陣三百餘騎、轡を竝べて馳合する。父の山城入道之を見て、又兵衞を討たせじと、三百餘騎の眞中へ、諸鐙を合せて切つて入る。馬場民部少輔之を見て、小幡父子を討たすな、續けや者共と、馬に鞭を進めて、駈出づれば、北條の魁帥笠原大道寺、一支も支へず、菊屋川を打渡つて、悉く敗走するに、北條の小將大橋、桑原川中にて取つて返し、采配を揚げて、守返せと、下知する所を、小幡入道追付て、大橋と引組み、水中に百と落つ。我身も三箇所手疵を蒙り乍ら、取つて押へ、首搔落し、采配を添へてぞ取りたりける。然る所へ、一子又兵衞尉も馳來りて、桑原が引取る所を、菊屋川の向ふの岸にて追付き、引組んで落重り、首を搔落し、同じく采配を添へてぞ分捕する。又兵衞も、手疵二箇所蒙り

武田北條今川三家和睦

原入道甲府歸參

ける。斯くて軍も散じければ、討取りし首共を算ふるに、民部少輔が手に、討取る所、雜兵合せて百九十一級なり。大將の實檢に備へければ、信玄悅喜淺からず。馬場・小幡が軍功を感じ給ひける。斯かりける所に、駿府臨濟寺の雪濟和尙と、善德寺の長老とは、肉親の兄弟にて、今川の一族なるが、兩和尙の噯にて、隣國と干戈を動かされん事、無益の至なり。其上、北條家は、今川家と好深し、何ぞ今斯かる事に及ぶべきとて、三家互に和睦あり。信玄の嫡子太郎義信は、兼ねて今川義元の婿に契約あれば、義元の息上總助氏眞は、左京大夫氏康の婿に、氏康の嫡男氏政は、信玄の婿にとの約束にて、和議和調り、武田・北條・今川三家、合體あつて、三方へ陣を引拂ひ給ひける。此度、馬場民部少輔景政、魁として軍功を抽でしかば、同じき五月、今川治部大輔義元より、一禮のため、慇懃の書翰を、景政に送られける。亦小幡父子が忠戰、他に異なりとて、其後、信玄、駿河を手に入れ給ひて、賀島に於て、百貫の所領を、小幡又兵衞に加恩せられける。弘治二年に、三方へ御輿入ありしかば、頓て北條氏康へ、原美濃守入道を所望あつて、甲府に歸參したりければ、氏康大に惜み

給ひける。

川中島對陣附馬場民部少輔景政智謀の事

川中島對陣

去る程に、雪濟和尚の嗳にて、武田・今川・北條の三家、和親調りたる由、聞えしかば、上杉入道謙信、信州發向の軍議ある。是れ武威を隣國に振ひて、諸方の敵國を、怖れざるといふ權謀なるとかや。此時近年、武田家の幕下に從ひし樂岩寺右馬助・依右近進・和田・布下等、隱謀を企て、越後に內通したりければ、謙信大に悅んで、後切の約を定め、天文廿三年六月、信州川中島へ打出で、善光寺の東山に陣し給へば、武田入道信玄も、軍勢を引率し、茶磨山に陣し給ふ。斯くて同じき九日、謙信、武田家に使者を以て、明日、川中島清野の宿を、放火すべき旨を、申越さる。其翌十日、謙信一萬三千餘人を引率し、清野へと押出さる。馬場民部少輔景政、三百五十騎、都合雜兵三千五百の戰兵を以て、いかでか謙信へ、清野へは指をもさゝすべくやと、清野より高畑へ打つて出て、筑摩川を前に當て、山本道鬼が相傳ふ所の必勝微妙の

備を以て、巍々然として控へたり。謙信、素より良將なれば、馬場が備を見渡して、前日の廣言にも似ず、早々人數を引揚げらる。さしも猛勇の謙信、然も一萬三千餘人を以て、馬場が三千五百に、後を見せ給ふ事、互に智勇の擧動なりと、諸人之をぞ感じける。謙信、淸野の宿を燒かざる事を、無念に思ひ、同じき十二日、此頃働きて、井上文左衞門を介錯に出す。布下をば、春日彈正承つて、飯島長左衞門を介錯に出す。和田は旗本二十人頭三澤三郎兵衞承はる。是等四人を介錯にて、四人の者共潔く腹をぞ切りたりける。斯くて信玄、暫く信州に滯留まし〳〵て、七月上旬に、甲府に凱陣し給ひけり。

信玄甲府凱陣

信玄木曾に亂入附木曾左馬頭義昌降參の事

信玄木曾に闖入

天文廿三年八月廿六日、信玄、信州下諏訪に發向あり。木曾口へ手遣ある所に、瀨場降參の儀相調り、御禮として出仕しければ、信玄怡悅まし〳〵て、九月下旬、甲館に馬を入れ給ふ。此瀨場が居城は、木曾に隣りて、殊更大剛の曲者なれば、小身な

信玄屋根原着陣

りと雖も、若し越後へ一味し、逆心を起さば、木曾を退治せんに、大に妨となるべしとて、明くる天文廿四年正月の慶賀として、甲館に出仕しけるを、一蓮寺に寄宿すべき旨仰あつて、甘利左衞門尉晴吉を、討手に差向けらる。瀨場、今は遁れぬ所なりと、主從二百十三人抜連れて、切つて出づ。火花を散らし、血戰數刻に及び、終に同じ枕に死したりける。其後三月七日、信玄、甲府を打立ち給ひ、本山贄川を押通り、習井峠を打越えて、屋根原に着陣あり。此所に砦を築き、木曾左馬頭義昌の居城へ攻寄すべしとて、四月迄滯留ある。斯かる所に、同じき五月、忍の出抜馳來りて、謙信、川中島へ出張の由を告げければ、栗原左兵衞尉に、足輕大將多田淡路守を差副へて、屋根原の砦に殘し置き、信玄は同じき六日に、屋根原を打立ち給ひて、越後勢にかさる虛空藏山の城を、攻め候はんと、使者を以て、いひ送らる。是は樂岩寺・布下以下、謙信に內通し、武田勢を切所に引入れて、討取らんとの企なり。此儀を、飯富兵部少輔を始め、諸勢大に悅び、越後勢を死地に入れて、一人も殘さず討取らん事、此時にありと、勇み合ふ。然りと雖も、信玄、深く思慮し給ひて、敵の働樣を見

て、遠慮あるべき事肝要なり。謙信程の智將、前後に敵を受けて、唯一筋なる切所に入れんといふ事は、彼に大なる謀あればなり。努々謙信城を攻むとも、後より押詰むべからずと、軍使を以て觸れさせらる。斯くて樂岩寺・布下以下内通の色を、信玄悟り給ひて、三人の魁將等に、油斷すべからずと、仰含めければ、虛空藏山の道に、出抜を出し、陣法嚴重にして、備へければ、謙信、日頃の方便、彌々相違して、屋代より引返し、右の道を押通り、信玄の本陣茶磨山の麓、目の下なる所を、靜に打たせて、善光寺の阿方迄引取られしは、天晴ゆゝしくぞ見えにける。其後謙信より、樂岩寺・布下・依・和田四人の者共へ、忍んで飛檄をばせられけるに、馬場景政が出抜、之を搦めて、謙信の狀を奪取り、信玄の御前へ出しければ、今は隱謀明白なりと、彼の者共を召捕つて、誅戮すべしと仰付けらる。上杉入道謙信は、權謀悉く相違して、同月十六日、善光寺通を、越後へ引返されける。斯くて同じき廿八日、四人の者共を切腹仰付けらるゝに、樂岩寺右馬助は、飯富三郎兵衞承はつて、廣瀨鄉左衞門を介錯に遣し、依右近進をば、廿利左衞門尉承り、向はれける。斯くて五日對陣あ

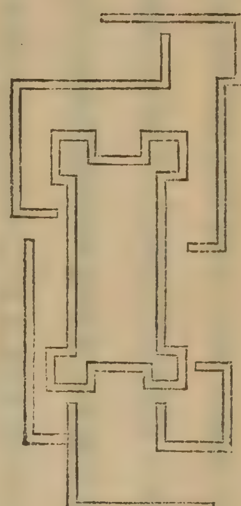
つて、謙信引取り給ひしかば、信玄も凱陣あり。同じき八月廿一日、亦鳥井峠を打越えて、屋根原に着陣あり。其翌廿二日、甘利左衛門尉晴吉を、魁帥として、馬場民部少輔景政・內藤修理正昌豐・原隼人佐昌勝・春日彈正忠昌信、此五頭の士大將を以て、御嶽の城を攻めさせらる。然るに信州木曾と申すは、山より山に續き、盤石峨峨として、古松老柏生繁り、樵夫ならでは、人倫の通ひもなし。案內者はありと雖も、人數を押すべき道なるや否やの程を知らず。爰に於て、如何はせんと、軍議區區にして、衆口一決せず、諸將茫然(あきれ)て、言を出す者なかりけり。然る所に、原隼人佐昌勝、進み出でて申しけるは、往昔源平の爭戰に、源義經朝臣、一ノ谷の後を乘り給ふ時、案內者を求めらるゝに、平山武者所季重、畏つて申しけるは、君は普く日本武尊・田村將軍にも劣り給はざる御大將なるに、今此所に至つて、地の利に屈託御座す事、暗將の擧動に似て、淺ましく覺え候。凡そ良將は、先勝而後戰ふとこそ承れ。此儀は、鎌倉に於てこそ沙汰あるべき事なれ。季重は能く地利を存じて候とて、眞先に進んで、鵯越を乘込んだり。尤も此木曾山は、一ノ谷の後に、十倍したる難所なれ

原昌俊父子相傳の膝の矩

ば、輙く人數を押すべき道にあらず。されども某能く道を知れり。我が後に、從ひ給へといふ儘に、馬に物を能く飼ひ、眞先に打立ちければ、後陣の勢も、是に續きて打たせけり。昌勝が、詞に違はず、總軍何の苦勞もなく、小木曾・溝口なんといふ難所を、事故なく打越えて、御嶽の城へ押詰めたり。是よりして、案內を知らざる山道を押すに、先づ原隼人佐に尋ねらる。さるに因つて、陣場奉行を奉つて、總軍の先に、押させられけるは、此謂れなりとかや。至らずして、遙の地利を貫通する事、掌をさすが如し。〔脫字アルカ〕隼人佐昌勝父加賀守昌俊が相傳にて、不思議の妙を得たり。委しく其故を尋ぬるに、父昌俊は、甲州白畑の住人にて、武田譜代の士大將信虎・信玄二代に當つて、別して武功の數を知らず、大將の寵類なかりけり。或時、昌俊が第に、山伏と思しき者一人來て、旅舍を求めん事を乞ふ。昌俊則ち、之を諾して、渠に對面し、終夜諸國の風俗を尋ね聞き、或は武道の雜談をなしけるに、渠者膝形（ちきりかた）の城取を傳へ、且つ山中に於て、道に迷ひたる時、其是非を辨へ、山を隔て、何方の地利をも知る事を相傳し、暇中して何國ともなく去りぬ。昌俊、不思議に思ひ、家人を

木曾義昌降參

して、其行方を見せけれども、竟に知れず。亦再び來る事なかりけり。膝の矩と申



すは、城捕極意の深祕にして、其矩に、徹通する者、世に鮮し。然れども昌俊、城捕其委しき傳を得ざるが故に、此膝の形を以て、我が家の馬印の紋となして、一本は黑地に白き膝、一本は白地に黑き膝を附けて、大小の纏と定めたり。隼人佐昌勝も父が傳を繼ぎて、山中の地利を知り、則ち膝の馬印を持たせたり。扨福島筋へは、飯富三郎兵衞尉昌景・長坂左金吾入道釣閑・左馬助信繁・栗原左兵衞尉・市川宮內介等大勢を率して、攻入りしかば、木曾勢防戰の術を失ひ、唯茫然たる風情なれば、左馬頭義昌、今は叶はじと思惟して、木曾累代の所領を、一箇所も殘さず差出して、永く

武田の幕下に屬せられん事を望まれしかば、信玄、怡悅の餘りに、本領相違なく安堵の上、姬君を義昌へ遣され、婿になさるべしとの契約にて、頓て歸陣ましましける。其年の十月、年號改元あつて、弘治元年とぞ號しける。同じき十一月中旬、左馬頭義昌父子、甲府に來り給ひ、長坂入道釣閑を以て、御禮を申上げらる。信玄、彌〻滿足にまし〳〵て、則ち姬君を遣され、婚禮の儀相調り、上下喜ぶ事限なし。千村備前守・山村新左衞門尉兩人を、姬君に差添へられ木曾に御輿入あつて、武田の諸士穴山殿、同事に木曾殿と尊敬すべき旨、仰下されければ、義昌大に面目を施し給ひける。此左馬頭と申すは、淸和天皇八代の後胤帶刀先生義賢の嫡子、朝日將軍義仲の末流にて、數代木曾を領し、武威逞しくおはしけるが、武田家一時の武略に碎かれ、忽ちに幕下に屬せられける。

信玄信州發向附諸士賞罰の事

斯くて弘治二年三月朔日、武田晴信入道信玄、信州伊奈に出陣あり。方々に手遣あ

武田上杉對陣

つて、城々を攻めさせらるゝ所に、同じき廿八日、越後の景虎入道謙信、出張の由、聞えければ、早速川中島に發向あり。茶磨山に陣し給へば、謙信は、犀川の阿方善光寺に陣を取り、對陣して居給ひけるが、五月朔日、謙信引取られしかば、同じき六月中旬、又伊奈へ向ひ給ひ、同じき九月迄に、伊奈の諸士を悉く討從へ給ふ。松尾の小笠原掃部大夫を始め、皆々降人となりて、幕下にぞ從ひける。中にも溝口・黑口・小田切・宮田・松島・祇野島・羽生・稻部以下、相從はざる者共は、皆、誅戮に行はれける。其外坂西左衞門尉・一野瀨千久、是等の勢二百騎を、秋山伯耆守晴近が相備と定められ、晴近手前の五千騎と合せて、凡そ二百五十騎の士大將となされ、伊奈の郡代を命ぜられて、高任の城に差置かる。又松尾・下條・松岡、是等合せて三百騎、其外此度、成敗に行はれし伊奈諸士の下にて、武勇の名を得る者共を、五千騎選び出され、此三百五十騎を、飯富三郎兵衞尉昌景に預けられ、昌景が手前二百騎と合せて、凡そ五百騎の大將となされ、先衆の二の手に備ふべしと仰付けらる。海津の城代小山田備中守昌辰を、天飾の城へ移し給ふ。此天飾と申すは、鳥井峠海津の向ふに當

信玄甲府歸陣

つてある城なり。爰に春日彈正忠は、信州先方高坂入道が名跡を繼がせられて、高坂彈正忠昌信とぞ名乘らせられけるに、信州先方の侍三百騎を預け下され、彈正手前の百五十騎と合せて、四百五十騎の將となされ、九千貫の領主となりて、上杉謙信の押の爲め、海津の城に差遣さる。二の曲輪には、小幡入道日意・其子又兵衛尉を差置かる。斯くて同じき十月廿九日、甲府に馬を納められける。

武田三代軍記卷之第九 終

武田三代軍記 巻之第十

上州瓶尻合戰附信玄願書の事

茲に、上州箕輪の城主長野信濃守、武州岩槻の城主太田美濃入道三樂齋道譽とて、兩人共に上杉憲政の幕下にて、各上杉謙信を後楯として、太田三樂は武州を從へ、長野信濃守は上州を伐從へんと相約して、相州の北條と合戰を挑みける。北條左京大夫氏康、熟思案を廻し、越國の謙信·太田三樂·長野信濃守、何れも剛強の者なれば、行々我が領地の妨とならん。幸に甲州の武田信玄は、嫡子氏政が舅にして、親族の睦淺からざれば、甲州にいひ遣し、謙信が働を、信玄に妨げ抑へさせん。信玄、如何に良將なればとて、謙信又さばかりの强將なれば、早速には事行くべからず。其間に、我れ太田入道三樂を退治して、其後、便り能くば、晴信入道をも攻滅

さんと思惟して、弘治三年正月七日、大藤金獄齋を以て、いひ送られけるは、去る天文十九年、武田殿、上州へ發向の儀、思召留り給はれかしと、今川殿を賴み、申送り候へども、武州の太田入道三樂、上州の長野信濃守以下、越後の上杉入道謙信を力として、自立せんと相巧み候。此上は、太田入道は、氏康退治仕るべく候。上州の長野は、貴邊誅伐あつて、上州を御支配候へかしとぞいひ送られける。信玄、深く思慮を廻し給ひ、去る天文十九年の氏康の望を叶へ置かれしかば、此度の氏康の使者、願ふ所の幸なりとて、同じき三月、笛吹峠を打越え〔てカ〕し上州に發向ある。北武藏・西上野の諸將、相集りて二萬餘人、長野信濃守を以て、大將として出向ひ、飯尻に陣を取れば、甲州方には、飯富兵部少輔虎昌・同弟三郞兵衞尉昌景・馬場民部少輔景政・内藤修理正昌豐・甘利左衞門尉晴吉・小宮山丹後守昌友・諸角豐後守昌淸、是等七頭を先として、太郞御曹子義信、同じき四月九日、飯尻に押懸かる。敵將長野信濃守、元より勇猛の陣將なれば、一族小幡・倉ヶ野以下、陣を鶴翼に連ねて、甲州勢を引包み、火水になれと揉んだりける。さしもの甲兵、内藤が備を始めとして、一二町色

長野勢敗北

めき立つて引退くに、長沼長助・同じく弟長八郎・小宮山八左衞門踏留つて、鎗を合せ、四方を拂ひ働きしが、長助餘りに深入して、竟に討死をしてけり。弟長八郎、兄を目前に討たせ、何かは少しも猶豫ふべき。咬付く敵を、前後に受留め、死狂に働くを、內藤昌豐、馬に流鼓を驅け、長沼討たすな守返せと、下知をなせば、士卒一同に蹈悚へて、颯と鎗をぞ合せける。暫く此場改つて、義士等互に死を爭へば、敵軍の旗色、眞原になりて、白々と見ゆる所に、甘利左衞門尉晴吉、右の手先に備へたる飯富兵部少輔が備を、驅越えて、敵の左備武州の天神山大石等が備へ、眞驀になりて、突入り、一戰に捫み崩し、東道一里餘追討にし、取つて返し、又上州勢の先陣小幡倉ヶ野が備に、會釋もなく橫入に、喚いて突入つたり。晴吉、年若なりと雖も、離倫絕類の勇將にて、馬に鞭を副へ、采配を採つて進退す。其形勢、唯猿猴の梢を傳ふに似て、爰に顯はれ彼所に變化して、自ら敵に相當れば、上州勢又大半討たれて、右往左往に敗北す。甲州の諸將、我も〳〵と進み蒐つて、敵を碎けば、總敗軍になりにけり。武田の士卒、馬引寄せ〳〵打乘つて、我劣らじと追蒐くるに、味方を心安く引

せんと、とある切所を、木楯に取つて守返す輩には、土肥大膳亮・友野十郎左衛門尉等、命を義の爲めに輕んじ、鞆を傾け、射向の袖をゆり合せ、必死になりて血戰す。天晴いみじき殿とぞ見えたりける。斯くて追留を限りに、人數を揚げ列を作つて屯せり。大將信玄、諸將を引連れ給ひ、長野が居城箕輪に押詰め給ふに、同じき十二日、上杉入道、河中島へ出張と告げたりければ、信玄箕輪を打捨て給ひて、河中島へ向ひ給ふ。斯くて五月下旬迄、對陣あつて、雙方引取り給ひける。同じき八月、又箕輪へ働き給ひて、近邊の毛作を薙き、方々放火ありけれども、甑尻の一戰に、手竝を見せければ、己々が身に、牆をする風情にて、各居城に引籠りて、攻戰の備をなさゞるにより、同じき十月中旬、甲府に引返し給ひける。然る所に此度、上州甑尻合戰に、御勝利の段、相州小田原より、使者を以て賀し申さる。就ては氏政の御室、懷胎の由を申越されける。信玄寵愛の姫君なれば、大に悅び給へども、初產なれば如何あらんと、心元なく思ひ給ひ、富士に願書を籠められける。其文に曰く

敬白願書意趣者

武田晴信息女北條氏政妻常座平安無病延命、則從二來歳戊午夏六月長(ひとゝなり)一レ可レ拔二丹津之關鎖一、比二垂ル士峯菩薩願轂一。如意滿足不レ可レ有レ疑者也。急々如律令

維時弘治三暦丁巳冬十一月十九日　武田大膳大夫兼信濃守晴信入道信玄

南無富士淺間大菩薩

小田原に、此事を傳へ聞き給ひて、氏康父子大に悦び給ひける。

信玄・謙信和議調はずして又對陣
附謙信所々放火の事

弘治四年戊午、改元あつて、永祿元年と號す。今年二月、上杉管領入道謙信、甲府へ使者を以て、近年兩家弓箭を爭ふ事、偏に村上義清に頼まれ、武の一道を以て、唯止む事を得ざる所なり。所詮此以後、兩家和睦合體し、謙信は越中・能登・加賀を伐從へ、亡父爲景が敎養に備へ、又は上杉憲政、上州平井への還住を、相計り候はんと云ひ送られければ、信玄早速許諾あつて、同じき五月十五日、武田入道信玄・上杉入

謙信信玄和睦

道謙信の兩大將、和睦の對面ある。牛島の渡より四五町大室の方へより、筑摩川を隔て、兩方の川岸に、牀机を立て置き、兩將互に馬より下り給ひ、牀机に凭つて、一禮あるべし。近習の士五人宛、邊りに人を拂ひて、對面あるべしと兼約ある。扨兩將共に、川端に馬を乘寄せられ、兩方既に下立たんとせられし時、景虎入道は、究めて早雄の勇將なれば、信玄に內甲を見られじと、早く馬より飛んで下り、牀机に腰を懸けられけるに、信玄は鞍を搖つて、左右を見合せ、下立振をして、苦しからず候。

謙信信玄和議破る

謙信、早々馬に乘られよと、呼ばはり宣へば、謙信大に怒り、頓て馬に打乘り、營中に馳戻り、使者を以て申されけるは、貴丈、今日の不禮、一向匹夫の爲體にして、更に主將の擧動にあらず。謙信大に憤る所なり。某が元祖鎌倉二郎景弘は、桓武天皇の後裔鎌倉權五郎景政が曾孫にて、右大將賴朝卿に、昵近せしより以來、數代相續いて、今某謙信に至る迄、未だ武勇の名を汚さず。就中予が同流梶原平三景時は、右大將家の侍所の別當を給はり、既に富士の牧狩の時も、梶原は御前の次、其次武田といへる事は、歷然として、嬰兒も知る處なり。其上、八箇年以前より、上杉の

名跡を繼いで、管領職となりて候。貴老の擧動、傍若無人の形勢、更に人倫の交に非ず。向後干戈を動かす事、猶ほ始めの如くなるべしとぞいひ送られける。信玄、之を聞き給ひて、謙信の由なき系圖だてかな。抑〻武田の由緒の事は、普く吾朝に隱れなければ、今いふに及ばず、古の梶原は、右大將家の被官なり。何ぞ武田の太郎信義なんどと、其尊卑を比べん。亦管領職の事は、上杉憲政、武の道を亡却して、賞罰に暗く、民を貪り人非人の行跡故、天罰其身を責めて、越後に逃去り、冥加の盡きたる管領職を讓られ、謙信の管領顏こそ嘲しけれ。信玄曾て、左樣の事を羨まず、夫までもなし。信玄は忝くも、大僧正の宣下を下され、官既に大納言に準ず。謙信無位無官なり。何ぞ我貴殿に對し、何ぞ尾籠の仕方に及ばん。和議を破らるゝの儀、勝手次第たるべし。唯何事も、穩便に事を行はれん事、尤もなりと、返事してぞ返されける。元來、心猛勇の謙信なれば、大に怒り、惡き武田入道が返事かな。安安と渠に計られ、下馬したる事こそ無念なれ。己れ此憤を散ぜんものをと、同じき五月、又信州に出張せらる。折節梅雨、降り續いて、犀川大に水笠增して、激浪岸を

浸しけれども、總勢一同に打入れて、浮びぬ沈みぬ渉しけるに、溺死する者數百人に及べり。謙信之を事ともし給はず、難なく犀川を打渡して、川田山に陣を取らる。信玄も頓て出張あつて、高畑山に營をなされける。斯くて七十餘日對陣あつて、日日に足輕を出し、繩手軍に日をぞ送りける。其後謙信、使者を以て、兩家對陣に、日を暮す事毎度にして、此度は猶ほ數十日に及べり。軍勢の疲勞・人民の困窮、心を痛むに忍びず。所詮運を一戰に任すべし。其方より川を越され候や。又此方より越えて、一戰を始め候はんや。此旨を承るべしとぞ申されける。信玄聞き給ひ、一戰を望み給はゞ、明日貴殿より筑摩川を越さるべし。信玄に於ては、軍を廻すべからずと、返事あつて、夜半より筑摩川の岸に望んで、嚴重に備を立て給ふ。謙信、其夜の寅の上刻、川田山を打立つて、川を越しかゝらるゝかと見る所に、さはなくして、牛島をも打過ぎて、東道十五里下つて、長沼村上の渡を越し、山根の村々に押懸り、武田方に降りたる郷邑を、放火せらる。然れども甲州の軍勢、靜まり返つて控へたれば、猶も二十里計り押込んで、小市邊迄燒立てさせ、煙の紛に、引取らるれば、信玄も

七月十一日、甲府に歸陣し給ひけり。

岩井入道上杉に通ず

岩井入道滅亡井上・須田誅戮同馬場・飯富・甘利飛驒國へ亂入の事

永祿二年二月十二日、大膳大夫入道信玄、甲府を打立ち給ひ、河中島に出陣ある。然るに先年、村上義清と越後へ退きたる清野入道清受軒は、武田家に降參しぬ。高梨の岩井入道も、甲府に從ひしが、去年上杉家、筑摩川對陣の節、謙信調略に依りて、又越後へ志を通ずる由、其聞えありければ、高梨を攻殺し、河中島四郞の諸士の見懲にすべしとて、高梨が居館を巡見あり。越後は未だ雪深しと雖も、若し謙信が後援に出づる事もやと、諸勢は須坂・金井を過ぎて、越後筋を押へ、高坂彈正、一手の勢を以て、高梨を攻めさせらる。斯くて高坂昌信、軍勢を從へ、高梨入道が館に押寄せて、一人も殘さず、撫切にせよとぞ下知しける。岩井が從兵、兼ねて期したる事なれば、神命を惜まず。馳出で〳〵鎗を合せ、手強く防戰ひけり。高坂が勢、之を

事ともせず、爰彼所に攻寄せて、討取りけるに、首を得る事三百餘級、味方の討死八十餘人に及びけり。井上・須田兩人は、中間頭に仰せて、首を刎ねられける。斯くて三人が下にて、名を得る勇士七十騎、選び出されて、馬場民部少輔景政に預けらる。景政、手前の五十騎と合せて百二十騎の將になされける。其外三十騎を、下曾根に預けられ、小室の城代に差置かる。抑ゝ高梨・隅田・井上、謙信に心を通じける。其根元を尋ぬるに、西條山に村上家先祖の社ありけるに、或時、高梨入道を始め須田・井上、彼宮に參詣して、古を慕ひ涙を流し、神に祈りて忽ちに心を飜しけり。是等の陣將、其本を忘れず、義清を信濃に還住せしめん事を、先祖の社にして計るは、大に其理に當りて、天道何ぞ之を捨て給はん。然りと雖も、其胸慮の實否を知らず、己れが邪慾を挿んで、此事を計らば、神明非禮を肯ひ給はざれば、察する所邪僻の企ならん事を、三人の妻子此社を恨めしく思ひ、一時の灰燼となしけることうたてけれ。扨こそ、河中島に逆心の者、斷えたりける。去程に信玄は、海津の城に入り給ひ、暫く滯留おはしける。上杉入道、此事を聞き給ひ、高梨を見屆の爲めに、三月

十八日、河中島に出張あり。川田山に陣し給へば、信玄も高畑に陣を取り、十五日對陣ある。其翌月三日、謙信引入れ給ひしかば、同じき十日に、信玄も歸陣あつて、同じき六月中旬に、又信州松本迄出陣あり。飯富三郎兵衛尉昌景・馬場民部少輔景政・甘利左衞門尉晴吉三人を以て、大將として飛驒國へ差遣はさる。三將、大野通りを押出し、池尻・障子澤を過ぎて、大峠を打越え、平湯迄攻入つたり。江間常陸介・平湯筑前守等、防戰を挑むと雖も、叶ひ難く、敗軍に及びしかば、夫より飛驒・信濃の堺池尻に、砦を築き、木曾衆に、長坂釣閑を差添へ、籠め置かれ、小宮山丹後守昌友を、諏訪の郡代と定め、七月下旬、甲府に歸陣し給ひ、暫時軍勢を休め給ひける。

信玄輕井澤出張幷小幡尾張守信定味方に參る事

北越管領上杉景虎入道謙信、相州小田原へ攻入るべき由、聞えければ、永祿三年二月十三日、北條氏康、甲州に飛檄を馳せて、武田家の加勢を請はれしかば、信玄則ち許諾あつて、初鹿源五郎・青沼助兵衞兩人の足輕大將を、差遣はさる。青沼は、山川

信玄輕井澤出陣
謙信小田原を攻む

迄も所務の勘辨妙を得たれば、諸代官の勘定奉行なり。北條家の富貴如何程なるぞ、此度の序に、見積り歸るべし。初鹿は、今年廿七歲なれども、十六歲の初陣より、數度の譽を顯はせし者なれば、北條家の軍立、士大將より末々小身の者迄も、忠・不忠・剛・弱を能く見定めて歸るべしと、密々に仰あつて、同じき十八日に、信玄既に甲府を御立あり。上杉の堺笛吹峠の此方、輕井澤に着陣ある。斯かる所に、上杉入道謙信、關八州の諸軍勢都合十一萬三千餘人を引率し、相州に押寄せ、大磯・小磯・藤澤・田村・原木邊迄、陣を取り、北條家を一時に、蹈滅さんとぞ議せられける。其武威の盛なる事、火の燃ゆるが如く、風の物を損ふに似たれば、北條家の浮沈、此時にありと、武田家に於ては、各評定とり／＼なり。輕井澤に於て、飯富兵部少輔、信玄の御前に參り、此度謙信、北條家を攻滅さん事、必定なれば、氏康滅亡の後は、駿州の今川殿と當家をこそ亡さんと議せられん。小田原未だ堅固なる內に、笛吹を引取り、甲州より三增峠を越え、花水川へ打つて出て、關東勢をば差置き、景虎と十死一生の合戰を挑まれ、然るべしと、頻りに諫め申しけれども、信玄深く思慮を廻し給ひ、

仰せけるは、信玄此十四年以來、謙信と對陣して、其働を見るに、生得勇猛の將なれども、我が武略に慢ずる氣質あつて、武道未だ練れず。今般謙信、小田原發向に付ては、結局氏康の吉事とならん。其故は關東の諸士、上杉憲政の愚昧を疎み、上州を追出し、氏康に從ひたり。今又、氏康懃に、仁義達をして、賞罰を行ふ故に、諸人此人をむつかしく思ひ、謙信に隨順す。元來短慮の荒々しき謙信、一兩年の中に、關東の諸士に、心を離されん事必然たり。然らば又、北條に降參するより外はなし。此度謙信、十一萬三千の主將となれば、必ず彼の法師、先づ驕慢の心先立たん事、必定なりと仰せける。信玄の推量に違はず、謙信先づ鎌倉に入つて、鶴岡の八幡宮に社參せらる。其威儀嚴重にして、右大將家の格式に準ぜり。然るに武藏國忍の城主成田下總守長泰、從軍に候ひけるが、何れも列居せる中にて、少し頭を持上ぐ。扨も由由しき謙信の威勢かな。さのみ大切もなくして、既に關八州の軍勢十一萬の主將となり給ふ。寔に果報の弓取り、前代にも例多からずと、感思して、不圖謙信の顏を打守り、目と目を眆と見合せけるに、謙信、其儘牀机を立つて扇を持ち、長泰が面を

二つ續けて打たれける。長泰大に怒つて、無念の眼色、面に餘つて見えければ、須破大事こそ出來れと、營中の騷動斜ならず。長泰も、太刀の柄に手を懸けて、既に飛懸らんとせしかども、直江山城守・須田大炊助、左右より取噤め、働せざりければ、成田力なく、頓て己が居城忍にぞ引籠りける。之を見て、關八州の大小名、我も〳〵と本國に歸りしかば、謙信の手勢、一萬七千餘人も、散々に攻擊たれて、小荷駄を多く百姓等に奪はれ、士卒數百討たせて、這々上州平井迄引取り、同じき八月上旬、越後に歸陣し給ひけり。玆に上州小幡尾張守信定・同苗圖書之助といふ者あり。共に長野信濃守が婿なり。大身の者なれば、己が幕下に、屬すまじき事を計りて、圖書之助と心を合せ、信定を追出す。去るに因つて、尾張守去る。正月より申入るゝ仔細あつて、此度甲府に來り、御禮を申しゝかば、信州大日向にて、五千貫の知行を恩賜ある。此大日向といへるは、佐久郡の南目へ手近き所なれば、信定一身の働を以て、南目を切取りけり。信玄喜悅あつて、南目に城を築き、尾張守を入れ置かる。其後信定、西上野の内三箇所の城を、武田家に攻取りしかば、今は安中・箕輪・松井田三箇所

の外は、西上野の諸士、甲府に從はずといふ事なし。然るに今年夏、百日信州岩村田にて、小宮山丹後守に仰せて、拂口和尙を師家と定め、大益坊を江湖頭にて、千僧の江湖を行はる。是武田家にて、數度の合戰に、討死せし諸士の御弔とぞ聞えし。同じき十一月三日、勝沼五郎を誅戮ある。是は上杉麾下の士に、武州の藤田右衞門尉に內通し、武田家に對して、惡逆の企あるに依つてなり。其儀、既に露顯したりければ、飯富三郎兵衞尉に仰せて勝沼の館に遣され、召取つて刑罰せられける。

信玄信州發向、太田切へ働く附鰐嶽落城の事

斯くて永祿四年二月上旬、越後の使者、甲州に着來す。其故は將軍義輝卿へ、御禮の爲め、上洛の望あり。是れ公儀の事にして、私の事にあらず、信玄上を重じ給はば、謙信が歸國に及ぶ迄、某が領地へ出張の事を、思ひ留り給へかし。貴老此儀を承引なきに於ては、謙信が上洛を相止むべし。此條、偏に貴所の慈愍大度の德を仰ぐ所なりと、申さるれば、信玄聞き給ひ、謙信上洛の結構、神妙の至に存ずるなり。

北條援を武田に乞ふ

信玄信州發向

武家の棟梁たらん人は、斯くこそあるべけれ。歸國の節迄は、手遣を相待ち候べしと、返事あつて、使者を返されける。斯かる所に、太田美濃入道三樂、關東の諸士を語らひ、上杉民部大輔憲政を大將として、相州酒匂迄攻來り、安房の里見正木大膳亮は、北條幕下の千葉新助が、佐倉の城を攻動し、正木左近進は、里見家の老臣板倉と共に、相州金澤を乘取りぬ。其外忍・河越の兩城も、越後・上野の者共、攻寄せしかば、氏康父子如何はせんと思慮せられ、信玄に申送られけるは、何卒越後へ出張あつて、所々を攻動し給はり候へかしと、一宮隨巴を以て、再三申されける。然れども謙信への契約相違すれば、信玄許諾し給はず。既に使者三度に及んで、わりなく賴み越されしかば、此上は是非に及ばずとて、武藤甚衞門尉を、先づ海津に遣され、高坂が方へ陣觸ありて、三月十七日、甲府を打立ち給ひ、河中島に着陣ある。斯くて越後堺迄押出し、高坂彈正忠昌信を以て、越後の太田切迄亂入させられ、鰐嶽城を巡見あり、引返して河中島に陣し給ふ。是に依つて、相州に亂入せし上杉勢、悉く引取りしかば、北條氏康父子悅び給ふ事限なし。玆に信州先方の侍大將に、海野・仁科

信玄鰐嶽を攻む

高坂三人の者共は、去年謙信、相州發向の時、寄合密談して、謙信數年信玄と戰はるれども、一度も越後勢勝利を得る事なければ、相州發向と披露し、不意に大軍を以て、甲州を攻滅さんとの計略ならんと推しければ、竊に上杉に志を通じしかば、其事既に洩れて、三人共に首を刎ねられける。此高坂入道は、春日彈正に名字を讓りし者なり。然るに信玄第二の御曹子隆寶と申せしは、今年十八歲になり給へども、盲目にて御座せば、殊に其寵深かりけるに、此人に、海野の名跡を續がせられ、海野が支配せし八十騎を差添へられ、士大將にし給ひ、海野が老臣奥座若狹守が百貫の所領を、千貫になされ、隆寶の後見として、陣代を仰付けらるゝ。又五番目の御曹子、五歲になり給ふ。是は油川腹の若君にて、五郎殿と申しけるを、仁科の名跡を繼がせられ、五十騎の士を預けられ、仁科五郎信盛とぞ名乘られける。斯くて同じき五月、鰐嶽に押寄せ給ふ。若し越後勢後詰する事もやと、先陣を以て、越後勢に手當あり。旗本を以て、鰐嶽の城を攻め給ふに、勇猛の越後勢、神命を惜まず、馳出で馳出で防ぎければ、容易く落つべしとは見えざりけり。されども原美濃入道と、

加藤駿河守昌賴が微妙の謀を以て、終に城を落しける。此時、辻六郎兵衞尉、比類なき働をして、竟に討死をしたりける。大剛の勇士なれば、信玄、惜み給ふ事限なし。辻彌兵衞尉が父なり。斯くて六月下旬、歸陣し給ひけり。

信玄・謙信川中島對陣附武田家軍議の事

去る程に、上杉彈正大弼景虎入道謙信は、上洛を遂げ、將軍家の謁見に入り、彌〻管領職を給はり、殊に將軍義輝卿の諱の一字を給はつて、輝虎と改め、大に悅び、越後に歸國せられける。然るに信玄契約を變じ、太田切迄手遣し、鰐嶽の城を攻落されし事を、大に怒り、十四箇年以來、晴信入道に出し抜かるゝ事、幾度といふ數を知らず。信玄に似合はざる表裏の擧動、兎角言語に絕えたり。急ぎ信州へ出馬して、手詰の一戰を挑み、無二無三に勝敗を決し、晴信が首に對面し、此鬱憤を散ぜん物をと、齒を嚙み怒り罵りて、既に永祿四辛酉年八月中旬、春日山を雷發し給ふ。相從ふ者共には、柿崎和泉守・甘粕近江守・直江山城守・本庄越前守・柴田周防守・山吉玄蕃允・北城

武田上杉河中島對陣

安藝守、是等を宗徒の士大將にて、都合其勢一萬三千餘人を引率し、信州に打つて出て、西條山に陣城を構へ、足下に海津の城をも、攻潰さん爲體に見えければ、同月十六日、高坂彈正忠昌風、飛檄を馳せて、此旨甲府に言上す。信玄扨こそと仰あり。卽時に觸れさせられて、同じき十八日、其勢二萬人を從へられ、浦野を押通り、廿四日に、猿馬場の北に當つたる茶磨山に打上り給ひ、筑摩川の流、雨の宮の渡りを足下に見下し、越後の道を取切つて、五日對陣し給ひける。斯くて信玄、間者を以て、西條山の陣を、候はせ給ひけるに、越後の軍勢、大に屈托し、今信玄、雨の宮の渡りを取切り、越後への通路を留む。此の如くして日を超え月を重ねば、更に糧の運送に便盡きて、飢死するの外あるべからずと、士大將を始め、士卒皆之を憂ふ。然りと雖も、大將謙信、些も驚き給はず、快然として近習の士に、謠を諷はせ、自ら一挺鼓を打つて御座しける。間者歸り參りて、信玄に斯くと、告げ申しければ、信玄此事を聞召し、暫時思案し給ひ、同じき廿九日、海津の北廣瀨の渡を打越えされ、海津の城に軍勢を入れ給ふ。九月朔日より九日迄、互に睨み合ひてぞ居たりける。然るに甲

州の出抜ヌ走り歸つて、始め茶磨山に御陣ありし時は、謙信甚だ機嫌宜しく候ひしが、今海津に軍勢を入れられ候後は、亂舞をも仕給はず、唯默然とぞ座す。然れども軍勢共の悦ぶ事は、大將と背腹に候と言上す。信玄、左思ひつる事よとて、御氣色快然たり。時に飯富兵部少輔虎昌、大將の御前に參り、此度は謙信と有無の一戰を遂げられ、然るべしと申す。信玄、則ち馬場民部少輔景政を召され、此事如何あらんと、問ひ給ふ。景政承り、虎昌が申す如く、御一戰尤もに候と申す。信玄仰せけるは、兩人が申す處、理に中ると雖も、我が家にて、武功に名を得し小幡山城入道日意は、去る六月に病死し、原美濃入道淸岩は、鰐嶽の城攻に、十三箇所の痛手、未だ平癒せずして召連れず。然りと雖も、謙信に重きを討たれざる先に、此方より戰を始め、西條山の陣城をまくり落せとて、山本入道道鬼を召され、馬場民部少輔に軍議して、備を定むべし、朝日急に西條山に懸つて、勝負を決し、然るべしと仰せければ、道鬼畏つて、景政と軍議を相定め、御前に出て、委しく其次第を申上げける。抑ゝ此度、輝虎入道謙信、一萬三千餘の軍勢を率ゐ、深く死地に入つて、危きを見て怖れず、安き

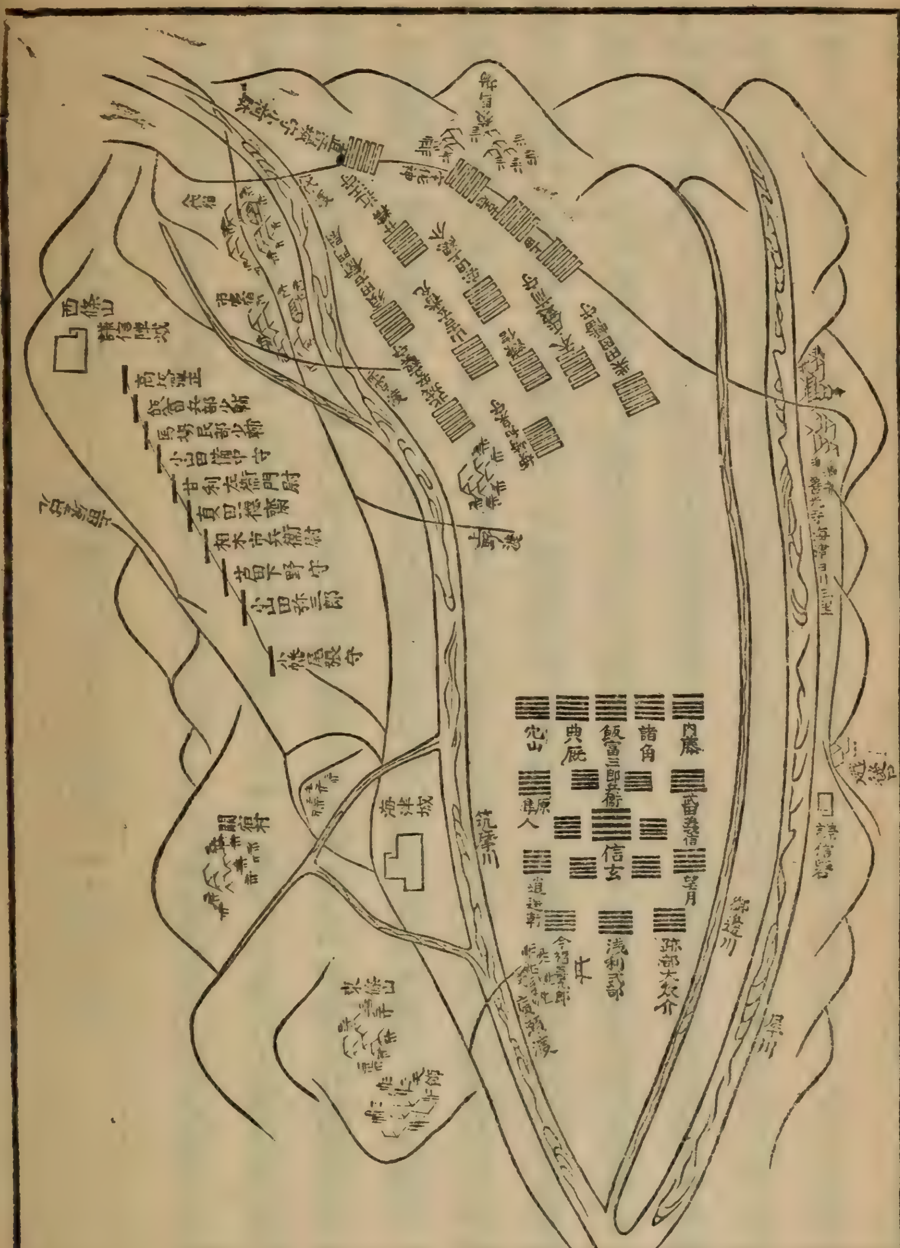
を見て憂ふ。是れ必死の想なり。每度當家の武略に碎かれ、無念の鬱胸、一戰に散ぜんと思切り給ふ事、明かなれば、大に大事の合戰にて候間、先づ味方二萬の人數を二つに分けて、一萬二千を以て、大正の備とし、八千を以て、大奇とす。是れ卽ち御旗本なり。斯くて大正の士大將十頭計りを以て、西條山に押懸り、無二の一戰を挑ませらるべし。其時、謙信、勝つても負けても、西條山を立つて、雨宮渡を刎越し、善光寺の渡を心懸けて、犀川の方へ引取らるゝ所を、旗本の八千人を嚴重にして、川中島に待催け、前後より引包んて、攻擊ち候はゞ、必定謙信討取り候はん事、掌の中に候とぞ申しける。信玄、此旨を聞召し、道鬼が申す所、理の至極なり。然らば手合を定めよとて、飯富兵部少輔虎昌・馬場民部少輔景政・高坂彈正忠昌信・甘利左衞門尉晴吉・小山田彌三郎信茂・小幡尾張守信定・小山田備中守昌辰・眞田彈正入道一德齋・葦田下野守・相木市兵衞尉、此十頭を以て、西條山の一番合戰と定め、其勢一萬二千餘人、今夜子の刻に打立つて、明朝卯の刻に、合戰を始むべしとぞ定められける。扨旗本の前備中は、飯富三郎兵衞尉昌景、左は左馬助信繁・穴山伊豆守信良、右は內藤

修理正昌豐・諸角豐後守昌淸、左の脇備は、原隼人佐昌勝・武田孫六入道逍遙軒、右は太郎義信・望月三郎、後備は跡部大炊介・今福善九郎・淺利式部、凡べて十二備、其勢八千餘人。九日の夜の巳の刻に打立つて、川中島に押出し、西に向ひ、犀川より一里東の方、三枚畑の坤の方に、備を立て、越後勢の退口を切崩さんとぞ議したりける。斯くて西條山には、輝虎入道謙信、海津の城を遙に見渡し、煙氣の立登るを見候ひて、柿崎宇佐神・直江・宇野左馬助等を、呼んで宣ひけるは、信玄、明日は必ず有無の一戰を、遂げんと欲すと見えたり。我れ其術を察するに、甲信の軍兵を二手に分ち、一手は此方へ指向けて、一の合戰を始め、勝敗に係はらず、味方越後へ引退く所を、晴信入道が旗本を以て、川中島に待ち受けて、戰勞れたる我が兵を、一人も殘さず打取らんと、企てたる事、姿の鏡に映るよりも、猶ほ明かなり。其仔細をいふに、海津の城の煙氣を見るに、飯煙兩度に立つ事、必定愚案相違あるべからず。信玄が胸中に入らずと雖も、我之を察する事、其肺肝を見るが如し。然れば謙信、又重手を撃つて、今夜の亥の刻に、雨宮渡りを越え、武田の正兵、此山に向つて、時を移す陣

に摺り違うて、信玄が旗本へ押懸り、無二無三に突き入つて、勝敗を決するならば、如何に智勇の晴信入道なりとも、不意を討たれて、前後を忘るゝ所を、我れ逸散に乘懸つて、信玄が牀机に近付き、惡き法師が首を、鋒に懸けて、日頃我に向つて、尾籠を擧動し、士大將等、殊にさる頃、我が留主の所を窺ひ、鰐嶽の城を攻落したる奴原を始め、しや生首を拔きてくれんず。各其用意せよ。馬は轡を縛り、舌を卷きて嘶すべからず、軍勢は枚を銜ませて、嘩しがるべからず。是れ謙信が生前の面目に、備へ死しては、思出とする合戰なるぞと、一時に觸渡し、謙信既に、介副の武具を捕つて投懸け、件の放生月毛に打乘つて、其夜亥の上刻に、西條山を討立ち、雨宮渡りをば渉らず、遙に川上の八代の渡りを越えて、川中島に打出でらる。元來謙信の軍法に、一人に三人當の飯を、支度しければ、敢て驚かず、靜々と押出されけるは、天晴不敵の擧動なり。猶ほ外聞出拔の手當、嚴密なれば、武田の忍者、其夜近づく事を得ざりけり。

川中島合戰附上杉謙信武勇幷戰場の圖の事

斯くて上杉入道謙信は、其夜八代の渡りを打越えて、川中島に至り、寅の刻に及んで、軍勢の手分ある眞先に、柿崎和泉守二千餘人を押立て、二の身に大將謙信、左は村上の本庄越前守・柴田因幡守、右は山吉玄蕃允・北城安藝守、後備に甘糟近江守一千五百餘人、次は直江山城守、小荷駄奉行となりて、遙かの後に備へたり。斯くて謙信、思ふ儘に手分し、皆二手組にして、雙方互に助け合ひ、一陰一陽なれば、一備敵に當れば、一備は後に繰越し、屈伸往來するを以て、車懸りの要とす。斯くの如く備へて、次第に犀川の方へ近付き寄る。頃しも秋の末なれば、東方既に白なんとするに、朝霧深く、武田の斥候、曾て知る事なかりけり。然るに信玄は、先手の一左右を待ち給へども、更に合戰の是非を、告げ來る事なし。既に卯の上刻に及んで、霧晴れ、四方青々となる所に、遙に南の方を見遣りたれば、上杉謙信、一萬三千餘人を從へ、雨宮の渡りを刎越えたりと覺えて、妹捨山の東川中島の廣原に、大根の打


西條山
謙信陣城
高坂彈正
馬場民部少輔
小山田備中守
甘利左衞門尉
眞田彈正
相木市兵衞尉
芦田下野守
小山田彌三郎
小幡尾張守
海津城
千曲川
犀川
御幣川
内藤
諸角
飯富三郎兵衞
典厩
穴山
原隼人
信玄
望月
逍遙軒
浅利式部
跡部大炊介

懸の繩を、眞先に押立てさせ、忽然として控へたり。武田の軍勢、大に仰天し、備に疑の色を顯はすと雖も、信玄、些とも驚き給はず。信州先方の士に、浦野源之丞大剛の者なれば、謙信が備を見て來れと、仰下さる。浦野、畏つて馳向ひ、頓て歸つて、敵將謙信は、既に引取られ候と申す。信玄仰せけるは、謙信程の者、宵より川を越えて、長夜を待明す程にて、何ぞ一戰に及ばずして、空しく引取られん。但し引取る樣の體は、如何證ありやと仰す。浦野承り、謙信味方の備を廻つて、立切り〳〵幾度も斯くの如くして、犀川の方へ赴かれ候と、申上ぐる。信玄、莞爾と笑ひ、是は浦野とも覺えぬ者かな。汝知らずや、夫は車懸とて、車の廻るが如く、備を繰替へて、幾廻り目に、敵の旗本と我が旗本と打合はせ、一戰に勝敗を決する陣法、甚だ殊勝の備なり。謙信、如何程働くとも、何程のことのあるべきぞと宣ひ、重ねて諸角入道を召され、斥候仕れと仰す。諸角、參りて立歸り、君の仰せに違はず、車懸を以て、頓て突懸り申され候。謙信の旌旗、早晩に勝れて、唯黑雲の起るが如く、必死の色顯れ候。急度御思慮遊ばされ候べしと申す。信玄則ち、山本勘介入道道鬼を、

川中島合戰

御牀机の側に呼び給ひ、謙信既に車懸を以て、追付味方を切崩さんと議する。信玄が旗本小勢なり。假令對々なりとも、大にむつかしき謙信が陣法なるぞ。何卒味方の一萬二千の正兵駈付けたらん迄、會釋ひて合戰を挑まんに、時刻暫くも延引せん事は、味方の陣法の宜しきに寄るべし。速に備を變作せん事を計るべしと、仰下さる。山本道鬼、元來武略神通の者なれば、畏り候とて、須臾に備を催けたり。是れ大奇の備を以て、大正の備を待ち受くる故に、之を號けて、待味方備といへり。其細密の祕法、至つて深々の奇術なれば、暫く之を畧する所なり。此時、左馬助信繁・穴山伊豆守信良、諫言を以て、武田重代の御旗（日の丸に武田菱なり）と將軍の旗は、太郎義信の備に立てさせられ、大將の御纒・孫子の旗一本、御牀机の本に立てさせらる。斯くの如きの大合戰には、良將必ず用ふる所の祕法なり。斯かりければ、上杉の先手柿崎和泉守が二千餘人、鞠を傾け、小旗をうつぶけて、飯富昌景・内藤昌豐が備に、會釋もなく、鬨を揚げて突懸る。兩陣互に喚き叫んで、切れども突けども事ともせず、四方を拂ひ八面に當て、此所に顯れ彼所に變化して、萬卒に面を進め、攻戰

ふ。形勢は、何時果つべき軍とは見えざりけり。飯富昌景、一陣に進み、謙信に廻り合ひ、引組まんとぞ議したりける。内藤昌豐も、士卒を下知し、自ら敵に相當るに、上杉の陣將北城安藝守・本庄越前守、二頭懸けて、左右より挿撃に、さしもの內藤が備、嚾と崩れて敗走す。典廐信繁の備と諸角昌清が備に、須田・安田・山吉等三頭、懸けて切崩す。閧天に響き、鐵砲の音山谷の間に震動し、魑魅坤軸に答へて、天地目下に覆るかとぞ疑はれける。時に安田上總介・須田右衞門尉、士卒を勇めて、命を義の爲めに忘れ、名を後代に傳へて、子孫の耳目に備へよ、一足も引くなと、北より南へ馳通り、西より東へ追廻して、須田と安田、會つては別れ、別れては廻合ふ。越後の軍勢、兩將に義を進められて、味方の手負・死人を、蹈越え〳〵奮ひ戰ふ。左馬助殿の備も七顚八倒して、既に崩れんと見えけれども、信繁、一足も引き給はず、武田重代の緋紺地に、法華經の文書たるを懸け給ひけるが、今日を限りと思ひ給ひければ、則ち解いて臺に上げ、鎧の綿嚙に懸けて、鞍の前輪に括り付け、馬にしさり口を引きて、前後を制し、隙なく鐙をゆり合せ、鞍笠になりて、下知し給ふ所を、敵間

武田信繁討死

近く狙ひ寄つて、鐵炮を以て、逆樣に打落す。此時竟に、左馬助殿の備も崩れけり。敵兵走り寄つて、信繁の首を掻落し、馳歸るを、御被官の山寺妙之介、其敵を追蒐つて、御印を取返し、則ち其敵を討取つたり。諸角昌清も、今は是迄と思ひければ、白身鎗を追取つて戰ふに、多く深手を蒙りて、終に討死をしたりけり。敵兵透さず馳來り、諸角が首取つて引退かんとする所を、同心の石黒五郎兵衞・參河浪人成瀨吉右衞門兩人にて、其敵を討つて、則ち首をも取返す。其餘の備も、各右往左往になりて、敵味方の分ちもなく、唯押立てられつ押立てつ。或は馬上より組んで落ち、首を取るもあり、取らるゝもあり。越後勢には、本庄越前守・山吉玄蕃之允・穴山信良の備を、切崩さんとしたりけれども、穴山、一足も退き給はず、飯富三郎兵衞と二備、始終一足も去らずして、竟に敵を追討にす。其外、原隼人佐孫六入道逍遙軒・跡部大炊介・今福善九郎等、柴田因幡守・北城安藝守等に突崩され、一同に敗走して、廣瀨の渡りに追込めらる。されども信玄、牀机の場を、些とも退き給はず。去るに依て、此牀机の備へ始終少しも動搖せず。穴山信良・飯富昌景・太郎義信、今一備は、信玄の

山本道鬼討死

御牀机所の備、都合四備計りこそ、一足も退かざりけれ。爰に山本勘介晴幸入道道鬼齋は、今日の術を仕損じたりと、西條山の先手歸り來るをも待たず、味方の諸將各討死する上は、是迄と思ひ定め、敵中に駈入り、前後左右に近付く敵を、まくり立て、切散らすに、七騎に手負はせ、十三騎迄切つて落し、終に討死をしたりけり。初鹿源五郎も、敵二十騎計りの中に、取籠められて討死す。斯くて大將謙信は、武田の先手追付け、後より馳付けて、切崩さん事を氣遣はれ、直江山城守・甘糟近江守が備に、軍使を立てられ、隨分怺へて、味方の働を警固すべしといひ送り、金の星甲を着給ひけるが、忍緒を切つて、犀川の深みに打込み、白練の絹を以て鉢卷し、紺絲の鎧の上に、萠黄緞子の胴肩衣を着し、放生月毛の逸物に、一鞭を當て、後は總懸りにせよといひ捨て、唯一騎、三尺六寸の太刀を拔逃し、眞先に駈出て給へば、謙信の牀机備、我れ劣らじと拔き連れて、眞驀になり、太郎義信の備に、切つて入れば、是時、御曹子の備も崩れたり。扨信玄の牀机の備、謙信眞一文字に駈入り給ふに、前後の近習、或は老人共、今は是迄なりと思ひければ、大將の目前にて、涼しく討死

武田義信謙信決闘

をせよといふ儘に、死狂にぞ働きける。謙信は信玄を求め兼ねて、爰彼所と尋ねられけるが、隱居の老人七八騎、同色の出立なれば、見分け難きも理なり。あはや是ぞと見るや否や、鋒逃れに馬上より、三刀迄ぞ切付けらる。時に金丸平八郎（後に土屋右衛門尉と號す）・眞田源五郎・原大隅守、御牀机の場を取圍んで、一足も退かず働きけるが、謙信を取籠め討取らんとする所に、原大隅守、信玄の靑貝の柄の持鎗を以て、謙信の總角と思ふ所を、見上げに礑と突きけるに、實よければ裏かゝず、返す鎗にて、甲の鞠より、馬の組違にかけて、拜打に打ちければ、馬は四足を挑つて、駈出でたり。時に謙信、馬より逆様に落ち給ふを、郎從走り來て、我が馬に搔乘せ、犀川の方へ落行きける。斯くて太郎義信は、卯の花縅の鎧に、白星の甲を着、黑き馬の太く逞しきに、金の馬鎧を懸けて、乘り給ひ、敗軍を集めて居給ふ所に、謙信、横合に吃と見付け、會釋もなく馬を乘懸け、其に控へ給ふは、誰なるぞと問はれけるに、義信も馬を馳合せて、是は信玄が嫡子武田太郎義信と名乘り、二尺八寸の太刀を拔合せて、互に馬上の太刀打ある。雙方手垂の勇將、互に名馬に乘り給へば、急に勝負は見えざ

りけり。されども謙信の打物、遙に其寸延びたりければ、義信の鎧綿嚙の逃れ、冠板・絃走板・甲の吹返、都合十一箇所迄、太刀疵付き、鎧の透間に、薄手二箇所ぞ負ひ給ふ。謙信も草摺の逃れに、二箇所血を引きけるが、其疵や深かりけん、鐙を踏み兼ね給ふ體にぞ見えたりける。既に組打にならんとせし所に、義信の馬廻り二三十騎駈付けしかば、謙信、今は叶はじと、味方の敗軍の中へ打入れ給ふ。然るに西條山に向ひし武田の正兵、其勢一萬二千餘人、謙信に出し拔かれぬることそ安からねと、各齒嚙をなす所に、川中島の鬨の聲、手に取る樣に聞えしかば、須波や合戰は跡にありと、諸鐙を合せて、一騎駈にぞ駈けたりける。高坂彈正昌信、一の先なりければ、雨宮の渡りを、一番に打入れて、直江山城守が小荷駄を切崩す。數百の荷馬、直江が戰隊の中に、飛散りければ、備四度路になりて、右往左往に騷ぎ立つを、馬場民部少輔・飯富兵部少輔、馬を飛ばせて馳來り、鬨を作つて切立つれば、直江が備立足もなく崩れて、犀川の方へ引退く。甘利左衞門尉・小山田彌三郎・同備中守・小幡尾張守・眞田一德齋・葦田下野守・相木市兵衞、各大波を立て、突懸くれば、越後勢、

前後の敵に途を失ひ、散々に亂るれば、始めに崩れし九備、大正の術に氣を蘇して、一度に噇と大返しに返し、急の太鼓を打つて突懸くれば、越後勢竟に總敗軍になりにけり。謙信、今は是迄なりと、宇野民部少輔兼晴が一子左馬助と、上州和田兵部丞が甥の和田喜兵衞と共に、主從唯三騎、犀川に颯と打入つて、越後を指して落ち給ふ。宇野左馬介は、輝虎入道の家にて、軍配の達人なりけるが、謙信に追付きて、犀川の渡り揚りにて申しけるは、今日の合戰、車懸今一廻り遲く候はゞ、必ず信玄も敗北せられて、始終味方の利運ならんに、餘りに君の早過ぎ給ふに依つて、味方の敗軍無念の次第と申す。謙信其儘手綱を返し、己が分にて、謙信が武略をさみするこそ安からね。己が軍配をくり損じて、今日の合戰敗走に及ぶといひ樣に、唯一打に打つて捨て給ふ。其後、謙信、和田を連れて、高梨山に押懸り、危き命を免れ、漸々と落延び給ひける。謙信の乘放されし放生月毛は、長坂左金吾入道釣閑が手へぞ取つたりける。相殘る越後勢は、三枚畑の瀨、又は善光寺の渡りに懸けて、散々に敗走するを、坂東道十一里が間、追討に打つて、首を獲る事、三千百十七級、

越後勢敗軍

其日の申の刻に及び、勝鬨を執行ひ給ふ。御太刀は、馬場民部少輔景政、弓箭は諸我大和入道なり。此戰は、大正大奇の應變微妙の勝利にして、卯の刻に始まる戰は、武田の負軍なり、辰の刻に始まる軍は、上杉の負軍なり。然し乍ら、始終大將牀机の場を去り給はず、越後勢を追討にして、首實檢迄仕給ふなれば、勝は信玄にあつて、敗北の名は、謙信にあり。扨こそ其頃遠國迄も、此合戰の勝敗を聞きて、是非の界を批判せし主將もなかりしとかや。

甘糟近江守川中島退口の事

此時、越後勢の後陣に備へし甘糟近江守は、謙信扶翼の重臣にて、上杉第一の勇將なりけるが、味方悉く敗北せしかども、少しも騷ぐ氣色もなく、一千五百餘人を一手になし、上杉謙信相傳の龍の丸備に作り、靜まり返つて、北を指して引取り行く。然るに信玄の旗本は、始めより越後の道を取切つて、備を立てられし事なれば、敗北の上杉勢逃懸らずといふ事なし。旗本組の備を左へ引取らば、少しく右の方犀川

甘糟近江守武勇

の方へと落行くを、甲州勢追蒐け〳〵討取りけるにより、殘り留る者とては、初度の軍に手を負ふ者、又は戰ひ疲れたる老人計りなり。斯かる所に甘糟近江守、一千五百餘人しまり備の荒手を從へ、少しも臆する色氣なく、味方の旗本の前を志し、靜かに討たせせて引退く。其形勢、前に怖るべき敵ありとも見えざりけり。武田勢之を見て、甘糟とは思も寄らず、大將謙信、兼ねて、信玄に組まんと、思惟せられたる由、聞えければ、旗本へ懸つて、勞れたる軍勢を、切崩さんとの支度ならんと、少し危みける所に、信玄仰せけるは、今朝予に太刀打せしは、正しく謙信とこそ見えたれ。原大隅に打たれて、犀川の方へ落行きけるが、又引返して、今後備を以て、我が旗本に、戰はんとの結構か、是こそ謙信の血氣の勇ならん。是程に勝ちたる軍に、我れ何ぞ心を殘さんやと宣ひて、太郎義信の方へ、軍使を立てられ、早々廣瀨の渡りを越し、引込んで備を立て給へと、仰遣さる。義信、聞き給ひ、先づ信玄公に先へ御越し候へとある。父子辭退あつて、往返の使者馳違ふ間に、甘糟間近くなりければ、此上はとて、信玄、筑摩川を越えて向ふに、備を立て給ふ。是れ初度の戰に、大將父子、

手疵を蒙り給ひ、典厩信繁を始め、名譽の勇將・猛士多く討死し、或は手を負ひ戰勞れければ、別して此儀を、痛み思召す體なり。時に內藤修理・原隼人佐・跡部大炊介等、仰を奉り、散走の兵を集めて、犀川の端に屯し居たりけるが、夫れ餘すなと、いふ程こそあれ。三將喚びて突懸る。甘糟、少しも騷がず働けども、士卒悉く敗走して、右往左往になるを、爰にて又大勢討取りたり。爰に甘糟が備より、白き羽織着たる武者三騎、取つて返し、殿して突拂ひ／＼引退く所を、小幡虎盛が嫡子又兵衛尉・遁さじと追蒐けて、三騎に渡り合ひ、二町計りの間にて、竟に二騎をば討取りたり。其身も疵を蒙りけるが、一人を討洩しぬるこそ、安からねと怒るを、郎等の熊井孫四郎、頓て追付きて、其敵を突き落す。飯富虎昌・馬場景政・甘利晴吉、此働を見屆けて、委しく言上したりければ、信玄、感悅座して、又兵衛尉、今年廿八歲、父入道が如く再拜を御免あり。感狀に、長刀添へてぞ給はりける。斯くて甘糟、今は主從僅かに十三人に討なされ、兎角して、犀川を打渡り、敗軍を集めて、又三百騎計りにぞなりにける。然れども猶ほ、此所を去らず、三日逗留して、其後越後に引返しけるは、天

晴倫を離れたる働かなと、武田家にても、大に之を感じける。其後十日計りの間は、大將謙信なりとぞ沙汰しける。謙信、後に宣ひけるは、信玄が旗本に、切入りたりし時、大勢紛れ安き出立あつて、決して夫と定め難く、笠形の甲着たるを若しやと思ひ、唯一打にと切付けしかども、士卒の鎗に驚き、馬飛出でたれば、本意を遂げざりし。我れ鎗を持ちたらば、一突に鍛留めん事、掌中にあり。是も信玄が武運の強き印なりと申されける。扨も信玄の御舍弟左馬助信繁の討死の爲體、天晴潔き形勢、古今殆んど稀なりとて、敵味方都べて之を感じけるに、其頃の良將、敵ながら謙信を始め、織田信長・北條氏康、各感じ給ひけるとなり。信繁、日頃宣ひけるは、我は屋形の厚恩の者なれば、晴信入道の、爰はの大事といひし時、眞先に進んで、討死をせんぞと仰せけるが、果して其言の違はざりけるこそ有難けれ。

武田三代軍記　卷之第十　終

武田三代軍記 卷之第十一

松山開城附上杉謙信山根の要害を攻落さるゝ事

武田大膳大夫入道信玄、甲府の館にして、永祿五年壬戌正月元旦の賀儀あり。同じき七日に、相州小田原より、北條氏康父子の使者來りて、申しけるは、武州松山の城は、上田又次郎入道暗礫齋を入れ置き候所に、近年敵方へ攻取られ候ひしが、太田美濃入道が計らひにて、上杉民部少輔憲政の末子左衞門大夫憲勝を、籠め置き候ひき。氏康、松山を攻め候はゞ、上杉入道謙信・里見兵庫頭義弘是等を賴み、太田入道後詰仕らんと、相紛致候由、此度に於ては、是非に信玄御馬を出され、御加勢あつて給はり候はゞ、松山の城を攻取るべく候と、種々に賴み越されけり。信玄、止む事を得給はず、嫡子太郎義信と共に、同じき二月廿八日、依路南目より、武藏國に發向

信玄松山城を攻む

ある。北條氏康大悦あつて、嫡子氏政・二男源三氏照・武田入道信玄・嫡子太郎義信、兩家の軍勢四萬六千餘人、松山城に押寄せて、息をも繼がせず、攻めたりけり。城中、鐵炮の手垂多かりければ、矢頃に引受けて、散々に打出しゝかば、手負・死人數百人に及びけり。然るに武田の先鋒甘利左衞門尉晴吉が同心頭米倉丹後守、先年信州苅屋原の城に於て、竹把を作つて、忽に城を乘取りけるが、此度も又是に習ひて、武田の軍勢、件の竹把を以て、ひた〳〵と攻近付きて、水の手を攻取らんと、竹把を繰寄せ〳〵攻上りけるに、日向大和守昌時が嫡子日向藤九郎は、鐵炮の上手なりければ、諸卒に先立つて、矢狹間を閉ぢ、さか〳〵しく働きければ、城中の手垂共、

米倉丹後討死

餘すなと、爭ひ放つ鐵炮に、忽ち胴中を打拔かれて、終に討死をしたりける。米倉が嫡子彥次郎も、同じく劣らず働く所を、一の板を押へ付け打徹され、大地へ百と倒るれば、從者走り寄つて、肩に懸け引退く。然りと雖も、未だ死せず、胴の中へ血落ちたりければ、腹大に張りて、既に息絕えんとする時に、側なる者のいひけるは、蘆毛の馬の糞を水に和し、呑み候へば、血を脫する事ありとて、則ち求めて水に和し、

彥次郎に與へんとす。彥次郎、父に劣らぬ大剛の者なれば、眼を開きいひけるは、我れ心元を前より後へ打拔かれて、爭でか命を助かるべき。迚も死すべき命なるに、彥次郎こそ一命を助からんとて、馬の糞迄呑みたるなんどと、死後迄も人に嘲けられん事、無念の次第なるべし。武士の戰場に死する命、是こそ望む所なれと、頭を振つて、呑まざりけるを、甘利左衞門尉晴吉來りて、彥次郎が平生の志とも覺えぬ物かな。尤も深手なれば、存命不定なり。然りと雖も、若し血を脫し、疵平癒せば、君への忠節、父母への孝行、何事か是に如かん。衆愚の誹らん事を恥ぢて、忠孝の重きを忘るゝは、武勇とするに足らずとて、晴吉、彼馬糞を馬柄杓に請けて、快く呑み舌打して、風味能きぞといひて、手自彥次郎に與へければ、米倉、淚をはら〳〵と流し、近頃誤りて候。御志の辱さ、假令一命を繼がずと雖も、未來に於て、何ぞ忘れんといひて、押戴き、一滴も殘さず、呑んだりけり。忽ち腹中の血、一桶計り瀉して、疵程なく平癒す。之を見て、甘利が同心を始め、郞從等感淚を流し、彌〻晴吉に親み付きける。信玄も之を聞召し、晴吉が忠貞、士を愛するの志を感じ給ひける。斯くて當

松山開城

上杉輝虎松山發向

手の攻戰嚴しく、鐵炮の鋒き事、恰も梅雨の如くなれば、中々攻取るべき體には、見えざりけり。されども甘利晴吉、眞先に進み、終に水の手を乘取りしかば、大將上杉左衞門大夫憲勝、二の曲輪に居たりし廣澤尾張守信秀、防戰の術を失ひて、唯茫然てぞ居たりける。さるに依て、氏康、勝式部丞を城中に遣して、城を明渡すべき旨をいはせらる。勝は、美濃入道と舊友にして、其交深かりしかば、城中に入りて、之を謀る。憲勝・信秀、弓折れ矢盡きたる勢なれば、流に棹す心地して、忽ち城を明渡しぬ。氏康、本意を達し、又上田又次郎入道を、城代とぞせられける。太田入道三樂・見田彈正忠、越後へ急を告ぐる事、唯櫛の齒を引くに異ならず。輝虎入道、大に驚き、八千餘人を引率し、松山の後援に發向せられしが、落城の後二日目に、廐橋に着き給ひ、太田入道を呼んで大に怒り、斯樣の臆病至極の奴原に、城を持たせ、謙信に後詰せよとて、呼出しぬることそ安からね。我に恥辱を與へんとの事ならば、三樂と討果さん者をとて、太刀の柄に手を懸けて、眼色に血を濺ぎ、齒は咬切つて、居長高になり給ふ。氣色、唯今三樂打つて、捨てられん勢なり。されども三樂齋、

大剛の者にて、些とも臆せず、さん候。城中には兵糧・玉薬・弓矢・鐵炮・薪水等、澤山に入置き候へば、持ち怺へ申さん事、輒く候へども、皆是れ憲勝といへる不覺仁が所爲、扨は三樂が誤り、偏に恐入り候と、兵糧馬の大豆・玉薬等の書立を差出し、其上憲勝が子と弟とを、人質に取置き候とて出しければ、謙信二人が髻を一つに摑んで、あへなくも提切りにこそし給ひけれ。爰にて謙信、色を直し、盃を乞うて三獻干し、三樂を近く呼んで、信玄・氏康兩旗にて、多分五萬計りにてぞあらんと仰せければ、さん候。氏康父子三人、信玄父子凡そ六人の主將、都合軍勢四萬五千餘人とこそ承り候へと申す。謙信打笑ひ、義信・氏政如きの子共などは、何人もあれ、唯幾度も信玄といふ曲者こそ、予が病となる者なれ。兎角多數にては、思ふ樣に、武略も顯はれ難ければ、唯逞兵を傚つて、八千人を從へたり。武田・北條兩家の人數五萬計りに、唯八千を以て切勝ちなば、譽を天下に顯はすべし。味方元より小勢なれば、負けても恥にならず。然れども直に戰を挑まんとせば、信玄、思慮の深き者なれば、自由に戰を締すべからず。此邊に、北條家の要害はなきかと問ひ給ふ。三樂承り、是

謙信山根城を攻む

より三十里を隔て、山根の城とて候が、日歸りの路にて候といふ。謙信、大に悦び給ひ、夫こそ究竟の事なれとて、頓て武田・北條の兩家へ、使者を以て、謙信、松山後詰の爲め、罷向ひ候へども、上杉憲勝といへる臆病者、早速にして、開城致し、以後に至りて着陣す。嘸いひ甲斐なく思召さん。然れども謙信、是まで罷出で、空しく歸り候はん事、兩家へ對し、弓箭の慮外に似たり。さるに依つて、山根の要害を攻めて、城兵を鏖にせんと存候。兩旗を以て防がんと思召し候はゞ、如何樣とも御働き候べしと、いひ送り、翌卯の刻に、厩橋を打立つて、刀根川二本木の渡りに、舟橋を懸けさせ、諸卒悉く渡つて後、舟橋を切落し、必死の術をぞし給ひける。是れ韓信が嚢沙背水の謀と謂つべし。謙信、直に兩旗の前を、靜々と押通り給ひて、山根の城に押寄せて、一日一夜、息をも續がせず、攻められける。城內の士卒に、須田五郎左衞門・松山兵部丞、忽に心を變じて、搦手の山手の門を開き、越後勢を引入れしかば、城中の軍勢周章て、前後を忘じ、途に迷ふを、追詰め〳〵、女童の差別なく、一人も殘さず、撫切にして、次の日は本の道を、厩橋に引返し、厩橋の城主長尾彈正入道謙

山根城陷る

忠を呼出し、汝も太田三樂が如く、山根の案内者に參るべき者なるに、臆病至極の擧動なり。是れ味方軍勢の見懲なりとて、拔打に切離され、謙忠が手の者二千餘人、悉く誅せられ、厩橋の城には、北城丹後守を、入れ置き給ひ、越後に歸陣し給ひけり。謙信、智謀深き故、武田・北條兩家、四萬千人を以て、謙信が八千の小勢に對し、合戰は締ぶべからずと察せられて、山根の城を攻取り給ふ。此時氏康、信玄の心を引見んとて、合戰を挑む所を挑まず、逆に晤然として、之有りし事、千萬後悔に候と、いひ送らる。信玄、仰せけるは、氏康、今年四十八歳、某四十二歳、謙信卅三歳なり。然るに、若大將の謙信、一人を相手にし、貴殿と我老氣なくも、然も大勢を以て合戰し、勝ちても負けても、大に恥にて候と、取敢ず返答をし給ひける。此時次でに、上州長野が様子を試んと、飯富三郎兵衛尉昌景を以て、箕輪に差向け給ひけり。

上州法坊寺口合戰附赤石豐前守土肥大膳亮殿の事

爰に、上州箕輪の城主長野信濃守・在原業政、去年五月、討死したりけるを、其子、父

法坊寺口合戰

が遺跡を繼ぎて、又信濃守と號す。斯くて武田勢、箕輪へ發向すと聞えしかば、不知馳向つて、防戰すべしとて、法坊寺口に打出て、兩陣互に打合せて、一聲鬨を揚ぐる程こそあれ、飯富昌景が備より、古畑伯耆守・小菅五郎兵衞、一番に鎗を入れ、火花を散し相戰ふ。長坂宮內左衞門尉・辻孫兵衞・早川彌三左衞門、相續いて、鎗下の高名す。暫時入亂れ、颯と引いて互に息を休め、又駈合せて捫合ひけるに、此度は、三科肥前守・西卷監物・廣瀨鄉左衞門、一番に鎗を入れば、辻彌兵衞・渡邊三左衞門・和田加介、鎗下の高名して、猶ほ敵中に切入りけるに、敵兵も爰を先途と防戰へば、雙方又戰勞れ、少し猶豫ふ所を、飯富昌景、采配を採つて、敵に足を留めさすべからず、速に進んで切崩せ。曲淵庄衞門はなきか、鎗を入れよ。廣瀨・三科はなきか、組んで高名せよと、下知すれば、上野豐後、眞先に進んで、鎗を打入るゝ。是に續ぎて、辻彌兵衞・早川彌三左衞門、繼げや人々といふ儘に、眞驀になつて突懸る。又曲淵庄左衞門・廣瀨鄉左衞門・猪子才藏等、面も振らず突入りて、千變萬化に顚倒して、神命を惜まず攻戰へば、箕輪勢討負けて、我先にと敗走す。武田勢追蒐つて、餘すなと婈留

むる。爰に土肥大膳亮・赤石豐前守、取つて返し、追懸る味方を、突拂ひ〳〵、殿となりて、甲州通りを引退くに、赤石豐前守、何とかしたりけん、竝木の立續きたる中に、兎角の木の茂り合ひたるに、差物を引懸けたり。豐前守如何はせんと、身を挧めども、下立たん樣もなく、爲方盡きて、大膳を呼返し、天運の盡くる處か、指物を竝木に引懸けたり。捨て歸らば、末代の瑕瑾ならん、見屆けて給へといひければ、大膳、心得たりと、取つて返し、馬よりゆらりと飛下り、件の角を、二人にて切倒し、難なく指物を取つたりけろ。斯くて時刻移りければ、兩人思惟して、我々斯樣の難にて、留まる事を知らず、味方不審に思ふべしとて、兩人が乘りたる馬を、味方の方へ引向けて、したゝかに鞭を當てければ、二匹の馬は、逸散に馳けて、引取る味方の中に飛入りたり。扨は兩人は、討死したるか、左なくば敵に咬留められて、歩立になりて、防ぎ戰ふと覺えたり。之を見捨つるは、勇士の器にあらずとて、志の士卒、思々に取つて返しけり。去る程に兩人、彼の角を切倒し、路に横へ枝葉の茂みを、木楯に取りて、付慕ふ敵を、待ち懸けたり。斯かる所に、長野勢、追々に守返して、百騎

計り屯して、馬の鼻を竝べければ、武田勢、之を見て、大木を引渡して、敵大勢、其陰に控へたり。如何術を催けたる體なりとて、馳重りし者共、少し猶豫ひける程に、今は夕陽、西山に傾き、既に黄昏に及ばんとす。昌景采配を採つて、士卒を制し、長追をすべからずと、頓て軍勢を引揚げたり。翌日昌景、松山に歸り、右の次第を言上す。是れ兩和田、昌景に內通して、武田家に心を通じけるにより、思ふ儘にぞ働きける。夫より氏康・信玄引分かれ、歸陣に就き給ひける。

飯富昌景松山歸陣

小柴見宮內誅戮竝武田四郎勝頼伊奈郡代の事

爰に、信州朝日城主小柴見宮內といふ者あり。去年川中島合戰の時、甘糟近江守が犀川の向ふに、三日逗留せしも、此宮內が志を通じけるに依つてなり。此事、粗ぼ露顯せしを以て、急ぎ誅すべしとて、荻原彌右衛門尉、仰を奉る。且つ又、高坂彈正が方へも、密に仰遣されければ、彈正、海津の同心を、二三十騎忍びて、彼方へ差向くる。荻原、則ち信州に至り、同じき五月十三日に、小柴見を誅りて、善光寺へ引出

し誅しければ、信玄大に感悦あつて、褒美として來國俊の太刀を、荻原に恩賜ある。
爰に又信玄の四男四郎御曹司と申すは、故諏訪賴茂の息女の腹に、出生ありし御男子なり。母堂の寵み深かりければ、信玄、此四郎殿を愛し給ふ事、大方ならず。依りて故賴茂の名跡として、信州伊奈の郡代になされ、武功の者共を、多く附けられて、高遠の城へ差置かれん事を、思召すと雖も、嫡子太郎殿の心中、計り難く思召し、同じき六月、飯富兵部少輔・長坂釣閑・跡部大炊介、此三使を以て、四郎に諏訪の名跡を繼がせ、伊奈の郡代となして、安部五郎左衞門尉・小原下總守・舍弟丹後守・秋山紀伊守・跡部右衞門尉・向山出雲守・小田切孫右衞門尉・竹內與五左衞門尉、是八人を附けられ、高遠の城へ差遣さるべき旨、太郎義信の方へいひ送らる。義信は嫡子なりと雖も、四郎に覺え劣りたる樣に、兼ねて憤り思はれけるに、今又安部・小原以下の功臣を、四郎に附けて、諏訪の郡代とせられん事、快からず思はれけれども、父の仰なれば、兎も角も御心中の通りに、仰付けらるべしとの返事なれば、則ち諏訪の名跡となされ、高遠に差越されて、伊奈四郎勝賴とぞ號せられける。

信虎入道、信玄に密意をいひ送らる附舅人狂歌の事

永祿六年正月七日、遠江國懸川の圓福寺といふ寺より、律僧一人、甲府に來り、長坂左衞門入道釣閑を以て、申しけるは、左衞門尉信虎入道、今川氏眞と不快の事出來り、去年より圓福寺に、御移り候が、當春御上洛あるべきに付、仰渡され度事候由、小身なる人々の內に、信玄御心を置かれず、身近く召仕はれ、然も忠貞ある者一人、御遣し候べしとの仰にて候と、申しければ、先づ彼使僧を留置かれ、同じき十三日、日向入道源藤齋に仰付けられ、使僧と共に、遠州に遣さる。同じき十七日、圓福寺に着きしが、其夜に、信虎謁見あり。日向源藤齋とは、汝が事か、何者が子なるぞと、尋ね給ふ。日向畏つて、某儀は、日向大和守昌時が一族にて、信州の者に候ひし。君、甲州に御在世の時分は、若輩にて、昌時が方に養はれ、罷在候ひしと申す。入道聞き給ひ、譬ひ何者にもせよ、信玄に昵近する者ならんには仔細なし。近く參るべしと仰す。扨、仰せられけるは、信虎、信玄に方便られ、去る天文七年、駿州に押出され、

信虎今川氏眞と不快

既に廿六年の春秋を送り、漸く齡七旬に及べり。予甲州より、浪落せし翌年、駿府にて一子を儲く。武田上野介と號す。然れども今川義元、禮儀を守り、甲府にありし時の如く、崇敬せられしかば、今川家領國の諸士、予を恐るゝ事、大方ならず。上野介をも小舅なりとて、重く會釋し、二十騎の士を預け置かれしなり。又去る天文十四年、上野介が妹を儲く。是は義元の取持にて、今出川大納言晴季卿を婿に取りて、婚禮を執行ひしなり。又上野介十六歲にて、一子を設く。伯父信玄の果報に靈體とて、信玄の稚名を付けて、勝千代丸と號せり。當年十歲かと覺えたり。然るに、去る永祿三年五月十九日、尾州桶狹間に於て、織田信長が爲めに、義元討たれて後、嫡子上野介氏眞、信虎を以て、外祖父の會釋にせず、其上己が寵愛の美童を、元服せさせて、三浦右衞門尉と名付けて、萬事渠が計らひ故、入道父子が事を、氏眞に讒言しけるにより、愚昧の氏眞、實と思ひ、予が父子に疎く、あれども無きが如くなれば、去年より此圓福寺に立退きて、恨めしき月日を送りたり。斯くして朽果てんも口惜しく、近き內に上洛して、今出川惡相を便り、都の中にて餘命を送り、將軍にも謁し

奉らんと思ふなり。然れば上野介は、信玄の弟なれば、此父子の者共を、如何樣とも賴むの間、見捨て給ふべからずと、懇に申せとぞ宣ひける。斯くて深更に及んで、人皆靜まりて後、入道殿、源藤齋を側近く招き寄せ、汝信玄が腹心の者とあれば、心を置かず、密事をいひ送るべし。曾て他人に泄すべからず。我信玄に恨ありと雖も、過ぎて久しき事なれば、其憤を含む事なし。熟思するに、信玄、予を廢去せる事、其謂なきにあらず。晴信入道は、良將の器に當り、武威天下に輝き、譽四海に轟く。信州を悉く伐治め、飛驒・上野をも、追付殘らず平均せらるべき由、風聞す。爰に於て、倍信虎が誤の程を知れり。斯く隣國を討從へ、威を東山・北陸の間に、振はるゝと聞けば、入道が祝着、是に過ぎず。親の子を思ふ事、人情の習なれば、數年父子の間を、義絶すと雖も、惡かれとは露思はず。上野介其外、多くの子共に、思ひ代る事なきぞとよ。扨今川家の滅亡も、十年とは延びじと思ふなれば、此儀に付て、晴信入道、思慮あるべき事なり。今川家の內、調はざる仔細をいふに、三浦右衞門尉といふ佞臣、氏眞、寵に誇り、私欲を以て、民を貪り、累代の功臣等を侮り妬み、老臣

朝比奈兵衛大夫を始め諸士、氏眞を恨むこと、皆是れ三浦一人が爲す所なり。加之四の宮右近が妹に、菊鶴といへる女は、故義元寵愛の妾なりしに、義元討死の年よりして、彼右衞門尉密通して、曾て世の聞えを憚らず。然れども諸人三浦が權威に怖れ、氏眞に知らする者なし。此事をば若し信虎など、氏眞に告ぐべきかと、疑ひ思ふが故に、信虎を惡み、讒言する名越與七・濱田小大夫等が如く、追從輕薄の者共は、三浦が氣に入らんとて、予を甲斐の武田膏薬入道と異名を付けて呼ぶ。皆是れ氏眞の愚なるが致す所なり。さるに依て、德川家康も氏眞を見放し、織田信長と心を合せ、氏眞を押倒さんとの催しと見えたり。とても滅亡に及ぶべき今川家なれば、參河・遠江・駿河三箇國を、むざ〳〵と人の物になさんよりは、信玄伐取り給へかし。此事能々思慮せられよ。但し北條氏康は、氏眞の舅なれば、若し加勢などすべきか、又氏政は、信玄の婿なれば、此儀は定めて、信玄の胸中にあるべき所なり。此段跡つて、竊に泄さず申すべしと宣へば、日向承り、仰にては候へども、御口上計りにては、爭てか申上候べき。御墨付を給はるべしと申す。入道、聞き給ひ、愚なり。

信虎入道上洛

源藤、書面を以ていふならば、何ぞ汝を召寄すべき。斯樣の大事をば、書付にはせざる者なりとあれば、日向重ねて、某仰を承り、諸國の密使へ參ると雖も、證のなき事を、曾て用ひ給はず候はゞ、御判を居ゑて、給はり候べしと申せば、則ち判形を給はりける。斯くて信虎入道は、同じき十九日、圓福寺を立ち給ひ、都へと上り給ふ。日向は、二十日迄逗留し、懸川を立ちて、同じき廿五日、甲府に歸り參り、判形を差出し、仰の趣密々に申上ぐる。信玄、熟々聞き給ひ、當家の吉事とは、心中に思ひ給へども、信虎の老耄にて、樣々の徒事を宣ふと覺えたり。汝必ず、口外すべからずと仰せられ、御氣色能からず見えければ、源藤も手持惡しくて、退出しける。去る程に信虎は、潜に都へと志し、上り給ふ所に、今川上總介氏眞、大に驚き給ひ、引間後濱松と號すの元目曹洞宗の寺院に、止め置き參らせられけり。其翌年、設樂（したら）郡一の宮城を、今川氏眞攻め給ひし時も、德川源君、御後詰あるべき聞えありければ、則ち信虎入道、八千餘人を從へられ、牛窪口を押へ給ひけるとぞ聞えし。其後、今出川亦菊亭殿とも號す晴季公を便り、都へ上られて、菊亭殿へ入り給ひ、初めて婿舅の對面あり。互に喜悦限

なし。然る所に京童の曲なれば、一首の狂歌を門の扉に張付けける。

婿入をまたせぬ先の舅入り菊亭よりは武田入道

上州嶺・松井田・箕輪等落城附長野滅亡並伊奈四郎勝頼武勇の事

信玄上州發向

其後信玄、同じき二月十三日、上州に發向あるべしとて、甲府の館を發馬あつて、依路峠を越して、南目に着陣あり。是れ去年、松山に在陣ありし中、倉ヶ野淡路守を始め、和田・五甘・長根等、内通の仔細あるに依りてなり、信玄、小幡尾張守信定を呼び給ひて、小幡圖書之助は、氣質如何なる者ぞと、尋ね給ふ。信定承り、圖書は武勇に、賢々しき者にて候へども、僅の事にも周章て申す者にて候と申す。扨こそ能き方便ありと、内藤修理正昌豐を召し、今宵旗本より棹の先に、挑燈を付けて、火を揚ぐべし。其を相圖に、汝が請取の小荷駄一匹に、挑燈二つ宛結付け、馬取共に、續松を手々に持たせ、數十匹高き所々へ追登せよと、仰付けらる。松井田・箕輪・安中へ

信玄嶺城を攻む

抑の勢を差向けられ、旗本組・脇備・後備を以て、圖書助が居城嶺城に押寄せ、同じき廿四日の亥の刻計りに、右の相圖を用ひて、諸勢一同に、貝を吹立て、太鼓を打つて、喚き叫んで、總乘りの氣色を見せければ、小幡、大に驚き騷ぎ、松井田・箕輪・安中へも、抑の勢向ひたれば、後詰の味方となし。とても籠城叶ふまじと、竊に城中を忍び出で、一方の明きたるより、行方も知らず落行けば、城中の士卒、我先にと落散るを、武田勢追詰めて、悴者・小者に至る迄、鎧・太刀・刀・衣服を剝取りて、悅ぶ事限なし。諸卒、城中に乘込んで、翌廿五日迄、亂取をぞしたりける。爰に安中の城主左近進は、信玄、松山在城の節、小幡信定が謀略故、武田家に志を通じ、重ねて當國御發向の時、安中へ軍勢を、差向けられ候べし。夫を鹽に、某居城を差上げ申すべく候。其上、松井田の父越前守をも、能々諫言を以て、御味方に仕るべしと申入れたりしが、其後度々、父を諫めしかども、越前守曾て許容せず、結句父子の間、不快にぞなりにける。去る程に信玄、松井田を攻めらるべしとて、同じき廿六日、甘利左衞門尉晴吉・小幡尾張守信定に、足輕大將原美濃守虎胤・曾根七郎兵衞を相副へ、安

松井田城を攻む

嶺松井田
安中落城

中へ差向けらる。飯富三郎兵衞尉昌景・馬場民部少輔景政・內藤修理正昌豐・小山田彌三郎信茂を、箕輪の押として差遣され、飯富兵部少輔虎昌・小宮山丹後守昌友・淺利式部丞信音に、足輕大將には、城入道伊庵舍弟忠兵衞・原與左衞門尉・市川入道梅印を相副へ、松井田の城に差向けらる。是等六頭、松井田に押寄せ、息をも繼がせず攻立て、外郭を乘取つて、二の曲輪迄、攻入りたり。中にも城入道伊庵、自身の働して、粉骨を盡す。城將安中越前守、爰を先途と防ぎ戰ひ、城戶を開き打出づる事、既に三度に及ぶ。然りと雖も、城兵殘少に討たれしかば、越前守、術を失ひ、終に降人にぞ出でたりける。其子左近進は、兼て密約の事なれば、早々城を開き明渡し、其儘味方にぞ從ひける。嶺・松井田・安中の三城、立所に落城に及びしかば、明日は箕輪を攻めらるべしと、軍議有ㇾ之所に、其日の申の刻計りに、小幡參河守・同圖書之助が方より、鬼石の向ふ迄、敵五十騎計り、大斥候の體にて、打出でけるが、胴勢に三町計り離れて、聲花（はなやか）なる五騎、小幡川を打渡つて乘來る。時に信玄の四男伊奈四郎勝頼、年十八歲、然も初陣にて座しけるが、此體を見給ひて、惡き敵の擧動か

武田勝頼の武者振

な。不知討捕らんと、秋山紀伊守と唯二騎、馬を竝べて駈出でらる。五騎の者共、之を見て引返し、川を越して逃げ歸る。勝頼、名馬に乘り給へば、雙の鐙を、羯鼓拍子に合せて、須臾に駈付け、川中に於て、一騎は馬より切つて落さる。敵の胴勢五十騎計り、味方討たすなと、轡を竝べて駈合する。原美濃守入道、初めより四郎殿の働を、危く思ひければ、士卒を引連れ、迎備を作りて、待ち懸けたり。頓て勝頼引退き、備に馬を打入れらるゝに、敵兵、爰彼所より起つて、前後より引包まんとするを、美濃入道、流鼓乘を以て、備を乘別け、采配を採りて、四方を下知し、馬に鞭を當てゝ、敵の徒立を乘切れば、又敵、川を越えて逃げ歸る。勝頼、未だ若年にして、然も初陣の働といひ、倫を離れし擧動かなとぞ感じける。されば鳳凰は卵の中より、其聲諸鳥に勝るといへり。獅子の萠ありけりとぞ、皆人申しけり。誠に壯年に及び給ひて、形の如くの勇將にてぞ座しける。

箕輪城を攻む

斯くて信玄、二萬餘人を引率し、長尾信濃守が箕輪の城を、取卷き給ひ、追手・搦手より攻めさせらる。中にも城伊庵は、追手口に懸りて、一日の中に、二度迄鎗を合せけるが、二度目の迫合、甚だ嚴しく祕

術を盡し、力戰すれば、舍弟忠兵衞尉、兄を討たせじと馳隔り、終に討死をしたりける。城入道、之を見て、弟を目前に討たせ、安からず思ひ、猶も敵中に駈入り、弟の忠兵衞を、鎗付きたる武者に渡り合ひ、弟の敵、何國迄か遁さんと、獅子奮迅の怒を出し、則ち其敵を突伏せけるに、持ちたる鎗の柄、箕の手の如くに撓みけるを、石段に當てゝ蹈直し、又駈入つて戰ひけるが、數箇所の深手を蒙りて、朱になりて引退く。爰に飯富昌景が隊下に、大熊とて大剛の者ありけるが、伊庵に劣らず血戰しけるに、能き敵に引組み、首掻き落す所を、後より敵來りて、大熊が指物を取つて、逃行きける。大熊少しも騷がず、組敷きたる敵を、首搔切り、鼻を闕き引合に納め、我指物の遙か、敵中に見えけるを目懸け、假令敵に翼ありて、虛空を翅ると雖も、我一命のあらん限り、取返さずば、再び味方の陣へ歸へらじと、廣言して駈出でけるが、其儘敵中に入りて、矢庭に其敵を突伏せ、首搔切り、則ち指物を取返す。信玄遙に見給ひ、大に感ぜられ、誠に離倫の働、是をこそ、一人當千の者といふべけれと、軍散じて後感狀を給はり、殊に寵愛の女房小宰相とて、故小幡入道日意が妹、容色無

雙にして、其心貞なる女ありけるを、大熊に給はり、備前守になされて、足輕七十五人・騎馬三十騎預けられ、旗本の足輕大將にぞし給ひける。使番の栗原藤三郎も、先手へ使者に行きて討死しぬ。其外の諸勢、身命を捨て、三月二日の寅の刻より、同じき五日の巳の刻迄、晝夜寸刻の間もなく、息をも繼がせず、攻めたりければ、長野信濃守、今は是迄と思惟して、一族・郎等を集め、廣間に竝居て、妻子を刺殺し、腹十文字に搔破りければ、從者一同に、腹をぞ切りける。長野、勇猛の大將にてありけるが、志を變ぜず、義を善道に守つて、譽を後代に殘しけり。天晴丈夫の擧動かなと、皆人感じけり。相殘る者共に、武邊覺の者を選び、二百騎を召抱へられ、內藤昌豐に預けられける。昌豐始めの五十騎を合せて、二百五十騎、外に手前の五十騎都合三百騎の將となりて、箕輪の城代を蒙り、西上野七郡の郡代とぞなりにける。松井田の城には、小宮山丹後守昌友を差置かる。安中左近は、始終志神妙なりとて、本領始めの如く、安中の城を給はりける。父越前守は、誅伐に行はるべけれども、一子左近進が、忠に依りて、死罪恩免あるべき旨仰せければ、越前守、剛强の勇士にて、

降人となりて、一命を助かる事珍しからず。何ぞ左近が腰拔、忠に依りて、我意忠の首を繼がん。速に刑を給ふべしといひて、檢使を乞ひ、腹掻切つて失せたりける。

伊奈勝頼武略附小幡尾張守信定の事

此度、長野を攻められし時、箕輪の椿山といふ所へ、信濃守が家にて、大剛の聞えある藤井豐後守といへる者、斥候として出でたりけるが、伊奈四郎勝頼は、之を遙に見給ひて、味方の備より、唯一騎進み出でらる。藤井之を見て、正しく强敵なりと覺えければ、手綱を返し、城中に引入れんとするを、穢し返せと、勝頼に言葉を懸け押られ、豐後、逃がれぬ所と思ひければ、弓手の方へ引返すを、勝頼、馬手へ乘懸け押雙べ、無手と組んで落重り、些とも働かせず、藤井が首を掻切り、馬引寄せ、首を取付に附け給ふ所に、安部五郎右衞門尉、馳來り、匹夫の働大將の末練と申す者なりとぞ諫めける。武田の老臣飯富兵部少輔虎昌、之を見て、安部を近付け、四郎殿、年若にましまして、斯樣の擧動を仕給ふ事、偏に血氣の勇にして、主將の器にあらず。

御後見として、など諫をば申されざるや。君此事を、聞き給はヾ、御邊は痛き腹を、切り申されんぞと、戒めければ、安部大に迷惑がり、向後の事をこそ相心得候。此度勝頼の御擧動、必ず御前隱密になされ給はるべしとて、深く隱しける。扨又小幡尾張守は、前代の如く、嶺の城を給はり、本領相違なく下されて、其後、甲陽に馬を入れられける。扨内藤修理正・原隼人佐兩人の士大將を以て、小幡尾張守が方へ、仰下されけるは、汝が妻女は、故長野信濃守が娘なれば、當家へ對し、怨敵の子なり。將亦汝が爲めにも、敵の娘なり。早く彼女を離別すべし。當家累代の臣等の內より、縁組を申付くべしとありければ、信定承り、仰を違背申すにては候はねど、存ずる仔細候へば、此儀に於ては、御請を申難し。さあるに於ては、居ながら御返事申さんは憚ありとて、身近き郞等唯二騎、召連れて、主從三騎、大將の御館に參り、謹んで申しけるは、信定が妻女の事、信濃守御誅伐以前に、此儀を仰付けらるゝに於ては、何ぞ違背仕らん。今に至つて、離別の事を仰付けられしこそ、難儀の上意にて候へ。信定、先主の上杉憲政を、疎み申せし故を以て、越後の謙信、信定を惡み申

され、攻殺さんと、仕られけるに、某が一族同名參河守、然も和婿にて、骨肉の好を忘れ、惡逆無道の信定が郎等不忠の奴原を、賺し付けて、某を討たんと巧み申す故、幸にして、御味方に屬し候ひき。其間、妻女も大に艱難を凌ぎ候ひし。君の御恩に依りて、信州日向に於て、五千貫の恩祿を給り、今又本領を下し置かれて、上州嶺の城に、還住仕る事、偏に公の御惠恩の莫大なる事、申すも愚に候。此上は一族・郎等、悉く一命を召上げらるゝとも、何ぞ背き申さん。さるに依て、信定、忠義を存ずる事、又左の如し。然れども妻女の儀、唯今離別仕り候へば、速に路道にさまよひ申さん事、眼前の儀に候。是れ信定が恥辱の大なる所にして、敵國への聞え、旁以て、御請申難しと、思切りたる體にぞ申しける。此時、內藤・原が郎從等、小幡が宿所を取圍んで、蹈潰すべき勢なり。誠に信定が一生の浮沈とぞ見えし。信玄、兩人の士大將を以て、一々に聞き給ひ、信定が申す所、理の至極する所なり。左程の剛なる志なくんば、何ぞ當家の先鋒を勤むべき。上杉憲政を見張り、信玄を見知つて、味方に來る者なれば、賢人二君に仕へずといふ格言を、知らざるに似たれど、韓信、猶

ほ楚を背きて、漢に降る。其例なきにあらず。信定も、脚下の小辱を、知る者なりとて、結句稱美の仰を蒙り、妻女離別の事を、赦免あつて、則ち信定が娘を以て、御舍弟故典厩信繁の嫡男左馬介信豐に、嫁すべき由の仰にて、信定大に面目を施しける。其後永祿十一年、仰に依りて、信定、尾張守を轉じて、上總介になりにける。寔に君臣の禮義と謂つべし。

武田三代軍記卷之第十一　終

武田三代軍記 巻之第十二

武田太郎義信逆心露顯附飯富虎昌以下誅伐の事

永祿七年七月、晴信入道信玄、家嫡太郎義信父子の間に、異なる珍事出來て、甲府、大に騷動す。其故を尋ぬるに、去る永祿四年、信州川中島合戰の節、謙信の勇臣、甘糟近江守が退口に、武田勢、悉く敵を追ひて離散し、旗本備、僅か一千人に過ぎざれば、今又、敵の荒手と、再び戰はん事危かるべしと、信玄、思慮あつて、太郎義信の備に、使を遣され、早く筑摩川を越えて、備を立てられよと、いひ送られけるに、義信、承引なく、先づ信玄公に、御越然るべしと宣ひて、父子辭讓の軍使、往返の間に、敵、既に近づきければ、信玄、筑摩川を打越え給ひ、三町計り引込んで、備を立てらる。是れ大に信玄の思慮深き所なり。然るに、軍散じて後、義信、信玄の敵に臆し

給ひて、仰せられし事なりと譏り給ふ。義信父子の禮義孝道を以て、其時の辭讓の使者ありしならば、退いて父を議り給ふは、僻事なり。これ唯、血氣の勇にして、人に弱みを見せじとの小勇より出でたる、拙き擧動なり。然るに、信玄、此事を傳へ聞き給ひて、大に怒り憤られ、何ぞ義信が短智を以て、此入道が行事を斯くこそ安からね。古の小松重盛には事替るべしとて、翌永祿五年戌の八月二十日、御使を以て、兩方の存分を仰せられ、父子の間、不快にぞなられける。是に依つて、翌永祿六年二月、甲州大善寺の高傳和尙、信州岩村田の法興和尙の兩僧㑪にて、中を直し參らせんとて、種々取持ち給ひけれども、兩方共に、樣々の仰せられあつて、彌〻不和にぞなり給ふ。然るに、四郎勝賴は、別腹にてましますにより、他の名跡を名乘らせられ、高任の城に居住せらる。これ義信と信玄、前方より御仲、尋常の親子の如くなきにより、晴信入道の深き思召し入れある故なり。然るに、勝賴を伊奈になされ、高任に差越し給ふ時も、家嫡の儀を重んぜられ、安部五郎左衞門尉を、後見となされ、小原・秋山以下を付けらるべき旨、老臣等を以て仰遣さる。時に義信、彌〻惡心を

信玄父子不和

生じ、四男を伊奈の郡代になし、高任の城主に、せらるゝだにあるに、阿部以下の功臣を、勝頼に附けらるゝ事、これ皆、義信を疎み、四郎を愛し給ふ故なりと、黒心にぞ思はれける。然るに、駿河の今川氏、眞中に、信玄と快からず。其上、内々義信父子和せざる事を知られければ、晴信入道を廢去して、義信に世を繼がせば、我が幕下の如くに會釋して、能き便ならんと思惟し、信玄の信虎を追出せられし如く、義信又、信玄を廢去あらんに、何の障のあるべきぞと、氏眞、方人になり、本意を遂げさせ申さんと、起請文を書いて送られければ、義信彌々順風に纜を解く心地して、逆心の謀を、廻らされけり。老臣飯富兵部少輔虎昌・長坂左金吾釣閑が嫡子・同名源五郎御乳母夫曾根周防守等を以て、隱謀の方人とせられけり。頃は永祿七年七月十五日の夜、燈籠見物の爲めとて、太郎御曹司義信、曾根周防守・長坂源五郎、唯兩人を召連れられ、飯富兵部少輔が宿所に至り給ふ。これ信玄出陣の時分、謀を以て擒となし參らせ、甲府の館を奪ひ、一時に甲信其外の領邑を、押取にせらるべきとの密談なり。然るに其夜、丑三刻計りに及んで、忍びやかに歸り給ふ。追手の番所に

勤番せし監(めつけ)、坂本武兵衛、横目荻原豊前守、(初名彌右衛門尉と號す、)能々見屆けゝれば、翌朝信玄、山にまします時、右の次第を、委しく言上す。信玄、近年用心の爲めとて、二間に一間半の閑所を立てられ、其所を山と號けらる。續いて浴室あり。湯殿の縁の下より、樋を懸けて、風呂屋の下水にて、不淨を洗ひ流すやうに拵へたり。彼の山、常に香爐を備へ、當番の近習二人宛、朝晩兩度に香を燒く。今一人は仰を承つて、訴狀箱の蓋を、何れの國何れの郡と、書付を見分して、閑所へ持ち參り御覽に入れ、是非を決す。殊に先年、河中島合戰より、飯富三郎兵衛尉昌景・跡部大炊助勝資・原隼人佐昌勝、三人の士大將、信玄、山にまします時は、太刀を持つて、取障子の影に畏まる。されば、此閑所を以て、山と號せられし事、如何なる謂あるかと、武田家拜趨の諸士、評議しけるに、長坂源五は、山にはくさきが絶えぬといひ、小宮山内膳は、山の句は燒物を願ふといひ、曾根與市之介は、山は登れば下るといひ、小山田彦三郎は、山には匂ふ物絶えずといひ、日向藤九郎は、山より匐うて下るは、苦勞ならんとぞ申しける。閑所浴室等は、信玄、深厚の智より巧み出さるゝ所なり。扨こそ、徳

川源君、甲州悉く平治まし〳〵て後、大倉藤十郎、彼の風呂屋の密圖を差上げしかば、大に御感あつて、若干の褒美を下され、其上、大久保の名字を免し下されける。然るに、信玄、七月十六日の夙に、彼の山にまし〳〵けるに、荻原・坂本參上して、右の次第を有の儘に申上ぐる。飯富三郎兵衛尉、當番にて、御刀を持つて居たりけるが、進み出てて申しけるは、某、先達、此事を存じて候へども、御目勝の人々、申上げられて後、披露仕らんと存じ、控へて罷在候。扨も義信君、逆心を企てられ、當月上旬の頃より、長坂源五を御使にて、兄兵部が方へ、日々御書を下され候により、御自筆の御文を、某證據の爲めに、盜取つて候へども、御文章の體、火急の儀にて御座なきにより、御目附共、言上致すを相待ち候とて、肌に附けたる守袋より、義信の御文を取出し、御覽に入れけるに、飯富兵部少輔殿へと、名付あつて、疑ふ所もなく、義信の手跡に紛れなければ、信玄、殊に憤り給ふも理なり。文章の內に書かれけるは、此度の逆意に、一味の段、悅び思召す所なり。事成り、本意を遂げらるゝに於ては、御契約の旨、相違あるまじく、重ねて神誓の證文を下さるべしと、既に御旗・無楯を、

盟に入れ給ひてこそ書かれけれ。信玄、大に怒り給ひ、卽時に討手を差向け、義信を始め、飯富兵部以下の人面獸心等が首切つて、御旗屋の前に懸くべし。時刻を移すなと、仰下さる。然れども、昌景、餘りに火急に御座候條、委しく御詮議の上にて、如何樣とも、御仕置き然るべし。此儀、御存知の上にて、御油斷之なき事なれば、御用心に別條なし。寔に兄にて候虎昌、臣たるの道を忘れ、未だ御年若き義信君の叛逆に、與し申す事、言語道斷の大惡人にて候。君、義信を、信虎の君を惡み給ひし如くに、家嫡を退けなんとし給ふべき御所存にも候はゞ、不義ながらも、其理あるに似たり。假令、君に左樣の思召あるにもせよ。義信の御器量にて、信虎を、君の廢去ありし眞似は、鵜の眞似をする烏、水を喰ふと申す、卑賤の譬言に、同じかるべし。能くも虎昌が心には、天魔の入り代りたるとこそ覺え候へ。諫言を申して許容なくば、御前に於て、腹切つてこそ死すべけれ。これ偏に、虎昌一人が罪にて候へば、昌景が爲めに、大なる君の讐にて候。此企を存じてより、骨肉の好を忘れ、虎昌を見る事、一向怨敵の思に候。此上は、御詮議を遂げられ、狐狼の心を懷く奴原、速に誅

せられて然るべし。人手に懸け申さんも、口惜しければ、虎昌が討手を、昌景に給はり候へかしと、涙を流し申しければ、信玄、仰せけるは、汝が志、忠臣の道、至れり盡せりと宣ひけり。斯くて、暫く猶豫あつて、翌年正月、罪科五箇條の書付を以て、兵部少輔虎昌、切腹を仰付けらる。虎昌、兼ねて覺悟を極めし事なれば、目付兩人を、檢使に乞ひ、潔く腹をぞ切つたりける。長坂源五郎・土屋惣次郎も誅戮せらる。義信の乳母夫曾根周防守・梁田彌太夫兩人は、荻原豐前守を、討手に遣されけるに、荻原、兩人が宿所に押込んで、放討にぞ討取りけり。信玄、感悦まし〳〵て、周防守が帯せし包平の刀、一條三原の脇差を、豐前守にぞ下されける。凡そ義信に、一味の者廿八人誅戮せられ、其餘は、悉く國中を追拂ひ給ふ。虎昌が同心被官三百騎の内、五十騎を、弟三郎兵衞尉に預けられける。斯くて、義信は、死罪を宥められ、禁獄にぞ及び給ひける。扨又、山縣は、飯富と源家の同流にて、武田譜代の長臣なれども、山縣河内守虎清、信虎に誅せられて、山縣の家系斷絶す。今より昌景、山縣の名跡に移り、山縣三郎兵衞尉昌景と、名乘るべしと仰下さる。其外、小曾板垣三郎

に、二百五十騎を預けられ、百騎は跡部大炊助勝資、五十騎は御舍弟孫六郎信連入道逍遙軒にぞ、預けられける。

馬場民部少輔美濃守になる附江間・椎名降參 竝上州石倉砦の事

去年永祿七年、晴信入道の耳目と賴まれし、究竟の士大將甘利左衞門尉晴吉、己が乘りける馬の足を見るとて、過つて頭を蹈まれて、竟に死しけるこそ哀れなれ、享年卅一歲、信玄、惜み給ふ事限なし。嫡子三郎二郎、未だ幼少なれば、米倉丹後守を、陣代にぞ仰付けられける。此年、原美濃入道淸岩も、病死せり。さるに依つて、永祿八年三月三日の夜に入つて、原隼人佐昌勝・駒井右京亮、此兩使を以て、長場民部少輔景政が方へ、仰遣されけるは、故原美濃守虎胤は、父信虎朝臣より信玄に至つて、二代が間、數度の武功を顯し、鬼美濃と呼ばれ、忠臣の譽を殘せり。當家に、虎胤より外、美濃と稱する者なし。されば、大剛の忠臣故か、受領の中にも、美濃と

甘利晴吉變死

馬場虎胤病死

號するは、取分宜しく聞ゆるなり。然れども、美濃守虎胤、去年病死したれば、今は當家に於て、美濃と號すべき者、汝ならではなし。今日よりして、美濃守に任ずべき由、仰にて、其上、晴信の信の字を給はりて、馬場美濃守信房とぞ改めける。斯くて、同じき六月、大將信玄、山縣三郎兵衛尉昌景を先鋒として、越中に發向あり。其故を尋ぬれば、去年四月、三郎兵衛尉、一手の勢三百餘騎を以て、飛驒國に發向し、大峠を打越えて、平湯迄出張せしに、飛驒半國の主江間常陸介も、平湯に討出て相戰ふ。江間、多勢なりと雖も、一戰に、戰負けて敗軍す。昌景、勝に乘り、舟戸邊迄押詰めけるが、昌景、調略を以て、和を入れしかば、常陸介、其儘降參して、同じき廿七日、降人となり、舍弟圓成寺丹立といへる法師を、人質に出しければ、昌景、此丹立法師を相具し、同じき五月、甲府に歸陣し、大將に御目見え致させけり。此圓成寺は、法師ながらも、武勇勝れて、心剛なる者なりければ、還俗せさせて、江間右馬丞と號けられ、足輕大將になされける。さるに依つて、信玄、山縣三郎兵衛尉・江間常陸介を先鋒とし、越中の堺、舟戸峠を打越えて、椎名が領地に發向あり。

木曾左馬頭義昌・馬場美濃守信房・眞田源太左衞門尉信綱、敵城二箇所、安々と攻落す。敵將椎名肥前守泰種、松倉金山の城を討つて出で、三千五百餘人を引率し、馳向つて防ぐと雖も、武田の大勢、事ともせず、攻立て〳〵戰ひければ、泰種も、唯爲方なく、茫然果てたる所に、常陸介、辯才を盡して、樣々といひければ、泰種、忽ち降參し、己が二男龜松丸を、人質として出しければ、四郞勝頼に預けられ、伊奈に差置き給ひけり。其後、馬場美濃守信房、牧島に居城せしかば、椎名肥前守泰種、舍弟甚左衞門尉・江間常陸介等を、相備にぞなされける。

石倉合戰

長野信濃守誅伐の時、厩橋城の押として、刀禰川の向ふ石倉といふ所に、砦を築き、大戶豐前守・長根・曾根等を入置かれしに、此度、信玄、越中へ發向の由を聞き、上杉謙信、時を得たりと喜んで、二萬餘人を引率し、六月下旬に、上野へ發向し、彼の石倉の砦をぞ攻められける。信玄、越中にましませば、後詰の賴もあらず、城中、本より小勢なれば、竟には叶ふまじとや思ひけん。大戶豐前守以下、開城して、箕輪の城へ引入れしかば、謙信は、北城丹後守が甥荒尾甚六を、石倉の砦に入置きて、越

後に歸陣し給ひけり。信玄、此由を聞き給ひ、安からぬ事に思はれ、直に上州を押通り、彼の石倉に攻懸り、一息に揉落し、荒尾甚六を始め、一千餘人伐懸けさせ、和田兵部大輔を入置かれ、同じき七月下旬に、甲府へ凱陣をし給ひけり。

信玄諸士の緣邊を結ばる附伊奈四郞勝賴婚禮の事

斯くて、信玄は、飛驒・越中半國宛切從へ、甲館に馬を入れられ、暫く士卒の勞れをぞ休め給ひける。爰に故小幡入道日淨が娘小宰相は、信玄、其才智を愛し給ひて、寵顧深かりけるに、さる永祿六年の頃、大熊備前守に下されけるが、英才穎悟にして、常に凡慮の及ばざる事を、計りけるに依り、備前守が元よりも、折々信玄へ、諫言を奉りける。或時、數箇條の書付を以て、晴信入道を諫め申す。信玄、卽ち許容あつて、諸士の婚禮の取組をぞし給ひける。先づ信州先方望月が娘を、故典厩信繁の二男、今の左馬助信豐の舍弟、未だ十四歲にてまし〳〵けるに嫁せしめ、望月の名跡となし給ひ、望月右近大夫義勝と號せられ、六十騎の將となし給ふ。其外、信

州の丸子三左衞門尉とて、三十騎の將なりしを、馬場美濃守信房が婿になし給ひ、坂西左衞門尉を、安中左近進が相婿に、相木市兵衞尉が一子を、山縣三郎兵衞尉が婿にと、又先年、箕輪にて討死せし栗原藤三が後家を、甘利左衞門尉が嫡子三郎二郎が、妻女にぞし給ひける。茲に其頃、濃州岐阜に居城し給ふ織田上總介平信長は、大敵今川義元を、尾州田樂が窪桶狹間に於て、一戰に討取り、勢强大にして、天下一統の大功を、望み思はれけれども、今、甲斐源氏の棟梁武田晴信入道信玄こそ、遠鄙にありながら、往々邪魔にはなるべけれど、種々に謀を廻らされける。爰に、織田掃部助とて、信長の家の子あり。故あつて、甲府に來り、武田家に、十一箇年、勤仕してありけるを、去る永祿四年、信長、之を呼返され、織田家に歸參せしを、調略の使者として、甲州に送られけるに、此掃部助、永祿八年九月九日、甲府に歸り申しけるは、信長、近年濃州を過半退治仕りぬ。就ては、信玄の御領分、信州木曾に取續き候ひぬれば、民百姓の往來迄も、互に申分之なき爲めに、伊奈四郎殿へ、信長が娘を進じ、父子の睦を、致度存候へども、某、漸く三十二歲、嫡子奇妙丸さへ、未だ十

歳餘に候へば、二十歳に及び給ふ四郎殿へ、婚姻を執行ふべき女子を持たず候。爰に、濃州苗木の城主、遠山勘太郎は、某が妹婿にて候。彼の者の娘を、幼少より信長養ひ置き候。容色・心樣、宜しき者にて候へば、之を四郎殿に、嫁せ申度候と、禮を厚うして懇望あれば、信玄、思慮あつて、早速許容し給ひ、同じき霜月十三日、伊奈の高任へ御輿入あつて、婚禮目出度調ひしかば、織田・武田の兩家は、水魚の交にぞなり給ふ。

小幡又兵衛尉旗本組に入る事

永祿八年十二月二日、晴信入道信玄、海津二の曲輪に差置かれし、小幡虎盛入道が嫡子又兵衛尉を、甲府の御館に召寄せ給ひ、跡部大炊助・長坂左金吾入道釣閑を以て、仰せけるは、汝が父虎盛、武功世に尧されたる勇士、殊に其父日淨より、二代の忠臣なれば、信玄、腹心の思をなし、越後の謙信といふ剛敵の押として、海津二の曲輪に差置いて、高坂が介副とす。其上、信州の士に、西條治部少輔・海野中務丞とい

ふ忠功の者を、虎盛が婿となしぬ。又信州川中島居住の原與左衞門尉・市川入道梅印が一子平左衞門尉、是等兩人は、當家譜代の者なる故、山城入道が婿になせしなり。これ皆、軍議差引等の異見をも、助けさすべき爲めなり。然れども、虎盛、去る永祿四年の夏、病死せり。此上は、信州の緣者共、又兵衞を故入道が如く、舅の恩をなし、其下知に從ひなば、高坂が能き助ならん。川中島は、大事の堺目なれば、父入道が如く、二の曲輪に罷在るべし。所領も同心も、重ねて增し給はるべしとなり。又兵衞承り、仰を違背申すには候はねども、海津在城、御免を蒙り申したく候と、頻に訴へ申しければ、然らば此上は、是非に及ばず、所領を召上げらるべきにぞ極りける。又兵衞、重ねて申しけるは、某儀、君の御草履を提げ候てなりとも、御旗本へ相勤め候はゞ、生前の大幸、是に過ぎずと申す。是信玄、武威盛なる故、今年の中、天下一統の大功を立てられん爲め、上洛あるべきなれば、此一大事の合戰に、旗本にあつて、粉骨を盡さんと、思ひ詰めたる故なりけり。信玄聞召し、予が命を用ひず、我意に任せんと欲する條、罪科輕からず。此上は、切腹仕るべしと、仰下され

信玄大僧正に任ぜらる

しかば、小幡畏つて、穴山小路の妙音寺にて、腹切らんと、己が宿所にも歸らず、御館より直に、妙音寺へぞ馳行きける。御小姓の土屋平八郎、御前に進出て、上意なくとも、切腹仕るべき小幡にて候。嚴命の上は、爭でか猶豫仕るべき。某、馳參つて留め候はんとて、馬に鞭を揚げて、妙音寺にぞ馳行きける。四郎勝頼の方よりは、安部五郎左衞門尉馳來つて、安部と土屋、色々に制し、其後、勝頼と土屋平八郎兩人、御前に參られ、樣々に申されしかば、又兵衞が望の如く、旗本に召置かれ、所領七百貫宛行はれ、騎馬三騎・足輕十人附けられ、殘りし所領、同心足輕等、悉く又兵衞が叔父彌左衞門尉に給はり、山城守になされ、海津二の曲輪にぞ差置かれける。

信玄大僧正に任じ給ふ竝和歌會興行の事

斯くて、永祿九年正月十三日、武田信玄を大僧正になし下さるゝ。比叡山明王院の阿闍梨、綸旨を捧げて、甲府に下着ありしかば、信玄、恐悦斜ならず。これ三條左中將、執し給ふに依つてなり。主上正親町院より、成下さるゝ所なり。此時、山門よ

り、昔文德天皇の御時、惟喬・惟仁、帝位を爭はせ給ひしに、惟仁は、山門の惠亮に賴ませ給ひ、種々の祈をなし給ひし惠亮、其時、持ち給ひし劍を、信玄に授け參らせられしかば、圓王院大僧正の綸旨と、此劍を持ち下りて、信玄に與へられにけり。是より甲府尊現寺にて、淺海法印、加々美の法善寺にては、圓性法印、仰を承つて、國家安全、家運長久の大法祕法を行ひ給ふ。其後、御館の主殿に於て、天台・眞言の論議、又は惠林寺・長禪寺の名僧を召集められ、入室說禪等、樣々の事共をぞ執行はれける。是よりして、信玄、護摩・灌頂をし給ひ、種々の事を行はれけり。此春は、御悅の爲め、惠林寺・長禪寺を始め、寺々へ、信玄を請待をぞしたりける。時宗、一蓮寺へも

信玄和歌會興行

請待致すべき旨、申したりければ、則ち歌の會を、興行せらるべしとて、既に一蓮寺、其用意をせられ、日限迄も極りける所に、都より今出川左大臣公彥公、下向ある時に、一蓮寺より使僧を以て、跡部大炊助勝資・原隼人佐昌勝に就いて、菊亭左府公、此度の御下向こそ、幸にて候へ。君の御相伴に、左府公をも、招請仕るべきかの由を言上す。信玄聞召され、予が相伴に、菊亭公を招請せんとは如何なり、無用たる

べしと仰下さる。斯くて、其日になりければ、大僧正信玄、一蓮寺に入り給ふ。監塚原六右衞門・相川甚五兵衞・笠井半兵衞・三澤四郎兵衞・坂本武兵衞に、六十人頭の中城入道伊庵・遠山右馬之助・今井九郎兵衞を差副へられ、此等三人、同心を引連れ、五人の目付と共に、寺中を警固したり。目付伊藤玄蕃・小池主水・武井鄕右衞門・島田外記・切田勘之丞に、足輕大將市川梅印・横田十郎兵衞尉・原與左衞門尉を差添へらる。是等は、騎馬同心足輕を引連れ、寺外の四方を打廻り、非常の狼藉を禁めたり。御前の相伴には、小笠原慶安・板坂法印一華堂・一向宗長圓寺・岡田堅桃・寺島甫庵、此等の咄衆に、長坂入道釣閑、又は檢使など加へられて、十二人なり。次の座には、御舍弟信連入道逍遙軒・左馬助信豐・伊奈四郎勝賴・穴山伊豆守信良・御舍弟武田兵庫助信實（是も、信玄の舍弟なり）・同一條右衞門大夫信龍（上に同じ）、以上十二人なり。緣には、大倉大夫・同彥右衞門・宮增彌右衞門・長命勘左衞門以下の猿樂共、伺候せり。然る所に、今出川左大臣公彥公、御來輿あつて、今日は御歌の會と承り候故、斯かる時節に下向致したるこそ幸なれ。參らずんば、傍若無人の行跡ならんと、案内をも申さず、推參仕

候とあれば、信玄、大に喜悦ましく〳〵ける。扨御歌は、松間花といふ兼題にて、信玄、

立ち竝ぶ甲斐こそなけれ櫻花松に千年のいろはならはて

既に、御歌も終りければ、膳奉行武藤參河守、御前に出て、御膳の時分を伺ふ。其時、信玄、何となく寺島甫庵を召し、宋梅洞の事は、何れの書に出で候ぞ。承りたき旨をいひ、汝、書して歸るべしと、遠光院說山和尙の方へぞ、遣されける。扨又、御前の配膳は、御小姓土屋平八郎・曾根孫次郞・三枝惣次・眞田源五郞なり。饗應樣々、善盡し美盡せり。酒杯數刻にして、人々醉に和し、當座卽興の詠歌等、種々の遊興あつて、機嫌よく御館に歸らせ給ひけり。今日、信玄、說山和尙へ尋ね給ひし宋梅洞といへるは、恫は、これ林和靖が住める處の湖山を指していへるなり。林和靖は、世に秀でたる詩人にて、一世の間、若干の詩文を作り、世の人口にある所の名句、多しと雖も、分けて元祐の頃、

疎影橫斜水淸淺　　暗香浮動月黃昏

といふ妙句あり。されば、說山和尙、此句を書して送られける。斯くて、信玄、一蓮

寺より歸御の後、高坂彈正忠昌信、御前に畏つてありけるに、信玄、仰せけるは、予、今日、寺島を説山方へ遣したる事は、計らざるに、菊亭公入御ありし故、一蓮寺は出家の儀なれば、盛膳の用意も、人數の如くにして、其餘分なき時は、相伴人の者共を、座席を立つるは、信玄が恥辱なりと思ひ、取敢ず宋梅惘の事を、いひ遣したりと仰せければ、高坂昌信を始め、各信玄の萬事に慮の深き事をぞ感じける。

武田信虎密書附上州和田の城軍竝信玄上州發向の事

前左衞門尉信虎入道は、今出川大納言晴季卿を便り、在京しておはしけるが、密に書を甲府に送らるゝに、五月五日の書札、同じき六月廿四日、甲府に來着す。其趣は、さる永祿七年三月、將軍義輝卿に、拜謁を遂ぐる所に、退出の節、將軍家、廣緣迄送り出でさせらるゝ。其時、信虎平伏して、武田家のあらん限は、これ舊例たるべし。臣が家の規模と仕らんとて退き侍りぬ。然るに、去年五月、三好・松永等、逆心を起し、不意に將軍家の御所を圍む。警衞の諸士、多く討死し、將軍義輝卿、自ら力

足利義輝自盡

戰し給ひて、營中に火を放ち、將軍家を始め、御所中の男女、悉く討死し、義輝卿自殺し給ふ。爰に於て、信虎、思ふに、此世に武士のあらん限、公方家の斷絶する事あるべからず。能く〳〵思慮を廻らさるべしとの密書なり。これ當世、信玄の武威盛なれば、將軍家の貴族を取立て、天下一統の大功を、立て給へとの奥意なり。信玄、此書翰を開き給ふと等しく、父信虎の心底を察し、彌〻上洛の計略より外は、他事なかりけり。流石、惡逆無道の信虎も、子を思はるゝ道は、斯くこそと、諸士泄れ聞きて、感涙を流さずといふ事なし。爰に、管領上杉入道謙信、其勢一萬三千餘人を引率し、同じき七月、上野國和田城へ押寄せ、ひた〳〵と攻め近づく事、恰も、雷霆の鳴動するに異ならず。城將和田左衞門尉、士卒を下知し、矢狹間に、弓・鐵炮を賦り、精兵を傚つて、射立て打立てける。されど、猛勇の越後勢、死人を橋にして、我先にと乘入らんとす。茲に、甲州より加勢として籠りける横田十郎兵衞尉は、故原美濃入道虎胤が子にて、原彥十郎といひけるを、故横田備中守、養ひて家を繼がせければ、夫より横田十郎兵衞と號し、養父備中守が如く、足輕を預けられて、形の如く武邊覺の足

輕大將なり。殊に、當時、流行する鐵炮の妙を得て、翔鳥(かけとり)下針(さげはり)を打つに過らず。然るに、此度、當城一の不堅固を、堅めけるに、横田、我が足輕を左右に從へ、狭間を一度に押開き、我が筒を以て、頭筒と定め、左右緩急のあやどりをなし、詰替へ／＼玉藥を惜まず打出すに、更に化矢はなかりけり。謙信の一騎當千と頼まれし勇臣等、枕を雙べて打倒されければ、流石の越兵、攻倦んで、人を楯に取り、敢て進まざりければ、謙信、大に怒り、一陣に馬を乘出し、自ら城に乘入らんとし給ひければ、軍勢共、我劣らじと攻付けて、既に城門を破らんとす。横田は、爰を破られじと、狭間一つに、五挺宛の鐵炮を、稲妻の如くに詰替へさせ、差取り引詰め打出せば、矢面に進む兵を、百二十騎迄、打伏せけり。さしもの謙信、馬を立兼ね、既に危く見えける所に、輝虎入道の小姓、井地峯拗太郎馳來つて、斯かる危き場所に、大將のおはしまさん事、不覺の擧動にて候。是等は、匹夫の勇にして、仁義主將の勇にあらずとて、馬の口を取つて、後陣に引退く。謙信、能き汐なりと思はれければ、速に圍を解き、軍勢をあげて、越後に歸陣し給ふ。城中の軍勢、渇魚の水を得たる心地して、大に横

田が功を感じける。寔に、横田一人の武功に依つて、謙信といふ大勇猛の良將に、圍を解かせ、一城の兵衆を、忽に蘇らしめけるこそ、類少き擧動なれ。越後勢、和田城を取卷いて、攻立つる由聞えければ、信玄、後詰あるべしとて、陣觸し給ふ所に、敵、退散の由、告げ來りしかば、緩々として、八月廿六日辰の刻に、信玄、甲府を出馬あつて、閏八月二日、上州箕輪に着陣あり。同じき十三日、足利へも手遣あつて、由良信濃守が居城、新田へ押寄せ給ふ。利根川を打越えて、御靈・二本木・葛和田より、亂入せらる。後陣の押は、穴山伊豆守入道梅雪を大將にて、信州伊奈・松本の軍勢共、利根川を、前に當てゝ、備へたり。武田勢は、新田に押詰め、宿城を燒拂ひ、勝鬨を作つて引取れば、足利筋へ働きし人々、在々を放火すと雖も、敵、出合はざれば、引取りけり。斯くて、四十餘箇日、箕輪に滯陣あつて、十月十日、歸陣に赴き給ひけるが、信玄は、謙信此度、和田城に取詰められしにより、早く敵の機を察し、越後、又は飛騨・越中を押へん爲め、同じき廿八日、馬場美濃守信房を召し、信州牧の島に城を築くべし。汝、繩張をして、則ち城代を勤むべしとありしかば、信房、仰を

承つて、牧の島に繩張し、普請丈夫に城を構へ、北國筋を押へて、美濃守信房、長く此處に在城せり。

武田・北條厩橋城攻附武田太郎義信自殺竝鹽止上杉謙信書通の事

永祿十年九月九日、北條氏康父子の使者、甲府に來つて、扨も北越の上杉入道、上州厩橋の城に居て、氏康が領地を掠めんと仕候。早く御馬を出され、加勢あつて給はらば、氏康父子が大幸、是に過ぎずとぞ申越されける。信玄、早速、許諾し給ひ、其勢二萬餘人を從へられ、同じき十八日、甲館を雷發あつて、上州に出馬し給ふ。氏康父子、對顏あつて、悦び給ふ事限なし。斯くて、樣々の軍議あつて、同じき十月六日の未明に、打立ち給ふ。北條家の軍勢、三萬五千餘人、武田の軍勢二萬餘人、都合五萬五千餘人、厩橋の城に押寄せて、市町に火を放ち、城を十重・二十重に追取卷き、一息に攻潰さんと、揉んだりけり。されども、城中には、楠・菊池を欺く管領入

道謙信、栖籠られし事なれば、城兵、少しも痿まず、打出て〳〵防戰ふ。寄手は、楯を突寄せ〳〵、竹把を催けて、難なく城門に攻付け、既に虎口を破らんとせし所に、信玄・氏康の兩將、何とか思ひ給ひけん、早々人數を引揚げらる。斯くて、軍勢、利根川を渡りけるに、折節、大風、古木を折り砂を飛ばし、白日の影、暗夜の如く、山谷鳴動して、放火の烟、旋風に吹かれて、目を明け、口を開く事を得ざりけり。直江山城守兼續以下の剛臣等、謙信の前に出で、城戸を開き討つて出で、敵を咬留め候はんと、頻に諫めたりけれども、謙信、曾て用ひられず。一人も討つて出づべからずと、下知せられける。直江・甘糟を始め、今度に於ては、一向、謙信の分別損のやうに思へども、輝虎入道の宣ふ事、常々、能く圖に當れば、違背するに及ばず、一人も討つて出でざりけり。其間に、兩家の軍勢、利根川を打渡り、靜々と引取りけり。此時、城兵討つて出でたらましかば、兩將を始め、宗徒の者共、悉く討死すべかりしに、謙信、何とか思惟し給ひけん。大に愼み深く、靜まり返つておはしけり。これ謙信の一生の慮の深き所なりと、諸人申しけり。斯くて、海津在城の高坂彈正忠昌信は、小

幡山城守を殘し置き、同月上旬、海津を打立ち、越後の光明山迄亂入し、在々を放火して、同じき十一日、川中島に引取りけり。謙信、之を聞き給ひ、本國、心元なしとや思はれけん。俄に越後に引入られければ、武田・北條の兩家も、歸陣に及び給ひける。去る程に、十月上旬、甲府には嫡子太郎義信、近年獄中におはしけるが、俄に自害し給ひける。これ信玄の仰に依つてなり。行年三十歲にぞなり給ひける。此義信の北の方は、駿州故今川治部大輔義元の息女、上總介氏眞の妹にて、母は信虎の息女なりしかば、此姬君は、正しき信玄の姪にてぞおはしける。去に依つて、其儘、甲府に座す樣にと、仰せけれども、舍兄上總介氏眞の方より、迎として、近臣を甲府に着越し、駿府に呼返し給ひけり。今川氏眞、太郎義信と合胸して、信玄を失はんとせし隱謀、既に露顯して、義信伏誅せられ、富飯虎昌を始め、悉く誅せられしかば、氏眞、日頃の企、化事となりぬる故、何卒して、此憤を散ぜんものをと、深く妬み思はれける。然るに、相州北條氏康は、氏眞の舅なれば、小田原に使者を馳せて、氏康と心を合せ、翌年、武田の分國へ、鹽止をぞせられける。甲斐・信濃・上野等は、海なき國な

謙信の義氣

れば、萬民、難儀に谷り、奈何ともする事を得ず。然る所に、上杉入道謙信、此事を傳へ聞召し、甲州に飛檄を馳せて、申されけるは、謙信承る。近國の諸將、貴老を憎み、分國へ鹽を留め候由、近頃比興の擧動、末代迄も、武家の笑種なるべし。何樣、近國の腰拔大將共、弓矢を以て、信玄に勝つ事を得ざれば、左樣の弱者共の上からは、斯かる臆病至極の謀を以てなりとも、信玄を痛めずんば、爭でか軍を出しては、勝つ事をすべき。謙信に於ては、唯、幾度も、運を天に任せて、勝敗を闘戰の上に、決せんこそ存じ候へ。鹽の儀は、何程にても、謙信が領國より差遣し候べし。其御國より、手形を以て入用次第に、取らせらるべし。高直に致すに於ては、重ねて仰聞けらるべし。急度申付け候はんと、自筆の書狀を以て、早馬にて告げられければ、信玄を始め武田の老臣等、謙信の武道の正義を感じ、味方にして、ほしき名將かなとぞ申しける。さるに依つて、越後より信州へは、川中島、上州へは猿鄕通り、鹽を運送する事、莫大なり。扨こそ、甲・信・上州の間の諸民、鹽を喰ふ事を得て、梅酸の渴を凌ぎけり。

武田信勝誕生

武田太郎信勝誕生附快川和尙の夢竝織田・武田兩家婚約の事

斯かる所に、信玄の四男、伊奈四郎勝賴の御室、去る春の頃より、懷姙の氣まし〳〵けるが、程なく十一月上旬、男子誕生し給ひけり。然れども、難產にて、室家は竟に卒去まし〳〵けるこそ痛はしけれ。是は織田上總介信長の養女にて、容貌・心樣、殊に勝れておはしければ、勝賴の寵愛淺からず。偕老の契、深くおはせしに、惜かるべき齡にてぞまし〳〵ける。然れども若君、安穩に出生ありしかば、歎きの中の悅とぞ申しける。信玄、悅喜淺からず。既に嫡子太郎義信は、去る頃自害し、又、二郎は、海野の名跡を繼ぎ、三郎は葛山の名跡、四郎は諏訪の名跡を繼ぎけり。然れば、今般、四郎が儲けし男子を、信玄が家督とせんに恥しからじ。四郎が母は、諏訪賴茂が娘なり。此度、誕生の幼き者が母は、織田上總介信長が娘なり。四郎が父は、苟くも信玄なりとて、山縣三郎兵衞尉昌景・馬場美濃守信房・內藤修理正昌豐・土屋

平八郎に、御一族吉田左近、小姓眞田源五郎を差添へられ、勝頼の御方へ遣さるゝ。土屋平八郎は、己が名代として、秋山越前守をぞ出しける。五人の面々、四郎殿の御方に參り、仰の趣を演説し、若君の御名を、太郎竹王信勝と、信玄、自筆に遊ばされ、武田重代の義弘の太刀、安吉の脇差を遣さるゝ。其上、竹王殿の御乳夫に、溫井常陸介を附けられ、勝頼は、御曹子信勝の後見をし給ふべき旨、仰出されしかば、四郎殿に附從ふ者共は、果報のいみじき若君なりとぞ悦びける。茲に竹王丸殿の誕生に、不思議の事共多かりけり。中にも、甲州の逸見、惠林寺の快川和尙と申すは、博識多才の名僧なる故、信玄、渇仰斜ならず。されば、大通智勝國師と申すは、此和尙の御事なり。然るに、快川和尙、其頃、同國鹽の山へ參詣し、二三日が程、其處に逗留してありけるが、或夜、深更に及んで和尙、夢見給はく、慥、鹽の山の向ふと覺しき所に、藤の俵を、又鹽の山と等しく積上げ、其上に、烏帽子直垂を着し、弓箭を帶して在す人あり。和尙、夢心に怪しき人にて候が、何人にてあるやらんと、守り居給へば、彼の人、和尙に向つて、此藤俵、武田の家を續ぐといふと覺えて、夢覺めた

快川和尙の夢

織田信長信玄に婚約を望む

り。其後、程なく信勝、誕生まし／＼ければ、扨は察するに疑なく、俵藤太藤原秀鄕の再來なる事を、此儀、快川、信玄へ委しく物語ありけるなり。斯かる所に、同じき廿七日、織田信長の使者、織田掃部助、甲府に參禮して申しけるは、信玄公に、七歲の御息女の候由、信長が嫡子奇妙丸に、嫁せたく候。御同心に於ては、信長父子が本懐、是に過ぎずとぞいひ送られける。さるに依つて、武田家の老臣馬場・山縣以下詮議して、密に信玄に申しけるは、信長、旣に四海を幷呑せんと欲し、上洛を企てられ候ひぬ。然れば、心中に斯樣の大望あつて、重緣を望まるゝと覺え候。此儀、御許容あらん事、宜しからじと存じ候。此緣を結ばせ給ふに於ては、行末、當家の大なる害と、なり候はんと申しける。信玄、實もと仰せられ、暫時思慮あつて、汝等が申す所、其理ありと雖も、今、信長が胸意を熟思するに、末は知らず。當時入魂の僞なき證據は、每度、信長より、小袖を入れ送る所の唐櫃、黑漆にして、武田菱を蒔繪に畫けり。其體、上品の物にして、金・銀・珠玉を鏤めり。又其匣を削らせて見るに、如何にも、無類の堅地なり。信長が方よりは、一年に七度宛定つて、音物の使者を送

る。信玄は、二年に一度も、使者を送らず。然れども、毎度の音物、殊更、念を入れらる、これ僞なきの證か。いでく、汝等に其證據を見すべしとて、年々の唐櫃を取出させ、削らせて見せ給ふに、果して宣ふ如くなり。此上は、信長が所望に任すべしとて、御返事ありしかば、信長、大に喜悦あつて、同じき十二月中旬、信長より緣結の印として、信玄へ、虎皮三枚・豹皮五枚・緞子百卷・金具鞍鐙十口、姫君へ、厚板百端・緯白百端・織紅梅百端・鳥目千貫・系懸帶三百筋、織田掃部助を、使者としてぞ送られける。

武田・今川確執附信玄岐阜へ進物を送らるゝ事

大僧正信玄は、一向天下を掌握にせん事を、深く思ひ給へば、駿州表、又は帝都へ、旗を揚げられん內試を、密々にせられん爲め、永祿十一年二月、太郎義信の屋形の跡に、毘沙門堂を、美々しく建てさせらる。總じて、大僧正になり給ひてより後は、一向、淸僧の行跡にて、護摩・灌頂等あつて、種々の行法を、行はせ給ひけり。內々、

今川家を攻滅さんと、近年、密々に調略ありしかば、今川家の老臣朝比奈兵衛大夫を始め、武田家に、志を通ずる者、多かりけり。爰に於て、同じき五月上旬、駿府へ使者を以て、貴邊の領地、東參河を信玄にたび候へ。其故は、故義元の弔合戰をし給はん時、東參河は、信州、伊奈に續きたれば、信玄が領地に、取續けたらんには、加勢の爲め、出馬仕るも、其便り宜しかるべし。さなきとても、德川家へ討取られ給ひなん。敵の物になし給はんより、信玄に給はり候へとぞ、いはせられける。氏眞、大に立腹し、我が父の弔合戰を遂げんに、信玄に加勢を請ふに及ばず。時節を見合せ、氏眞一身にて、本望を遂ぐべきなり。當家の怨敵信長と、緣者になり給ふ上は、信玄も、大方、敵とこそ存じ候へ。德川家へ、東參河は取らるゝとも、信玄へは、得こそ參らすまじけれ。信玄へ、東參河を參らせたらば、遠州をも頓て取られ候はん。定家の伊勢物語を、酒に沈醉したる體にもてなし、盜み取られ候ひしとて、亡父義元も、信玄は、表裏の大慾人とこそ申され候へ。氏眞が爲めには、正しく伯父にて候へども、以來、音信無用たるべし。信玄、調略を以て、德川家母方の叔父、水

野彌平大夫、内應せし事隱れなし。又、梶水之介を、甲府に呼寄せ、鐵炮十挺・木綿二百端與へ、參河へ馬を出しなば、汝、手引をすべしと、申されし事共、氏眞、悉く知るが故に、水野も、去年の冬、誅戮せしなりと、信玄より彌平大夫へ、送られたる廻狀を、使者に與へ、大に惡口してぞ返されける。是よりして、武田・今川の兩家、長く手切とぞなりにける。爰に、岐阜の織田信長より、去年婚約の進物ありしかば、其返禮として、同じき六月上旬、信州伊奈・飯田の城主秋山伯耆守晴近を差遣さる。信長へは、越後蠟燭三千挺・漆千桶・熊皮千枚・馬十一匹なり。其中、一匹は宇都宮より進上したる鬼河原毛といふ名馬なり。信長の家嫡奇妙丸殿後、從三位中將信忠と號すへ、大左文字安吉の脇差・板倉鄕義弘の太刀・紅千斤・綿千把・馬十匹、中一匹は、陸奧立の名馬にて、會津黑と號けられたるを、進上あり。信長、大に怡悅あつて、七五三の饗應あり。七度の御盃に、七度の引出物を給はりぬ。三日目には、梅若大夫に仰せて、猿樂能を興行あり。其後、鵜匠を集め、岐阜川にて川狩あり。鵜を遣せて、晴近に見せしめられ、其獲る所の鮎大小を、信長、自ら撰分け給ひ、晴近に直に渡し給ひ、

甲府に送られけり。逗留の間、種々善盡し美盡せり。晴近、忝き次第を謝して、七月上旬、甲府にぞ歸りける。同月又、信長、使者を甲府に差越され、色々の音物をぞ送られける。中にも、菊の御方へ、四間四方の匂袋を送り給ひけるこそ、例少きものなりけれ。

武田三代軍記卷之第十二終

武田三代軍記 卷之第十三

信玄駿河國亂入附今川氏眞敗北の事

謙信氏康と和睦

玆に、上杉管領入道謙信は、北條氏康と和睦あつて、氏康の七男三郎を養子とし、上杉三郎景虎とぞ、號けられける。さるに依つて、謙信、信玄とも和平すべしとて、甲州の一向宗長遠寺を以て、いひ送られければ、信玄、此事を聞き給ひ、謙信、若大將なる故、物每荒々しく、和議未だならず。一度和睦せば、信玄に於ては、違變あるべからず。彌々和議を調へんと思ひ給はゞ、此以後、謙信、少しの事をも心に懸け、短慮を發されん事、無益なり。老いたるを敬ふ事、父の如くすといへば、信玄は、年も老たると思ひ、此方に人質などをも差越され、以來、他事なく入魂せられば、我れ何ぞ疎かにすべきとて、長遠寺に、信州岩村田の法興和尚を差副へて、越後へぞ差越

されける。謙信、大に怒られ、未だ和議ならざる先より、謙信を以て、早や幕下の如くに、會釋ふこそ安からね。法師とはいはせじ、使僧を討つて捨てよとぞ怒られける。是より彌〻手切れとなりにける。さるに依つて、馬場美濃守信房が繩張にて、長沼に城を築かれ、市川入道梅印・原與左衞門をぞ籠め置かれけるっこれ越前の朝倉左衞門督義景・江州の淺井備前守長政・伊勢の國司北畠殿・攝州大坂の本願寺顯如上人・宇津宮萬喜少弼以下、國々の諸侯、又は山門の衆徒に至る迄、武田家に志を通じ、將軍家を取立てられ、天下一統の旗を上げられ候へと、日々夜々の內通、頻なれば、先づ北條家を攻滅してこそ、天下に旗はあげめとて、態と上杉家の和睦も、ならざるやうにぞ計らはれける。然るに、同じき十一月、信玄、少し不例にておはしけるに、醫師板坂法印、御脈を診み、申しけるは、御病氣、近日御快然にて候はん。然れども、一兩年の中に、膈を御煩ひ候はんか。京都より名醫を召し、御藥をも召上げられ候へかしと申す。信玄、仰せけるは、委しき事を、汝が眼の及ぶ所、僞なく申すべしとて、法印に誓紙を書かせられ、存命の際限を尋ねらる。假令、立所に死すとも、爭

てか帝都より醫師を呼び下さんとて、夫より上洛の用意、甚だ急なり。然れども、諸方の調議、未だ熟せず。これ北條の望を叶へ、且つ上杉入道と、兵を締ぶに依つてなり。人に先ぜられなば、痛快臍を噛むとも、益あるべからず。先づ北條家を攻潰し上洛すべし。然れば、其手初は、今川家を押倒すべしとて、甲斐・信濃・上野三箇國の軍勢、二萬五千餘人を引率し、同じき十二月六日に、甲陽を發馬あつて、駿州宍原に討つて出で、山縣三郎兵衞尉昌景を、內房通へ差向けらる。昌景、內房山に押上り、新衆二千人を以て、道を造らせ、薩埵山八幡平へ、押出さんとする由を聞き給ひ、信玄、直に興津の川上を打渡し、橫山通を進發あり。今川氏眞、此由を聞き給ひ、切所に向つて戰ふべしとて、駿府の城を打出でらる。先鋒は、庵原安房守・新里式部少輔、一千五百餘人にて、薩埵山金澤邊に陣を取る。岡部忠兵衞尉・小倉內藏之助兩將、今川家の十八人衆を從へて、八幡平に陣を取つて、軍勢、尺寸の地もなく控へたり。大將今川上總介源氏眞、淸見寺に本陣を居ゑ給へば、參河・遠江・駿河三箇國の軍勢共、甲の星を朝日に輝し、思ひ〳〵に、武具の袖を連ねしは、武藏野の秋風の、露吹き散

らしたるに異ならず。家々の旗纒は、三保の松風に飜つて、吉野・龍田の春秋を、一度に見るかとあやまたる。今川の軍兵等、大將の大事、此時にありと、鐵炮に火藥を備へ、弓押張り索引して、敵遲しと待懸けたり。斯くて、大僧正信玄、横山の坂を押上り給ふに、今川家の陣は、薩埵山八幡平を堅めて、敵軍、横山通を押通るを、目の下に直下（みおろ）して、一戰に打散らさんと議して、既に押懸らんとする所に、思の外、山縣昌景、内房通より、薩埵八幡平へ討つて出で、今川家の先隊へ討つて懸る。庵原安房守・新里式部少輔以下、之を遮らんとする間に、大將信玄、龍の海を出づる風情にて、横山通を押出し、淸見寺に陣取りし氏眞の旗本へ、眞直に押懸り給へば、今川の一族瀬名陸奥守嫡子中務少輔・朝比奈兵衞大輔・葛山備中守を始め、武田家に志を通ずる者共、敵は、味方の旗本へ、切懸ると見えたるぞ。後を取切られては叶ふまじ、一先づ府中に引入れよといふ程こそあれ。見崩に崩れて、引退けば、陣々、大に騷立つて、我先にと落去りけり。薩埵山より淸見寺迄、尺地もなく陣取つたる軍勢共、一騎も殘らず、敗北したりければ、氏眞、心は矢猛にはやられけれども、本陣の勢だ

も、皆逃去つて、僅か七八十騎には、過ぎざりけり。今は弓折れ、矢盡きたる心地して、這々逃げて、府中の城にぞ打入らるゝ。朝比奈兵衞大輔は、今川の一の老臣にてありけるが、一番に城中へ引入れて、氏眞の長圍爐裏にて、後炙して居たりけるを、小倉内藏助・岡部忠兵衞尉、餘り不審に思ひ、大將氏眞の前に參り、朝比奈兵衞は、別心を存するかと覺え候。早く誅せらるべしとぞ申しける。氏眞、驚き何條さる事のあるべき。夫は申す者の僞にてぞあるらん。斯樣の時は、敵より間者を入れて、樣々の事を、言はしむるものなるぞと宣へば、兩人承り、朝比奈は大剛の者にて、當家隨一の者には候はずや。今日の駈合に、一番に見崩れして、引退くのみならず、鎧を脫ぎ帶を解いて、腰を炙り罷在る體、一向、逆心に紛なし。敵早や淸見寺迄、充滿したる由、如何計らひ給ふべくやと、周章しく申すに、氏眞、大息ついて、兎角、老臣等を呼びて議すべしとて、三浦右衞門尉に、姓名を記せとあるに、兵衞は居るかと尋ねらるゝ。小倉承つて、以前の所には、見え申さずといひて、人質を尋ぬるに、早や盜み出して、何國ともなく落ち失せたり。すは、朝比奈は出奔せしと、いふ

程こそあれ。瀬名・葛山を始めとして、悉く別心し、思ひ〳〵に落行きけり。これ皆三浦右衛門尉が、氏眞の寵に誇り、我意を擧動ひ、譜代の重臣等を蔑如にし、民を困め、君臣の禮を失ひければ、忽ち天誅に依つて、源家正統の名家なれども、累代居城をも、軍卒の蹄に、穢され給ふこそ、淺ましかりし事共なれ。

今川氏眞沒落附徳川源君駿州御出馬
並秋山伯耆守晴近の事

去る程に、武田家の先鋒、山縣三郎兵衛尉昌景・馬場美濃守信房・小山田左兵衛尉信茂・（初名彌三郎と號す）小幡上總介信定（初、尾張守と號す）・眞田源太左衛門尉信綱・舍弟兵部丞昌輝・内藤修理正昌豐、是等七頭の諸將、既に江尻を打越えて宇八原迄押寄せたり。今川家には、宗徒の者共、悉く別心しければ、志ある輩、少々殘り止ると雖も、互に人の心を疑ひ、防戰ふべき義勢はなかりけり。氏眞、大に力を落し、唯茫然てぞおはしける。近臣等相議して、兎角、敵の爲め、擒となし申さんも、口惜しかるべしとて、殘兵、少

今川氏眞没落

少從へられ、山西を指して落ち給ふは、哀れなりし事共なり。斯くて、信玄は、勝つて誇らざる良將故、小池主計・三澤四郎兵衞・中村彌左衞門・窪田介之丞、四人の者を以て、雜人に雜へられ、早く城に入つて、火を懸くべしと、下知せられしかば、翌十三日、四人の者共、城に入つて、此處彼處に、火を懸けたりければ、餘烟、四方に吹覆ひて、一時の灰燼とぞなりにけり。茲に、駿州山西、花澤の城には、小原肥前守、遠州懸川の城には、朝比奈備中守、藤枝德の一色には、粉川芳榮が一子長谷川二郎左衞門尉、楯籠り居たりけるが、朝比奈備中守が計らひにて、大將氏眞を、己が居城、懸川へ入れ參らせて、凡そ三千餘人にて籠りけり。斯くて、武田の先陣は、八幡・沓谷・宇八源・江尻に陣取れば、信玄は、籠鼻に本陣を居ゑ給ふ。然る所へ、今川家の士大將廿一人、兼ねて內通をしたる事なれば、本陣に參り、皆々、人質を出しければ、甲府へ送り給ふ。扨、興津の横山に、砦を築かせ、穴山伊豆守入道梅雪を入置かる。

氏眞懸川城に入る

是は穴山殿、興津に續きたる下山の領主なる故なり。又今川家の、庵原彌兵衞といへる武功の者を、召抱へ給ひ、此邊りに、小勢にても、堅固に籠らるべき城地はなき

信玄久能山に城を築く

かと尋ね給ふ。庵原承り、山本勘介晴幸、駿府に罷在りし時、某も軍術を學び候ひしが、勘介、常に申せしは、當國久野山に、逞兵十人にて楯籠らば、凡そ日本國中の軍勢を以て、攻むるとも、容易(たやす)くは落つまじとこそ、申して候へ。尤も其地利、究竟の所にて、御座候と申しければ、信玄、之を可なりとし給ひ、久能に城を築き、弓・鐵炮、形の如く、兵糧、三年の用意にて、今福入道淨閑嫡子丹後守をぞ入置かれける。斯かる所に、參州岡崎の徳川家康公、其勢、七千餘人を從へられ、遠州井谷に、菅沼二郎右衞門・近藤登之介・鈴木三郎大夫を差置かせ給ひ、濱松端輪の法華寺に、御馬を立てられ、植村與三郎・山岡半左衞門尉兩使を以て、信玄へ仰遣されけるは、當家の軍勢を以て、懸川に押寄せ、今川氏眞の不仁を誅し候べし。尤も大井川を限つて、遠州は悉く、予伐從へん。信玄は、駿河を切治められ、然るべしと仰遣さるゝ。爰に、先年より、徳川家の御舍弟源三郎殿を、駿府に差置かせ給ひけるを、今川上總介氏眞、打捨てゝ逃げられし故、信玄の方へ、此松平源三郎殿を取置かれぬ。さるに依つて、兎も角も、仰に從ひ候べしと、返事ありしかば、夫よりも、徳川源君は、不入計(ふりやませ)に御

徳川勢、懸川城を攻む

馬を立てさせ給ひ、同じき廿七日、懸川の城に押寄せさせ給ふ。先陣は、酒井左衞門尉忠次・石川伯耆守數正・鳥井彦右衞門尉元忠・大久保七郎右衞門尉忠世・大須賀五郎左衞門尉康高・松平左近・石川日向守・本田平八郎忠勝・榊原小平太康政、以下一人當千の人々、直ちに押寄せ、引包んで奮ひ撃つに、城中防兼ねてぞ見えたりける。爰に又、遠州乾の城主天野宮內右衞門尉は、兼ねて武田家に、志を通じければ、秋山伯耆守晴近、命を承けて、信州下伊奈の勢、三千餘人を引率し、山路を押通つて、遠江の見付の町に打入り、屋敷城を乘取つて、其所に陣を張り、遠州北山家の諸士の人質を、記しけるに、勾坂六郎五郎來つて、勾坂の宗嗣なりと、記させける。次に、勾坂十左衞門來つて、某、勾坂の宗嗣なりと、互に之を爭ひけり。時に六郎五郎、先達て、竊に晴近が陣營の城戶の邊りに忍び居て、十左衞門が歸るを待受け、切殺し、直ちに懸川に馳行き、徳川源君へ、秋山晴近が所行を、一々訴へければ、徳川家、安からぬ事に思召し、山岡半左衞門尉・植村與三郎を以て、信玄の陣に仰遣されけるは、貴老は、駿州を治められ、予は遠州を從へんとの、兼ねての約束相違し、秋山が擧動こ

そ、心得難く候とありければ、信玄、返答に曰く、秋山以下の者共、其表に在陣仕るを以て、信玄は、遠州をも望むとの御疑心、尤もに候なり。所詮、晴近を呼取り候はんとの趣にて、兩使を返し給ひけり。然れども、秋山、見付を會て引取らず。徳川家より召せども、參らざりければ、酒井・本多等の智勇の臣と同じく謀を廻らされ、秋山が方へ、仰遣されけるは、予、晴近を以て、信玄の印を乞ひ、今より尾州を伐治むべし。遠江は、兎角、信玄領せらるべし。其爲め、酒井左衞門尉を、原川迄出すべしと、方便り給ひ、本多忠勝・酒井忠次・榊原康政を差副へられ、秋山が來るを待伏せ、捕へて手籠にし、遠州諸士の人質共を請取り、伯耆守を、二俣へ差越し給ふ。晴近は、危き害を免れ、漸々、信州伊奈へぞ赴きける。

北條氏康後詰附武田勢薩埵山の陣屋を破る事

茲に、相州小田原の北條左京大夫氏康は、今川氏眞の舅なれば、信玄の擧動を安からず思はれけれども、先づ其心を引見ん爲め、使者を、武田家に馳せらるゝ。頃は

永祿十二年正月五日、駿府に參陣し、樣々の佳肴を獻じて、申しけるは、氏眞、奢侈第一にして、行跡、人望に背きし故を以て、追伐を加へられし條、尤に候と、懇にいはせられける。さるに依つて、信玄も同じき十二日、寺島甫庵といへる伽の者を、小田原に遣され、種々の進物を送らるゝ。氏康、大に怒り、甫庵を伊豆の北條へ差遣し、禁籠せしめ、氏康が父子として、氏眞を、駿府に還住させずんば、信玄を討果し、永く憤を散ぜんと、永祿十二年正月十八日、小田原を打立つて、駿州に押向くる。相從ふ者共には、北條常陸介・同治部少輔・同新三郎・松田尾張守・同肥後守・狩野入道一庵・九島伊賀守・大道寺駿河守・多目周防守・荒川豐後守・成田下總守・千葉介國胤・原式部大輔・橋本次郎右衞門尉・內藤大和守・大石信濃守を始めとして、四萬五千餘人の軍勢共、薩埵山・八幡平・由井・蒲原より三島迄、段々に陣取れば、大將氏康は、三島の新徑寺に、本陣を居ゑられたり。武田の出抜(すつぱ)共、此由を告げたりければ、信玄聞き給ひ、此度、花澤・山西等の城々へ、軍勢を遣さゞる事、氏康が後詰を、察するが故なりとて、山縣三郎兵衞尉昌景・相木市兵衞尉を大將として、三浦右近・同兵部丞・大

熊備前守以下の相組、凡そ一千五百餘騎、懸川・田中・花澤等の押のため、鞠子へ差向けられ、其身は、一萬八千餘人を引率し、興津川原へ馳向ひ、興津山の切所に、本陣を居ゑらるれば、先手の勢は、興津川を前に當て、次第を守つて陣を取る。頃は、正月中旬の事なれば、餘寒未だ烈しうして、雨雪を誘ふ山嵐、濱の眞砂を卷上げたれば、寒風、膚に徹つて、手屈まり足蹇け、敵味方、共に働く事を得ざりけり。爰に於て、信玄、荻原豐前守・山木土佐守・中村彌左衞門以下の中間頭に仰せて、國中の酒を、悉く買取り來るべしと命ぜらる。三人の者共、雜人を召從へ、駿府中の酒店に入り、數百駄の酒を買取つて、興津に歸り參りければ、近郷の村里より、鍋釜を多く取寄せられ、彼の酒を燰めさせて、士卒はいふに及ばず、中間・悴者・歩人足に至る迄悉く之を飲ませられけるに、我も〳〵と、勇み進んで呑みける體、信玄、御覽じて、汝等、此酒を呑みて、寒氣を忘れたるかと宣へば、軍勢承つて、さん候。酒にて手足の暖まりたるよりは、君の御情の有難さに、寒氣を凌ぎ、死して蘇りたる體に、御座候と申す。信玄聞召し、汝等、斯樣の平地に、營をなし、酒を飲んでだに、寒さの忘れ難

きに、敵は薩埵山・倉澤山に取登つて、陣をなせば、塞氣、何程か防ぎ惡からん。察するに、敵兵は、よも山上に怺へて、陣を守るべからず。麓の在家に下つてぞ居んずらん。氏康が軍政、何程の事かあらん。唯今の酔の覺めざらん内に、敵の先手共の役所を、蹈破つて、敵に一鹽付けよと、下知し給ふ。早雄の魁兵共、承るといひて、唯一息に、薩埵山の陣に攻上り、爰彼所と見廻れども、旗數十旒、木々の梢に翻りたる計りにて、軍勢、一人もなかりければ、陣所々々を押破り、悴者(かせもの)・中間等、少々討取り、武具・馬具・鎧・太刀・刀等、思の儘に、亂取をぞしたりける。

馬場美濃守信房武略の事

斯くて、武田・北條の兩家、日毎に勢を出し、雌雄を爭ひけるに、甲陽の士大將は、十番迄の鬮を取つて、一手切の迫合あり。馬場・内藤・眞田・小山田・小幡・高坂等、各、一人當千の陣將、花々しく働きたりしに、戰ふ度に、敵を追込まずといふ事なし。中にも、高坂彈正は、上杉入道、川中島へ打出てらるゝ事もやと、御暇給はつて、海津に

歸城したりけり。二の新は、跡部大炊助なれば、迫合の番に相當つて、三百餘騎にて討つて出て、松田尾張守と駈合せて、入亂れ揉合ひたり。馬場・內藤・眞田・小幡などの、武功勝れたる面々の、深々と働くを見て、跡部勝資、其眞似をして、北條の勇臣松田に、何の手もなく追立てられ、右往左往に敗走す。本鄕八郞左衞門尉は、跡部が備の檢使を承つて、向ひけるが、崩るゝ味方を恥しめて、終に武田の軍勢の、敵に押付を、見せたる事のなきものを、穢し、返せと下知し、其身、手痛く働き、竟に討死をぞしたりける。北條家の軍勢、機に乘りて、透間をあらせず、三町計り追詰めしが、跡部、敵に喰留められ、引きも懸りもせられればこそ、既に討たれぬべくぞ、見えたりける。信玄、此體を見給ひ、馬場美濃守信房を召され、跡部、不覺の働して、味方の恥辱を、取る事こそ安からね。汝、馳向つて、松田が備を追崩せと、宣ひければ、信房、承つて仰にては候へども、某、信州牧の島に、在城仕り候へば、彼の處、大事の堺目と存じ、五百餘騎の騎卒、四百騎、城に殘し置き、百騎を以て出陣仕り候へば、僅に雜兵四五百人には、過ぎ候はじ。此小勢を以て、松田が大勢の、然も勝

誇つたる軍勢に、駈合せ候はん事、覺束なく存ずるなり。既に、跡部三百餘騎、雜兵千五百餘人の大勢だに、戰損じたる所なれば、此段、御請申難く候。願くは、餘人に仰付けられかしと申す。信玄、重ねて、汝を牧の島に在城させ、上杉の剛敵、又は飛驒・越中の强敵を、預け置くと雖も、信玄が出陣に、必ず先づ、汝を召連れずといふ事なし。これ武功、他人に勝るゝを以てなり。馬場・內藤ならでは、あるべからず。辭するに及ばず。兩人の內、早く罷向ふべしと仰せける。內藤罷出で、申しけるは、跡部、大に敗軍して、剩へ咬留められ、早や討死を仕りたるやも知れず。此所を仕返したらんには、馬場殿ならでは、誰か候べき。一刻も早く、馳向ひ給ふべしと申しければ、信房、今は辭するに及ばず、跡部には、何卒足早に引取り候へと仰付けられ、然るべう存ずるといひ捨てて、我が陣に馳歸り、介副の鎧を追取つて、肩に懸け、己が武者奉行を呼んで、跡部勝資、松田尾張守に打負けて、敗走に及ぶにより、二の新を仕つて、松田を追崩せとの上意なれば、辭するに及ばず、馳向ふ所なり。早く軍勢を、揃へよといひけるに、畏まるといふ儘に、須臾に人數を揃へければ、信

房、頓て五百餘人を引率し、地黒に山道の旗を押立てさせ、八幡平へ討つて出で、跡部が引取る馬手の方より、五百餘人を三備に作り、我が旗本を以て魁とし、殘る二備を以て、奇兵とし、競ひ懸る松田が二千五百餘騎に、面も振らず討つて懸る。松田、之を見て、唯今、馳向ふ敵の荒手は、正しく馬場美濃守とこそ見えたれ。大事の敵なるぞ。然れども人數は、やわか六七百にはよも過ぎじ。小勢を以て、新に押出し戰はんとする。己が武邊を、鼻にかけたるこそ安からね。唯引包んで、一揉に揉み崩せと、采配を採つて、下知すれば、勝誇りたる松田が勢、足竝を直して、猶豫はず、馬場が旗本二百餘人を引包んで、火水になれとぞ揉んだりける。信房、些とも動搖せず。鐵炮を以て、一放切に敵を打噤め、究竟の騎馬を一面に連ね、敵、馬上にて、跡部を追懸け來り、下立ち隙のなき所を、內甲を見、上に突落させ、馬の平首・太腹、或は鎧の透間、小勢聢と後を合せ、突立てける騎兵の鎗に、松田が逞兵十七八騎、枕を竝べ討たれけり。松田勢、是に辟易して、色めく所を、後備の三百餘人、穗先を揃へ、兩方より入違つて、突立てければ、松田が軍勢、四度路になり、崩れかゝ

信玄信房を賞す

る所を、馬場か猛卒、根來法師鳶大貳坊、崩れ際の鎗と名乘つて、敵五六騎、突伏せ働きけるに、松田勢、足を留め兼ね、咄と崩れて引退くを、追蒐け〳〵、敵を討つ事七十三級、敵陣の一の城戸迄押込み、則ち柵を乘取りたり。斯くて、信玄、軍使を遣され、早々、勢を引揚ぐべしと、仰下されければ、信房、自ら馳廻つて、軍勢を纏め、手輕く引揚げけるに、さしもの馬場が武勇に怖れ、一人も咬付く敵もなかりけり。味方の諸將、大に感じ、信房が武功を仰ぎければ、信玄、大に怡悅あつて、晴信入道が目矩は、毛頭も違ふべからずとぞ宣ひける。斯かりける所に、信房、采配を腰に納め、甲を脫ぎ、高紐に懸けて、御前に畏まる。信玄、早晩よりも、心勇氣に打笑ひ宣ふは、信房が今日の働は、少し强過ぎたる擧動なり。必ず十分の勝は、易の理に背くぞ。予、汝を以て、右の腕なりと思ふぞとて、御盃を給はり、感狀を下さる。內藤昌豐、信房に向つて申しけるは、今日の働、貴殿に似合はざる誤をし給ふ物かな、といへば、信房打笑ひ、さればとよ。弱敵の崩るゝは、討ごたへなくして、思はずも深入仕る事、未練の擧動と存ずるなり。斯樣の格外の働も、蹈へ所なくしては如何、

信房が斯樣に擧動ふとて、若手の面々など、おめ〳〵と働かん事は、鵜の眞似をする鳥なるべしと、申しければ、跡部、傳へ聞きて、大に憤り思ひけり。信玄、內藤が申す旨を聞き給ひ、武道評議の最上なり。予が家の武備、頂上したる所なれば、面々も其思慮をなすべし。信房が如きは、是非を分つに及ばずと宣へば、信房、面目を施し、我が陣にぞ歸りける。寔に、甲州の軍勢、少しにても、敵に押付を見せたる事、前後始めてなりと、先手の若者共、歌に作つて躍りけるは、猶も茂れや八幡林、紅丸據旗の懸る程とぞ諷ひける。跡部が旗は、白地に日の丸を畫きければ、斯かる怯弱の者には、據旗の日の丸、憚あり。所八幡平なれば、八幡林とはいふなり。並木に旗を引懸けて、敗軍せしといふ心にて、大に欺き笑ふ事なるべし。

馬場・內藤諫言附馬場・山縣夜討並信玄歸陣の事

斯くて、武田・北條の兩雄、去る正月十八日より、同じき四月二十日迄、九十三日の間、對陣をぞせられける。其間、日々夜々の迫合に、武田の諸將、一度も敵に押付を

見せず。唯、いひ甲斐なかりしは、跡部一人なりけり。又此間に、江尻・横山・淸水三箇所に、城を築かるゝ。各繩張は、馬場美濃守信房、奉行は今福和泉守奉つて、新衆人足、總て七千餘人、晝夜の分ちもなく、急がれしかば、程なく成就したりける。中にも、淸水の繩は、若しも北條家の海賊、不意に來つて、船軍せば大事の軍あるべしとて、信房、分きて祕密の繩をぞ取つたりける。信玄、則ち信州の丸子三右衞門尉に、舟手の勢を差副へて、此城に差置き給ふ。山本入道道鬼齋が船軍の密法は、馬場信房のみに傳へたり。されば丸子は、美濃守が婿にて、船軍の法を傳へ知るが故なりけり。世人、淸水の繩の大事、曲尺の習といへるは是なり。扨又、久野の城には、今福入道父子、江尻には、武田左衞門佐信光、横山の城には、宍山伊豆入道梅雪をぞ、籠められける。然れども、武田家の軍勢、甲斐・駿河の間に、大山切所多くして、兵糧通路の便り惡しければ、諸卒、是に苦みてぞ見えたりける。斯程迄、隣國の諸將を切靡けられ、追付、天下を幷呑あらん支度、晝夜を捨てられず。然るに、當時、武略に長じ軍の試、密々の軍議等、決斷し給ふ相手に、四臣と號けられて、

尤も重く用ひ給ふは、馬場美濃守信房・高坂彈正忠昌信・山縣三郎兵衞尉昌景・內藤修理正昌豐なり。中にも、馬場信房は、山本道鬼が軍旅の奥儀を相傳し、軍配の達人にて、英才俊秀の智者たるに依つて、四臣の隨一とぞ仰がれける。高坂は、先達海津に歸り、山縣は、山西の押に置かれしかば、此度の軍議に、殘りし兩人を召し、軍の意見を尋ねらるゝ。內藤昌豐が申しけるは、斯く長陣を張らせ給ふ事、大に然るべからず。醫師が眼を淸くせんとて、脚の三里に灸をさせ候と申す。馬場信房は、啄木と申す鳥の候が、自餘の鳥には變り、蟲を取り喰はんとては、穴の後をつゝき、口へ出づるを取り候と申す。信玄聞召し、面々が意見の如くに、予も思ふぞとて、近々、歸陣に定められ、山縣三郎兵衞を、駿府より召寄せられ、敵の陣城一箇所、押散らさせ、又、馬場・山縣に命じ給ひ、今宵、由井源三が陣へ夜討して、敵に眠り覺させよとぞ仰せける。由井源三氏照と申せしは、氏康の二男、後に北條陸奥守とぞ申しける。武州八王寺の城主にて、尤も武名八州に鳴る。味方の諸營を離れ、陣取つて、陣前に柵を茂く振り、篝火を多く燒續け、用心嚴しく備へたり。馬場・山縣は、

軍勢を引率し、深更に及んで、忍びやかに押寄する。信房が手に、富田郷左衛門とて、忍の上手あり。是に劣らぬ剛者に、早川三左衛門・海野新左衛門・金丸彌左衛門、此四人を以て、忍の頭とし、究竟の騎馬三十騎を、胴勢となし、敵陣の城戸に忍寄り、境段出抜を用ひて、北條家の番人に似せ、忽に由井氏照の陣中に押入り、役所に火を放ちたり、胴勢、之を見て、すは、相圖の火の手を揚げたるぞと、喚き叫んで咄と切入りしかば、敵兵大に騒立つて、武具をすれども、上帯を忘れ、繋馬に鞭打つ所を、胴勢、一度に亂入り、多く敵を討取つたり。信玄、大に感悦あり。馬場・山縣が武略、今に始めずとぞ宣ひける。斯くて、四月廿七日、甲府に歸陣あるべしとて、翌廿八日、駿州庵原の山越に、道路なき深山を、原隼人佐昌勝に積らせられ、安々と甲府に、歸陣し給ひけり。此度、北條家の出陣、氏眞の加勢といへるは、其名計りにして、此弊に乘じ、駿州を奪はんとの方便なれば、駿府の城の燒跡には、小倉內藏助・森川日向守・久野彈正・富永・酒井・阿部以下の者共を籠め置き、蒲原・大宮・神田・屋布・興國寺・善德寺・長久保等の城にも、同じく北條譜代の諸士を置き、氏康・氏政父子、共に

小田原に歸陣せられけり。茲に、德川源君は、懸川の城を十重・二十重に取圍み、晝夜、息をも繼がせず攻め給へば、城中の軍勢、悕へ兼ねて、過半討たれ落失せたり。氏眞、今は術盡きて、德川家、古の舊好を忘れ給はずんば、氏眞を、今一度、駿河に還住させ、武田退治の計をなして給び候へ。然らば、當城をも明渡し、又、遠州をも參らせ候べしと、種々詞を盡して、いひ送られければ、德川家聞召され、予、故義元朝臣の烏帽子となりて、舊好忘れ難く候條、御望の如く、和好をなし、駿府還住の方便をなし候はん。御心安かるべしとぞ、返事し給ひける。これ北條父子、樣々に噯ひ給ふに依つてなり。斯くて、懸川の城は、明渡されけれども、駿府の城、未だ普請半中なれば、歸り入るべき城もなく、一先づ戶倉の城に移るべしとて、懸塚より舟に乘り、戶倉の城に赴き給へば、德川家より、松平若狹守を以て送らせらる。是より氏眞、暫くは豆州戶倉の城にぞ居給ひける。氏眞の寵臣、三浦右衞門尉は、日頃、我意に任せて、非常を擧動ひければ、今川家の滅亡、偏に三浦一人がなす所なり。誅戮して讐を報ぜよと、諸士・町人・百姓迄、一黨して閙り騷ぎしかば、四海廣しと雖も、

一身を置くに所なく、譜代相傳の主君を捨て、高天神の小笠原を、さりともと賴み、逃込みけれども、小笠原、渠が積惡を惡み、頓て捕へて、縛首をぞ刎ねたりける。斯くて、德川家は、懸川の城に、石川日向守を差置かせられて、三州岡崎に御凱陣なされけり。

信玄川鳴島出張附津浪の事

去る程に、信玄、伊豆・駿河の堺に、出張あるべしとて、甲斐・信濃・上野三箇國の勢、一萬八千餘騎を引率し、永祿十二年六月二日、甲府を首途あつて、富士の山中金玉通を、大宮に着陣あり。此時、內藤修理正昌豐進み出て、是より笛吹峠の方へ、御働き候へかしと申す。信玄聞召され、予、此度の出陣は、北條が勢を減ぜんが爲めなり。敵の勢を察するに、今五箇國の領主なり。殊に當時は、上杉謙信と合體する故、東上野も、悉く北條が幕下なれば、軍勢凡そ五萬有餘、六萬にも及ぶべし。此度、三島・韮山邊、方々を燒働かせば、氏康、是に怖れて、蒲原・善德寺・高國寺・三牧橋以下、十

五箇所の城々へ、加勢を分けて籠らすべし。小田原の勢を減じさせて後、一戰に大利を得んと、思ふなりとて、神田・屋布を、三千餘人にて押へさせ、圓能・興國寺・善徳寺の三城を、又三千餘人を以て押へ、相殘る軍勢、一萬二千餘人を以て、韮山・山中迄押詰めさせ、民屋を悉く燒拂はせ、同じき十七日には、三島近邊の在々を放火あつて、翌日川鳴島に陣し給ふ。

信玄、川鳴島に着陣

斯かる所に、俄に風烈しく、大雨頻に降出でたり。陣場奉行の原隼人佐昌勝、大將の御前に參り申しけるは、天氣を考へ申すに、雲の飛行する體、海鳴り山震ひて、頻に大風洪水の、出來るべき樣子に御座候。殊更、此所惡き地利に候條、急に御陣を替へられ、然るべく存ずると、詞を盡し申しける。信玄、常は諸臣の諫を、早速に許容あるに、今度は、如何なる思慮かましまし けん。曾て、隼人佐が諫を容れ給はず、則ち其所に陣し給ふ。隼人が申したるに違はず、雨、頻に強く、車軸を降すに異ならず。信玄、諸勢に下知し給ふは、今宵は曾て寢るべからずと、觸れさせられて、旗本は、猶ほ川近く陣取り給ふ。然るに、其夜、亥の刻に及んで、山鳴渡り、洪水、陸を浸し、逆浪さかまき來りければ、すはや、津浪こそ打來れと、陣

中の騷動斜ならず、武具・馬具・雜具に至る迄、悉く打捨ててこそ引取りけれ。されども、信玄、さまで驚き給はず、靜々と、甲府に馬を納れ給ふ。津浪に取られし兵具、幾許といふ數を知らず。爰に、八幡大菩薩の持旗一旒、何としてか取忘れけん。津浪に漂ひ、翌日北條家に取揚げ、大將氏康に參らせければ、甚だ悅喜あつて、九島伊賀守に給はりしかば、九島が家の奇寶なりとぞ悅びける。然るに、其夜、興國寺の城、小勢なりとて、氏康、下知をなし給ひ、福島治部大輔・山角紀伊守・太田大膳亮を、加勢として遣し給ふ。されば、北條家の批判には、其夜、彼の三將、百餘騎を從へ、相圖の明松を多く立て、高國寺へと急ぐを見て、武田の軍勢、敵、夜討に寄すると驚き、敗軍して、斯く據旗迄、取落し逃げたるは、信玄、一代の不覺なりとぞ沙汰しける。

信玄に對する北條家の批評

然れども、これ兵家、實の批判にあらず。夜討を怖るゝは、陣營常の事なり。左計りの良將、敵、夜討に寄すればとて、何ぞ一戰に及ばずして、諸隊、悉く敗北せん。洪水・津浪は天災なり。何ぞこれ人力の及ぶ所ならん。此場に至つて、列を亂し、軍勢周章てたるを以て、恥辱なりとせば、洪水・津浪の爲めに、溺死したるを譽とせんか。

皆これ、北條家瓣人の批判にして、一つも武具正義の沙汰に中らず。然れども、末代の人口譁しければ、取るに足らざれども、之を記す。これ信玄、原隼人佐が諫を、用ひ給はざるにより、不慮の難儀に及び、剰へ不實の汚名を蒙り給ふものなり。

信玄關東出陣並高坂彈正忠昌信諫言の事

斯くて、信玄は恙なく、甲府に歸陣あつて、常よりは猶ほ、氣色快然たる風情にて、同じき七月五日、保田・香清以下、歌道に携はる輩を、毘沙門堂に集められ、和歌の會をぞ催されける。關路月といふ兼題にて、信玄、斯くぞ詠じ給ふ。

清見潟空にも關のあるならば月を止めて三保のまつばら原

去る程に、北條氏康は、諸所の城々に、軍勢を分籠められければ、相州小田原に殘り留る軍勢、二萬人には過ぎざりけり。信玄、兼ねて斯くあるべしと、思ひ給へば、忍の者を以て、日々夜々に、小田原の體を聞召し、相州亂入の試頻なり。北條の領分、一分間の繪圖を以て、能く地利を考へられ、直に小田原へ亂入つて、箱根へ懸り、三

島へ出づべきか、然れども、其間、敵城餘多あれば、三增峠を越え、甲州郡内へ出づるか、何れも、始の道を歸陣あらんは、危ふければ、三增峠に懸つて、歸陣あるべきにぞ定りける。これ敵國に亂入するに、良將、先づ戰に、勝つ事を先んぜずして、味方の軍勢の進退、自由なる事を第一とす。必ず大敵を後にして、引退く時、味方を切崩さるゝ事、常の事なれば、此所を肝要に、軍勢を扱ひ、還て敵を喰撃つ謀なり。既に一場に於て、同日同敵に向ふ七重の試決して、百戰百勝の理、盡さゞれば戰はれず。扨、三增筋は、敵城築井、一所なれば、さまで大事もあるべからず。又、敵を引懸くる合戰に、三增峠の如くなる場所、なしと定めらるゝ。折節、高坂彈正昌信、在府して候ひけるが、汝は早く海津に歸るべし。十月になりなば、謙信も出張すべからず。然れば、押の勢も、多くは入るまじければ、二三千計り殘し置き、相備の者共、又は、信州在國の諸士を催しなば、七八千はあるべきなり。是等を以て、海津より討つて出でよ。牧の島に、馬場を殘し置きぬる上は、信州の儀は氣遣なし。信玄、三增にて、若し戰負けなば、築井の城に押を置き、氏康と對陣せん。其時、汝は、甲

州郡内より、深澤筋を押通り、深澤・足柄の兩城を、我攻にするか、又は兩城に、押の勢を置き、小田原へ亂入せば、追手三增の合戰は、戰はずして勝つべきなり。追手、勝利を得るに於ては、搦手の汝も、引取るに、何ぞ難からんと宣へば、昌信承り、仰にて候へども、深々と小田原迄、亂入あらん事は、甚だ以て宜しからず。其故は、當時、上杉・北條、水魚の思をなし、一味せられ候故、今は伊豆・相模・武藏・上總・下總・東上野迄も、悉く御敵にて候。其に、當手の御勢を、城々に押を差置かれなば、殘る兵、一二萬にはよも過ぎ候はじ。敵に內通の者もなきに、斯く大敵の北條方へ、足長に攻入り候はん事は、心許なく存じ候。其上、先年上杉謙信、小田原の四門蓮池迄、攻入られたる時、討泄したる事を、今に至つて、北條の勇臣等、臍を噛むの由、承り候。然るに、今度、君、亂入ましまさば、必定、方便を催けて、手强き合戰あらん事、治定なり。然れば、危き働にて候條、深く慮を、廻らされ候へとぞ申しける。されども、信玄、曾て諫を容れ給はず。吾、多年の大望なれば、氏康が居城、小田原を、駒の蹄に懸けずんば、爭てか天下に旗をも進めんと宣ひて、郡內の小山田兵衞尉信茂を召

され、汝は、郡内より直に武州に發向し、八王寺へ討つて出て、北條陸奥守が城を攻崩し、瀧山にて出合ふべしと宣ひて、同じき八月廿四日、府中の御館を發馬し給ふ。今度は、思寄らざる笛吹峠を越えて、武藏國江戸葛西へと發向あり。小山田と相圖の契約あれば、方々を兼ねて働あつて、或は敵城の二三の曲輪迄蹈破り、或は民屋を追捕あり。又は在々放火等、樣々の働をぞ仕給ひける。

小山田信茂願書附武州戸取山合戰の事

小山田信茂の願文

斯くて、小山田兵衞尉信茂は、常に武略を心に懸け、敵國の繪圖を以て、國々の案内、自國よりも能く知り、殊に此度の合戰を試す事、既に八箇年以來なれば、思ふ儘に、敵を奇術に引載せ、見事に勝利を、得んと思ひしかば、富士淺間大菩薩へ、願書をぞ籠めたりける。其文に曰く、

願書敬白

右之意趣者、甲相兩州之牽負、追レ日令二增々和親一不レ知二其期一、故、我國太守信玄

公、催分國軍勢、止嫌疑捨猶豫、任運於天道、抛身於義路、責順關東諸士、直到相府動干戈、遂興亡合戰、被欲散累日鬱憤。因茲、經武上兩國、被擊碎小田原之裡。爲本國堅固備、都留郡軍士、各暫、被殘鴻溝岐。然爲御嶽鉢形、其外、攻亡數箇所敵城、既向瀧山、放火必然之由、頻告來之間、爲其手合、集郡中兵卒、凌敵讐中、速亂入武陽、欲抽無二忠信。不憑神明加被、臨戰場爭能得勝。伏願、大菩薩感應眞實懇念、合金剛力、無異儀打入敵國、勵隨分軍功。此時、信玄、以一團扇、決勝一時、惡讐邪謀、悉曝骸於軍門、味方勇兵、皆振威陣頭、實上歎臣下樂再俊三五有年早款擊壞必聽童謠。至求願成就者、今度信茂所着諸武具、幷馬一匹、令奉納之、彌凝信心可奉抽精所丹誠者也。仍願書如件。

于時永祿第十二己巳九月吉日　　前兵衛尉平信茂

士峯薩埵御寶毒

斯くて、左兵衛尉信茂は、己が相備、加藤丹後守を、甲武の堺、上野原に差遣し、其身

は、手勢二百餘騎、步卒都て戰隊九百餘人を引率し、北條奧陸守氏照（初名、由井源三）の領地、武藏國八王寺へ討つて出でんと、同じき十月朔日の未明に、小佛坂を打越えて、駒木野にぞ出でたりける。大將信玄も、其朝、蝿烏に着陣あり。然るに、瀧山勢は、武田方の軍勢共、定めて、檜原筋よりぞ寄せ來らんと、兼ねて思ひ居たる所に、案に相違して、小佛坂より寄せ來る由、告げしかば、陸奧守氏照の老臣横地監物・布施出羽守、浧兵三百餘騎、雜兵二千餘人を相從へ、九月晦日の夜に打立つて、先づ犬目原へ馳出で、不動坂を押下し、戶取山は、究竟の切所なれば、此所に陣取つて、敵を難所に引入れ、一人も殘さず討取れと、馬烟を立て、勇み進んで、戶取山へぞ馳向ひける。

信茂・北條氏照を攻む

小山田は、兼ねて忍の者共を、隈々に隱し置きたれば、夜は走り來つて告げ、晝は相圖の據旗を以て、敵の方便を告げければ、信茂、敵を知る事、鏡に影の移るが如し。斯くて、小山田、敵を思ふ圖に引入れんと、先づ戶取山をば取らんとせず。駒木野より川原宿迄討下し、二百餘騎を四十騎宛、五手に分けて備へさせ、物見を遣し見せしむるに、敵兵、既に戶取山の七八町、阿方（あなた）迄、相近付き候といふ。小山田

戶取山合戰

聞きて、時分は能きぞ者共と、己が旗本を、戸取山へ押上げて、山上に備へたり。瀧山勢、之を見て、戸取山へ攻上らんと相近付く。山上よりも鐵炮を放ち、弓を射懸くる事、雨脚の如し。されども、瀧山勢、事ともせず、山際へ攻寄する所に、小山田が先手四十騎、戸取山の右の方より押出し、鐵炮を打懸け／＼攻立つる。瀧山勢、驚き騒いて、山上の小山田が旗本へ、炮弓を射懸け、打懸くるもあり。又、先備へ矢石を飛ばすもあり。左右の敵に氣を呑まれて、正術、既に盡き、茫然果てたれば、炮弓、曾て的中せず。小山田勢、直下して射立て打噤めければ、北條勢、旗の手大に亂れ、色めき立つを、信茂、得たり賢しと、又四十騎、一備を味方の右、瀧山勢の左、山際に付けて、敵の後へ懸らんと、雁行に連ねて、遙々と押廻す。布施出羽守・横地監物、之を見て、敵は味方の後へ懸るぞ。味方の人數をも、前後に分けよと、下知すれども、左右より、透間なく打立つる鐵炮に、北條勢、右往左往に亂れ、四方の敵に途を失ひ、主討たるれども、郎等之を助けず。親疵を蒙れども、引退くるに暇なく、上を下へと騒動するを、又小山田が三の備、味方左の方の澤へ下り、瀧山勢の馬手へ、

無二無三に懸つて戰うたり。此時、信茂が旗本より守る旗を、一振、振るや否や、敵の後へ廻したる小山田が先手、鬨を咄と作りかけ、喚き叫んで切崩す。北條勢、八方の敵に、術を失ひ、一怺も怺へず、八方へ敗走するを、追蒐け〳〵、思ふ儘にぞ討取りける中にも、陸奥守氏照の郎等、金指平右衞門尉・野村源兵衞尉などいふ、一人當千の勇士、踏留り終に討死をぞ蒙りたりける。小山田武衞、大に戰勝つて、首を得る事、二百五十一級なり。物始めよしと悅んで、不動坂首塚を打越え、瀧山に至つて、大將信玄に拜謁し、首實檢に入れしかば、信玄、大に感悅あり。信茂が武略、例少き合戰、之を若手の者どもの、手本にすべき軍なりとぞ仰せける。信茂生年廿七歲、未だ壯年に至らずして、斯かる働は、寔に、名譽の勇士なりと、皆人、大に感じけり。

北條勢敗北

武田三代軍記 卷之第十三 終

武田三代軍記 卷之第十四

武田勢所々燒働附馬場美濃守信房參陣の事

去る程に、北條家の者共は、武田信玄、思寄らぬ笛吹峠を打越えて、江戸葛西より寄せ給ふ由、聞えしかば、騷動する事斜ならず。本鄕には、山角紀伊守・諏訪右馬之助・太田・篠原・寺尾等の者共あり。葛西には遠山、江戸の城には、富永神四郎在城す。富永、未だ若年といひ、殊に小勢なれば、己が居城を攻められんかと、驚き騷ぐ處に、さはなくして、甲州勢、稻毛・品川・蜷島邊の民屋を追捕せり。六鄕に、行方彈正、居たりしが、敵を一支、支へんと、己が居館の近所、八幡は要害の地なりとて、此所へ引籠り、稻毛の田島・橫山・駒林以下の者共を引率し、橋を燒落し、亂杙茂く打つて、用心堅固に待懸けたり。甲州勢は、品川の宇多川石見守・鈴木等を攻崩し、六鄕

馬場信房參陣

に押出す。然れども、行方彈正、六鄕の橋を燒落し、切所に敵を引入れて、雌雄を、一戰に決せんと控へたり。信玄、何とか思ひ給ひけん。此所を打捨て、池上に押通り、日蓮宗の寺、池上寺を追捕せらる。此所は、甲州身延山の下なる故、寺僧出て、樣々に歎きしかば、炎上の災を免れたり。此より彼の寺僧を、案內者として、矢口の渡に、舟共、數百艘浮べさせ、稻毛の平間に押渡り、稻毛十六鄕に、火を放ち亂取す。此時に、江戶芳林院・大圓寺以下の諸寺・諸社・民屋、悉く火災の難にぞ懸りける。爰に、馬場美濃守信房は、越後・飛驒・越中等の押として、信州牧島の城に、殘り留り居たりけるが、今度の合戰を、心元なく思ひければ、椎名肥前守泰種・江間常陸介に、四百五十騎を附け殘し、我身は、僅に五十騎を引率し、信玄の跡を慕うて打ちけるが、武州松山にて追付き、信玄に拜謁す。信房申しけるは、今般、小田原への御出馬は、大敵氏康との御一戰なれば、一入面白く候はんと存じ、牧島には、武功勝れたる勇士餘多、用心堅固に申付け殘し置き候。さるに依つて、僅五十騎の士卒を召連れ、見物の爲め、參上候と申しければ、信玄は、陣中に能き客人を儲けたりと

て、近習の面々へ仰せ、馬場を饗應させ給ふは、寔に賴もしき擧動なり。

武州瀧山の城攻附甲州勢相模川を渡す並吉良左兵衛督の事

信玄瀧山城を攻む

然るに、信玄、北條氏照の居城瀧山の城を攻むべしとて、四郎勝賴を以て、大將と定め、舍弟孫六郎入道逍遙軒に、山縣三郎兵衛尉昌景を差副へて、敵後より後援すべき押の爲めに差置かる。內藤修理正昌豐・眞田源太左衛門尉信綱は、小田原筋の手當とし、瀧山城に攻寄せ給ひ、蠅島に本陣を居ゑられ、十重二十重に取圍んで、息をも續がせず攻めたりける。城兵も爰を破られじと、弓・鐵炮の手垂を、矢狹間に賦り、攻兵を毛付して、打落しければ、急に攻入らるべしとも、見えざりけり。されども、勇猛の武田勢、之をば物の數ともせず、塀際に押寄せ、熊手・薙鎌を以て、打懸打懸け、進む者の總角・袖印に取付き、彌が上に、重ねて攻入りしかば、竟に二の曲輪迄、乘込んだり。

北條氏照奮戰

城主北條氏照、隱れなき大剛の勇將にて、二の丸の多門に打上

武田勝頼の武者振

つて、皆、當城を枕にして討死すべし。骸は瀧山の軍門に曝すとも、名を高天の上に揚ぐべし。本丸を以て墳墓とし、軍卒の蹄にかけさすべからずと、采配を揚げて、下知せられければ、城兵、命を鴻毛に比し、義を金石に守つて、突出て〳〵戰うたり。寄手の主將伊奈四郎勝頼、生年廿四歳、鹿角の前立打つたる甲に、緋縅の鎧、鳥毛を以て五色に織りたる羽織を着し、月毛の馬の五寸計りなるに、金を以て、武田菱を、間繁く畫きたる鞍置いて、乘り給へるが、早り切つたる大將なれば、鎗追つ取り下立ち、倫を離れて働き給ふに、武州師岡の城主師岡山城守とて、大剛の勇士ありしが、勝頼の擧動を見て、是こそ音に聞えし四郎勝頼、御參なれ、天の與へと悅び、其穗、三尺計りなる大身の鎗を提げて、勝頼に渡合ひ、追ひつ返しつ突合ひけるは、天晴、潔き見物なり。勝頼、師岡を追つ懸けて、二階門の下迄、付け入り給ふに、敵大勢、押隔てしかば、互に引退き、又廻り合ひては突合ひ給ふ。都合、其日に師岡と勝頼、三度迄鎗を合せらる。斯くて、信玄、此旨を聞召し、吾れ此度は小田原に亂入し、氏康に、信玄が手並を見せんと、覺悟したれば、斯樣の小敵の爲めに、勝頼・信豐な

どを討たせては、信玄が名折なりとて、俄に瀧山城を卷解し、相原・三曾・二田・勝坂邊に陣取つて、唯小田原に亂入の備、益々嚴重なり。斯くて、相模川を涉さるべしとて、其陣列を定めらる。先陣は、内藤修理正昌豐・小山田左兵衛尉信茂・蘆田下野守・小山田備中守・安中左近進・保科彈正忠・諏訪五郎・相木市兵衛・栗原左兵衛・板垣三郎・伊奈四郎勝頼なり。二の手は、淺利式部丞信音・原隼人佐昌勝・跡部大炊助勝資なり。次は、旗本の前備、市川宮内助・駒井右京進・左馬助信豐と、馬場美濃守は、一手になりて、渡るべき由なり。御舍弟兵庫助信實は、諸牢人二百騎の大將なり。繩無理之助重行・五味與三兵衛貞氏・飯尾彌四右衛門助友、此三人は、浪人の組頭にて、各信實の隊下なり。扨又、長坂左金吾入道釣閑・小山田大學之助昌貞・大熊備前守・下曾根等は、旗本組なれば、御旗本と一つに引堅つて、押渡すべしとなり。後備は、武田孫六入道逍遙軒・同一條右衛門大夫信龍・海士尾・白倉・依田・應戸、小荷駄奉行は、甘利なり。扨又、守る備は、山縣三郎兵衛尉昌景・小幡上總介信定・眞田源太左衛門尉信綱・舍弟兵部丞昌輝等は、後陣に引下つて、諸勢、川を渡す間の警固となりてぞ備へける。

斯くて、先陣内藤昌豐、其勢一千二百餘人、一番に馬を打入れて、續けや者共と、いふ儘に、馬筏を作り、逆浪を立て、向ふの岸に打上げたり。其次、段々列を亂さず、後備に至る迄、少しも猶豫はず颯々と打入れ、一人も流れず渡しけり。斯くて、金田・妻田・岡田・原木に陣取つて、既に小田原に、打入らんとぞし給ひける。爰に、足利左馬頭義氏の後裔吉良左兵衞督は、北條氏康の妹婿にて、蒔田に居住せられけるが、其頃しも、大橋山城守・北見・關加賀守以下を相具して、小田原に在りけるより、蒔田には、女性稚き者計り殘り、軍勢無下に乏少なり。多目周防守は、青木に居住せしが、某、爰に居ながら、蒔田殿を敵に蹈潰させて、何の面目あつてか、吉良殿に面を合せん。いざ、敵を一防ふせぎて叶はぬ期には、腹搔切つてこそ死なんずらめと、藤卷・粟田以下を引連れて、吉良の居館をぞ守護しける。輕部豐前守は、其頃、蒔田に居たりしが、吉良左兵衞の、居所の向ふなる山に取登り、鐵炮を連ね、石弓を張つて待ちかけたり。されども武田勢、爰へも寄せ來らず。藤澤の大谷帶刀が宿所を、追取卷いて、攻めたりけるに、帶刀は小田原にありし故、殘りし者共、十方に散亂した

り。さるに依つて、武田勢、辛津・前川・酒勾迄攻入り、小田原の城を、乗潰さんとぞさゞめきける。

初鹿傳右衛門の指物

初鹿傳右衛門尉酒勾川の先陣附香車の指物竝北條家軍議の事

既に、甲陽の軍勢、酒勾の宿に着きしかば、爰にて重疊、小田原亂入の軍議を、決談せられけるに、時しも、大雨連日降り續いて、酒勾川夥しく、水嵩漲り增つて、激浪、岸を浸しければ、輙く軍兵を渡されん事、如何あらんと、衆議區々なる所に、足輕大將の若手の内、初鹿傳右衛門尉は、將棊の駒の指物に、香車といふ文字を書いて、射向懸りに指しなし、馳廻りけるが、逍遙軒、之を見給ひ、大將に近付き、申されけるは、初鹿が潔き出立して候。寔に猛勇の者にて候。此者に、酒勾川の瀬蹈を、仰付けられかしとありしかば、信玄聞召し、渠は加藤駿河守が末子、彌五郎といひしかども、初鹿源五郎、川中島合戰に討死し、其跡を繼がせて、今、初鹿を名乗る。實父駿河守昌頼

は、信玄が旗本の武者奉行にて、武功、衆士に勝れたる忠臣なりし。さるに依つて、傳右衞門、武勇は父が業を受け續ぐと雖も、己が勇に慢じ、諸士を侮り輕しめ、傍輩の憤を含むにより、我れ渠を愛せず。香車は進んで退かざる駒なるを以て、己又、其如く敵陣と見ては、進んで退かぬといふ意味を含み、傍輩無人の擧動をなすぞとて、甚だ無興にしてましましけるが、暫くあつて、初鹿を召され、汝、此川の瀬蹈仕らんやと、宣へば、初鹿、少しも辭せず、畏まり候ひぬと、御前を罷立つて、頓て馬に打乘り、初鹿傳右衞門尉、酒勾川の先陣をするぞ。續けや者共といふ儘に、手勢合せて二百餘人、少しも猶豫はず、川へ颯と打入れて、さしも漲り流るゝ、酒勾川の瀬枕に、逆波を立ててぞ渡しける。初鹿、馬廻を下知しけるは、篦撓形に馬を游がせ、鞍の跡輪を踰して、三途へ乘下り、手綱を緩くして、馬の頭を、川下へなすべからず。従軍歩卒は、手に手を取組み、鎗の柄を取違へ、引固つて、己が刃に拔かるべからず。力を互にして、向ふの上り場に、心を付くべしと、眞先に馬を游がせけるに、逆卷く波は、鞍を浸し、鎧の總角、波に洗はれ、唯、指物の香車計りぞ見えたりける。

されども、初鹿、少しもひるまず、一人も流れず、向ふの岸に打上りたり。之を見て味方の人々、我劣らじと渡しけり。然るに、旗本・脇備を始め・悉く川を渡して、小田原にぞ攻入りける。※北條家には、兼ねて駿河を心元なく思ひ、軍勢三萬餘人を分けて、駿豆の堺の城々へ籠めければ、小田原に殘る軍兵、僅に八千餘人なり。大將氏康の四男左衞門佐氏忠・北條常陸介・大道寺駿河守、一色に在城し、石巻下野守・九福入道道隨、伊佐・板口を持堅めたれば、先づ一支、支へんとぞ議したりける。此時、大將氏康は、小田原の城に在つて、軍の評議區々なり。時に老臣松田尾張守入道・北條長綱入道幼庵、兩人進み出で申しけるは、去る六月、信玄、駿州富士の裾野に出張せられ、韮山・三島以下所々を、燒働かせらるゝを以て、以前より彼の地に籠置かる一萬八千餘人に、又一萬二千餘人の加勢を、差遣されぬ。然るに信玄、智謀を以て、思寄らぬ武藏より、當國に攻入られ候。今、小田原に殘り留る軍勢、僅に八千餘人に過ぎず。機に乘つたる甲州勢に懸つて、合戰を挑み候はゞ、危き軍にて候べし。一色・伊佐・板口を始め、近邊諸城の味方を、召集められ候はゞ、凡て二萬餘も候べ

し。此勢を以て、當城に引籠り、心を一致にして、防ぎ戰はゞ、元來、短氣なる甲斐信濃の軍勢共、長途の長陣に、氣屈し勇氣衰へ、兵糧の運送に草臥れ、追散らさぬに、引退かんとこそ覺え候へと、申しければ、衆議、是に一決して、一色表伊佐・板口を始め、城々の軍勢を引取り、小田原の城に引籠り、町人・百姓・女童迄、近鄕は悉く城中に取入れられぬ。程遠き在々所々の鄕民共は、曾我山・田島・川村邊の深山幽谷にぞ逃入りける。

小田原合戰

相州小田原合戰附馬場美濃守信房奇計の事

斯くて、武田家の軍勢、小田原へ攻入りけれども、捗々しく、手に立つ敵もあらざれば、既に四門蓮池迄、攻入りたり。北條家の勢も、討出て〳〵防戰ふ。內藤昌豐が手に、寺尾豐後守・町田兵庫介・神名圖書之助・木部駿河・阿久津大學・久保島・矢島・矢木原・長沼、是等九人、倫を離れて鎗を合せ、思ひ〳〵に高名す。此時、馬場美濃守は、日頃、謎を好みければ、早川彌左衛門尉幸豐を使にて、先陣にありける內藤修理が方

へ、絲毛の具足敵を切るといふ謎を、かけたりければ、內藤取敢ず、小太刀なりとぞ解きたりける。軍使に行きける早川も、往返の間に、鐵炮疵を、二箇所迄こそ蒙りけれ。これ先手の戰の樣を、見せしめん爲めの軍使、且つ內藤が安否をも聞き、早手詰の合戰なれば、此の如くにはいひやりける。寔に大丈夫の勇將共なりと、時に取つて、秀才を感じける。武田の軍勢、競ひ懸り、一足も引かず攻戰へば、城兵、颯と引入れて、唯、鐵炮を以て、遠矢にこそは打懸けけれ。斯くて大將信玄は、小田原の波打際を押通り、早川口を妻手になし、湯本の風祭に、本陣を居ゑ給ひけれども、敵、敢て討出でざれば、士卒に仰せて、小田原中の町屋は、いふに及ばず。諸士の宿、一箇所も殘らず、燒拂はれけれども、一人も出でて、防がんとする者なかりけるは、能々武田勢の鋒先を、怖れけるとぞ見えたりける。關八州の大小名、當時拜趨の小田原なれば、さしも、美々しく作り廣げたる城下、忽ちに渺々たる廣原とぞなりにける。爰に何とかしたりけん。松田尾張守入道が宿所のみ、燒け殘りければ、信玄、之を安からず思召し、後日に、松田、廣言を吐かんこそ、無念なれと仰せければ、

馬場美濃守進み出で、此度の合戰は、信房、僅に四五十騎の勢にて、御陣に押して、推參致したれば、御前備にあつて、朝暮、合戰を見物仕るのみなり。然れば、燒け殘りし松田が宿所を、信房が一手を以て、燒拂ひ申したく候。あはれ、御免を蒙り申さんとぞ願ひける。信玄聞召し、汝が武功を以て働かば、危かるまじとは思へども、至剛の者は、皆、牧の島に殘し置き、僅の勢を以て、松田が宿所迄、働き入らん事は、千萬心許なしとぞ仰けせる。信房承り、仕課せ申さずとも、難儀に至る程の事は候まじ。總軍中、一備より侍一人に、萱木一把宛、信房が方へ送り候へと、仰付けられ候べしと申す。信玄も、馬場が申す事なれば、早々、許諾あつて、陣中を觸れさせられけるに、我もく\と、萱木を、侍に持たせてぞ遣しける。信房、武功の郎等を近付け、方便をいひ含めけるは、汝等、小田原の燒跡に、今宵、寅の刻に及んで、竊に忍び至り、敵、城中より切つて出づる道筋を考へて、萱木を積置くべし。若し其時、敵見咎めて追拂はゞ、控軍より助くべし、斯くて、思ふ儘に、積課せたらば、火付一人當殘つて、皆々、引取るべしと下知し、其身は、逞兵十騎・足輕三十人を引具し、松田が

宿所に押入つて、鐵炮を打懸けけれども、敵、一人もなし。其時、相圖の貝を吹上げければ、方々の口々に、積上げたる萱木に、一度に火をぞ懸けたりける。是と一同に、松田が宿所にも、火を懸けたりけるに、城中より討つて出でんと思ひしに、方々に燒揚る猛火にや怖れけん。防がんとする敵、一人もなかりければ、思ふ儘に、燒拂ひてぞ引取りける。信玄聞召し、悦び給ふ事、限なし。味方の士大將、各危氣のなき信房が働かなと、感ぜぬはなかりけり。

相州三増合戰附戰場の圖の事

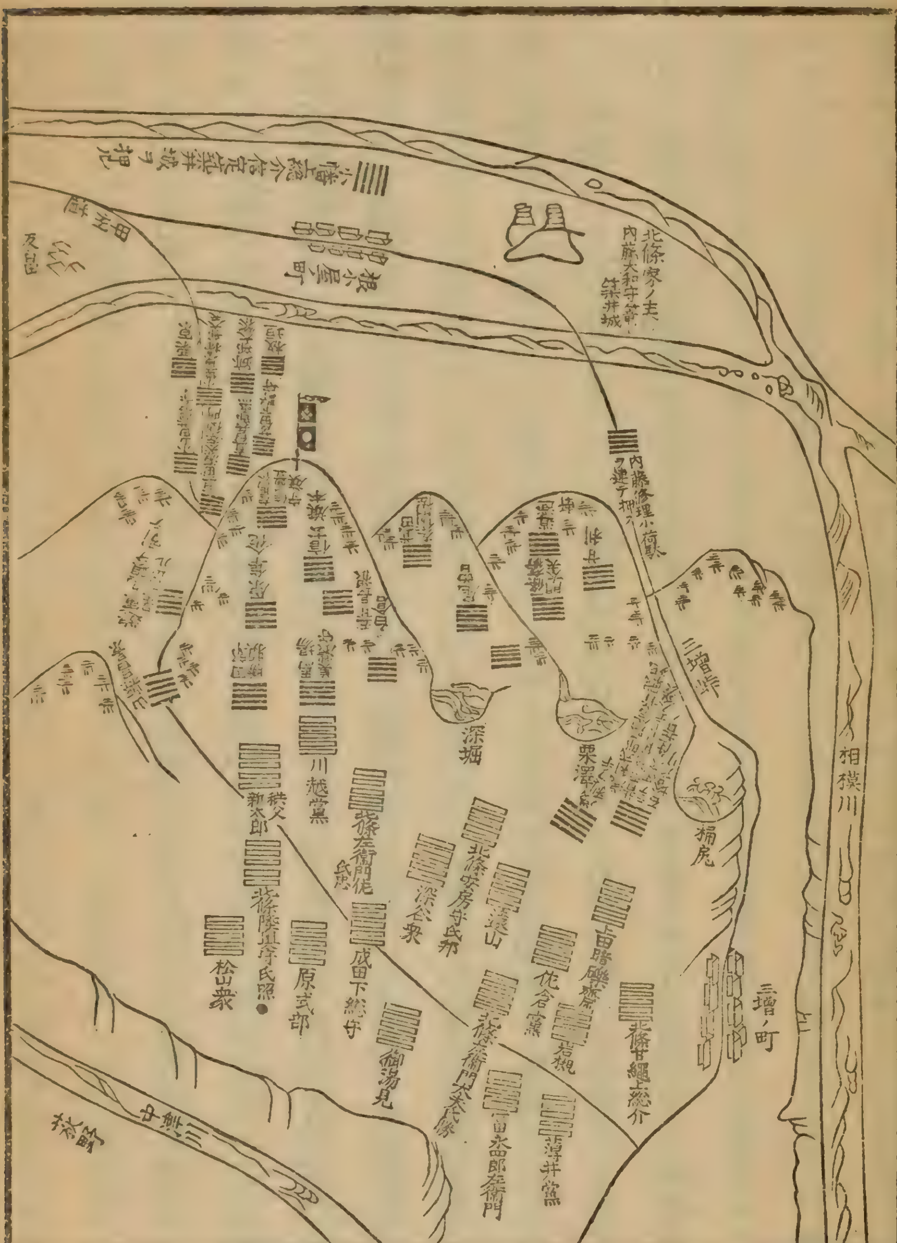
去る程に、大僧正信玄は、思ふ儘に働き給ひ、小田原中は、いふに及ばず。近郷の在家・神社・佛閣に至る迄、悉く放火し給へども、敵は小田原の城を、攻落されぬを面目にして、一人も討つて出づる者なかりけり。數月、長陣に及びしかば、今は本懐を達しぬ。歸陣あるべきに極りけるが、敵の機を察せられ、鶴岡八幡宮に、社參あるべき由を、沙汰せられける。氏康父子を始め、北條家には、之を聞いて、先年、謙信

を討泄しぬる事の、口惜しきに依つて、誰にもせよ、其後、鶴岡に入らん敵を、討取るべき術を、能く試し置きたれば、假令ば 信玄、孫武の再來にもせよ。打入るや否や擒にして、從將附卒、一人も殘さず討取り、此鬱胸を散ぜんものをと、悦び勇む事限なし。斯くて、信玄、同じき十月四日、風祭を陣拂あつて、引取り給ふ。後殿をば、四郎勝賴、望み勤め給ひけるに、北條の勇臣松田尾張入道進み出で、敵は鎌倉に赴くにもせよ、鶴岡に參るにもせよ、今、目の前を、おめ〳〵と引取らせて、何の面目あつてか、人に面を合せん。不知(いさ)、追蒐けて咬留めよと、松田が一手附慕ふ。尾張守が長臣酒井十左衞門、眞先に進んで追來れば、四郎勝賴、自ら馬を引返し、敵中に蒐入り、酒井と馬上にて渡合せて、太刀打、三度に及びける。小田原より酒勾迄の間にて、四度迄、取つて返し給へば、敵兵、今は咬留め兼ねて、小田原を指して引退けば、是より緩々と、引取り給ひけり。斯くて、生捕の者を召して、是より三增迄の間に敵さゝへ居るや否やと問ひ給ふ。生捕の中に、杉屋金太夫といふ者、申しけるは、氏康が二男北條陸奧守氏照・舍弟安房守氏邦・同左衞門佐氏忠を始めとして、

成田下總守・上田入道暗礫齋・富永四郎左衛門・高城藏人・北條左衛門大夫氏勝、原式部大輔・遠山・荒川以下、二萬餘人にて、三增峠を取切つて、罷在り候と申す。信玄聞召し、氏康父子、小田原にありてだに、信玄に敵し難し。ましていはんや、氏康が末子を大將にて、家の子・郎等共の支へたるを、何十萬騎にもせよ、軍には、信玄が勝ちたるぞとて、翌五日、三增峠へ押懸り給ふ。然れども、先年、上杉謙信、小田原に亂入せし時、小荷駄を奪ひたるに味ひ、又、今度も小田原勢、小荷駄を取らんとぞ巧むらん。小荷駄は、總軍の左の方、往還を通して、金田迄、押勝にさすべしと、使番を以て、小荷駄奉行甘利が方に、仰遣されければ、畏り候とて、追立て〳〵打たせて、三田・妻田邊に馳着いて、此所にて待ち居たり。時に陸奥守氏照の郎等、設樂越前守父子、斥候として馳出でしが、金田の後山の上より、心靜に見積る所に、甘利が手より、米倉丹後守・畑加賀守・田中淡路守・水野四郎右衛門尉・青木彌三左衛門・井上文左衛門・木內六郎左衛門、此等八騎、我先にと、中津川を押渡り、牛窪坂へ乘上ぐれば、叶はじとや思ひけん。設樂父子、馬を返して引退くを、遁さじと追蒐けしかど

信玄三增に着陣

も、遙に隔りければ、追付かず、又、本の所に引返しけり。斯くて、信玄、三增に着き給へば、小田原勢、何とか思ひけん、中津川を打渡り、半原山に逃げ登つてぞ控へける。此時、信玄、內藤昌豐を召され、小荷駄奉行をば、汝、勤めよと宣へば、修理正、畏つて申しけるは、昌豐、上州箕輪の城代を承りし故、關東筋の御出馬には、進む時に先退く時は、殿をこそ承る筈の、兼ねての上意にて候に、小荷駄奉行を承る事、如何樣の思召にて候やと、申しければ、信玄、重ねて、先年上杉謙信、十一萬三千の軍勢を從へ、小田原四門蓮池迄、攻入りしかども、竟に敗軍せしは、小荷駄を切崩されしに依つてなり。明日の小荷駄奉行は、信玄が勤めたく思ふなり。馬場美濃守は、小勢にて參りたれば、申付け難し。然れば、汝より外に、小荷駄を預くべき者なし。押通る道、五町計り去つて、簗井の城あり。爰に、敵方の內藤大和守が、籠り居る由、これ亦、大剛の者なり。明日は、殿よりも小荷駄奉行こそは、大切の役なるぞと、仰せければ、內藤、其時、御請を申しける。去る程に、信玄、翌六日、三增峠に赴き給ふ。小幡上總介信定は、騎馬二百騎を引率し、沼といふ所より、簗井の押とし


相模川
三増ノ町
三増峠
深堀
川越衆
松山衆
原式部
成田下総守
深谷衆
北條安房守氏邦
北條陸奥守氏照
御湯見
佐倉衆
内藤修理小荷駄ヲ建テ押ス

て馳向ふに、志大澤□上の山を、峭傳ひに押通る。山縣三郎兵衛尉昌景は、遊軍九頭を引連れて、小幡が跡を押通り、長蛇の頭となりて、敵の後に起り、一時に切崩せと約せらる。去る程に、山縣に從ふ面々には、眞田源太左衛門尉・小山田備中守・同兵衛尉・眞田兵部丞・蘆田下野守・小笠原掃部大夫・跡部大炊助・栗原・板垣以下の人々なり。然るに、此等の士大將、沓地川の此方、二呂根迄討つて出で、二呂根より下澤へ馳下り、敵の後へ懸らんとぞ議したりける。内藤修理昌豐は、小荷駄を引連れ、三增峠を押上げて、沓地川の方へと押行きたり。斯くて、三增峠の殿は、淺利式部丞信音、峠の南に、栗澤といふ澤あり。桶尻といふ沼、夫より遙の西に、深堀といふ堀あり。以上、三つの池水あつて、人數の進退、便り惡しければ、此三つの難所を弓手になし、南の方、峠の本道を引取るべしと、定めらる。馬場美濃守信房は、小勢なれども、會釋勢となりて、旗本の前に備へて引取るべし。二の手は、四郎勝賴なり。然るに、此二手、桶尻・栗澤・深堀、三つの池水を、馬手になしてぞ引取りける。殿・會釋勢の三手は、敵を引懸くる合戰の要備なれば、淺利が備に、旗本よりの檢使とし

て、曾根内匠助を遣さる。馬場美濃守が備には、眞田喜兵衞尉昌幸を差越され、勝賴の備には、三枝勘解由左衞門尉晴行をぞ越されける。次は大將の旗本なり。馬場・勝賴の二手は、敵、左右なく、旗本備に切懸らんとするを、押へては引き、押へては引きする備なり、殿備は、又、敵、急に馳立て揉み崩さんとするを、返合せて强く防戰ふの備なり。扨又、旗本組は、左右の備・しまり備、都て十六備なり。是等は、夜中より三增の山に押上つて、三增峠を馬手に見て、本道は小荷駄雜人を通し、戰隊の諸手、何れも山を總越にして、周章逃ぐるやうにぞ擧動ひける。左馬助信豐は、是より猶ほも、南の山上に備へて、遊軍の山縣以下、思ふ圖に押出し、戰、半ならん頃を見切つて、守る旗を振り給ふ役なり。斯くて、敵方の魁兵北條上總介綱成・同陸奥守氏照以下、敵は逃ぐるぞ。追蒐けて討取れとて、淺利信音が備に、無二無三に切つて蒐るを、淺利、心得たりと取つて返し、暫く支へて揉合ひたり。馬場信房、四郎殿の備にも、敵、急に切懸りければ、同じく返して防ぎ戰ふ。此時、北條廾繩上總介備より、早馬を以て、氏康父子に急ぎ押付け給へ。敵、三增峠を總越に備を亂し、道もな

き所を、右往左往に引取り候。唯今、急に追詰め候はゞ、必定、敵を追崩し、三增坂を眞下りに、まくり下し候はん。御旗本を一刻も早く、押付けらるべしとぞ告げたりける。信玄、山上より遙に之を見給ひて、北條上總が備より、早馬二騎馳歸るは、氏康に早く押付けよ。當手の戰、嚴しければ、早く勝負を決せんと、急を告ぐるの騎馬なり。氏康が旗本の來らん先に、追崩しのけんと宣へども、山縣以下の遊軍、切所を越えて押通れば、人馬の駈引、自由ならず。未だ長蛇の首尾を合せざれば、心ならずも待合せ給ふ。此時、内藤昌豐は、寺尾豐後を軍使として、馬場信房が方へ、いひやりけるは、

待つ宵に更行く鐘の聲聞けばあかぬ別れの鳥はものかは

といふ古歌を、謎にして懸けたりければ、車牛・離牛とぞ解きたりける。抑、此謎を、車牛・離牛と解きたる事は、古歌の意を以てなり。待つ宵に、其方樣の人、未だ來らざるに、早や、明方の鐘を突出せば、假令、來つて積る事共を、語り明すとも、早や、東雲の頃なれば、夜、暫くもあるべからず。況んや未だ思ふ人の、來らぬこそは恨めし

けれ。夫さへあるに、來つて語り明し、別れの鷄は、猶更、盡きぬ名殘なり。然れども、二つを比べたらんには、別れの鷄よりは、待つ宵の鐘こそ、恨めしきといふ古歌の心なるに、唯今の軍も、先づその如く、敵の來つて待ち儲けたる備に、懸り戰ふ間の懶く、味方は方便を儲けたれば待長く、唯待つ宵の鐘の心地こそすれとなり。又、離牛は、斯く迄、待ち儲けても、敵を追崩し、速に勝利を得る事は、咬付く敵を、武略を以て追つ散し、切退けざれば、勝つ事を得難し。さるに依つて、離れにくさよとなり。然はあれど、此待長きに比べては、駈合せ戰ひて追崩し、勝利を得る事は、物の數かはといふなり。歌道・武道、其義、遙なりと雖も、理は一つなれば、深く吟味して知るべし。此秀歌に依つて、待宵の小侍従と呼ばれ、武勇、萬人に傑出するを以て、今日の小荷駄奉行とはなれり。此古歌の義理に於て、兩用何れが殊勝なりとせん。時に隨ひて、臨機應變の秀才かなと、馬場・內藤の兩雄を、敵國の諸卒迄も、感じ慕はずと、いふ事なかりしとかや。實はこれ、山縣以下の遊軍、廻り至るや否やを、見せしめん爲めの軍使なり。爰に、北條陸奥守氏照の家の子に、大石遠江守

といへる、大剛の兵ありけるが、味方を離れ、眞先に進んで働きけるを、信玄、山上より御覽あり。勝頼が備に向つて、白き羽織着たる武者の、倫を離れて働く形勢、天晴、さる兵とこそ見えたれ。あたら男討たすべからず。相川甚五兵衞・伊藤玄蕃允・原大隅守・石坂勘兵衞、四人急ぎ馳向つて、生捕り來るべしと仰す、先づ石坂は、勝頼の備に行き、彼の者を討つべからずと申せと宣へば、畏まつて、四人一同に馳向ふ。石坂、勝頼の備に馳參れば、相川は追縋うて、大石に鎗を合す。原大隅・伊藤玄蕃允は、後より廻つて、左右より組留め、則ち御前に連れ來る。信玄、悅喜ましまして、死を免され召使ひ給ひける。斯くて、淺利・馬場・勝頼、三手の戰甚だ強く、敵方の士大將北條甘繩上總介・上田暗礫齋・北條左衞門大夫・同安房守・佐倉・遠山・薄井なんどいへる、各、關八州に勇名を振ふ者共、旗の手を龍粧に進めて、淺利信音が備に、必死と咬付き、遁さじと攻戰ふ。淺利、敵の大勢を足下に見下し、桶尻・栗澤の切所を左右に受け、物々しやといふ儘に、追ひつ捲くつ、火出づる計りに挒合ひける。されども、敵、目に餘る大勢にて、弓・鐵炮の飛行する事、唯、村雨の降通る如くなれば、既

に、信音、鐵炮に中りて、馬より逆樣に落ち、うんと計りに死したりけり。敵、是に機を得て、味方の死骸を蹈越え、小旗をうつぷけて、眞驀になり攻上ぐれば、信音が備、亂立つて既に崩れんとする所を、旗本よりの檢使、曾根内匠助、大音揚げて、檢使は此時の爲めなるぞ。汝等、一足も引くべからずと、采配を探つて下知すれば、流石名將の譽風、何れも名を惜み、義を先んずる勇士等、蹈留つて、備、少しも亂れざるは、檢使曾根が武功なり。此二の手に、備へられし一條右衛門大夫信龍も、旗の手を進めて押懸けらる。南の方、馬場信房が手へは、氏康の二男、陸奧守氏照・左衛門佐氏忠・秩父新太郎・成田下總守・富永四郎左衛門・原式部・川越・深谷・松山黨、一同に押懸つて、荒手を入替へ〳〵戰ひけるに、此手の檢使、眞田喜兵衞尉昌幸、此手の一番鎗ぞと名乘つて、究竟の武者二三騎突伏する。信房が手に、鳶大貳房が弟、二位といへる大剛の法師、眞田、既に一番鎗を入れしかば、旗本の二番鎗をして、何の詮かあらんと、大身の鎗をからりと捨て、四尺三寸の大太刀を引拔いて、敵中に切入り、近づく者を、八騎迄切つて伏する。されども、敵は大勢にて、備を繰越し〳〵、彌が

上に押懸るに、馬場が軍勢、九牛が一毛なれば、左計りの信房も、手先を廻し、爰を先途と攻戰ふ。二の新に備へられし四郎勝頼、軍勢を勇め、自ら鎗を提げて、眞先に進み、横合より懸り給ふに、原隼人佐も、同じく跡を詰めて押懸れば、敵味方の諸手入違へ、凱歌・鐵炮の音・陣雷、青天の上に徹り、旌旗、馬蹄の馳違ふる音は、須臾に坤軸も砕けぬべくぞ見えたりける。斯かりける所に、山縣三郎兵衛尉昌景、遊軍九頭、都合其勢五千餘人、下澤の細道を、雁行になりて押廻し、漸くして、旗先下澤の山鼻、深堀の左、敵軍の遙か弓手の後に、見えたりけるを、左馬助信豐、合戰の勝利是なりとて、守旗を一振、振り給ふと見えけるに、旗本の前備、各、山を眞下りに押下せば、諸手一同に、凱歌を作りかけ、百千の雷の、一度に落ち懸る風情なるに、遊軍の九備、黒雲の起るが如く、龍の水を得たる勢にて、敵軍の弓手、後の方より無二無三に懸り、我れ劣らじと、鎗を入れて攻立つれば、北條の軍勢、前後の敵に途を失ひ、總軍、一度に崩れ立つて、三増峠を眞下に、衞士原へと逃ぐる者あり。中津川・荻野を指して、落行くもあり。或は馬を乘離して、歩立になり、是非なく腹を切るもあり。從

北條勢敗績

者は主に離れ、主人は郎等を見捨て、見歸の鞭を繁く打つて、諸鐙を當てて引退く。遁さじと甲州勢、馬引寄せ〳〵、打乘つて追詰め〳〵、手先へ乘懸り突落し、分捕高名、算木を亂すに異ならず。敵の斬首を得る事、都合其數、三千二百六十九級なり。大將氏康父子、半原山の防方、荻野迄馳來り給ふに、味方の敗軍、大水の出づるが如くに逃げ來り、合戰の樣を告げければ、氏康、大に齒嚙をなし、大音揚げて怒り給ふに、北條左衞門大夫氏勝、仰甲になりて馳來り、御旗本の遲かりけるにより、味方、敗軍に及びぬるこそ口惜けれ。然れども、信玄の耳目と賴まれし淺利式部丞信音を、某が備より、鐵炮を以て打落し候ひぬといへば、氏康、少し機嫌直りけり。斯くて信玄は、思ふ儘に戰勝ち給ひ、三增峠を打越え、沓地川の山王の瀨を打渡り、反畠といふ所に至り給ひ、勝鬨を執行はれ、則ち陣を取敷き、軍勢を休め給ひける。其翌日、馬場美濃守信房・內藤修理正昌豐、大將の御前に參り、昨日勝賴君、自身に横鎗を入れられ、武勇の擧動をなされし事、今に始めぬ事ながらも、扨々、武將の器に當り給ふ事共、今更申すも愚なりとて、感涙を流し申したりければ、信玄、其事は何

とも宣はず。それ莊夫の涙といふ事あり。今、信房・昌豐が感涙を見て、思ひ當れり。古より唐にても、至つて勇猛に誇る者、必ず物に感動す。予が家にても、故荻原常陸介昌勝、武略神通の者なりしが、忠貞義勳を見ては、必ずしも涙弱く、早く沈涙しけるとなり。旁も、夫に同じとぞ宣ひける。斯くて、同月八日、反畠を陣拂ひあつて、甲館に馬を入れ給ふ。

北條方所々落城附黃八幡の指物並蒲原落城の事

斯くて、同じき十一月五日、大僧正信玄、甲斐・信濃・上野、三箇國の軍勢を、引率ありて、伊豆・駿河・相模の國堺に、出張あり。北條家の城々を、攻拔き給ふ。中にも、深澤の城には、北條左衛門大夫氏勝、楯籠りけるが、信玄の向ひ給ふを聞きて、夜に紛れ城を落ちて、何國ともなく出奔しけるに、如何計りか周章(あわて)けん。氏勝、重代の家寶、黃八幡の指物を、取落してぞ退きける。抑、此氏勝は、今川家の勇臣福島上總介が孫にて、上總が嫡子福島左衛門大夫綱成が子なり。然るに、左衛門綱成、相州に

直八幡殿

落魄し、離倫絶類の勇士故、氏康、之を用ひて、相州甘繩の城主となし、北條氏、及び家に傳はる綱の一字を給はり、指物は朽葉の四半に、墨にて八幡大菩薩を書きけり。其身、直に地黄八幡なりといふ意なり。されば世人、黄八幡左衛門とぞ呼びにける。嫡子氏勝は、福島辨千代丸と號けられ、氏康の小姓にて、常に左右を去らず。川越の夜軍に於て、絶倫の武功あり。然るに、父左衛門大夫、受領の指物を讓り、己は、北條上總介と名乘りけるに、關八州の諸士、直八幡殿とぞ渇仰しける。然るに、彼の取落したる指物を、信玄に獻じ、若手の面々が申しけるは、扨も、去る三增合戰の御勝利にて、君の武威を怖れ、さしも鬼神の如く聞えし北條氏勝、黄八幡の指物を捨てて、落去候。偏に、氏勝が臆病の樣に覺え候と申しければ、信玄聞召し、武道不案内の批判、左樣に申す者こそ、臆病の擧動ならん。北條左衛門大夫が武名は、當時、天下に隱れなく、參州の德川家、會津の蘆名盛氏・藝州の毛利元就・尾州の織田・北越の謙信、是等の豪家にても、稀なる勇士とこそ聞えしか。然るに、氏勝が下人、指物を取落したりとて、何ぞ氏が怯弱ならん。又、一命を惜み功名を捨て、信

玄に恐怖し、逃げたるなんどいはんも、無下に拙き批判なり。氏勝は、脚下の恥を知る者なりと仰せければ、諸士、畏入りてぞ候ひける。其後、眞田一徳齋が末子源次郎を召され、氏勝が武勇に、靈體るべしとて下されけるに、源次郎、己が家の奇寶として、子孫に之を傳へけり。後に、眞田隱岐守信尹といひしは是なり。其外、足柄・新庄・鷹巣・長久保・山中・弘國寺・善徳寺・神田・屋布等、以上九箇處の城々、落城に及び、芳賀伯耆守・北條常陸介・松田新次郎以下、悉く小田原に逃げ歸れば、新庄・足柄・山中等は、城を燒捨て給ひ、深澤の城には、小山田彈正に、駒井右京亮を差添へてぞ、籠められける。斯くて、北條新三郎が籠りたる、蒲原の城を、攻めらるべしとて、同じき十二月五日、未の下刻に及んで、吉原表へ打つて出で給へば、先鋒の勢は、富士川を前に當てゝ、段々に備へたり。大將信玄は、吹上六本松に陣し給ひ、是より蒲原の城中へ、使者を立てられ、既に、深澤・弘國寺・新庄・鷹巣・善徳寺以下、九箇所の城々、或は屠り殺し、或は戰はずして降る。當城も、急ぎ開渡すべき旨を、いひ送らる。城主北條新三郎、大剛の者なれば、此事を聞きて、某が儀は、關東に勇名を顯した

る北條長綱入道幼庵が悴にて候へば、父が勇譽を穢し、今、當城を出て、誰に面を合せ候はん。死を輕んずるは、勇士の好んずる所なり。當城、御望に候はゞ、取圍んで攻めらるべし。神命を拋つて防ぎ戰ひ、討死をして後こそ、渡し候べけれ。恐くは、我が神命の在らん限は、得こそ渡し候まじとぞ返事しける。信玄、之を聞召され、大に偪まれたる體にて、大事を前に置きながら、此程の小城一つに、人數を弊さん事、宜しからず。當城は、重ねての事にすべしと、諸陣へ觸れさせられけるは、去る三增合戰に、北條家打負けて、當家を怖るゝ事、大方ならず。然れば、味方引拂ふとも、城兵、付慕ふ事はあるべからずと雖も、當城の主將新三郎は、大剛の者なれば、討つて出でん事必定なり。其餘は、大方出づまじきぞ。假令、討つて出でたりとも、味方、少しも戰ふべからず。頻に咬留めて、邪魔をなさば、控へ〳〵會釋ひて、必ず、したるくすべからずとぞ觸れられける。爰に、北條新三郎が家の子に、石卷彌三郎とて、名を得し忍の上手あり。何とかしたりけん。信玄の御次男、海野隆寶の陣に紛れ入つて、居たりけるが、此軍法を聞くや否や、城中に馳歸り、此趣を以

て、大將新三郎に告げたりけるが、新三大に悅び、舍弟箱根の少將狩野新八郎以下、會評して、咬留むべき軍議をぞしたりける。時に、新三郎申しけるは、敵の引取る所を城中より切つて出で、先鋒と信玄が旗本の間を、取切らば、信玄大に周章て、大宮より甲州へ奔走し、先手は薩埵山の味方に攻立てられ、前後の敵に周章し、便り能くば、信玄をも討取らん事、難からじといひければ、衆議、是にぞ決しける。信玄、元より僞の陣觸なれば、敵の忍、定めて味方の方便を、城中に告げん事を察し給ひ、味方より間者を以て、聞き給へば、案の如く、味方の謀を以て、敵、實と思ひ、重疊、味方を咬留むる軍議を聞召し、仕濟したりと悅び給ひ、同じき五日の三更に及んで、打立ち給ひ、翌六日未明には、由井・倉澤迄押出せり。辰の刻に及んで、先陣小山田備中守昌辰、旗本に先立ち、油斷したる體にて、討つて通る。案の如く、城主北條新三郎、狩野新八、士卒を率ひ、城を拂つて突いて出で、小山田と旗本の間に、會釋もなく突いて入る。小山田、心得たりと取つて返し、推參なり。己等、當時、武田の鋒先に向つて、軍せん者、夏の蟲の燈を愛するに似たり。不覺して後悔すなといふ

儘に、一足も引くべからずと下知をなし、火花を散らし突合ひける。既に、戰、半ならんと思ふ頃、兼ねて相圖の事なれば、伊奈四郎勝頼、後陣より道場山へ備を廻し、自ら眞先に進み、城門を志して、唯、一息に乘込まんと、甲州立の駿足に、諸鐙を合せて馳けられけり。此道場山の方を、善德寺曲輪と號す。之を見て、新三郎、敵に方便られたるぞ。引返せと、急に引取らんずるを、小山田、扨こそ、後悔先に立たずといふ諺を知らずや。容易く引かせまじ。小山田備中守が咬留むるぞと、ひたくと付慕ふ。城兵、今は討たるゝ事をも顧みず、無二無三に、城中を指して逃入りけり。眞田源次郎信尹は、深澤にて信玄より給りし、北條氏勝が黄八幡の大指物を、山嵐に翻させ、善德寺曲輪の一番乘ぞと名乘りて、城中に乘込んだり。玆に、落合市之丞は、小山田備中守昌辰が手へ、御使に來りけるが、眞田に續いて、乘入らんとする所を、城内より、加藤助四郎と名乘つて、落合が指物を奪取る。市之丞、是は無念と、頓て乘込んで、指物を奪返し、則ち其敵、助四郎を討取つたり。吉田左近進・初鹿傳右衛門も、一同に乘込みける。落合は猶も勇み進んで、敵中に入りけるが、十

三箇所迄、疵を蒙り、左の指、五つともに切落され、朱になりて引返す。其外、我も我もと乘込んで、息をも續がせず、攻立つれば、城兵、今は防ぎ兼ねて、本丸に颯と引入れたり。駿州先方、岡部忠兵衞尉が郎等、小鹽市右衞門、本丸の一番乘ぞと名乘り、倫を離れて乘込めば、是に續いて、澤江左衞門・常磐萬右衞門・入江五右衞門・大石四方之介、是等は皆、岡部が家人なるが、我劣らじと乘入りたり。城兵にも、石卷彌三郎・渡邊豐前・二見右馬助、命を義の爲めに捨つると呼んで、各、同じ枕に討死す。今は城兵、殘り少なになりければ、城主北條新三郎、命は是迄なりと、舍弟箱根少將長順・狩野新八郎・清水太郎左衞門・新田又八郎・引野大膳・同圖書助・上原甚太郎・同甚三郎・大草右京・同右近以下、究竟の者共廿八騎、前後左右に相從へ、眞一文字に切つて出で、四方に敵を引受けて、死狂にぞ働きける。各、將の命に代らんと思ふ逞兵等、少しもためらふ氣色もなく、井の字に割立て、巴の字に廻り、合ひては別れ、別れては廻り合ふ。されども城兵、次第に減じ、僅十騎計りになりければ、早晩迄罪を作るべきと、主從十餘騎、竟に腹をぞ切りたりける。北條新三郎を始め、城兵の

首、合せて七百十一級討取り、勝鬨を執行ひ給ひけり。北條の門葉多しと雖も、此新三郎は、分けて勇武、常人に超えければ、氏康、懇志淺からず。扨こそ、此蒲原の城には置かれけれ。寔に、死を善道に守つて、勇名を永く、後代に殘せりと、感ぜぬはなかりけり。されば、最後の憤念に依つてか、此山中に怨靈殘り、樵夫・草刈など、折節、之を見る事ありと、里民共申傳へけり。

薩埵山軍附駿府・花澤等開城竝繩無理之介が事

信玄は、蒲原の城を攻落し、由井・金澤を打過ぎて、薩埵に押出し、山上を見上げ給へば、旗少々、木蔭に翻つて味方を遮らんと、待懸けたる體なれば、馬場美濃守を召して、薩埵山に控へし敵を、見積るべしと仰せければ、信房畏まつて、敵は、伊豆・相模の集勢の一揆原と見えて候。然れども味方、長途を打つて、人馬疲勞仕つて候へば、若し、一揆の爲めに、一備にても切負け候はゞ、長き御弓矢の瑕にて候と、申す所に、城の入道伊庵、何程の事の候べき。いで、蹴散らし候はんと、足輕を押立

て、眞驀になつて突懸れば、信房も、伊庵討たすなと下知して、山上へ攻登る。元來、一揆の事なれば、一戰に打散らされ、立足もなく敗走するを、興津河原迄、追討にして、首共を多く斬懸けられ、淸見寺を過ぎ、庵原川を打渡り、江尻を越え、沓谷を馬手に見て、翌日、駿府の城に、押寄せ給ふ。此城には、岡部次郎右衞門・久野彈正・森川日向守・酒井極之介等、楯籠つて神命を惜まず戰うたり。中にも岡部次郎右衞門尉は、今川氏眞の近臣にて、大剛の者なりしが、鐵炮を餘多つるべ懸けて、玉藥を惜まず防ぎければ、さしもの武田勢、疵を蒙り死を致す者、若干に及びけり。信玄見給ひ、岡部は、聞及びし剛の者なり。一命を助けて、召使ふべしとありて、臨濟寺の和尙を以て、樣々に、和議を入れられければ、岡部を始め、悉く城を開いて渡しける。則ち次郎右衞門を召出され、本知三百貫を、三千貫にし給ひ、五十騎の士卒を預けられ、侍大將にぞなされける。斯くて、信玄、宣ひけるは、花澤の城には、小原肥前守父子、籠りたりと聞く。來正月には、早々、花澤の城を攻落すべしとぞ仰せける。斯かりければ、其年、陣中に暮れて、新玉の春に立歸り、永祿十三年正月下

駿府開城

信玄花澤城を攻む

旬にもなりければ、駿州花澤の城に押寄せ給ふ。城將小原肥前守、弓・鐵炮を飛ばして、防ぎ戰ふ事嚴重なり。爰に、岡部次郎右衛門が弟岡部治部右衛門は、武田家に降つて、初ての軍なれば、粉骨を盡さん爲め、先手に罷在りけるが、花澤腰曲輪の近所なる、高き屋根に登り、城中を見積り居けるに、信連入道逍遙軒、仰を承つて、巡見して見られけるが、岡部が登り居たる屋の上に、同じく上り、城中の體を見給ふ。其時、岡部、此處殊の外、弓・鐵炮荒く候とて、戶板を取集めて、逍遙軒の前に立てける。信連入道見給ひ、運を天道に任するぞとて、悉く戶板を押倒さるゝ。岡部兄弟、頻に諫むれども、用ひ給はず。斯くて、兩人の者共、主君の御連枝と一所にあらん事、恐ありと、屋根より飛下りけるに、腰曲輪の乾堀の中に飛込んで、治部右衛門、腰の骨を打損じけり。然る所に、伊奈四郎殿、一番乘を心懸けられ、門前に乘寄せらる。是に續いて、長坂左金吾入道釣閑・初鹿傳右衛門・諏訪越中守・縄無理之介等、馬に紅梅を嚙ませて出來る。時に、初鹿傳右衛門、先に進みし縄無理之介に、城門の上鎖子を揚げ候へといふ。縄、聞いて城中の鐵炮、雨の如くにて、揚げ難しと答ふ。初鹿

聞いて、物々しや。無理殿、無理に揚げ給へ。さなくば退き候へと、ついくゞり錠前を押上ぐれば、諏訪越中守、己が鎗の柄を指込み、捻開け立歸り、諏訪・初鹿兩人にて、無理之介が着たる繩の羽織を取り、向後、無理之介と名乘らせまじと怒りければ、勝頼、樣々扱ひ給ひ、羽織を取つて、無理之介に返されけり。信玄、此體を聞き給ひ、四郎討たせては、叶ふまじと、軍勢を揚げらるべしとの軍使、再三に及びければ、此上はとて、勝頼、軍兵を引揚げらる。諏訪・初鹿兩人、最前の鎌鎗を取つて殿となり、徐かに引取りけるを、譽めぬ者こそなかりけれ。爰に、三枝勘解由左衛門尉・眞田喜兵衛尉・曾根田匠助三人は、日頃、斷金の交、淺からざれば、三枝、兩人に向つて、いざ、三人馳拔けて高名せんといふに、曾根・眞田、いふにや及ぶと一同して、唯三人、轡を並べ取つて返し、既に門前に至る時、城兵、城戸を押開き突出づる。三枝勘解由左衛門昨行、虎口の一番鎗ぞと名乘つて、究竟の敵二騎、突伏すれば、眞田喜兵衛尉昌幸・曾根内匠助、二番鎗を突いて働きたり。中にも、曾根は、岩崎主馬右衛門といふ大力の剛の者を、突伏せ首を取る。之を見て、胴勢、咄と押付て、頓て門を打

破り、追込んでは追出され、追ひつ捲くつつ、聲を揚げてぞ戰ひける。然る所に、辛澤口より、敵兵、一同に切つて出づる。寄手の手より、孕石源右衞門、一番に鎗を入るゝ。城兵にも、井伊彌五郎・杉原戸兵衞・弓桁又左衞門・小原權右衞門以下、究竟の城兵等、物々しと訇り、爰を先途と揉合ひたり。甲兵には、落合治部・舍弟左平次・天野一平・田宮權左衞門・白畠與七郎以下、一息に切落さんと、切立てゝ攻めけるに、駿州方の瀧三郎左衞門尉は、聞ゆる强弓の精兵なりければ、小高き岳へ走せ上げ、矢把を解いて押しくつろげ、差取り引詰め射たりけるが、大雁俣を以て、落合治部が唯中を射通したり。弟の左平治、兄が首を、敵に取らせじと、肩に引懸け退く所を、城兵、遁さじと追蒐くる。攻兵も亦助來つて、左平治を引包んでぞ退きける。信玄、此體を聞き給ひ、旗本より螺を音太に吹立てさせ、太鼓を打つて、總乘の色を見せ給へば、城兵、是に驚き、一同に引入りけり。城中、今は力盡きて、岡部治郎右衞門が手へ、矢文を射て降を乞ひ、開城すべき旨、申しければ、信玄、早々許諾あつて、城中の男女、悉く命を助けらる。士卒、我も／＼と德川家へ立退きけり。之を聞きて、藤

枝德の一色も、開落してぞ逃げ行きける。是は究竟の要害なりとて、馬場信房に、繩を添削せさせられ、馬出等を附けて、田中の城と號せらる。江尻の城も、信房が繩張にて、山縣を差置かる。淸水にも同じく屋敷を構へらる。是は關東梶原海賊、攻來り、此所を乘取るべきか、若くは敵乘取りたる時は、味方より攻取り安きやうにとの繩張、これ山本道鬼が、馬場信房に相傳ふる城取り極意の深祕なり。扨も今度、繩無理之介が擧動、初鹿傳右衞門・諏訪越中守に劣りたりとて、如何なる者かしたりけん。一首の狂歌を連ねて、武田兵庫助信實の陣前にぞ立てたりける。

無理之介道理之介と名乘るべし無理なる事をする身でもなし

然れども、繩も大勇の者なれば、敢て小辱を恥しとせず。何ぞ我れ、大切の場に臨んて、無理なる擧動を、すまじくやとぞ粒語きける。斯くて、信玄、田中に座す所に、織田信長より、佐々權左衞門を使者にて、唐の頭二十・毛氈三百枚・猩々皮の笠を送らるゝ。此笠は、去る永祿十年、將軍義昭卿の供奉して、上洛を遂げ、京都に置き參らせ、公方と仰ぎ奉りし時、自ら着用して候へば、吉例の笠にて候條、進上仕ると

て送られけり。信玄、此笠を土屋平八郎に給はり、信長の武威に、靈體るべしとぞ仰せける。唐の頭は、近習の面々に、配分して與へられけり。かくて、江尻に至り給ひ、三月下旬迄逗留あつて、駿州一遍に治められ、其後、甲府に凱陣ましましけり。

武田三代軍記卷之第十四 終

大正五年四月十二日印刷
大正五年四月十五日發行

國史叢書
武田三代軍記 一

定價金一圓

編者 黑川眞道

發行者 國史研究會

右代表者 小瀧淳
東京市本郷區駒込林町二二四番地

印刷者 福山福太郎
東京市牛込區西五軒町五二番地

印刷所 福山印刷製本所
東京市牛込區西五軒町五二番地

發行所 國史研究會
東京市本郷區駒込林町二百廿四番地
振替貯金口座東京二七〇二四番